



PS
1915
J3
1937
v.6

Hearn, Lafcadio
Koizumi Yakumo zenshū

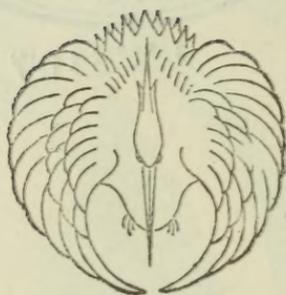
**East
Asiatic
Studies**

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

小泉八雲全集

第六卷



東京

第一書房

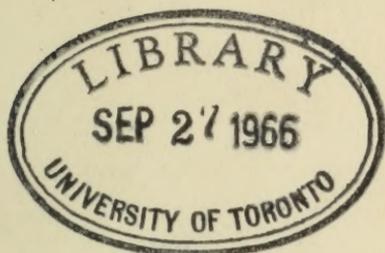
PS

1915

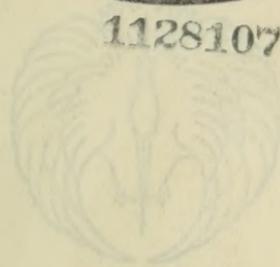
小泉 雲全集

1937

v. 6



1128107



東京
第一書局



貝蝶法・敷呂風・イタクネ・袋足・團蒲座(品遺雲八泉小)

佛の畠の落穂

異國情趣と回顧

日本お伽噺

譯
者

落合貞三郎

金子健二

大谷正信

岡田哲藏

稻垣巖

田部隆次

小泉八雲全集第六卷目次

佛の島の落穂

第一章	生神	一三
第二章	街頭より	三六
第三章	京都紀行	四九
第四章	塵	八六
第五章	日本美術に於ける顔について	九九
第六章	人形の墓	一三四
第七章	大阪にて	一三〇

異國情趣と回顧

異國情趣

第八章	日本の民謡に現れた佛教引喩	一七四
第九章	涅槃	一九九
第十章	勝五郎の轉生	二四二
第十一章	環中流轉相	二六五

富士山	二七七
蟲の樂師	三〇五
禪の一間	三四一

死者の文學……………三五〇

蛙……………四〇七

月の願……………四三二

回 願

初の諸印象……………四三三

美は記憶……………四四二

美のうちの悲哀……………四五〇

若さの香……………四五六

蒼の心理……………四五九

晩歌……………四六九

日本お伽噺

赤い夕日	四七六
身震ひ	四八五
夕暗の認識	四九三
永遠の執着者	五〇七
化け蜘蛛	五一七
猫を畫いた子供	五二〇
團子を失くしたお婆さん	五二六
ちん・ちん・こばかま	五三四

佛の畠の落穂

極東に於ける手と魂の研究

第一章 生神

一

その大きさ如何に拘らず、純粹の神道の堂や社は悉く同じ古風な様式で建ててある。標本的の神社は、極めて急な勾配の、張り出したやうな屋根のある白木造りの窓のない長方形の建築である、前面は破風造りである、永久に閉ざしてある戸の上の方は木の格子造りで、——大概格子の縦横が細かに組んであつて、互に直角に交又して居る。大概、建物は木の柱で地面から少し高く上つて居る、そして眉庇のやうな孔や、破風造りの上の梁の不思議な凸出物のある妙な尖つた前面は、歐洲の旅客に、屋根窓の或古いゴート式の形を想ひ出させる事もあらう。人工でつけた色はない。飾りのない材木はやがて、雨と日のために自然に灰色になる、それも晒らされる度合によつて、樺木の皮の銀がかつた調子から、玄武岩の薄暗い灰色まで色々の變化がある。そんな形のそんな色であるから、淋しい田舎

の社はやしろ大工の造つた物と云ふよりも、むしろ風景の一特徴——岩石や樹木と同じく、自然に密接に關係した田舎の或姿、——大地の神の現れとしてののみ存在するやうになつた或物、——と云つた方がよい。

或建築の形が、何故見る人に一種物すごい感情を起させるかの問題は、私はいつか解釋しようと思ふ物である、今はただ神社はさう云ふ感情を起させるとだけ敢て云つて置く。慣れるに随つて、それが薄らぐ事はなく、かへつて増加する、そして一般信仰の事を知つて居る事が、それを強くする傾きがある。私共はこの不思議な形の物を適當に説明する英語の言葉をもたない、——まして、それから受ける特異の印象を傳へる事のできる言葉はさらにない。私共が『テムブル』とか、『シユライン』とか云ふ言葉で、よい加減に譯して居るそれ等神道の言葉は實は翻譯ができない、——即ち、それ等の言葉に日本人がつけて居る思想は、翻譯で傳へる事はできない。所謂神の『みや』は古典的の意味で云ふ殿堂よりも、むしろ魂の出入する部屋、精靈の室、心霊の家である、多くの小さい神は事實心霊、數百年或は數千年以前に生きて働いて死んだ偉大なる戰士、英雄、爲政者、教師の心霊、——である。私は西洋の人には『心霊の家』と云ふ言葉の方が、『神社』や『殿堂』のやうな言葉よりも、神道の宮みやや社やしろ、——そこにはその永久に薄暗いところに、象徴或は

しるし、多分紙でできたしるし以外には何等實質的な物のない、その不思議な性質を多少おぼろげなりに傳へるだらうと想像する。

その眉庇まゆびの正面のうしろの空虚は、如何なる實質的な物よりも、遙かに暗示的である、そして諸君が數百萬の人が數千年の間に、こんな社やしろの前で、彼等の偉大なる死者を禮拜した事、——全民族が今もなほその建築は意識のある人格を有せる見えない神の住むところと信じて居る事を思へば、——諸君は又この信仰の不合理な事を證明する事は如何に困難であるかを考へるやうになる。否、西洋の人が如何に濫つても、——その經驗について、諸君があとて何と云ふ方が或は云はない方が好都合だと思ふにしても、——讀者は多分一時はあり得べき物に對する敬虔の態度を執らざるを得ないであらう。ただ冷たい推論だけでは、反對の方向へ諸君をつれて行く助けにはならない。感覺の證據は餘り役に立たない、見る事も聞く事も觸れる事もできない非常に多くの實在が存して、しかも力、——恐るべき力として存する事を讀者は知る。それから讀者は又、その信念が空氣のやうに讀者の周圍に普く動いて居る間は、——空氣が讀者の肉體をとりまくと丁度同じやうに、その信念が讀者の精神をとりまく間は、——四千萬の信念を嘲る事はできない。私自身について云へば、いつても私が獨りて神社の前に出ると、私は何かにとりつかれたやうな感じになる、

そしてとりつく物を自覺する事のできる事を考へざるを得ない。それからこれが私を誘惑して、もし私自身が神であつたら、——石の獅子にまもられ、尊い森に圍まれた岡の上のどこか古い出雲の神社に鎮座するとしたら、——どんな氣がするだらうと考へるやうになる。

私の住所は魍魎^{ちみ}の住むやうに小さいだらうが、私は形も姿もないから、決して小さい事はない。私はただ顫動に過ぎない、——エーテルや磁氣のやうに見えない運動に過ぎない、しかし私が出現したい時には、私の昔の見える姿に似た影の體を取る事が時々できる。

鳥が空氣を、魚が水を通るやうに、私の靈は凡ての物質を通りぬけるだらう。私は私の家の壁を自由に通過して日光の長い黄金浴に遊ぶ事も、花の心で動く事も、蜻蛉の頸に乗る事もできる。

生命に勝る力、死に勝る力、——それから自分を擴げる力、自分を何倍にもする力、そして凡ての場所に同時に遍在する力、——が私にある。一百の家庭に於て同時に私が禮拜されるのを聞く、一百の供物の氣を吸ふ、每晚、一百の家々の神棚にある私の場所から、赤い粘土の燈明、眞鍮の燈明に、私のためにともしてある聖い光、最も清淨なる油をついで、最も清淨なる火をもやしてある聖い光が見られる。

しかし岡の上の私の社で、私は最大の尊敬を受ける、そこで私は速かに私の無数の分身を集める、そして哀願に答へるために、私の力を統一する。

私の靈屋のほの暗いところから、私は草履をはいた足の近づくのを待つて居る、そして誓の文句を書いた紙をひねつて、蕉色の柔軟なる指で私の格子に結びつけるのを見て居る、そして私の禮拜者の口が動いて、祈をするのを見て居る、——

『——拂ひ給へ、清め給へ。……私共は太鼓を鳴らし、火をともしましたが、田地が乾いて、稻が育ちません。哀れと思召して雨をふらして下さい、大明神様』

『——拂ひ給へ清め給へ。……私は野原で働いて、餘り日に當つたので、色が黒くて、餘り黒くて困ります。……どうか、私を白く、精々白く、——町の女の人達のやうに白くして下さい、大明神様』

『拂ひ給へ清め給へ。……私共の倅で、二十九になる兵隊の塚本元吉が、早く、——至急、大至急、——凱旋して私共のところへ参りますやう、恐れながらお願いいたします、大

明神様』

時々或少女が来て、心の中を悉く私にささやく事がある、『十九になる女でございます、私は二十一になる男に慕はれてゐます。善い真面目な人ですが、貧乏なので私達の前途は眞暗でございます。哀れと思召してお助けを願ひます、——どうか一緒になれるやうにお助け下さい、大明神様』それから、柔らかな濃い髪の一房、——元結で結んである鳥の翼のやうに光澤のある黒い彼女自身の髪を、私の社の格子に掛ける。そしてその捧げた物の香、——その若い農婦の質素な香にひかれて、——神であり靈である私は、人間であり愛人であつた頃の感情を再び感ずるやうになる。

母達は子供等を私の社前に連れて来て、私を尊敬する事を教へて云ふ、『この有難い尊い神様の前で頭を下げなさい、大明神にお辭儀をなさい』それから、私は小さい手の鮮やかな柔らかな拍手を聞いて、神であり靈である私も昔、父であつた事を想ひ出すだらう。

毎日、私のために清い冷い水の注がれる音、ばらばらと降る雨の音のやうに、私の木の箱に米のばらばらと落ちる音、賽銭のちりんと鳴る音を私は聞く、そして水の精で力がつき、米の精で元氣を回復するだらう。

私を尊ぶために、祭禮が行はれよう。黒冠白衣の神官達は、——私の食物に息をかけないやうに、白紙で鼻と口を掩うて、果物、魚、海草、餅、酒の供物を私に捧げるだらう。それから彼等の娘である巫女達、眞紅の袴と純白のころもをつけた神女達は、小さい鈴の音につれて、絹の扇のなびきと共に、踊るために来る、それは私が彼等の若い花やかさを見て喜び、彼等の優美な魅力によつて樂むためである。それから、何千年前の音楽、——太鼓と笛の不思議な音楽、——それからもはや使はれない言葉の歌がある、同時に、神々の祕藏娘の巫女達は、私の前で姿美はしく列ぶ、——

……

『神の御前に花のやうに立つ乙女等、——誰の子であらう。それは大神の子等である。』

『聖い御神樂、乙女等の舞、——神は聞いて喜び、見て樂む。』

『大神の御前で乙女等は舞ひ踊る、——新たに開いた花のやうな乙女等』……

色々の種類の奉納の品を私は受ける、私の聖い名を書いた繪提灯、奉納者の年齢をすり込んだ色々の色の手拭や、病氣平癒、船の救助、鎮火、男子出生の祈願がかなつた記念の

繪の額を奉納される。

それから又、私の番をする獅子唐獅子も崇められる。巡禮が来て、頸や足に草履を結びつけて、強い足を授かるやう、唐獅子に祈るのを私は見るだらう。

私は、碧玉色の毛皮のやうな綺麗な苔がその獅子の背中に徐ろに、徐ろに生えて來るのを見るだらう、——私は、その脇腹と肩の上に、光のない銀色の斑となつて、光のない金色の點となつて、地衣こけの發生するのを見るだらう、——私は數代を經るうちに、その土臺が霜と雨に掘られて行つて、最後に私の獅子が鈎合を失つて倒れて、その苔蒸した首が取れるのを見るやうになるだらう。そのあとで人々は又別の形の新しい獅子、——金の齒と金の眼と、苛責の火のやうな尾をもつた花崗石か唐金の獅子を私に與へるだらう。

杉と松の幹の間から、竹藪の間から、私は季節毎に、谷の色の変化するのを見るであらう、冬の雪の降る事、櫻の花の雪のやうに降る事、都花の廣い藤色、菜の花の燃ゆるやうな黄色、水の漲ぎつて居る低地に映ゆる青空、——私を愛してくれる働く人達の月の形の笠の斑點のある低地、それから最後に生長する稻の清い柔かな綠色。

椋鳥と鶯は、様々の好いさへづりて私の暗い森を満たすであらう、——鈴蟲、きりぎりす、それから夏の七種の驚くべき蟬は、その嵐のやうな音楽をもつて私の靈屋の悉くの森

を震はせるであらう。速かに、私は大恐慌のやうに、彼等の極めて小さい生命のうちに入つて、彼の叫びの喜びを勵まし、彼等の歌の好音を大きくするであらう。

しかし私は決して神にはなれない、——今は十九世紀であるからである、そして——肉體をもつた神でなければ——何人も神の感覺の性質を本當に知る事はできない。そんな神はあるだらうか。事によれば——非常に邊鄙な地方に——一人二人はある。生神は昔からあつた。

昔は、どんなにその境遇は賤しくても、特別に大きな或は善良な或は賢い或は勇敢な事を何かした人は、その死後、神と宣言される事があつた。大きな残忍不正に苦しんだ善人も亦神に祀られる事もある、それから今でも、特別な境遇の下に進んで死を選ぶ人の魂、——たとへば、不幸な愛人の魂に、死後の名譽を與へて、祈をするやうな一般の傾向が存して居る。(多分、こんな傾向を作つた古い習慣は、惱んだ魂を慰めたいと云ふ願から起つて居る、しかし今日では大きな惱みの經驗があれば、その人は聖い境遇に入る資格があると考へられるらしい、——そしてこんな考のうちには何等馬鹿らしいところはない)——しかしもつと著しい神化もあつた。未だ存命中の或人々は、その人々の魂を祀る神社を建て

て貰つて、神として取扱はれた、實際國家の神としてではないが、もつと低い程度の神として、——事によれば守護の神として、或は村の神として。たとへば、紀州有田郡の農夫、濱口五兵衛は、生前神にされた。私はそれだけの價值があると思ふ。

二

濱口五兵衛の話をする前に、私は明治以前の時代には、多くの村々を支配してゐた或法律——或はもつと正しく云へば、法律の力を悉く有する習慣——について少し云はねばならない。この習慣は數代の社會的經驗に基づいてゐた、そして國や郡によつて小さい點は違つてゐたが、その重なる意味は殆んど到るところ同じであつた。倫理的な物も、産業的な物も、宗教的な物もあつた、そして一切の事は、——個人の行儀までも、——それに支配されてゐた。それによつて平和が保たれ、相互の助力、相互の親切が行はれた。時々他村との間に、重大な争闘——水争や境界争に關する小さい百姓の戦——の起る事があらう、しかし同じ村同志の間の争は復讐の時代には許容されなかつた、そして村全體は徒らに内部の平和を破る事を嫌つた。或程度までこの状態はどこか古風な地方では今もなほ存在し

て居る、人々は戦は勿論争もしないで暮らす事を知つて居る。一般の規則として、どこでも日本人の戦ふ場合は命のやりとりである、それで自分から進んで本氣に手出しをするやうな人は、その團體の保護を事實上受けない事になる、そして自分の生命は自分の手だけで守る事になるから、どうしてもそれを失ひさうである。

女性の行爲は全然不文律を離れた或著しい制裁によつて支配されてゐた。結婚前の農夫の娘は、都會の娘よりも遙かに多くの自由を許されてゐた。彼女に愛人のある事が知られても差支はない、それから兩親が甚だしく反對しない以上、彼女に對してそれ程非難は加へられない、それは——少くともその意志については、——正直なる結合と見なされてゐた。しかし一旦選擇をした以上、彼女はその選擇によつて束縛されてゐた。もし彼女は秘密に別の愛人に會つた事が發見されたら、人々は彼女を裸にして、棕櫚の葉を一枚前に當てる事を許すだけで、村の往來や小路を歩かせて嘲弄する事にした。娘の兩親は、娘がこの通り公然侮辱を加へられて居る間、外へ顔を出す事もできない、娘の恥を共に受けて、兩戸をしめて家の中に蟄居すべきさまりになつてゐた。そのあとで娘は五年間追放の宣告を受けた。しかしそれだけの期限が終れば、彼女はその過失を償つた事と考へられて、それ以上の非難を受ける心配は少しもなく、家へ歸る事ができた。

災難や危険の時に、相互に助力すべき義務は、凡ての團體の義務のうち、最も重大な物であつた。殊に火事の場合には、誰でも、男でも女でもできるだけの事をして直ちに助力せねばならなかつた。子供でもこの義務は免れなかつた。勿論都市では違つた制度になつてゐた、しかし小さい田舎の村ではどこでも、一般の義務は甚だ明白で簡單であつた、それとその義務を怠る事は許し難い事と考へられた。

この相互の助力の義務は宗教上の事にまで及んでゐた事は珍らしい事實である、誰でも頼まれた時には、病人や不幸な人のために神佛に祈る事になつてゐた。たとへば、非常に重い病人のために、千度参り参をするやうにとその村の人が命ぜられる事がある。そんな場合には、組長（銘々の組長は五六軒の家の行爲について責任があつた）は、家から家へと走り廻つて、『かうかうした人が病氣でひどく悪い、どうか皆で急いで千度参りをして貰ひたい』と叫ぶ。そこでその時どんなに忙しくても、その村の人々は残らず寺なり神社なりへ急ぐ事になつてゐた、——途中で躓いたり轉んだりしないやうに注意せねばならない、千度参りを行ふ間に少しでも間違があれば、それは病人に取つて不幸になると信ぜられてゐたからである。……

註 千度参りと云ふのは、寺なり神社なりへ千度参詣して神佛へ千度の祈禱をする事である。しかし門なり鳥居なりから、祈禱の場所までその度毎に祈をくりかへして往復すればよい事になつて居る、そしてこの仕事は幾人で分配しても宜しい、——たとへば、百人で十度つつ参詣する事に、ただ一人で千度参詣するのと全く同じ効果がある。

三

これから濱口に關して。

有史以前から日本の海岸は、數世紀の不規則なる間を隔てて非常に大きな海嘯——地震、或は海底の火山の働きのために起る海嘯のために掃き去られて居る。この恐ろしい海の不注意の膨脹を日本人は津浪と云つて居る。最後の津浪は一八九六年（明治二十九年）六月十七日の夕方に起つた、その時には殆んど二百哩程の長さの津浪は宮城、岩手及び青森の東北の諸縣を襲うて數百の都市と村落とを破壊し、いくつかの地方を全滅させ、そして殆んど三萬の人命を亡ぼした。濱口五兵衛の話は日本の他の地方の海岸に於て明治時代より遙か以前に起つた同じやうな災害の話である。

彼を有名にした事件の起つた時、彼は老人であつた。彼はその村の最も有力なる住民であつた、長い間村長であつた、そして尊敬され又愛されてゐた。人々はいつも彼をおぢいさんと呼んだ、しかし、その土地の最も富んだ人であつたので、時に公けに長者と呼ばれてゐた。彼は小さい農夫に爲めになるやうな事を云つてきかせ、喧嘩の仲裁をし、必要な時には金をたて替へ、そして最もよい條件で彼等のために米を賣捌いてやるやうな事をいつもしてゐた。

濱口の大きな草葺きの母屋むろやは、灣を見下す小さい高臺の端に建つてゐた。重に米をつくつてあるこの高臺は、森のしげつた山に三方圍まれてゐた。この土地は外に向いた端の方から、水際までぐるり取つたやうに大きな緑の四面になつて傾斜してゐた、そして一哩の四分の三程のこの傾斜の全部は、海面から見ると狭い白いうねりくねつた道、一條の山道によつて中央を分けられた緑の大きな階段のやうに見えた。本當の村になつて居る九十の草葺きの家と一つの神社が屈曲した灣に沿うて立つてゐた、そして外の家は長者の家へ通ずるその狭い坂路の兩側にしばらく續いて散在してゐた。

秋の或夕方、濱口五兵衛は下の村でお祭の用意をして居るのを、自分の家の縁側から眺

めてゐた。稻の收穫は大層好かつた、そこで村人は氏神の社の境内で踊を催して豊作を祝しようとしてゐた。老人は淋しい町の屋根の上にはひるがへつて居る幟や、竹の竿の間に飾つてある提灯の列や、神社の裝飾や、派手な色のなりをした若い人々のむれを見る事ができた。その夕方老人と一緒にゐたのは小さい十歳の孫だけであつた、その他の人々は早くから村の方へ行つてゐた。いつもより少しからだの加減が悪くなかつたら、老人も一緒に出かけるところであつた。

その日はむしあつかつた、そして微風が起つて來たが、未だ何だか重苦しい暑さが残つてゐた、それが日本の農夫の經驗によると、ある季節には地震の前兆である。そして間もなく地震が來た、人を驚かす程の強さではなかつた、しかしこれまで數百回の地震を感じて來た濱口は變に思つた、——長い、のろい、ふわりとしたゆれ様であつた。多分極めて遠方の或大きな地震のほんの餘波であつたらう。家はめきめきと云つて幾度かおだやかにゆれた、それから又靜かになつた。

その地震が終ると、濱口の鋭い思慮深い眼は、氣遣はしさうに村の方へ向いた。或一定の場所や物を見つめて居る人の注意が、全く自覺して見てゐない方へ——明かな視野以外にある無意識な知覺の朦朧たる範圍に於てただ少し變な感じのする方へ、不意に氣を取ら

れる事がよくある。そんな風に濱口は沖の方に何かつねならぬ事のあるのに気がついた。立ち上つて海を見た。海は全く不意に暗くなつてそして變であつた。風と逆行して居るやうであつた。陸から向うへ退いて走つてゐた。

忽ちのうちに全村がその稀有の出来事に気がついた。明らかに先程の地震を感じた人はなかつた。しかし潮の運動にはたしかに驚いた。一同が浪際へ、そして浪際のもつとさきへ、それを見に走つて行つた。人の記憶ではこんなに潮の引いた事はこの海岸であつたためしはない。見た事のないものが現れ出した、これまで知られなかつた肋骨のやうな畦のある砂の廣場や、海草のからんで居る岩の區域が、濱口の見居る間に現れて來た。そして下の方の人はその巨大なる引潮は何を意味するかを考へる者はないやうであつた。

濱口五兵衛彼自身もこんな物を見た事はかつてなかつた、しかし彼は父から幼少の折に聞いた事を覚えてゐた、そして彼は海岸の凡ての傳説を知つてゐた。彼には海がどうなるか分つてゐた。多分彼は村へ使をやるのに要る時間、山のお寺の僧に大きな釣鐘を鳴らして貰ふために要る時間を考へてゐたのであらう。……しかし濱口の考へたらしい事を話す方が、濱口の考へた時間よりもはるかに長くかかるであらう。彼は只孫に向つて云つた。

『忠ただ、すぐ大急ぎだ……たいまつをつけて来い』

たいまつは嵐の夜に使ふために、そして又或神事の祭禮に使ふために多くの海邊の家にしまつてある。子供はすぐにたいまつをつけた、そして老人はそれをもつて野原に急いだ、そこには彼の大部分の投資とも云ふべき數百の稻叢があつて運ばれるばかりになつてゐた。坂の端に一番近い稻叢に近づいて老いた足で急げるだけ急いで交る交るたいまつをつけ始めた。日に乾いた藁はほくちのやうに燃えた、火勢をあほる海風はその燄を岡の方へ吹き上げた、そしてまもなく一叢又一叢、藁は炎になつて天に沖する烟の幾條かを上げたが、それが相集り交つて一つの大きな雲の渦となつた。忠は驚きかつ恐れて祖父のあとから叫びながら走つた。

『お祖父さん、どうして、お祖父さん、どうして、——どうして』

しかし濱口は答へなかつた、説明して居る暇がなかつた、ただ危難に瀕して居る四百人の生命の事ばかり考へてゐた。子供はしばらく稻の燃えて居るのを興奮して見てゐたが、突然泣き出した、そして祖父さんは氣が狂つたと信じてうちへ驅け込んだ。濱口は稻叢の一つ一つに火をつけて遂に自分の田地のはてまで來た、それからたいまつをなげ出して、待つてゐた。その燄を見て山寺の小僧は大きな鐘をゴーンとならした、そこで村人はこの

二重の訴へに答へた。濱口は村人の、砂から落をこえて、村の方から蟻のむれのやうに急いで登つて来るのを見たが、彼の待遠い眼から見れば蟻よりも早いとは思はれなかつた。それ程時刻は彼に取つては非常に長く見えたのであつた。日は沈みかかつてゐた、灣の皺のある底、それから遙か向うの斑のある土色の大きな廣がり最後の橙色のあかりに露出してゐた、そして續いて海が地平線の方へ走つてゐた。

しかし、實際は濱口がそれ程甚だ長く待たないうちに、第一の救助隊が到着したのであつた、それは二十人程の敏速なる若い農夫達で、直ちに消火に赴かうとした。しかし長者は兩手を以てそれを止めた。

『もやして置け』彼は命じた、『うつちやつて置け、村中の人に、ここへ来て貰うんだ、——大變だ』

村中の人々が追々來た、そこで濱口が數へた。若い男や男の子供はすぐにそこへ來た、そして元氣な女や娘達も大分來た、それから老人の大方は來た、それから赤ん坊を背負つた母親、それから子供までも來た、——子供でも水を渡す手傳ができるからである、そして眞先きにかけてつけた人々と一緒にいつて來られなかつた年長の人々が急な坂を上つて來るのがよく見えて來た。次第に集つて來た人々は、やはり何にも知らなくて悲しげに不思議

相に、燃えて居る野原と長者の自若たる顔とを交る交る眺めてゐた。そして日は沈んだ。

『お祖父さんは氣ちがひだ、僕は恐い』と澤山の質問に答へて忠はただすすり泣いた、『お祖父さんは氣ちがひだ、わざと稲に火をつけたんだ、僕はそれを見たんだ』

『稲の事は子供の云ふ通りだ』濱口は叫んだ、『わしは稲に火をつけたんだ。……皆こへ来たか』

組長と家々のあるじ達はあたりを見廻し、坂を見下して答へた、『皆居ります、てなくともすぐに参ります。……私共にはこの事が分りません』

『来た』老人は沖の方を指さし、力一杯の聲で叫んだ、『わしは氣ちがいかな云つて見ろ』

たそがれの薄明りをすかして東の方を一同は見た、そして薄暗い地平線の端の海岸のなかつたところに、海岸の影のやうな長い細い薄い線が見えた、その線は見て居るうちにふとくなつた、海岸に近づく人の眼に海岸線が廣くなるやうに、その線は廣くなつた、しかし比べ物にもならぬ程ずつと早く廣くなつた。即ちその長い暗がりには、絶壁のやうに聳えて、鷹の飛ぶよりもつと早く進んで来る、押しかへしの海であつた。

『津浪』と人々は叫んだ、そしてその巨大なる海の膨脹が山々をとどろかす程の重さを

以て、又赫々たる幕電のやうな泡沫の破裂を以て海岸にぶつかつた時、どんな雷より重い、名状し難い衝動によつて、凡ての叫び聲と凡ての音をさく力とはなくなつた。それから一時は雲のやうに坂の上を突進して來た水烟のあらしの外何物も見えなかつた、そして人々は、ただそれにあびえて狼狽してうしろへ散つた。再び見直した時彼等は彼等の居室の上を荒れて通つた白い恐ろしい海を見た。うなりながら退く時、土地の五臟六腑をひきちぎりながら退いた。再び、三たび、五たび、海は進み又退いた、しかしその度毎に波は小さくなつた、それからもとの床にかへつて靜止した、大風のあとのやうに荒れながら。

高臺の上には暫らく何の話聲もなかつた。一同は下の方の荒廢を無言で見つめてゐた、投げ出された岩や裂けて骨の出た絶壁の物すごさ、住宅や社寺の空しいあとへ海底からめぐり取つて來て放り出してある藻や砂利の狼藉さ。村落はなくなつた、田畠の大部分はなくなつた、高段さへも存在しなくなつた、そして灣に沿うてゐた家のうち残つて居るものは一つもない、ただ沖の方に物狂はしく浮沈して居る二つの藁屋根だけであつた。死を逃れたあとの恐ろしさ、凡ての人の損害のための茫然たる自失は凡ての口を噤にした、そのあけく濱口の聲で再び穩に云ふのが聞えた、

『あれが稲に火をつけたわけだ』

彼等の長者なる彼は今最も貧しき人と殆んど同じ程の貧しさになつて立つてゐた、彼の財産はなくなつたからであつた、しかし彼はその犠牲によつて四百の生命を救つたのであつた。小さい忠は走つて来て手にすがつて愚かな事を云つた事の救しを願うた。そこで人々は彼等の生存して居る理由に氣がついた、そして彼等を救うたその單純なる、おのれを忘れた先見の明に感服し始めた、そして頭立つた人々は濱口五兵衛の前に七下座をした、それから人々はそれにならつた。

それから老人は少し泣いた、一つは嬉しかつたから、一つは自分が老年で衰弱してゐて、ひどく苦しんだからであつた。

『家が残つて居る』物が云へるやうになると直ぐに忠の頬を機械的になでながら、彼は云つた、『そして大勢の入る場所はある。それから山の上のお寺もある、外の人はそのこにもはひれる』

それから彼は案内してうちに入つた、人々は叫んだり、ときの聲を上げたりした。

困難の時期は長かつた、その當時一地方と他の地方との間に激速な交通の方法はなく、そして必要な助けは遠くから送られねばならなかつたからである。しかしもつと時節がよ

私は濱口の肉體が一方にあつて魂が又別の方にある事をどうして農夫達が合理的に想像するのであらうか、それを私に説明してくれるやうに、友人の或日本の哲學者に頼んだ。それから私は、濱口の生前に農夫達が禮拜したのは、彼の靈魂の一つであつたか、それとも彼等は禮拜を受けるために或特別の魂がそれ以外の魂と離れて出ると想像したのであらうかと尋ねた。

『農夫達は』私の友人は答へた、『人の心や魂は、生前でも、同時に澤山の場所に居られる物と考へて居る。……勿論こんな考は、魂に關する西洋の考と全く違つて居る』

『その方がもつと合理的でせうか』私はいたづらに尋ねて見た。

『さうですな』彼は佛教徒らしい微笑を以て答へた、『もし私共が凡ての心の統一と云ふ説を正しいとして見れば、日本の農夫の考には、少くとも或かすかな眞理を含んで居るらしい。あなたの西洋風の魂に關する考については、さうは云へませんね』

第二章 街頭より

一

萬^{通者註}右衛門は、立派に筆寫せる日本字の巻物を私の机上に置きながらいつた。『これは俗諺で御座います。もし御本にお書きになる場合は、西洋人が誤解しないやうに、俗諺だといふことを御斷りになつた方がよろしいでせう』

譯者註　これは、實は小泉夫人を指したのである。

私の家の隣りに空地があつて、洗濯屋がそこで舊式な方法で仕事をしてゐる——働さながら歌をうたつて、大きな平らな石の上で、濡れた衣類を打つのである。毎朝味爽、彼等

譯者註　本書は先生の神戸時代の著作である。神戸では、三回轉居せられたが、いつも下山手通、または

中山手通であつた。

の歌が私の眼を醒ます。して、私は往々文句を聴き取ることは出来ないが、それを聴くのは好きだ。それは長い、奇異な、哀れな抑揚に満ちてゐる。昨日その洗濯屋の十五歳の小僧と主人が、互に答へ合つてゐるかのやうに、代はり番こに歌つてゐた。貝殻を透して響き渡るやうな朗かな大人の聲と、少年の嚙曉たる中音部の聲の對照は、頗る聴き心地がよかつた。そこで私は萬右衛門を呼んで、何のことを歌つてゐるのか、尋ねてみた。

彼はいつた。『少年の歌は、

神代むみやこのかた、變はらぬものは、水の流と戀の道。

といふ古い歌で御座います。私の小さな時代に毎度聞いたことがあります』

『それから今一つの歌は？』

『今一つのは、多分新しいもので御座いませう。』

三年思つて、五年焦がれて、たつたひと晩だきしめた。

極馬鹿らしい歌でございますよ』

『それはどうか分からない』と、私はいつた。『西洋で有名な物語といつた處で、別段

これよりえらいことを含んではない。それから、其歌のあとの部分は何の事だらう？』
『もうあとはありません。それがあの歌の全部でございます。もし御所望なら、私は洗濯屋の歌や、それからこの町内で、鍛冶屋や、大工や、竹細工師や、米搗きなどが歌つてゐますのを寫してあげませう。尤も大抵似よつたものでございます』
さういふ譯で、萬右衛門は私のために俗謠集を作つてくれたのであつた。

俗といふことは、萬右衛門の考では、一般民衆の言葉で書いたものといふ意味であつた。彼自身古典的歌に巧みて、當世の流行歌を輕蔑してゐるから、餘程高尚優雅なものてなくては、彼の氣に入らない。して、彼の氣に入るものに關しては、私は書く資格がない。何故なら、日本の詩歌の優れた種類について喙を容れるためには、頗る立派な日本語の學者でなくてはならぬからである。もし讀者が、この問題のいかに困難なるかを知らうと思ふならば、アストン氏著『日本文語文典』(Grammar of the Japanese Written Language)の作詩學の章と、チエンバリン教授著『日本古典詩』(Classical Poetry of the Japanese)の序論を一寸研究するがよい。和歌は、日本がたしかに支那からも、またいかなる他の國からも藉りなかつた唯一の獨創的藝術である。して、その絶妙絶美は取りも直さず國語の花

そのものの粹香なので、模造し得られないものである。だから、いかなる西洋語に於ても、よしや一部分でさへ、その情緒、暗示、色彩の幽趣微韻を表現することは困難である。しかし民衆の作品を理解するためには、何等博學の必要はない。それはあらん限りの單純、直截、及び誠實といふ特徴を帯びてゐる。結局、その眞の妙處は、絶對に巧妙を弄しない點に存してゐる。だから私は民衆の歌を要求したのであつた。國民の永遠に若々しい心から直に湧きいでたる、これらの小さな歌の進りは、あらゆる國民の原始的無飾不文の詩と同じく、局限されたる一階級、または一時代の生活に屬せずして、寧ろ一切の人生經驗に屬するものを吐露してゐる。して、その曲調のうちにさへ、矢張りその源泉たる、民衆の胸裡から發する新鮮潑刺として力強い鼓動が響いてゐる。

萬右衛門は四十七首を寫してゐた。して、彼の助力によつて、私はその中に就いて、秀逸なもの自由譯を試みた。それは甚だ短いもので、十七文字乃至三十一文字であつた。大概日本の歌の韻律は、五字句と七字句の簡單なる交互から成つてゐる。俗曲で折々この規則に外れてゐる部分は、單に歌ひ手が、或る母音を滑唱したり、または延ばしたりして、繕つて行くことのできるやうな不齊に過ぎない。萬右衛門が蒐集した歌の大部分は、ただ二十六文字であつた。七字句が三句連續して、それから五字句が一句附いてゐた。次の例

の如くに――

かみよこのかた 七

かはらぬものは 七

みづのながれと 七

こひのみち 五

この構造から外れたものに、七―七―七―七―五、五―七―七―七―五、七―五―七―五、また五―七―五などの諸種があつた。しかし五―七―七―五―七―七で示さるゝ古典的五句の短歌形式は全く見られなかつた。

性を指示する言葉が歌詞の上に現はれてゐなかつた。『私』及び『汝』に對する語句は、滅多に用ひてない。また『愛人』といふ意味の言葉は、男に向つても、女に向つても、一様に適用されてゐる。ただ或る比喩の慣習的意義によつたり、特別な感情的調子の使用によつたり、または服装の或る細目が擧げてあるのによつて詠み人の性が暗示されてゐる。たとへば次の歌で――

わたしや水萍みづびさ、根もない身の上、どこのいづくで、いつ花が咲く。

詠み人は明らかに戀人を求めてゐる娘である。もし日本人がこのやうな比喻を男性の口から聞いた日には、丁度男が自らを堇や薔薇に喩へたのが、英人の耳に響くのと同じであらう。同一の理由で、次の歌に於ては詠み人は女でないといふことがわかる――

梅と櫻を兩手に持つて、どれが實のなる花だやら。

女の美は櫻の花にも、また梅の花にも譬へられる。しかし梅の花の象徴する性質は、いづれも有形的よりは寧ろ精神註的である。此歌では、或る男が、二人の娘に強い執着を感じてゐる。一人の娘は、容色が非常に綺麗である。多分藝者であらう。今一人の方は、性質が美はしい。いづれを一生の伴侶として、彼は選擇すべきであらうか。

註 「知られぬ日本の面影」下巻四四二頁参照。

もう一つの例――

筆を手に持ち、思案かんざしにくれて、銀たみざんの管たみざん、疊算たみざん。

こゝに管を擧げてあるので、詠み人は女だといふことがわかる。またその女は藝者だと

いふことも想像される。疊算と稱する一種の占ひは、特に藝者仲間に流行するからである。細い絲の枠の上に編んだ疊表の面には、一時の約四分の三位づつ間隔を置いて、規則正しく筋が並んでゐる。女は疊の上へ簪を投げて、その觸れた筋の數をかぞへる。その數によつて吉凶を判断する。時としては、小さな煙管——藝者の煙管は普通銀製である——が、簪の代はりに使はれる。

すべて集められた歌の題材は、戀愛であつた。實際日本の俗謡の大多數はさうである。名所を詠める歌でさへ、大抵或る戀愛的暗示を含んでゐる。戀愛の最初の蕾から最後の成熟に到るまで、あらゆる單純な情趣が、その蒐集に現はれてゐた。そこで、私はそれらの歌を發情的自然の順序に従つて配列してみた。その結果は、幾らか劇的暗示を有するものとなつた。

二

これらの歌は、實際三つの異なる集團を成して、それぞれこれら一切の歌の主題である

戀愛の情的經驗の特殊な時期に對應してゐる。第一團の七首に於ては、情熱の不意打ちの驚愕や、苦さや、弱さが現はれて、谷め立てをする悲しげな泣聲に始つて、信賴の囁きに終はつてゐる。

一

世間誰れもが嫌うたあなた、なぜにこのやうに好きだやら。

二

人には云はれぬこの苦勞、たれが作つたと思召す。

三

いつも闇夜やみと戀てふ路は、踏んで迷はぬ人はない。

四

あかるい洋燈らんぶや、電燈さへも、戀路の暗やみは照らしやせぬ。

五

惚れりや惚れるほどいひにくい、最初にききたい主なしの聲。

六

惚れたわいなとすこしのことが、何故にこのやうにいひにくし。

註 これは眞似の出来ないほど簡潔な句である。

七

びんと心に錠前おろし、錠はたがひの胸にある。

このやうに相互に信じ合つた後で、迷妄は自然に深くなつてくる。苦勞は隠しきれない歡喜に移つて行つて、心の錠は棄てられてしまふ。これが第二の階段である。

一

逢うた昔は嫌つた生命いのち、添うた今では長命ながいき祈る。

二

主とわたしは谷間の百合よ、今が花時どろ誰れもしらぬ。

三

思ふ人から杯差され、飲まぬうちにも顔赧らめる。

四

胸につゝめぬ嬉しいことは、口どめしながらふれあるく。

五

どこの鳥もみな黒い、ひとの好く人なせわしや好かぬ。

六

逢ひに行くときや千里も一里、逢はて歸るときや一里も千里。

七

惚れて通へば泥田どろたの水も、飲めば甘露の味がする。

八

お前百までわしや九十九まで、ともに白髪しらげが生えるまで。

九

云ひたい愚痴さへ顔みりや消えて、兎角うま涙がさきに出る。

註 「兎角」といふ文句を使つてあるのが、この歌に一種の哀れを興へる。

十

嬉し涙にわが袖ぬらし、袖は乾いても乾かぬ心。

十一

歸さぬやうにと祈願をこめりや、うれしや降り出す足止めの雨。

かやうにして迷妄の時期は過ぎてしまふ。そのあとは疑ひと苦みである。ただ戀のみは永遠に残つて、死を何とも思はない。

一

君と別れて松原ゆけば、松の露やら涙やら。

二

空とぶ氣樂な鳥見てさへも、わたしや悲しくなるばかり。

三

來るか來ぬかと川下しもながめ、川には蓬よもぎの影ばかり。

四

文ふみは郵便、姿は寫眞、とても得られぬもの一つ。

五

顔は見ないでただ文ながめ、夢てみる方が猶ほまだ。

身はくだくだに、骨を礎邊にさらさうとまゝよ、拾ひ集めて添うてみせう。

三

そこで日本に於ける種々の時代に、また種々の地方で、さまざまの人によつて作られたこれらの小さな歌は、私に取つては一つの物語のやうなものであつた。——すべての時代、すべての場所に於て永遠に同一だから、時代とか、場所とか、人物の名の要らぬ、物語のやうな形を帯びてきたのであつた。

『どの歌が一番お気に入りですか』と、萬右衛門が質ねた。そこで、私は取捨選擇がてきまるかと思つて、彼の寫したものをめくつて見た。戸外では、輝いだ春の日和に、洗濯屋が働いてゐる。すると、心臓の鼓動の如く規則正しく、濡れた衣類をぼんぼんとたたく重げな音が聞こえる。私が思案してゐると、不意に少年の聲が一本のすばらしい狼煙を打上げたやうな、長い、朗かな、鋭い調子で、翔け上がった——それから、跡切れて——また

されぎれの音が、びかつびかつと閃光を發するやうに顛へ乍ら、靜かに消えた——萬右衛門が若い頃に聞いたことのある歌を、少年はうたつてゐるのであつた——

神代このかた、變はらぬものは、水の流と戀の道。

『あれが最上だと思ふ』と、私はいつた。『あれがすべての歌の心髓なのだ』

『貧の盜人、戀の歌』と、萬右衛門は解釋をするやうな風に囁いた。『貧乏故に、盜人が出來て参りませす通り、戀愛から歌が湧き出る譯で御座います』

第三章 京都紀行

一

京都の奠都紀念千百年祭は、この春舉行される筈であつたが、惡疫勃發のため、秋季に延ばされることとなつた。そこで、その祝祭は十月十五日から始つた。軍隊の勳章のやうな、胸に挿すやうにできたニッケル製の小さな紀念祭徽章が一個五十錢づつて發賣された。その徽章を帯びたものは、すべて日本の汽車汽船に對する特別賃金や、宮殿庭園神社佛閣の拜觀自由の如き望ましき特權に浴することができた。十月二十三日、（譯者註）私は一個の徽章を求め、朝の一番汽車で、京都へ旅立つた。二十四日及び二十五日に舉行豫定の、盛大なる時代行列を見ようと熱中せる人々で、汽車は溢れてゐた。立つたまゝの乗客も澤山であつ

譯者註　これは明治二十八年のこと。先生は神戸から京都見物に上られたのである。

たが、群集はやさしくて、快活であつた。私と同じ車中には、大阪藝妓の祭典に出かけて行くのが幾名かゝるた。彼等は退屈まぎらしのため、歌をうたつたり、また彼等の知り合ひの男達と拳を打つたりした。して、彼等のお轉婆の惡戯とをかしげな叫び聲は、一同を面白がらせた。一人の女は非常に珍らしい聲を有つてゐて、雀のやうに囀ることができた。

何處でも——例へば宿屋で——女達が話し合つてゐるうちに、藝者がまじつてゐる時は、いつでもそれがわかる。何故なら、職業的練習によつて帯びた特殊の音色は、すぐに認めることができるところである。しかしその訓練の驚くべき特質は、眞に職業的の音調が用ひらるゝ場合にのみ明白である——それは假聲の音調で、決して人に感動を與へるものではないが、往々不思議にうるはしい。さて、ただ自然の聲で小唄をうたふ街頭の歌ひ手は、涙を催すやうな音調を用ひる。その聲は通常強い中音部である。して、その深い音調は人に感動を與へるものである。藝妓の假聲の音調は、大人の聲の自然の高さを越えて、鳥の聲の如く鋭い甲聲かんごゑに昇つて行く。客の一杯に満ちた宴會場で、太鼓や三味線の音、喋々嬉嬉の聲を凌いで、明白に——

と、藝妓が拳を打つときの細いうるはしい聲を聞くことができる。一方――

三つ、三つ、三つ

と、その相手の男が絶叫する答は、全く聞こえないことがある。

二

京都へ着いてから最初に旅客の眼を驚かしたのは、祝典装飾の美麗なことであった。すべての町には飾光の準備がしてあった。一軒一軒の家の前には、白木の新しい提燈柱が立てられて、或る適當な意匠を現はせる提燈が吊るしてあった。またいづれの戸口の上にも、國旗と松の枝があつた。しかし提燈が装飾の美をなしてゐた。町の區分毎に、それが同一の形で、また正しく同一の高さに置いてあつて、萬一の天候を慮つて同一種類の覆ひ物を以て保護してあつた。しかし町を異にするに従つて、提燈も異つてゐた。或る廣い大通では、非常に大きなものであつた。して、小さな木造の天幕で蔽つた町もあつたが、或る町では紙製の日本傘をひろげて、その上方に結びつけてあつた。

私が到着した日の朝には、行列がなかつたので、私は御室御所といふ帝室の夏の宮殿に於ける掛物の展覧を見て、愉快に二時間を費やした。此春、私が見た専門家の藝術展覧會と異つて、これは主にも學生の作品を陳列したものであつた。して、私はこれが遙かに一層獨創的で、且つ興味多い物と思つた。幾千點の繪畫が大抵三圓乃至五十圓の價格で賣品となつてゐて、財布の許す限り買はずには居られなかつた。明らかに實際その境地で描かれたらしい風景畫があつた。例へば、靄を帯びた秋の田の、垂れた穗の上を蜻蛉が飛んでゐる有様、深い峡谷の上に眞赤になつてゐる紅葉、朝霧に罩められた連峯、それから山間の目も眩まんばかりの崖端に立つ百姓の小屋などの光景であつた。また鼠が佛壇の供物を盜まうとするのを、猫が捉へる圖の如き、立派な寫實主義の小品もあつた。

しかし私は繪畫の説明を以て讀者の忍耐を憐まさうといふ考では決してない。私が展覧會見物のことを述べたのは、全く如何なる繪畫よりもつと興味あるものを、そこで見たからである。大玄關に近い處に、和歌をかけた一枚の書幅があつた。これは後に表装を施して掛物にするので、今は假りに長三尺幅一尺八寸程の板に張つてあつた。これは臨池の技に於ける驚異であつた。普通日本の書家が作品の落款に用ひる朱印の代はりに、私は細い手の赤い痕跡を見た——實際の手に捺印用の朱肉を塗つて、巧妙に紙面へ押したのであ

つた。私はガートン譯者註氏が特殊の意義を説いてゐる、あの小さな指紋を識別することができた。

譯者註 サイ・フランシス・ガートン（一八二二—一九一一年）は、英國の人類學者、且つ氣象學者。

また優生學の開拓者で、それから指紋法の創案者である。進化論の發見者ダーウキンの徒弟に當たる。

その書は六歳——西洋風に誕生日から年齢を起算すれば五歳——の子供が、天皇陛下の御前に於て揮毫したものであつた。總理大臣伊藤伯がその奇蹟を見て、その子供を養子にした。だから彼は今では伊藤明瑞といふ名である。

日本人の觀覽者達でさへ、殆ど彼等の肉眼の證據を信ずることができなかつた。大人の書家でもその書に及び得るものは少いだらう。たしかにいかなる西洋の藝術家も、たとひ多年の研究を以てしても、その兒童が陛下の御前で揮つたのと同じ腕前を見せることは不可能であらう。無論かやうな子供は、ただ千年に一たび生まれることができる——神の靈感を蒙つた書家といふ、支那の古い傳説を實現し、或は殆ど實現したのである。

それにしても、私を感動させたのは、作品の美そのものでなくて、その作品が、殆ど前世の思ひ出にひとしいほど鮮明な遺傳的記憶について、怪奇異常、且つ争ふべからざる證

據を與へる點であつた。代々の死んだ書家が、その縷細な手の指のうちに復活してゐた。それは決して眇たる五歳の兒童一個人の作品ではなく、疑もなく複合的祖先の靈魂となつてゐる無数の亡靈の作品なのだ。それは神道の祖先崇拜の教義と、佛教の前世の教義を二つともに肯定する、心理的並びに生理的不思議の明々白々、實在的な證據であつた。

三

すべての繪畫を見てから、私は最近公開されたばかりの御所の大きな庭園を訪ねた。それは仙洞御所の庭と呼ばれてゐる（仙人といふ語に眞に適當する英語がないから、少くとも *Genii* といふ語が、翻譯に當つて、用ひ得らるゝ唯一の語である。仙人は不滅の生命を有し、森林洞窟に住むものと思はれてゐる。印度の *Genii* が日本に於て、或は寧ろ支那に於て神話的變化を経たのである）。その庭園は名にふさはしいものであつた。私は實際神仙の幽境へ入つたやうに感じた。

それは山水の景を模した庭園である。——佛教のために創造されたものである。昔は世俗的虚榮に倦いた帝王や、皇子達のために宗教的隱遁所として建てられたる僧院が、今は

單に御所となつてゐるのである。この庭園はそれに附屬してゐる。門を入つてから受ける印象は、大きな古い英國の公園といふ印象である。巨大なる樹木、短く刈られた芝生、廣い歩道、青々たる草木の新鮮で心地よい香りは、すべて英國の思ひ出を與へる。しかし、もつと進んで行くにつれて、これらの思ひ出は次第に消されて、眞正の東洋風な印象が判然としてくる。それらの巍然たる喬木は、歐洲のものでないことが認められ、さまざまの驚くべき異國的な細部が現はれてくる。すると、一面の池が眼下にひらけて、高い岩と小さな島がその中に浮かんで、頗る奇異な形の橋で連結されてゐる。徐々と——ただ徐々と——この境地の無限なる魅力、怪奇なる佛敎的魅力が身に迫つてくる。して、その非常に古いといふ感じは、遂にかの畏怖の悚動を齎す審美感の琴線に觸れた。

單に人間の仕事として考へただけでも、この庭は驚異である。その設計に於ける巨岩の骨格だけを結合するのにも、數千人の熟練なる勞働を俟つて、始めて成つたのであらう。この庭は一たび形が作られ、土を盛られ、樹木を栽培されてから、その後は自然がその奇蹟を完成するまゝに委せてあつた。千年の間を通じて、働いた自然は、藝術家の夢想を超越した——否、言語を絶するほどに、その夢想を擴大したのであつた。日本の造園術の法則と趣意に通じてゐない外國人は、正確に教へられない限りは、すべてこれが數千年前、

人間の設計者によつたものだと思像することはできないだらう。初めから人の手に觸ることなく自然のままに保護されて、しかも舊都の中心に世間から隔絶してゐる原始林の一部といふ趣を呈してゐる。岩石の表面、大きな怪異な樹根、林間の幽徑、幾つかの古い一本石の碑など、すべて長い年代の苔を帯びてゐる。して、攀登植物は一尺も厚さのある莖となつて、巨蛇の如く梢隙に懸かつてゐる。此庭の或る部分は、鮮かにアンティルズ群島（譯者註）に於ける熱帶的性質の光景を想起させる——尤もここには棕櫚や、驚くべき蛛網狀を成せる攀援莖植物や、爬行動物や、西印度森林の凄い日中の静けさはない。空に賑はしく鳥が騒いでゐるのには驚かされる。それはこの僧院の極樂に棲む野生動物は、未だ嘗て人間によつて危害や脅威を加へられたことがないといふことを、嬉しがつて聲明してゐるのだ。私は戀々去るに忍び難くも、遂に出口に達したとき、この庭の番人を羨望するの念に堪へなかつた。かやうな庭の奉公人となるだけでも、充分に、ましい特權といふべきであらう。

譯者註　墨其古灣の東南に羅列せる西印度諸島の一群。そこで二箇年間滞在せられたヘルン先生の眼底には、熱帯風物の驚異が泛染してゐたので、先生の文章の中には、よく比較の材料になつてゐる。

空腹を感じたので、私の宿は甚だ遠かつたから、私は車夫に料理屋へ行くことを命じた。すると、車夫は私を裏町へ運んで行つて、入口の上に綴りの違つた英語をペンキで書いた、あぶなさうな建物の前にとまつた。私はただ「Hotel」といふ文字だけを覺えてゐる。靴を脱いでから私は勾配の急な階段、或は寧ろ梯子を登つて行くと、三階には西洋風に裝飾された室がつづいてゐた。窓には玻璃を用ひてあつた。リンネル類も申し分がなかつた。唯一の日本風のもは疊と煙草盆であつた。米國製の着色石版畫が壁を飾つてゐた。しかし私はここへ入つた西洋人は殆ど無いだらうと思つた。此家は洋食を辨當箱に入れて、宿屋へ仕出しをするのであつた。して、室は日本人の客のために設備したものに相違なかつた。私はこの皿、コップ其他の器具は、開港場の一つに存在してゐたが、今では疾くの昔になくなつた英國ホテルの名の組み合はせ文字を帯びてゐる事に目が留つた。食事は綺麗な娘達によつて運ばれた。彼等はたしかに西洋式給仕法に通じた人から仕込まれたのである。しかし彼等の無邪氣な好奇心と非常な内氣は、彼等が未だ嘗て眞の西洋客に接したこ

とのないのを私に信ぜしめた。突然私は室の一方の卓上に自動奏樂機のやうなものを一枚の鉤針編みて覆つたのを發見した！私はそこへ行つて、廢物の奏樂機を發見した。そこには澤山の穿孔式樂譜があつた。私は曲柄をその場所にはめて、『五十萬の惡魔』と題する獨逸の歌を出さうと試みた。その機械はごろごろと鳴つて、呻つて、しばらく怒號し、嗚咽し、また怒號し、それから黙つてしまつた。私は『コルヌヰエの時計』など、他の數曲を試みたが、その發音の喧騒囂々々は皆同一であつた。明らかにこの機械は開港場の外國人居留地に於ける競賣で、頭字入りの和蘭燒及び英國燒の陶器と共に買はれたものである。これらのものを見ると、何とも云ひやうのない一種の奇異なる憂鬱を感ずる。何故それがかやうに遠謫された光景を呈し、かくまで衰れにも場所外づれて見え、かくも全然誤解されたさまに映ずるかを理解することは、自身日本に住んだ人でなくては不可能である。西洋の和絃的音樂は、普通日本人の耳には、單にそれだけの騒音となつて聞こえる。して、私はたしかにこの機械の内部構造は、その東洋の所有者には不明となつてゐるだらうと感じた。

同じやうに珍らしいが、しかしもつと愉快な經驗が、宿へ歸る道中に私を待ち受けてゐる。

た。私は少し許り骨董品を眺めるために古道具屋へ立ち寄つた。して、夥しい古本の内に、

非常に汚れた金文字で、『大西洋月刊雑誌』と題せる大冊を認めた。更に近寄つて見ると、

私は『第五卷、ポストン市タイクナー・エンド・フェールズ書店發行、一八六〇年』とあ

るのを讀んだ。一八六〇年の『大西洋月刊雑誌』は何處にもあまり普通あるものではない。

私は値段を尋ねた。すると、日本人の店主は、それは『非常に大冊ですから』といつて、

五十錢と答へた。私は頗る嬉しかつたので、彼と値段の懸け合ひをしようとは考へないで、

直に其掘り出し物を手に入れた。私は其汚れたペーヂを通覽して昔馴染の作家を探してみ

ると、それを發見した——一八六五年にはすべて無名であつたのが、一八九五年の今日に

於ては世界的に有名なが多い。そのうちには『教授の話』といふ題の下に『エルジー・

グニナー』の續稿が載つてゐた。『ロバ・デイ・ロマ』の數章もあつた。『ピサゴラス』

と題する詩があつた。これは後に『輪廻』と改題されたことは、トマス・ペーリー・オー

ルドリックの愛讀者が屹度知つてゐる通りである。ニカラグアに於てウォーカーと共に劫

譯者註一　オリヴァ・ウエンデル・ホームズ（一八〇九——一八九四年）の著はせる小説。

譯者註二　オールドリック（一八三六——一九〇七年）は『アトランチック・マンズリー』の主筆とした

人。

譯者註三 キリヤム・ウォーカー（一八二四——一八六〇年）は米國の冒險家で、ニカラゲアに於て自ら大統領と稱したが追放された。

掠を行つた兵士の經驗談、ヂャマイカ及びサリナムの脱走黒人に關する立派な論文、それから猶ほ他の貴重な諸資料の一つに、日本に關する論文があつた。その劈頭の文句は、次の如き意義の深いものであつた。『日本から使節がこの國に到着したこと、かの寡黙にして嫉妬深き國民によつて、外國へ送られたる初めての政治的派遣員の渡來は、今や世間一般に取つて興味ある問題となつてゐる』少し進んでから、當時の通俗的誤解が、次の如く矯正してある。『今では全然別個のものとかわかつてゐるが、支那人と日本人は久しく同種族と考へられ、且つ一様に尊敬されてゐた……詳細に調べてみると、支那について想像されたる魅惑的性質が消えると共に、日本については、それが一層明白になつてくることを我々は見出す』この自我主張（原注）的な明治二十八年のいかなる日本人も、三十五年前に於ける『大西洋月刊雜誌』の日本に對する、次の如き評論に向つては、非難を加へることができないだらう。『その優れたる位置、その富、その通商的資源、及びその國民の敏捷る智力——智力は當然その發展に於ては局限せらるゝ處があつても、毫も西洋人に劣つてゐ

ない——これらの諸要素は、日本に與ふるに、いかなる他の東洋諸國よりも遙かに超越的
重要を以てする』この寛大な評論の唯一の誤謬は、數世紀の昔からの古い誤謬、即ち日本
の富といふ迷妄であつた。私をして少々昔風に感ぜしめたのは、現今一般に知れ渡つてゐ
る將軍、大君、神道、九州、秀吉及び信長といふ名に對して、昔の和蘭及びゼズイット學
者の奇妙なる綴字——Ziagoon, Tycoon, Simloo, Kiusiu, Fide-yosi, Nobanurga——を見
出したことであつた。

譯者註 日清戰爭に連戦連勝のため、日本人の國民的自覺の勃興した時期である。

私は照明された街頭をぶらついて夜を過ごし、また澤山の見世物のうち、二三を觀覽し
た。私は一青年が佛敎の經文を書き、また足て馬を描くのを見た。この技倆について特異
な事は、經文の文字が逆さまに後方へと書かれ——丁度普通の書家が行の上から下へ書い
て行くのと同じく、行の下から上へ向つて書かれ——また、馬の畫はいつも尾から描き始
められたことであつた。私は一種の園戲場を見た。そこでは鬪場の代はりに水族館があつ
て、人魚が泳いで日本の歌を歌つてゐた。私は日本の菊花栽培者によつて、『花から魔法
で作られた乙女』を見た。それから、折々私は玩具店を覗いてみると、珍奇なものが充満

してゐた。そこで特に私を感服させたのは、日本の發明家が非常に僅少な費用を以て、西洋の高價な機械仕掛の玩具に於けると同一の結果に達しうる、驚くべき巧妙の發揮であつた。一群の紙製の鷄が、竹の彈機の壓力によつて籃の中から假想的の穀粒を啄き出すやうにしたのがあつた——代價は僅に五厘であつた。人工品の鼠が走り廻つて、疊の下や孔隙の中へにげ込まうとするかの如く、後戻りをしたり、疾走したりした。その代價はただ一錢で、一片の色紙、粘土燒の糸卷棒、及び一本の長い糸で作られ、ただ糸を引きさへすれば、鼠は走りだすのであつた。紙製の蝶が同じやうに簡單な工夫で動いて、空中へ投げると、飛び始めた。模造の烏賊の頭の下へ附けてある蘭の小管を吹くと、それはすべてその觸手をうごめかし始めた。

私が歸らうと決心した時には、燈火は消え、店は閉鎖され始めてゐた。して、私が宿に達しない内に、既に私の通路の町は暗くなつた。照明の非常な輝き、妖術のやうな見世物、賑やかな雑沓、下駄の海の如き響き、この急に變はつた空漠と沈黙——これらのものは私をして恰も以前の經驗は眞實でなかつたかのやうに、妖狐の物語に於ける如く、まさしく人を騙すために作られた光と色と音の迷妄であつたやうに感ぜしめた。しかし日本の祭り

の夕を成す一切のものが、急速に消滅するのは、實際記憶の快感を一層痛切ならしめる。この變幻極まりなき光景は、徐々と消えてゆくといふことはない。かくて、その記憶は毫も憂鬱の色を帯びないやうになる。

五

私が日本の娛樂について、その妙趣が散り易いことを考へてゐた時、すべての快樂の痛切さは、その消散し易さに比例するてはないかといふ疑問が私の心に起こつた。これを肯定する證據は、快樂の性質に關する佛教の説に對して、有力なる援助を與へることとなるだらう。もともと精神的娛樂は、それを作る思想感情の複雑さに比例して力を増すものである。隨つて最も複雑なる感情は、必然最も時間の短いものであらねばならぬと思はれる。要するに、日本の通俗的娛樂は、消散し易いことと、複雑なことの二重の特徴を有つてゐる。その譯は、單にそれが纖麗優美で且つ細部が夥多だからばかりではなく、この纖麗と夥多は、一時的狀況と結合に基づいて、偶發的だからである。かかる狀況といふのは、開花と衰萎の季節、日光の時や、滿月の折、場所の變化、明暗の移動などである。また結

合といふのは、民族的天才の祝祭に於ける刹那的發露、幻影を作るために利用されたる脆弱な諸材料、夢を具體化したもの、象徴、肖像、表意文字、彩色の筆觸及び旋律の斷片などの中に復活せられたる記憶、個人の經驗並びに國民的情操に訴へる無数の微妙なる方法を指すのである。して、その情緒的結果は、西洋人の心へは通じないで終つてしまふ。何故といふに、その結果を生ずる數限りなき細部と暗示は、多年親炙熟達の効を積んだ後でなくては到底不可解なる別世界——西洋人が一般にすこしも知らない傳統、信仰、迷信、感情、思想の世界——のものだからである。その世界を知つてゐる少數の人々によつてさへ、日本人の享樂の光景によつて惹き起こされる、名狀し難く、優雅な感じの、茫漠たる浪は、ただ『日本の感じ』として述べられうるに過ぎない。

これらの娛樂の驚くばかり安價なことによつて、一つの興味ある社會學的事實が暗示される。日本人の生活の妙味は、貧乏が美的情操の發達に於ける一勢力である——或は少くともその發達の方向と擴張を決定する一要素である——といふすばらしい現象を私共に見せてゐる。もし貧乏でなかつたら、この國民が夙に快樂を最も高價贅澤な經驗としないで、極めて普通容易なものとする秘訣を發見するといふことはなかつたであらう——それは實

に無から美を創造する天工神技なのだ。

この安價低廉の一つの理由は、國民が一切の自然物に——山水、雲霧、日没の光景に——鳥や昆蟲や花卉の風姿に——西洋人よりも遙かに多くの愉快を發見する能力を有することである。それは彼等が視覺上の經驗を藝術に表現したものの鮮明によつてわかる。今一つの理由は、國民的宗教と古風な教育が想像力を養成して、その結果、苟も昔の物語や傳説を暗示しうるものならば、いかに些々たるものでも、想像力を鼓舞して、愉快に活動せしめることである。

恐らくは日本の安價な娛樂は、自然によつて與へられた季節と場所に人力を加へたものと、自然の暗示によつて人間の作れる季節と場所のものに、大別することができるだらう。前者の種類は、あらゆる國々に見出され、また年々増加してゆく。山上、海岸、湖畔、河邊の或る地方を選定し、庭園を作り、樹木を植ゑ、最も見晴らしのよい地點に茶亭を設ける。すると、荒涼たる土地が間もなく娛樂を趁ふ人のため行樂の境と變はつてくる。或る場所は櫻の名所、他の場所は紅葉の勝地、更に他の場所は藤の名所である。して、四季はそれぞれ——雪降る冬さへも——或る土地に特別の美觀を與へる。だから、最も有名な社寺或は少くともその大部分は、いつも自然の美が宗教的建築家に感激を起こさせ、幾多

の人をして今猶ほ佛僧又は神官たることを願はせるやうな勝地を選んで建てられてゐる。實際日本に於ては到る處宗教が有名な風景と相伴なつてゐて、山水、瀑布、峯、岩、島とか、或は花の咲いたのや、秋の月が水を照らしたのや、夏の夕べ螢の群れが燦めくのを眺めるによい絶勝佳景と聯結されてゐる。

裝飾、飾燈、あらゆる種類の街頭の盛觀、特に祝祭日の壯景は、すべての人が樂み得る都會生活の娯樂の大部分を成してゐる。かやうにして祭日祝節に於て審美的趣向に訴へることは、多分數千人の手と頭腦の働さを示すものであるが、公共的努力に對する各個の貢獻者は、昔からの規則を遵守しながら、しかも自己獨得の考案と趣味に隨つて働く。だから、その綜合の結果は驚くばかりに案外不思議なる多種多様を現はす。かかる場合に當つては、誰れでも助力することができし、また誰れも助力を惜まない。それは最も低廉な材料が用ひられるからである。紙でも、藁でも、または石でも何等實際の差異を呈する事はない。藝術感は天晴れ材料の如何を超越してゐる。その材料に形を與へるものは、自然物、または實物に對する完全なる理解力である。雞の羽毛で作つた花であらうと、粘土の龜や家鴨や雀であらうと、または厚紙製の蟋蟀、螳螂、或は蛙であらうと、その原物に對する觀念は充分よく考へられ、正確に實現されてゐる。泥土の蜘蛛が糸を吐き、網を作り

つつあるやうに見え、紙の蝶は人の目を欺く。何等の原型は要らない——或は寧ろ、いづれの場合に於ける原型も、原物または生きたる事實の精密なる記憶に外ならない。私は人形屋に二十個の小さな紙製人形を依頼した——それぞれ異つた髪の結び方をして、全部で京都の女の髪の主なる形を示すやうにと求めた。一人の娘が白紙、繪具、糊、松材の薄片を用ひて仕事を始めた。すると、それらの人形は畫家が同數のかやうな姿を描くに要するだらうのと殆ど同じ時間にてき上がった。實際にかかつた時間は、ただ手指の動作に要つただけで、直したり、比較したり、改良したりするためではなかつた——腦中の幻像は、彼女の纖手の動くのと同速力を以て實現したのであつた。緑日の夜の珍奇な品は大抵そんな風にして作られたものである——指頭で扭つてすぐ出来あがつた玩具、古い布片に數回毛筆を揮つて綾模様の反物に變へたもの、砂で描いた畫。このやうな妖魔的技術は、また人間の姿態をも利用する。平常目立たない子供に、繪具と白粉を巧みに塗抹すること二三回、それから、飾光に對して工夫せられたる衣裳を着せると、忽然それが化して小妖精となる。線と色に對する豊富な藝術感は、いかなる變幻の術をも行ふことができる。裝飾の調子は決して出鱈目に委せなくて、知識に基づいてゐる。飾燈はこの事實を證明してゐる。ただ或る種類の色合のみ取り合はせてある。しかし全體の光景は、驚異であると共に、ま

た果敢ないものである。それはあまりにも早く消え失せて、缺點を見つける邊もない。それを見た後一箇月の間も、不思議に思はせ、夢に見させるやうな壓氣樓である。

恐らくは日本人の日常生活に伴なふ満足と質素なる幸福の無盡藏なる源泉の一つは、此快樂の一般的安價の中に見出さるべきであらう。眼の慰みは、誰れ人も恣まゝにする事ができる。ただ季節や祝祭が娛樂を興へるばかりではなく、殆どいかなる奇異な町でも、いかなる眞の日本内地でも、賃銀なくして働くやうな極貧の奴婢にさへ、眞正の快樂を供しうるのである。美人或は美を暗示するものは空氣の如く無代價である。加之、いかなる男もあまりに貧乏のため、何か綺麗なものを所有し得ないといふことがない。どんな子供も面白い玩具が持てないといふことはない。西洋ではこれと状態を異にしてゐる。西洋の大都會では、美は富有階級のために存在してゐる。飾りのない障壁や、汚い步道や、煤煙に曇つた空や、怖ろしい機械の喧騒——不幸であつたり、弱かつたり、愚鈍であつたり、または同胞の道德を信任し過ぎたりするといふ、ひどい罪惡を罰せんがために、西洋文明によつて發明せられたる永遠的醜惡と不快の地獄——は、貧民のためのものである。

翌朝私が大行列を見るため外出すると、街上は群集充滿、誰れも動けないやうに見えた。けれども、すべての人々が動いてゐた。或は寧ろ廻流してゐた。丁度魚が群をなしてゐるやうに、一般的にいつか知らぬ間にじり、じりと滑るやうに進んでゐた。一見すると、人の頭と肩が堅固に押し合つてゐるやうな雑沓の中を通つて、私は苦もなく、約半哩ほどの距離にある親切な商人の家へ達した。どうしてこんなに人がぎつしり集つて、しかもそれがこのやうに安易に進み得るかといふ疑問は、日本人の性格のみが解釋を與へるのである。私は一度も亂暴に推しのけられなかつた。しかし日本の群集は必らずしもすべて一様ではない。その中を通過しようとする、不快な結果を蒙るやうな場合もある。無論群集の廉くやうな流動性は、その性質の溫和に比例する。しかし日本に於けるその溫和の分量は、地方に隨つて大いに差異がある。中央部及び東國地方では、群集の親切さはその新文明に對する未経験に比例するやうに見える。この多分百万人にも及ぶ莫大の群集は、驚くほど優しく、また上機嫌であつた。その譯は、大部分の人々は、質樸な田舎者であつたからで

ある。巡査がいよいよ行列のために通路を開くやうにしたとき、群集は我が儘勝手をいひ張らないで直に最も従順に列を作つた——小さな子供は前面に並び、大人は後方に控へて。九時といふ豫告であつたが、行列は殆ど十一時まで現はれなかつた。して、そのぎり詰まつた町の中で長く待つことは、辛抱づよい佛教信者に取つてさへ窮屈であつたに相違ない。私は商人の家の表座敷で親切にも座布團を與へられた。しかし座布團は頗る柔らかで、待遇は懇懃を極めたものであつたけれども、私は遂にぢつとしてゐる姿勢に倦いてきたから外の群集の中へ出て行つて、初めは一方の足で立ち、それから他の片足で立つてゐて、待つ事の經驗に變化を與へた。けれども、かやうに私の場所を去るに先だち、幸にも私は商人の家に於ける客の中で、數名の頗る美しい京都の貴婦人を見ることができた。そのうちには一人の公爵夫人もあつた。京都はその婦人の美で有名である。して、私がこれまで見たうちで最も美しい日本婦人がそこにゐた——それは公爵夫人ではなく、商人の長男の内氣な若い花嫁であつた。美はただ皮相にとどまるといふ諺は、『皮相の見解に過ぎない』といふことは、ハーバート・スペンサーが生理學の法則によつて充分に證明してゐる。して、同一の法則は、舉止品位の優美は容色の美よりも更に一層深長なる意義を有することを示してゐる。花嫁の美は、まさしくかの體格全部に互つて力の最も有效に現は

れてゐる種類の、世にも稀なる優美な形姿であつた。——初め見たとき人をびつくりさせ、更に見るたび毎にますます驚嘆止まざらしむる優美であつた。日本の綺麗な女が、固有の美麗なる衣服でなく、他國の服裝をした場合にも、同様綺麗に見えるのは頗る稀である。私共が普通日本婦人に於て優美と稱するものは、希臘人が優美と呼んだと思はれるものよりは、寧ろ形狀と姿勢の上品さである。この場合に於ては、その長い、軽い、細い、恰好のよい、申し分のないやうに緊まつた姿は、いかなる服裝をも品よく見せるであらう。そこには風の吹くときに若竹が示すやうな、たをやかな優美さが偲ばれた。

行列のことを詳しく述べるのは、無暗に讀者を倦怠せしむるに過ぎないから、私はただ二三の概説を試みるだけにしよう。行列の趣旨は、第八世紀に於ける京都の奠都の時から明治の今日に至るまで、京都の歴史上、諸時代に行はれたさまざまの文武の服裝を示し、また該歴史の中に活躍した主なる武將の人物を現はすといふことであつた。少くとも二千名の人が大名、公卿、旗本、武士、家來、雲助、樂師、白拍子に扮して、行列をなして進んで行つた。白拍子の役は藝者が勤めた。その中には大きな華やかな翼ある蝶々のやうな服裝をしたのもあつた。甲冑武器、古い頭飾りや衣裳は、實際過去の遺物であつて、舊家

や職業的骨董家や私人の蒐集家からこの催のため出品されたのであつた。優れた武將——織田信長、加藤清正、家康、秀吉——は、傳説に基づいて表現されてゐた。實際に藝のやうな顔の人が、有名な秀吉の役を演じてゐるのを見受けた。

これらの過去の時代の光景が、人々の側を通つて行くとき、彼等はぢつと沈黙を守つてゐた。西洋の讀者に取つては、不思議に思はれるかも知れないが、實はこの無言靜肅といふ事實は、非常な愉快を示してゐるのだ。實際、騒々しい表現によつて賞讃を示すといふこと——例へば拍手喝采の如き——は、國民的情操と一致してゐない。軍隊の歡呼さへも、輸入されたものである。して、東京に於ける示威運動じみた喧囂も、多分近頃から始つたもので、且つまた不自然の性質を帯びてゐる。私は千八百九十五年に、その年のうちに神戸で二回までも人を感動させるやうな、鎮まりかへつた光景を記憶してゐる。第一回は行幸の場合であつた。非常な群集で、前方の數列は車駕通過の折跪坐したが、一つの囁き聲さへも聞こえなかつた。第二回の目ざましい鎮靜は、出征軍が支那から凱旋の折であつた。その軍隊が歡迎のために建てられたる凱旋門の下を進行するに當つて、人民は一言の聲をも發しなかつた。私はその譯をきくと、『我々日本人は無言の方が一層よく感情を表はしうると考へる』といふ返事を受けた。私はまたここに述べてもよいと思ふが、最近

の日清戰爭中、日本軍の戰鬪前に於ける氣味わるい靜肅は、いよいよ砲門を開くのよりも一層多く喧騒な支那人を恐怖せしめたのであつた。例外はあるけれども、一般的事實として次の如く述べ得ると思ふ。日本では感情がその苦樂いづれを問はず、深ければ深いほど、また場合が莊嚴或は悲壯であればあるほど、感じたり、行動したりする人々は、自然とますます多く無言になつてくる。

或る外國の見物人はこの時代行列を評して活氣がないといつた。して、燒きつけるやうな日光の下で着馴れぬ甲冑の重さのため壓迫された勇將の勇ましくもない態度や、部下の隠しきれぬ疲勞について、兎角の批判を加へた。しかし日本人に取つては、すべてかやうな點は却つて一層その行列を現實化したのであつた。して、私は全くそれに同意であつた。事實、軍國史上の英雄豪傑は、ただ特異の場合に於てのみ天晴れ凜々しく見えたのだ。百戰鍛錬の剛の者さへも、疲憊の經驗を嘗めてゐる。して、たしかに信長や秀吉や加藤清正も、この京都の時代行列に於ける彼等の代表人物のやうに、幾たびか塵埃にまみれたり、疲れ果てた足を曳きずつたり、力なげに馬に乗つたりしてゐたことがあるに相違ない。苟も教育ある日本人に對しては、いかに芝居じみた理想主義も、日本の豪傑輩の人間味といふ感を没却させることはできない。これに反して、その人並な人間味の史的證據こそ、最

も民衆の心に彼等を懐かしく感ぜしめ、その人並でなかつた一切精神的方面を、對照のためによいよ立派な、卓越なものとするのである。

行列を見た後、私は大極殿へ行つた。これは政府によつて建てられた壯麗なる紀念の神殿で、私の前回の著書譯音注に述べてある。私は紀念章を示してから、桓武天皇の宮を拜することを許された。して、可愛らしい巫女が差し出した清淨潔白な粘土製の新しい杯から、天皇の紀念を祝する少許の酒をいただいた。神酒を飲んでから、小さな巫女はさつぱりした木箱にその白い杯を收め、紀念品として私に持つて歸らせた。このやうに、紀念章を買つてゐた人には、一個づつ新しい杯が與へられたのである。

譯者註 本全集第四卷「心」の第四章「旅日記から」參照。

かかる小さな贈物や紀念品が、日本旅行の獨得な愉快の大部分をつくる。殆どいかなる町や村でも、ただその一個所に於てのみ作られ、他の場所では見出されない美しいものや、珍らしいものを土産として買ふことができる。それから、内地の諸地方では少しばかり寛濶に振る舞ふ場合、屹度進物の謝禮を受ける。その品物は幾ら安價であつても、殆ど必ら

ず驚異且つ愉快でないことはない。日本各地漫遊の際、私があちらこちらで手に入れた種類の品のうちで、最も綺麗なもの、また最も私が愛するものは、かやうにして得た奇異な小さな進物である。

七

京都を立つ前に、私は譯者注畠山勇子の墓を訪ねようと思つた。彼女の葬られてゐる場所を數人に尋ねても、わからなかつたので、丁度檀家を訪問のため私の宿へ來た僧侶に聞いてみようと思ひついた。彼はすぐに答へた。『末慶寺の墓地です』末慶寺といふのは、案内書にはしるしてなく、またどこか市の外づれに建てられた寺であつた。私は直に車を雇つて、約半時間の後、その門へ達した。

譯者註 畠山勇子は千葉縣安房國長狹郡鴨川町の女。明治二十四年五月近江國大津に於て、露國皇太子が巡査津田三藏のため負傷するや、上下ために震駭す。この報千葉縣下に傳はるや、當時某家に雇はれ居たる勇子は、大に憂ひ、主家に請ひて直ちに京都に赴き、五月二十日夕景、京都府廳の門前に到り、露國大臣と日本政府に宛てたる二通の書面を車夫をして門番所に差出さしめ、やがて懷中より銳利なる剃刀を取

出し、自殺を遂ぐ。遺骸は京都大宮松原なる末慶寺に埋葬せらる。(『大日本人名辭書』)

私が來意を告げた僧は、墓地——頗る大きい——に私を案内し、墓を示してくれた。かなりと晴れた秋の日は、一切のものに光を浴びせ、墓面に幽靈のやうな黄金色を加味してゐた。そこに立派な大きな文字を深く彫つて、『烈女』といふ佛教の尊稱接頭語を加へて、少女の名がしるしてあつた——

烈女 畠山 勇子 墓

墓は手入れがよく行き届いて、草は最近きちんと刈つてあつた。碑前に建てられた小さな木造の庇が、供へられた花、櫛の枝、及び一個の清水を入れた茶碗を蔽うてゐた。私は勇壯で犠牲的な靈魂に向つて心から敬意を表し、慣例の文句を唱へた。他の參詣者の中には、神道の式によつて拜禮をするのも見受けられた。その邊には澤山の墓石が輻輳してゐたので、碑背を見るために、私は塚域を踏む無禮を冒さねばならないことを知つた。しかし私は彼女が宥恕してくれるだらうと確信したから、恭しく踏み乍ら、背後へ廻つて行つて、碑文を寫した。

勇子安房長狹郡鴨川町人天性好義明治二十四年五月二十日

有愛國事來訴京都府廳自斷喉死年二十七

谷 鐵 臣 誌

府下有志建石

戒名は『義勇院頓室妙教大姉』と讀まれた。

寺で僧は私に悲劇の遺物と紀念品を見せてくれた。小さな日本の剃刀は血が皮となつて、嘗て白く柔らかな紙を厚く其柄にまきつけたのが、固まつて一個の堅い赤色の塊となつてゐるもの——安價な財布——血で硬くなつた帯と衣類（着物の外は、すべて寺へ寄進するに先だち、警察の命令により洗濯された）——手紙及び控へ帳——勇子及びその墓の寫眞（私はこれを買ひ求めた）——墓地に於て葬式が神官によつて營まれた折の集會の寫眞などであつた。此神葬祭の事實は私に興味を興へた。何故なら、自説は佛教によつては宥されても、神佛兩信仰が同一の見地から考へる事は出来なかつたであらうから。衣類は粗末で安價のものであつた。彼女は旅費と埋葬の費用に當てるため、最上の所持品を質に入れ

たのであつた。私は彼女の傳記、死の物語、最後の手紙數通、種々の人が彼女のことを詠んだ歌——頗る高位の人の作歌もあつた——及び拙い肖像畫を載せた小冊子を買つた。勇子とその親戚達の寫眞には、何も目立つたことはなかつた。かかる型の人々は、日常日本のいづこに於ても見ることが出来る。その冊子の興味は、ただ著者とその主題の人物に關する心理的方面のみであつた。勇子の手紙は、日本人のかの奇異なる興奮状態を示してゐた。恐ろしい目的は一刻の油斷なく緊張しながらも、しかも心は最も些々たる事實問題にも、あらゆる注意を與へ得るやうになつてゐる。控へ帳もまた同様の證據を示した——

明治二十四年五月十八日

金五錢

日本橋より上野へ車代

同

十九日

金五錢

淺草馬町へ車代

金一錢五厘

下谷の髮結さんへ磨ぎ代として

金十圓

馬場の質屋佐野より受け取る

金二十錢

新町へ汽車代

金一圓二錢

横濱より静岡へ汽車代

同

二十日

金二圓九錢

静岡より横濱へ汽車代

金六錢

手紙二通の切手代

金十四錢

清水にて

金十二錢五厘

傘のため車屋へ

しかしここに現はれた整然たる規律的才能に對して、珍らしい對照を呈するのは、暇乞ひの手紙の詩趣であつた。それは次のやうな感想を含んでゐた――

「八十八夜も夢の如く過ぎて、氷は清けき滴りと變はり、雪は雨となりぬ。やがて櫻の花咲きいてて人の心をよろこばす。されど未だ風さへ觸れぬほどに、早くも散り始むるこそ哀れなれ。しばらくして、風は落花を吹き上げて、晴れ渡りたる春の空に舞はしむ。しかも妾を愛し玉ふ方々の心は晴れやらで、春の愉快をも感じ玉はざるならん。續いて梅雨の季節となれば、皆様の御心の中には一つの楽しみもなからん……あはれ如何にかせまし。

一刻として皆様を思ひ奉らぬ時はなし……：されどすべて氷も雪も遂には、とけて水となり、菊の香ばしき蕾は霜の中に咲く。何卒後日このことを御考へ下されたし……：今は妾に取つて霜の時、菊の蕾の時と申すべきならむ。いよいよ花を開きさへせば、いとも皆様をよろこばし奉ることならん。浮世にながらへ得ざるは、すべての人の運命、詮方なし。吳々も妾を不孝者と思召し玉はざるやう願ひ奉る。また妾を陰府へ失ひ玉ひしものと御考へ下さることなく、ただ將來の幸運を待ち玉はんことを』

この小冊子の編者は、この典型的婦人に豊かなる讃辭を浴びせ乍らも、しかもあまりに東洋流の婦人批評法に墮してゐた。官廳へ宛てた男子の手紙に於て、彼女は家族的要求を述べてゐる。して、これを編者は婦人の弱點として批評を加へ、彼女は實際肉體的利己心の絶滅を成就したものの、彼女の家族について述べるのは『甚だ愚か』であつたと書いてゐる。もつと他の點に於ても、その冊子はずまらぬものであつた。その平凡なる事實の曝露といふ、生硬強烈なる光の下に照らしてみると、一八九四年に書いた私の『勇子』と題する小品文は、暫くは、あまりにも空想的に思はれた。しかし、それにも關はらず其事實の眞の詩味——單に國民の忠愛の情を表明せんがために、若い婦人をして自ら生命を捨つ

るに至らしめた純なる理想——は、依然として減ずることはない。取るに足らざる些細な乾燥なる事實を取り上げて、その大事實にけちをつけることは決して出来ない。

譯者註 本全集第四卷「東の園から」の最後の一節である。

この犠牲の行爲は、私を感動せしめたよりも、更に多く國民の感情を激動した。男子の寫眞と彼女に關する小冊子は幾千となく賣れた。幾多の人が彼女の墓に詣つて、供物を獻げ、また末慶寺にある遺物を眺めて敬慕の情に打たれた。して、凡てこれは誠に尤もなことに私は思つた。もし平凡な事實が、西洋で人々が好んで『上品な感情』と稱するものに取つて、不快の感を催さしめるとすれば、その上品は不自然で、その感情は淺薄であることとの證據である。眞の美は内的生命に存することを認めてゐる日本人に取つては、平凡些細な事柄は、貴重なものである。それらは勇壯義烈の感を更に強め、且つ眞實ならしめる功能がある。あの血に汚れた、貧弱な物品類——粗末で地味な着物と帯、安價な小財布、質屋へ行つたことの覚え書き、手紙や寫眞や緻密な警察記録に現はれたる赤裸々の尋常一様な人間味の面影——すべてこれらは、恰もそれだけ眼に訴へる證據となつて、この事實を作つた感情に對する理解を充分完全ならしめる助けとなる。もし男子が日本一の美人で

あつて、彼女の家族は最も高い地位の人々であつたならば、彼女の犠牲の意義が身に浸みて感ぜられることは、遙かに少かつたであらう。實際の場合に於て、高尚なことを行ふものは、概して普通の人であつて、非凡の人ではない。して、一般人民はこの尋常な事實のお蔭で、自分達の仲間の一人に於ける勇壯な特質を最もよく見ることを得て、自分達の光榮を感じてくる。西洋の多數の人は、普通人民から彼等の倫理學を今一度改めて習はねばならないだらう。西洋の教養ある階級は、あまりに長く似て非なる理想主義、單なる因襲的偽善の雰圍氣のうちに生活してきたので、純真正直な温かい感情は、彼等の眼には卑劣俗悪に映るのである。して、その當然避け難き罰として、彼等を見ること、聞くこと、感ずること、考へることができなくなつてくる。哀れなる男子が、彼女の鏡の裏に書いた小さな歌詞の中には、西洋の月並的理想主義の大部分に於けるよりも、一層多くの眞理が含まれてゐる――

くもりなくこの鏡みがきてぞよしあしともにあきらかにみむ

私はこれまで見たことのない方面を経て、別の道を辿つて歸つた。そこは寺ばかりであつた。非常に大きな美しい空地の多い場所で、また魔法のために鎮められたやうに静かであつた。住宅も店もない。ただ兩側に道路から後へ傾斜した淡黄色の塀があるのみであつた。塀は城壁のやうであるが、笠石や青瓦の小さな屋根で蔽つてある。して、この黄色の傾斜せる塀（長い間隔を置いて一寸法師のやうな小門が穿つてある）の上に、杉と松と竹の柔らかな大きな茂林があつて、その中を貫いて天晴れ立派な彎曲を見せた屋根が聳えてゐる。これらの静かな寺院の町が、秋の午後の光線で黄金を溶びた見通しの光景は、多年吐露しようと試みても駄目であつた思想のいかにも完全なる表現を、たまたま或る詩中に見出したやうな愉快の竦動を私に與へた。

しかもその魅力は何を以てできてゐたか。立派な塀はただ泥土を塗つたもの、山門や寺院は木材を組み合はせて瓦を載せたもの、叢林、石細工、蓮池は單なる造園に過ぎない。何等の堅牢なもの、何等の永續的なものはない。しかし線と色と影の、いかにも美麗なる

聯結であつて、どんな言葉を用ひても、それを描寫する事はできない程である。否、假令その土墾は檸檬色の大理石に、その瓦は紫水晶に、寺院の材料は大光明王の經文に説いてある宮殿のその如き貴重なものに變はつたにしても、それでも此光明の美的暗示、夢のやうな安靜、渾然圓熟せる愛らしさと柔らかなさを秋毫も増す事はないだらう。恐らくはこの藝術がかくまでに驚嘆すべき所以は、まさしくその作り上げたものの材料が、かくまでに脆弱だからである。最も驚くべき建築、即ちかの最も人を恍惚たらしむる風景は、最も軽い材料で作られてゐる——雲の材料で。

しかし美をただ高價とか、堅固とか、『しつかりした實在』と聯結させてのみ考へる人は、決してそれをこの國に求めてはいけない——この國を稱して日出の國といふのは、まことに當を得てゐる。何故なら、日出は幻迷の時だからである。山間や海邊にある日本の村落を——春曙秋晨、恰も徐々ともちあがつて行く霧や霞を通して——日出後に眺めた光景ほど美はしいものはない——しかし實際的な觀察者に取つては、魅惑は霧や霞と共に消えてしまふ。生硬な白光の下に、彼は紫水晶の宮殿も、黄金の帆も見出すことができぬ。ただ脆い木造草葺の小舎と、素木のまゝの奇異なる日本型船を見るのみだ。

恐らくはいづれの國に於ても人生を美化する一切のものは、この通りであらう。人間界

や自然界を面白く眺めるためには、私共は主觀的或は客觀的の幻影を通してそれを見ねばならない。どんな風にそれが私共に映ずるかは、私共の内部に存する精神的狀態如何による。それにも關はず眞なるものも眞ならざるものも、ひとしく其本體に於ては幻影的である。俗悪なもの、珍貴なもの、一見はかなく思はれるもの、永久的に見ゆるもの、すべて一様に幽靈のやうなものに過ぎない。生まれてから死ぬるまで、いつも心の美麗なる霧を通して眺めてゐる人こそ最も幸福なのである——就中、愛の霧を通して眺めるにまさつたものはない。それはこの東洋の輝ける日光の如く、平凡なものを黄金に化するのである。

第四章 塵

「菩薩は、一切のものを空間の性質を有するものと見做すべきである——永遠に空間に等しきものとして。

本質なく、實體なく」——「サツダアールマ・ブンダリーカ」經句

私は町はづれまでぶらぶら散歩した。私の通つて行つた町は、てこぼこになつて田舎街道となつた。それから、山の麓の小部落の方へ向つて、田圃の中を經て曲つてゐた。町と田圃の間に、建物のない廣漠たる地面があつて、子供の好きな遊び場所となつてゐる。そこには樹木があり、ごろごろ轉がり遊ぶによい草地があり、小石も澤山ある。私は立ち止まつて子供達を眺めた。

路傍で、濕つた粘土を弄つて面白がつてゐるのがある。小規模の山や川や田の形、小さな村落、百姓の小屋、小さな寺、池や彎曲した橋や石燈籠のある庭、それから、石の破片を碑石とした小さな墓地——こんなものを粘土で作つてゐる。彼等はまた葬式の眞似をす

る。——蝶や蟬の死骸を土に埋めて、塚の上で經文を讀む風をする。彼等も明日はこんなことを敢てしないだらう。何故なら、明日は死人の祭の初日だからである。盆の祭の間は、昆蟲類をいぢめることは嚴禁されてゐる。特に蟬を苦しめてはいけない。或る蟬の頭上には、小さな赤い文字があつて、亡靈の名だといはれてゐる。

どこの國の子供も、死の眞似ごとをして遊ぶ。人格的個性の念が起つてこないうちは、死といふことを眞面目に考へることはできない。して、この點に於ては、子供の考へ方が、自意識を有する成人よりも、恐らくは一層正鵠を得てゐるだらう。無論、もし或る晴天の日、これらの子供達が、遊び仲間の一人は永久に去つてしまつた——他の場所て再生するために行つたと告げられるならば、漠然ながらも眞實に損失の念を感じ、はてやかな袖を以て、幾たびも目を拭ふこととなるだらう。しかし問もなく、損失は忘れられ、遊戯は復た開始されるだらう。物の存在がなくなるといふ觀念は、子供心にはなかなかわかりかねる。蝶や鳥や花や葉や楽しい夏そのものも、ただ死ぬる事の眞似をやつてゐるのだ——彼等は去つてしまつたやうでも、雪が消えてから、すべてまた皆歸つてくる。死に對する眞の悲哀と恐怖は、疑惑及び苦痛に對する經驗を徐々に積んだ後、始めて私共の心中に起つてくるのである。して、これらの男兒や女子は日本人であり、また佛教徒である

から、死について、讀者諸君や私が感ずるやうには、將來決して感ずることはないだらう。彼等は誰れか他人のためには、それを恐怖すべき理由を見出すだらうが、彼等自身のためには決して見出さないだらう。何故なら、彼等は既に幾百萬遍も死んできてゐるので、丁度誰れても引き續いた齒痛の苦を忘れる通り、その苦痛を忘れてゐるだらうからである。花崗岩にまれ、蛛網の絲にまれ、すべての物質は、幽靈のやうなものだと教へる彼等の信條のあやしくも透徹せる光に照らしてみれば——恰も最近發見されたエックス光線が、筋肉組織の不思議界を照明する如くに——この現在の世界は、彼等が子供時代に作つた粘土の風景に於けるよりは、一層大きな山や川や田はあつても、彼等に取つて更に一層現實なものと思はれることはないだらう。して、恐らくは更に一層現實なものではあるまい。

この考が浮かぶと共に、私は不意に軽い打撃を覺えた。これは私のよく馴れてゐる打撃である。して、私は物質非實在の思想に襲はれたのだと知つた。

この萬物空虛の念は、ただ大氣の溫度が、生命の溫度と頗る均等なる關係状態を呈して、私が肉體を有してゐることを忘れるやうな場合にのみ起こつてくる。寒氣は堅強といふ苦しい觀念を促す。寒氣は個人性といふ迷想を鋭くする。寒氣は主我慾を盛んならしめる。

寒氣は思想を麻痺させる。して、夢の小さな翼を縮めてしまう。

今日は温かい、静かな天氣で、一切のものをありのまゝに考へることのできるやうな日だ——海も山も野も、その上を蔽へる青い空虚の穹窿に劣らず現實らしくない。すべてのものが昼氣樓だ——私の肉體的自我も、日光にてらされた道路も、眠さうな風のもとにゆるく漣波をうつてゐる穀物も、稻田の靄氣の向うにある草葺の屋根も、それから遠く一切のものの中に、山骨の露はれた丘陵の青い皺も。私は私自身が幽霊であるといふ感じと、また幽霊に襲はれてゐるといふ感じの、二重の感じを有つてゐる——世界といふすばらしく明かるい幽霊に襲はれて。

その野原には男や女が働いてゐる。彼等は色彩を帯びたる動く影だ。して、彼等の足の下の土——それから彼等は出てたのだ、して、またそれへ歸つて行くだらう——も同様に影だ。ただ彼等の背後に潜める、生殺の力こそ眞實なのだ——随つて見えないのだ。

夜がすべての更に小さな影を呑み込んでしまふ如く、この幻像的な土は畢竟私共を呑み込んで、それからそのまゝ消滅してしまふであらう。しかし小さな影も、その影を喰べたものも、その消えたのと同様確實に、また現はれるにさまつてゐる——何處かて、何とか

して、復た物質化するに相違ない。私の足の下のこの土地は、天の河と同じほどに古い。それを何と呼ぼうとも——粘土といひ、土壤といひ、塵土といつても——その名は單に何等それとは共通性なき人間の感覺の象徴に過ぎない。實際それは名がなく、また名を附することもできない。ただ勢力、傾向、無限の可能性の團塊である。何故なら、それはかの際涯なき生死の海が打ちよせて作つたものだからである——生死の海の巨濤は、永遠の夜から密かに波を打ち乍ら、碎けて星の泡沫と散つてゐるのだ。それは無生命ではない。それは生命によつて自らを養ひ、また有形の生命がそれから生ずる。それは業報の塵土であつて、新しい結合に入らうと待ちかまへてゐる——佛者が中有と稱する、生と生の間状態に於ける、祖先の塵土である。それは全く活力から作られてゐる。して、活力以外の如何なるものからも作られてゐない。しかもそれらの活力は、單にこの地球だけのものではなく、數へきれぬほどの既に消滅し去つた世界の活力を含んでゐる。

苟も目に見えるもの、手に觸れうるもの、量りうべきもので、嘗て感性の混じたことのないものがあるか——快樂或は苦痛につれて振動したことのない原子、叫び或は聲でなかつた空氣、涙でなかつた點滴があるか。たしかにこの塵土は感じたことがある。それは私

共が知つてゐる一切のものであつた。また幾多私共が知り得ないものでもあつた。それは星雲や恒星であつたり、惑星や月であつたことが、幾たびであつたか云ひつくせない。それはまた神でもあつた——太陽の神であつて、邈乎たる昔の時代に於て、多くの世界がそれをめぐつて拜んだのであつた。『人よ、汝はただ塵に過ぎざることを記憶せよ』——この語はただ物質主義説としては深遠であるが、その見解未だ皮相の域を脱してゐない。何故といふに、塵はどんなものか。『塵よ、汝は太陽たりしことを記憶せよ。また再び太陽となるべきことをも記憶せよ……汝は光明、生命、愛たりしなり。而して今後また、永劫不斷の宇宙的魔法により、必らず幾たびも斯く變化せん』

何故なら、この宇宙といふ大幻像は、單に發展と滅亡の交替以上のものであるからである。それは無限の輪廻である。それは果てしなき轉生である。かの古昔の肉體復活の預言は、虚偽ではなかつた。それは寧ろあらゆる神話よりも大きく、あらゆる宗教よりも深い眞理の豫表であつた。

幾多の太陽は、彼等の炎の生命を失つてしまふ。しかし火の消えた彼等の墓から、また新しい幾多の太陽が元氣よく現はれてくる。幾多の滅んだ世界の死骸は、すべて或る太陽

の作用による火葬壇へ移つてゆく。しかし彼等自身の灰燼から、彼等はまた生まれる。この地球の世界も滅びるにきまつてゐる。その海洋は悉く幾多サハラの沙漠を現出することとなるだらう。しかしそれらの海洋は、嘗ては太陽のうちに存してゐたのである。して、その枯死した潮流は、火によつて生き返されて、また別世界の海岸に轟々たる波を打ち寄せるであらう。轉生と變形——これらは寓話ではないのだ！どんなことが不可能だらう？ 鍊金術者と詩人の夢は、決して不可能ではない——實際鐵渣を黄金に、寶玉を生ける眼に、花を肉に變化することができる。どんなことが不可能だらうか？もし海洋が世界から太陽へ、太陽からまた世界へと移つて行くことができるならば、死滅した個性の塵土——記憶と思想の塵土は、どうなるだらうか？復活は存在する——しかし西洋の信仰で夢想されてゐるいかなるものよりも、一層偉大なる復活だ。死んだ感情は、消滅した太陽や月と同じく確實に復活するであらう。ただ私共が現今認知しうる限りでは、全然同一個性の復歸といふものはないだらう。再現はいつも以前存在してゐたのを再び結合したものの、類縁のものを整理したもの、前世の經驗の滲みこんだ生命が更に完成されたものであるだらう。宇宙は業報である。

自身は無常だといふ觀念から私共が畏縮するのは、單に迷妄と痴愚のためである。何故なら、元來私共の個性とは何であるか。極めて明白に、それは毫も個性ではない。それは數へ盡くされぬほどの複雑性である。人間の身體はどんなものか。幾億億の生ける實體から作られた形態、細胞と呼ぶるゝ個體の一時的の聚團である。それから、人間の靈魂はどんなものか。幾億兆の靈魂の複合物である。私共は一人残らず悉くみな、以前に生きてゐた生命の斷片の、限りなき混合體である。して、絶えず人格を分解させては、また構成する宇宙的作用は、私共一人一人の上に恆久に行はれ、また現在の瞬間にも行はれてゐる。いかなる人でも、嘗て全然新しい感情、絶對に新しい思想を有したことがあるか。私共の一切の感情と思想と希望は、いかに人生の移り行く季節を通して變化し生長するにしても、ただ他の人々——大部分は死滅した人々、幾億兆の過去の人々——の感覺と觀念と欲望の集合と再度の集合に過ぎない。細胞と靈魂はそれら自身、再度の集合であつて、過去に於てさまざまの力の編まれたのが、更に現在に於て聚結せるものである——それらの力に就いては、それは宇宙間一切の幻影を作る造物主のものだといふことを除いては、何事もわかつてゐない。

諸君が（私が諸君といふのは、靈魂の他の聚團——私のよりも外の聚團を意味する）果

たして眞に一個の聚團として不滅を願ふか否か、私は斷言する事ができない。しかし私は告白するが、『わが心はわれに取つて一王國なり』ではない。寧ろそれは奇怪なる共和國である。それは南米諸共和國に頻發する革命騒動によるよりも、一層多く日々惱まされてゐる。して、合理的と想像せられてゐる名目上の政府は、かかる紊亂の永續は望ましくないと宣言してゐる。私の心には、空高く翔らうと欲する靈魂もあれば、水の中（海水だと私は思ふ）を游泳しようと欲する靈魂もある。また、森林の中或は山の絶頂に住まうと欲する靈魂もある。それから、大都會の喧囂雜沓をあこがれる靈魂や、熱帶地方の孤獨な場所に住まうと願ふ靈魂もある。更にまた、裸體的野蠻のいろいろな程度にあるもの——租税を納める必要なき遊牧的自由を要求するもの——保守的且つ纖麗優雅で、帝國と封建的傳統に對して忠良なるもの——虛無主義で、サイベリヤの流刑に値するやうなもの——袖手、無爲を嫌つてぢつと落ち著いて居られぬもの——非常な默想的孤立に安住してゐて、ただ多年を隔てて折々そのうごめくのを私が感じうるやうな仙人じみたもの——呪物崇拜の信仰を有するもの——多神教的なるもの——回々教を主張するもの——僧院の蔭と抹香の薰り、蠟燭の幽かな光とゴシック建築の暗影と崇高を愛する中世的なもの——さまざまの靈魂が私の中に入つてゐる。これらの一切の間に於ける協同一致は思ひもよらぬことで

ある。いつも悩みがある——反抗、紛擾、内亂が起こる。大多數のものは、かかる状態を嫌つてゐる。欣んで他へ移住しようとするものも多くある。して、少數の賢明なものは現存組織の全滅後でなくては、一層よい状態を望んでも結局駄目だと感じてゐる。

私が一個人——一個の靈魂！否、私は一つの群衆である——幾萬兆といふ、考も及ばないほど夥しい群衆なのだ。私は時代に時代を重ね、劫億に劫億を積んだものだ。今私を作つてゐる集合は、數へきれぬほどたびたび解散しては、また他の散らばつたものとまじり合つたのである。だから、次回の消散分解を何の懸念すべきことがあらうか？恐らくは、太陽のさまざまの時代、燃焼の幾億萬年を経た後に、私を組織する最上の要素が、再び集合することがあるかも知れない。

『何故』といふ理由の説明を想像しさへも得らるゝならば！『何處から』と『何處へ』の問題は、それよりも遙かに困難が少い。その譯は、假令漠然ながらも、現在が未來と過去を私共に確保するからである。しかし『何故』は！

少女のやさしい聲が、私の空想を醒ました。彼女は『人』といふ漢字の書き方を幼弟に教へようとしてゐる。初め彼女は砂の中へ、右から左へ向けて、下方へ傾斜する一畫を引く――

それから、彼女は左から右へ向けて、下方へ曲線をなす一畫を引く――

この二つを結合して、完全な一字を成すやうに書いたのが『人』である。男女の性如何を問はず人を意味する。または人類を意味する――

人

次に彼女は、この字形の意義を實際的説明によつて、幼児の記憶に印しようと試みた――

—この説明法は多分學校で學んだのだらう。彼女は一つの木片を二つに割つて、それから、文字の二畫が成すと殆ど同じ角度に、木の二小片を互に釣り合はせるやうにした。『さあ、御覽なさい』と、彼女はいつた。『一方は片一方の助けがあればこそこんなに立つてゐるのよ。一方だけでは立てませんわね。だから、この字は「人」です。人は助けがなくては、この世に生きて行かれません。助けられたり助けたりして、誰れも生きてゆけるのですよ。もしみんながほかの人を助けなければ、みんな悉く倒れて、死んでしまふのです』

この説明は言語學的には正確ではない。左右の兩畫は、進化論によれば、一對の足を現はしてゐる——原始時代の畫文字に現はれた人間の身體全部の形が、現代の表意文字には兩肢だけ遺存して表はれてゐるのだ。しかし美はしい教訓的空想の方が、科學的事實よりも一層多く重要である。それはまたあらゆる形狀、あらゆる出來事に賦與するに倫理的意義を以てする、古風な教授法の一つの面白い實例である。加之、單に道德的知識の一條項としても、それはすべての世俗的宗教の心髓と、すべての世俗的哲學の最良部分を含んでゐる。この鳩のやうなやさしい聲を有し、ただ一つの文字の無邪氣な福音を説く可愛らしい乙女は、實に世界的尼僧である！眞にその福音のうちにこそ、究竟の問題に對する唯一の可能なる現在の答が存してゐる。もしその完全なる意義が世界一般に感ぜられ——愛と

助けの精神的並びに物質的法則の完全なる暗示が、普く遵奉さるゝに至らば、理想主義者の説に従へば、忽然此一見堅牢な具象世界は煙と消えてしまふであらう！何故なら、いかなる時にも、苟も一切人間の心が、思惟と意志に於て大教主の心に一致する場合は、『一塊土一粒塵と雖も佛道を成就せざるものは莫からむ』と、書いてあから。

第五章 日本美術に於ける顔について

一

國民文庫ナショナルライブラリーに於ける日本美術蒐集品に關する頗る興味ある論文が、昨年倫敦に催されたる日本協會ジャパングレイトイの席上で、エドワード・ストレーンデ氏によつて朗讀された。ストレーンデ氏は日本美術に對する同氏の鑑賞を證明するのに、日本美術の諸原理——細部の描寫を或一つの感覺、または觀念の表現に隸屬せしむること、特殊を全般に隸屬せしむることの解説を以てした。氏は特に、日本美術に於ける裝飾的要素及び彩色印刷の浮世繪派について述べた。一部僅に數錢を値する小冊子に示さるゝ日本の紋章學さへも、『普通の形式的裝飾の意匠に於ける教育』を含んでゐると、氏は説いた。氏は日本の形板かたいた版意匠の非常なる工業的價値に論及した。氏は日本の手法の周到なる研究によつて、書物の挿畫法の上を得らるべき利益の性質を説明しようと試みた。して、氏はオーブリ・ビアズリー、エドガ

ア・キルスン、スタインレン・イベルス、ホキツスラー、グラッセット・シユレー、及び
 ラントレックのやうな諸美術家の作品に於ける、これらの手法の影響を擧げた。最後に、
 氏は或る日本の原理と印象主義の現代西洋に於ける一派の主張の一致を指摘した。

譯者註一　ピアズリー（一八七四——一八九八年）は、千九百年代に於ける、英國の世紀末文藝潮流の一

つなる、耽美主義類廢派の作家と提携し、書籍雜誌の挿繪に鬼才を發揮した人。

譯者註二　ホキツスラー（一八三四——一九〇三年）は、米國に生まれ、巴里に學び、英國に定住した色

彩畫家。銅版印刷術に最も妙を得た。

かかる講演は英國に於ては、大抵反對の批評を挑發しないでは止まないだらう。何故な
 ら、それは一種の新しい思想を暗示したからである。英國の輿論は思想の輸入を禁じはし
 ない。もし新鮮なる思想が始終提供されないならば、一般社會は不平を訴へることさへも
 ある。しかしその新思想の要求は攻勢的である。社會はそれらの思想に向つて知的戦闘を
 試みようとする。新しい信仰或は思想を、鵜呑みに受け容れしめようと勸説したり、一
 躍直に結論に達するやう賺かすのは、山岳をして牡羊の如く跳躍せしめようとすることに異ら
 ない。もし『道徳的に危険』と思はれない思想ならば、社會は欣んで説得さるゝことを欲

するが、しかし劈頭第一に、その斬新なる結論に到達せる心的徑路の一步一步が、絶對的に正確なることを認めねば承知しないのである。日本美術に對するストレーンデ氏の正當ではあるが、しかし殆ど熱情横溢の概ある賞讃が、論諍なくして通過するといふことは、固より有りうべくもなかつた。それにしても、日本協會の連中から異議が起ころうとは、誰れ人も豫期しなかつたであらう。しかし協會の報告によつて見れば、ストレーンデ氏の意見は、該協會によつてさへも、いつもの英國流の態度を以て迎へられたことがわかる。英國の美術家が日本人の手法を研究して、或る重要なことを學びうるだらうといふ考は、實際に嘲笑を浴びせられた。それから、會員諸氏が加へた批評は、その論文の哲學的部分が誤解されたか、或は注意を惹かなかつたかといふことを示した。或る一紳士は、無邪氣に不平を洩らして、彼は『何故に日本美術は、全然顔面の表情を缺いてゐるか』を想像し得ないといつた。また他の一紳士は、日本の浮世繪にあるやうな婦人が、決してこの世にありうべくもないと斷言し、して、彼はそれに描かれた顔は、『絶對に狂氣』であると説いた。

それから當夜の最も奇々怪々な事件がつづいて起つた——それは日本の公使閣下が、それらの反對說に確證を與へ、且つこれらの版畫は『日本に於てはただ通常なものと思

されてゐる』と、辯解的言説を添へた事であつた。通常なもの！昔の人々の判断では、恐らく通常であつたらうが、今日に於ては審美的贅澤品なのだ。論文に挙げられた美術家は、北齋、豊國、廣重、國芳、國貞などの珍重すべき人々であつた。しかし公使閣下は、この問題を瑣末なものと考へたらしい。その證據には、彼は機に乗じて愛國的ではあるが、突然にも話頭を轉じて會員の注意を戦勝の方に向かはしめた。此點に於て彼は日本の時代精神を忠實に反映してゐる。現今日本の時代精神は、外國人が日本の美術を賞めるのを殆ど我慢が出来ないのである。不幸にも、目下のいかにも正常にして且つ自然なる軍事的自負心に支配されてゐる人々は、大軍備の擴張と維持は——最大の經濟的用心を以て行はれない限り——早晚國家的破産を促すと共に、國家將來の産業的繁榮は、國民的美術感の保存と養成によること尠からぬといふことを反省してゐない。否、日本が用ひてその最近の戦勝を得た手段材料は、公使閣下が何等の價值をも附することなかつたらしい美術感そのものの通商的结果によつて、主にも購はれたのであつた。日本はいつまでも續いて、その美術觀念にたよらねばならぬ。かの花菱の製造の如き、平凡な産業方面に於てさへもさうである。何故なら、單なる低廉製品の點に於ては、日本は支那よりも安く賣ることは決してできないだらうから。

ストレーンヂ氏の論文によつて挑發された批評は、日本美術に對して正鵠を失つてゐたけれども、それは當然であつて、またその美術に對する無知とその目的の誤解を示せるものに外ならない。それは一見してその意義が讀まれるやうな美術ではない。それを正當に理解するためには多年の研究が必要なのである。私は敢て恰も文典に於ける法及び時制のやうな該美術に於ける詳細に通曉し得たと揚言する事はできないが、しかし古い繪雙紙や、今日の安い版畫、特に繪入新聞にある顔は、私に取つて毫も非現實なものと思はれないし、況して『絶對に狂氣』じみてゐると思はれないと、私は斷言し得るのである。それが實際私に取つて奇怪に思はれた時代もあつた。今ではいつもそれが面白く、また折々は美麗だと思ふことがある。もし他のいかなる歐洲人も、かかることを云ふものはないと、私に告げられるならば、その時、私はすべての他の歐洲人が過つてゐるのだと公言せざるを得ない。もしこれらの顔が、大部分の西洋人に取つて荒唐不稽なものと思はれたり、或は精神のないものと見えたりするならば、それは大部分の西洋人がそれを理解しないからであ

る。して、假令英國駐劄日本公使閣下が、いかなる日本婦人も未だ嘗て日本の繪雙紙と安い版畫の婦人に似たことはないといふ説を欣んで承認するにしても、私は依然^註として承認を拒まざるを得ない。私は主張するが、それらの畫は眞實であつて、聰明、優雅、美麗を示してゐる。私は日本の繪雙紙の婦人を、あらゆる日本の街頭に見る。私は日本の繪雙紙に見出さるゝ殆どあらゆる普通型の顔——子供と娘、花嫁と母、刀自と祖父、貧民と富者、美しいのや、平凡なのや、賤しげなのや——を、實地に見てゐる。もし日本に住んだことのある熟練なる美術批評家輩が、この斷言を嘲笑するといふことを私に告げられるならば、彼等は最も普通の日本畫さへも理解し得るだけに、充分長く日本に住まなかつたか、または充分日本人の生活に親炙しなかつたか、または充分公平にその美術を研究しなかつたに相違ないと、私は答へる。

註 日本美術が理想的顔面表情に於て偉大なる成績を擧げうることは、その佛畫によつて充分に證明される。普通の版畫に於て、畫が小規模の場合には、顔の故意らしき紋切形が減多に目につかない。して、こんな場合には、美の暗示が一層容易に認識される。しかし畫が稍々大きくて、例へば、顔の卵形が直徑一寸以上の場合などには、緻密な細部に關したる眼には、同一の畫法も不可解に映ずることもあるだらう。

日本へまだ來ない前には、私は或る日本畫に於ける顔面表情の缺乏に對して困惑を感ずるのが常であつた。私は告白するが、その顔は當時に於てさへ一種の不思議な魅力を有たないことはなかつたけれども、私から見ると、ありさうもないやうに思はれた。その後、極東に於ける經驗の最初の二年間——丁度その時期に於ては、いかなる西洋人も決して眞に悟ることのできぬ人民に關して、自分は一切のことを知りつくあるのだと外人は想像し易い——私は或る形狀の優雅と眞實を認め、且つ日本の版畫に於ける強烈なる色彩美を幾分感ずることができた。しかし私はその美術の一層深い意義については、何等悟得する處がなかつた。その色彩の充分なる意義さへも、私は知らなかつた。全然眞實であつた多くのことをも、私は當時珍奇異風と考へてゐた。幾多の美しさを意識しつつも、私はその美の理由を揣摩することさへもできなかつた。顔面が外見上因襲主義である場合には、さもなかつたならば驚くべき藝術的材能も、可惜發達を抑へられてゐることを示すものと私は想像した。その因襲主義は、一たび意味を闡明すれば、普通の西洋畫が現はす以上のものを示す象徴の意味たるに過ぎないといふことが、私の念頭に決して浮かばなかつた。しかし、それは私がまだ古い野蠻的な影響の下に留つてゐたからであつた。その影響が私をして日本畫の意義に盲目ならしめたのであつた。して、今や遂に少々わかつてきてからは、

私に取つて因襲的で、未だ發達を遂げざる、半野蠻なものに見えるのは、西洋の挿畫術である。英國の週報や米國の雜誌に於ける人氣の多い繪畫は、今では無味、下品、拙劣なものとして私に印象を與へる。けれども、この問題に於ける私の意見は、普通の日本の版畫と普通の西洋の挿畫とを比較した場合に限る。

恐らくは次の如くいふ人もあるだらう。假令一步を譲つて、私の主張を承認するとしても、苟も眞正の美術は何等の解釋を要すべきでない。また、日本の作品の性質が劣つてゐるのは、その意味が一般的に認識され得ないことを是認してゐるのでも證明される。誰れでも上のやうな批評をする人は、西洋美術は何れの處に於ても同様に理解され得るものと想像せねばならぬ。西洋美術の或るもの——その精粹のもの——は、多分さうであらう。して、日本美術の或るものも亦さうであらう。しかし私は讀者に斷言し得るのであるが、普通の西洋の書籍或は雜誌の彫刻畫は、丁度日本畫が日本を見たことのない歐洲人に於けると同様、日本人に對してわかりにくい。日本人が普通の西洋彫刻畫を理解するには、西洋に住んでゐたことがなくてはいけない。西洋人が日本畫の眞と美と面白い氣分を悟るには、その畫の反映する生活を知らねばならぬ。

日本協會の席上、一人の批評家は日本畫に顔面表情の缺けてあるのを因襲主義だといつ

て非難した。彼はこの理由に基づいて、日本美術を古代埃及人の美術と比較し、して、因襲主義の手法によつて制限を蒙つてゐるから、兩者共に劣等なものであると見做した。しかしラオコオンラオコオンを模範的美術として崇拜する現代は、希臘美術さへ因襲主義の手法を脱してゐなかつたことを正しく認めねばならない。それは私共が殆ど企及し得べくもない美術であつた。しかもそれは如何なる形式の現存美術よりも更に因襲的であつた。して、その神々しい美術さへ、藝術的因襲手法の制限内に發展を遂げ得たことが證明さるゝからには、形式主義といふ非難は日本美術に蒙らせるのに適はしき非難ではない。或る人は希臘の因襲手法は、美のそれであつたが、日本畫のそれには、美もなければ、意義もないと答へるかも知れない。しかしかかる説が出るのは、希臘美術は幾多近代の批評家と教師の努力によつて、私共に取つては、私共の野蠻的先祖達に取つてよりも、稍々一層わかり易いものとされてゐるに反し、日本美術はまだそのウッケンケルマンウッケンケルマンをも、レッシングレッシングをも見出してゐないからに過ぎない。希臘の因襲的顔面は實際生活に於ては見られない。いかなる生きた人の頭も、かほどに廣い顔面角を呈するものはない。しかし日本の因襲的顔面は、一たび美術上に於けるその象徴の眞價値が適當に了解された曉には、到る處に見受けられる。希臘美術の顔は不可能なる完全、超人的進化を示してゐる。日本畫家の描ける一見無表情

な顔は、生けるもの、實在せるもの、日常のものを現はしてゐる。前者は夢である。後者は普通の事實である。

譯者註　ラオコオンはトロイの神官であつたが、海神の祭式を営んでゐる際、二匹の蛇が海から現はれ、始めに彼の二子に捲きつき、更にそれを助けんとした彼をも捲いて、父子三人を殺した。この苦悶を表はせる有名なる群像の彫刻は、十六世紀の初、羅馬に於て發見され、今は法皇宮殿に藏してある。

譯者註一　ウケンケルマン（一七一七——一七六八年）は獨逸の美術批評家。希臘美術の理想的特性を闡明した彼の大著『古代美術史』は、偉大なる影響を及ぼした。

譯者註二　レッツシング（一七二九——一七八一年）は獨逸の評論家且つ戯曲家。希臘藝術に關する立派な著書及び論文がある。

三

日本畫に、一見した處、人相上の因襲主義があるのは、個性を類型に、個人の人格を一般的な人道に、細部を全體の感情に従屬せしめるといふ法則で、一部分を説明する事ができゝる。エドワード・ストレーンデ氏は、この法則について幾分日本協會に教へようと試みた

が、誤解されて無効に歸したのであつた。日本畫家は、例へば一匹の昆蟲を描くとして、そのやうにはいかなる歐洲畫家も描き得ない。彼はそれを生かしてみせる。彼はその獨得の運動、その性質、すべてそれによつて一目類型として識別さるゝものを見せる。しかも筆を揮ふこと僅に數回にして一切これを成就する。けれども彼は、その一枚一枚の翅面に、一本一本の翅脈を現はしたり、その觸角せきかくの各關節を示したりすることはない。彼は細密に研究したやうにはなく、實際一目で見たまゝのやうに描き出す。私共は蟋蟀や蝶や蜂が何處かに止まつてゐるのを見る瞬間に、一切その身體の細部を決して見るものではない。私共はただいかなる種類の動物であるかを、決定するに足りるだけのことを觀察する。私共は類型的のものを見て、決して各個的特異の點を見ない。だから日本の畫家はただ類型だけを描く。一々の細部を再現するのは、典型的の性質を各個的特異に従屬させることに在るであらう。極めて綿密な細部は、細部の認識によつて、類型を即時に認識することが助けられる場合の外は、滅多に現はされてゐない。例へば、一本の光線がたまたま蟋蟀

註 彫刻の場合は、これに異つてゐる。骨や角や象牙に刻まれ、また適當に賦彩されたる昆蟲の作品は、これを手に取つて見るとき、重量以外の點では、眞正の昆蟲と殆ど區別のできぬことも往々ある。しかし

かゝる絶對的寫實主義はただ骨董的で、美術的ではない。

の脚の關節に當つたり、或は蜻蛉の甲から複色の金屬的閃光を反射したりする場合である。これと同様に、花を描くに際して、畫家は一個特殊の花でなく、類型的花を描く。彼は種族の形態學的法則、即ち象徴的に云へば、形狀の裏面に潜める自然の思想を示すのである。此手法の結果は、科學者をも驚嘆せしめることがある。アルフレッド・ラッスル・ウオラス氏は日本畫家の描いた植物寫生集を、氏が從來見たものうちで、『最も優秀だ』といつてゐる。『一莖、一枝、一葉、悉く一氣呵成に一と筆でできてゐる。極めて複雑な植物の性質と配景が、天晴れ巧みに描かれ、また莖と葉の關節は最も科學的に示されてゐる』(圈點は私が施したものである)ここに注意すべきことは、その作品は『一と筆でできて』ゐて、簡單そのものであり乍ら、しかも現存最大博物學者の一人の意見によれば、『最も科學的だ』といふことである。して、その故は如何?それは類型の性質と類型の法則を示すからである。それから、また岩石と絶壁、丘陵と原野を描くに當つて、日本畫家は一般的性質を示すのみで、人に倦怠を興ふるやうな塊圍の細部を寫さない。しかも細部は主要の法則の完全なる研究によつて、うまく暗示されてゐる。更に日本畫家の日没及び日出の描寫に於ける色彩研究を見るがよい。彼は決して視界内のあらゆる緻密なる事實を現はさうと試みないで、私共に與へるのに、ただかの偉大な明かるといふ色調と彩色の混和を

以てする。それは他の幾多の些々たることどもが忘れられた後にも、依然として記憶裡に徘徊し、して、見たものの感じをその裡に再び作るのである。

譯者註　ウオラス氏を指す。ダイウキンとは全然獨立に、しかも暗合的に、自然淘汰説を發見した人（一八二二——一九一三年）

さて、美術のこの一般的法則は、日本の人身描寫と、また（この場合には他の諸法則も亦働くのであるが）人面描寫にも適合する。一般的の型が描かれ、しかも最も巧妙な佛國の寫生家でさへ、往々殆ど競争し難きほど力強く描かれてゐる。個人的特異は示されてゐない。諷刺畫の滑稽氣分や演劇の描寫に於て、顏面的表情が強烈に現はれてゐる場合にさへ、それは個人的特徴によつてでなく、一般的類型性によつて現はされてゐる。恰も古代の舞臺上で希臘の俳優によつて、形式的假面を用ひて現はされたやうに。

四

普通の日本畫に於ける顔の描寫法について、二三の概説を試みたなら、その描寫法の致

へることを理解するに助けとなるだらう。

人物の若さは主要な筆觸數本だけで済まして、顔と頸のさつぱりした滑らかな曲線以て現はしてある。眼と鼻と口を暗示する筆觸の外には、何等の線もない。曲線が充分に肉のたつぷりした豊富さと滑らかさと圓熟を語つてゐる。物語の挿畫としては、年齢または境遇は、髪^の結ひ方と衣服の様式で示されてゐるから、容貌を細密に現はすに及ばない。女の姿に於ては、眉毛のないことが、妻または寡婦たることを示し、亂れ髪は悲みを見せ、惱める思ひは、まがふ方なき姿勢と手振りに現はれてゐる。實際髪と衣裳と態度が殆ど一切のことを説明するに足つてゐる。しかし日本畫家は容貌を示す五六本の筆觸の方向と、位置に於ける極めて微妙なる變化によつて、性格の同情的或は非同情的なるかをほのめかす方法を知つてゐる。して、この暗示は日本人の眼では決して看過されることはない。また、これらの筆觸を殆ど目につかぬほど堅くしたり、柔らかくしたりすることは、精神的意味を有してゐる。それでも、これは決して個人的でなく、ただ人相上の法則の暗示に過ぎない。未成年の場合（男兒や女兒の顔）には、單に柔らかさと溫和さの一般的表示がある——幼兒の具體的愛嬌よりは、寧ろ抽象的魅力が現はれてゐる。

註 日本の現今の新聞紙の挿畫に於ては（私は特に『大阪朝日新聞』の小説欄に挿める立派な木版畫を描すのである）、これらの暗示は馴れた西洋人の眼にさへも全然よくわかる。

私はここに一つの珍らしい事實を想起する。私はそれが日本に關する如何なる書物にも書いてあつたのを讀んだ記憶を有たない。新來の西洋人は往々日本人について、その甲乙を區別し得難いことをこぼしてゐる。して、この困難を日本人種に於ける人相の強き特徴の缺乏に歸してゐる。彼は私共西洋人の一層鋭い特徴ある人相が日本人に取つては全然同様な結果を呈することを想像してゐない。幾多の日本人が私に云つた。「長い間、私は西洋の甲乙を區別するのが、非常に困難でした。いづれの西洋人も皆私には一様に見えミました」

今一層成人となつた型の描寫に於ては、線が一層數多く、また一層強められてゐる——これは性格が中年に於ては、顔面筋肉の現はれ始まるに従つて、必然更に顯著になつてくるといふ事實を證してゐる。しかしここには單にこの變化の暗示があるだけで、何等個性の研究は現はれてゐない。

老人を現はす場合には、日本畫家はすべての皺、窪み、組織の萎縮、目尻の皺、白髮、齒が抜けた後に生ずる顔の輪線の變化を描く。男女老人に性格が現はれてゐる。一種のやつれた美はしさを有する表情、情深い諦めの顔つきによつて私共を欣ばすやうなものもあれ

ば、また残忍な狡猾、貪欲或は嫉妬の面色によつて私共に嫌惡の感を起こさせるものもある。老年の型は澤山ある。しかしそれは人生の状態の諸型であつて、個人のそれではない。その畫は或る標本から描かれたのでなく、個人存在の反映ではない。その價値は、その畫が一般的人相上或は生物學上の法則について示せる認識から生ずるのである。

顔面表情の點に於て、日本美術が遠慮勝ちであるのは、東洋社會の倫理と一致するといふことを、この場合注意する價値がある。出來得る限りあらゆる個人的感情を隠し、外面には微笑を含んだ愛嬌や平然たる諦めの風を見せつつ、苦痛と激情をかくすのが、長い年代の間、行爲の法則であつた。日本美術の謎に對する一つの關鍵は、佛教である。

五

私は今頃外國の繪入新聞或は雜誌を眺める時、その彫刻畫にあまり愉快を見出さないといつた。大抵それは私に嫌惡を催させる事が多い。その畫は私に取つて粗末で醜く、またその寫實的な觀念は、淺薄と思はれる。かやうな作品は何ものをも想像力に委ねるといふ事がない。して、いつも折角の骨折りを無駄に歸せしめる。普通の日本畫は多くのものを

想像力に残して置く——否、強く想像力を刺激せずには止まぬ——して、決して努力を裏切らない。歐洲の普通の彫刻畫に於ては、一切のものが細密で、且つ個性化されてゐる。日本畫に於ては、一切のものが非人格的で、且つ暗示的である。前者は何等の法則を示さない。それは特殊性の研究である。後者は常に法則について幾らか教へる處がある。して、法則と關係のない限りは、特殊性を抑制して現はさない。

西洋美術は餘りに寫實的だと日本人がいふのを耳にすることが屢々ある。して、その判斷は眞理を含んでゐる。しかしその日本人の趣味に反する寫實主義、特に顔面表情の點に於ける寫實主義は、單に細部の緻密のために咎むべきではない。細部そのものはいかなる美術に於ても非難されてゐない。また最高の美術は、細部が最も精巧に描寫されたものなのである。神性を發見し、自然の粹を超越し、動物及び花卉に對する出世間的理想を發見した美術は、細部のできうる限り鋭い完全を特徴としてゐた。して、希臘美術に於ける如く、日本美術に於ても、細部を用ひて、憧憬の目的に反するよりは、寧ろ補助となしてゐる。西洋現代の挿畫の寫實主義に於て、最も多く不愉快を與へるのは、細部の夥多でなく、私共がやがて悟るであらう如くに、細部が表徴となることである。

日本美術に於て、人相上の細部を抑制したことに關して、最も奇異なる事實は、私共が

この抑制を見ようとは、最も期待しない方面、即ち浮世繪と稱する作品に、最も明らかに現はれてゐる事である。何故なら、たとひこの派の畫家は、實際甚だ美しく幸福な世界の畫を描いたのであるが、彼等は眞實を反映すると公言してゐたからである。或る形式の眞理を彼等はたしかに示したのであつた。しかしその趣は私共の普通の寫實觀念とは異つたものであつた。浮世繪畫家は現實を描いたけれども、嫌惡すべき或は無意味の現實を描いたのではなかつた。題材の選擇によつてよりは、寧ろ彼の拒斥の點によつて、一層彼の地位を證明した。彼は對照と色のことを支配する法則、自然の聯結の一般性、昔の美と今の美に對する秩序を探求した。その他の點に於ては、彼の美術は決して憧憬的ではなかつた。それはありのまゝの事物を廣く網羅した美術であつた。だからたとひ彼の寫實主義はただ不易性、一般性、及び類型の研究にのみ現はれてゐるにも關はず、彼は正しく寫實主義者であつた。して、普遍的事實の綜合を示し、自然を法則の體系化したるものとして、この日本畫はその手法上、眞正の意味に於て科學的である。これに反して、一層高尚な美術、憧憬的な美術（日本美術にまれ、また古代希臘美術にまれ）は、その手法上主にも宗教的である。

美術の科學的と憧憬的の兩極端が相觸れる處に、兩者によつて認めらるゝ或る普遍的な

審美上の眞理が見出されるだらう。兩者はその没人格的に於て一致する。兩者は個性化することを拒否する。して、これまで存在したうちで最も高尚な美術が興へる教訓には、この兩者共通の拒否に對する眞正の理由が暗示されてゐる。

大理石、寶玉、或は壁畫を問はず、古代の頭の美は、何を表現してゐるか？——例へば、ウケンケルマンの著書の卷頭を飾れる、かのリュウコセアの驚嘆すべき頭の美は何を示すか？單なる藝術批評家の著作から答を求めるのは無用である。科學のみがそれを興へ得るのだ。讀者はそれをハーバート・スペンサーの人物美に關する論文のうちに見出すであらう。かかる頭の美は知的材能の超人的完全なる發達と均衡を意味してゐる。私共が『表情』と稱するものを構成する、一切容貌の變差は、それが所謂『性格』なるものを現すに比例して、ますます完全なる類型からの分離を現はす——して、かかる完全型からの分離は多少不愉快、若しくは苦痛なものである。或はさうあるべきである。何故なら、『吾人を欣ばす容貌は、内部的完全の外面に於ける相關であつて、吾人をして嫌惡を催さしむる容貌は、内部的不完全の外面に於ける相關である』からである。スペンサー氏は更に進んでいつてゐる。たとひ平凡な顔面の背後に偉大な人格があつたり、また、立派な容貌が、貧弱な精神を隠してゐることが往々あるにしても、『これらの例外は、惡星の攝動が、そ

の軌道の一般的楕圓形を破壊しないのと同じく、この法則の一般的眞理を破壊することは
なす』

希臘美術も日本美術も、スベンサー氏が『表情は形成中の容貌である』と、簡單な形式
に云ひ現はした人相上の眞理を認めた。最高の美術、即ち神聖界に到達するため現實を超
越した希臘美術は、完成された容貌の夢を私共に與へる。今猶ほ誤解を受けるほど、西洋
美術よりも廣大なる日本の寫實主義は、ただ『形成中の容貌』、或は寧ろ形成中の容貌の
一般法則を私共に與へるのである。

譯者註　これは「完成された容貌」に對していつたものである。希臘美術は理想的完成の容貌に對する憧
憬の夢を示してゐる。日本の寫實主義も亦殆ど理想主義と稱すべきほど、廣く一般的^{譯者註}の趣を見せてゐると
いふ趣意が、この一段に述べてある。

六

かやうにして私共は希臘美術と日本美術が、兩者同様に認識した共通の眞理に到達した。

即ち個人的表情の無道德的意義である。して、私共が人格を反映する美術に對する歎賞は、無論無道德である。何故なら、個人的不完全の描寫は、倫理的意義に於ては、歎賞に値する題材でないから。

眞に私共を惹きつける顔容は、内部の完全或は完全に近いものの外形に於ける相關と考へられるけれども、私共は概して内部の道德的完全を少しも現はさないで、寧ろその反對の種類を暗示するやうな人相に興味を認めてゐる。この事實は日常生活にさへも明白である。私共が秀てた蓬々たる眉、鋭い鼻、深く据わつた眼、どつしりした顎を備へた顔を見て、『何といふ力！』と叫ぶ場合、私共は實際に力の認識を表白してゐるのである。しかしそれはただ進撃と残忍の本能の基をなすやうな種類の力である。私共が鷲の嘴の如く彎曲した強い顔、所謂羅馬人風の横顔を有する人物を賞賛する時、私共は實際掠奪人種の特徴を賞讃してゐるのである。實際私共は單に獸性、殘酷、或は狡猾の特徴のみ存する顔を歎賞するのではない。しかしまた私共は、或る聰明の徴候と結合せる場合には、頑固、進撃性、及び苛酷の徴候を歎賞するのも事實である。私共は男らしい人格といふ觀念を、いかなる他の力の觀念よりも優さつて、進撃の力と共に聯想するとさへ云へるだらう。この力が肉體的であらうと、或は知力的であらうとも、少くとも普通の選擇では、私共は

それを心の眞に優等なる諸能力よりも以上に評價してゐる。して、聰明なる狡猾を呼ぶのに、『明敏』といふ誇飾語を以てしてゐる。恐らくは希臘の男性美の理想が、或る現代人に發揮された時、それは寧ろ崇高とは正反對の特徴の烈しい發達を示せる顔よりも、普通の看者に興味を與へることが少いだらう——何故なら、完全なる美の知的意義は、人間の最高なる諸能力の完全なる均衡といふ奇蹟を、鑑賞しうる人にして、始めて悟られうるからである。近代美術に於ては、私共は性の感情に訴へる婦人美を求めたり、またはかの父母の本能に訴へる兒童美を求めたりしてゐる。して、私共は男性の描寫に於ける眞正の美を目して、只單に不自然と呼ぶのみでなく、猶ほまた柔弱だと評するに相違ない。戦争と戀愛は、近代生活を反映する嚴肅なる美術に於ては、依然として二つの基調をなしてゐる。しかし美術家が美或は徳の理想を示さうと欲する時は、矢張り古代の知識から借用せざるを得ないといふことが認められるだらう。借用者として、彼は決して全然立派な成功を擧げることとはできない。何故なら、彼は幾多の點に於て、古代希臘人の程度よりも遙かに劣等人種に屬してゐるからである。或る獨逸の哲學者は、旨くいつた。『希臘人がもし現代に蘇生したならば、彼等は現代の藝術品を評して——それは全く眞を穿つた評言である——一切の部門に互つて皆全く野蠻的であると公言するだらう』創造したり保存したりする

力のためよりも、寧ろその撲滅したり、破壊したりする力のために、正々堂々と聰明を崇拜するやうな時代では、何うして藝術品が、さうならないで居られよう？

私共自身に對しては、たしかに發揮されたくないやうな能力を、何故このやうに崇拜するのか？疑ひもなく、その主なる理由は、私共は自身に所有したいと望むものを崇拜し、また現今文明の競争的大戦闘に於ては、進撃力、特に知的進撃力の大價値を知つてゐるからである。

西洋生活の瑣々たる現實と個人的感情主義の兩者を反映するものとして、西洋美術は倫理的には只單に希臘美術の下位に列するのみでなく、また日本美術にさへも劣つてゐることが見出されるだらう。希臘美術は神聖に美しいものと神聖に賢いものに對する、民族の憧憬を表はした。日本美術は人生の簡素淳朴なる快樂、形と色に於ける自然律の認識、變化に於ける自然律の認識、それから社會的秩序と自己抑制によつて調和を得たる生活といふ感じを反映してゐる。近代西洋美術は快樂の飢渴、享樂の權利に對する戰場としての人生といふ觀念、それから競争的奮闘に於ける成功に缺くべからざる無愛想な諸性質を反映してゐる。

西洋文明の歴史は、西洋人の人相に書かれてゐると、いはれてゐる。東洋人の眼によつて西洋人の顔面表情を研究するのは、少くとも興味がある。私は屢々日本の子供に歐米の挿畫を見せて、そこに描いてある顔に關する彼等の無邪氣な批評を聞いて、自分で面白がつたことがある。これらの批評の完全な記録は、興味と共に價値をも有するだらう。しかし今回の目的のために、私はただ二回の實驗の結果を提供するにとどめよう。

第一回は九歳の兒童に對する實驗であつた。或る夜、私はこの兒童の前へ數冊の繪入雜誌を並べた。數頁をめくつてから後、彼は叫んだ。『何故外國の畫家は怖はいものを描くのが好きですか?』

『どんな怖はいもの?』と、私は尋ねた。

『これです』といつて、彼は投票場に於ける選舉人の一團を指した。

『これは何も怖はくない』と、私は答へた。『これは西洋では、皆立派な繪なのだから』

『でも、この顔!こんな顔は世界にある筈はありません』

『西洋では當たり前の人物なのだよ。實際怖はい顔は、滅多に描かないから』

彼は私が眞面目でゐないと思つたらしく、愕きの眼を圓くした。

十一歳の少女に、私は有名な歐洲美人を現はせる彫刻畫を見せた。

『悪るくはありませんね』といふのが、彼女の批評であつた。『でも、大層男のやうてすわ。それから、眼の大きいこと……口は綺麗ですわね』

口は日本人の人相に於ては、餘程大切である。して、この少女はその點について鑑賞の語を吐いた。私はそれから紐育の一雜誌所載の或る實景描寫の畫を彼女に示した。彼女は質問を發した。『この繪にあるやうな人達が、ほんたうにゐますか？』

『澤山ゐる』と、私はいつた。『これは善い普通の顔で——大抵田舎者で百姓なのだ』
『お百姓ですつて！地獄から出た鬼のやうです』

『何もこんな顔が悪るいことはない。西洋にはもつと非常にわるい顔があるから』と、私は答へた。

『こんな人なら、實際見るだけでも、わたしなど死んでしまひますてせうよ』と、彼女は叫んだ。『わたしこの御本は嫌ひです』

私は彼女の前へ日本の繪本——東海道の風景畫——を置いた。彼女は嬉しさうに手を拍いて、半ば見かけた私の外國雜誌を押しつけた。

第六章 人形の墓

萬右衛門はその女の子をすかして内に入れて、喰べさせた。賢い、氣の毒な程おとなしい、十一ばかりの子供に見えた。名は稻であつた、そしてその弱々しくほつそりして居るのがその名をふさはしく思はせた。

萬右衛門の穩やかな勧めによつて彼女が話を始める時、私は彼女の聲がその話につれて變つて來た事から何か風變りな話があると豫想した。彼女は全く一樣な高い細い可愛い聲で話し出した、炭の火の上で小さい鐵瓶が吟じて居ると同じ様に變化のない、感情の現れない聲であつた。日本では人は屢々こんな落着いた平板なそしてよく透る聲で、決してありふれた事でない何か感ずべき或は殘酷な或は恐るべき話を、女や女の子が話すのをきく事がある。その實、いつでも感情は抑制されて居るのである。

『うちには六人ゐました』稻は云つた『母さんと父さんと、大へん年とつた父さんの母

さんと兄さんと私とそれから妹と。父さんは表具屋でした、ふすまを張つたり又かけものの表装をしたり致しました。母さんは髪結でした。兄さんは版木屋に年季奉公に行つてゐました。

『父さんも母さんも景氣がよかつたのです。母さんの方が父さんよりもつとゑ金をもうけました。私共はよい着物を着てよい物を食べてゐました、そして父さんが病氣になるまで私共には本當の心配といふ物はありませんでした。』

『暑い季節の眞中でした。父さんはいつも達者でした、私共は父さんの病氣はさう悪いとは思ひませんでした、そして父さんもさう思ひませんでした。しかし丁度その翌日死にました。大へん驚きました。母さんは胸の中をかくして前の通りお客の前に出るやうにしてゐました。しかし母さんは丈夫ではありませんでした、そして父さんのなくなつたと云ふ心配が餘り急に參りました。父さんの葬式のあと八日たつて母さんが又なくなりました。餘り不意だつたので驚かない者はありませんでした。それから近所の人達は直ぐに人形の墓を造らないではいけない、造らないと又私共のうちでもう一人死ぬだらうと申しました。兄さんはその話は本當だと云ひましたが云はれた通りにする事は延しました。私に分らないけれども多分金がそれ程なかつたからせう、とにかく墓はできませんでした』……

『何ですか、人形の墓とは』私は遮つた。

萬右衛門は答へた『多分あなたは人形の墓を澤山御覽になつてゐてお氣がつかなかつたのでせう、丁度見たところ子供の墓のやうです。一家のうちで同じ年に二人死んだら三人目に死ぬ人が必ずあると信じられてゐます。「いつても墓は三つ」と云ふ諺があります。ですから一家内で同年に二人の葬式があつたらその二人の墓のつぎに第三番目の墓を造ります、そしてそのうちへほんの小さい藁人形のある棺を入れます、そして墓の上に戒名を書いた小さい墓石を建てます。その墓地をもつて居るお寺の僧侶はこんな小さい墓石に戒名を書いてくれます。人形の墓をたてると死なないやうになると考へられてゐます……稲、話のあとをきかしておくれ』

子供はつづけた、『未だおばあさんに兄さんと私と妹と四人ゐました。兄さんは十九でした。父さんがなくなつた丁度前に年季奉公を終つたところでした、これも私共を神様が憐んで下さるやうだと思ひました。兄さんは家の主人となつてゐました。仕事が大へん上手で、澤山同情して下さる方がありましたから私共を養つてくれる事ができました。初め

の月に十三圓もうけました。版屋としてはそれは中々いゝのです。或晩病氣して歸りました、頭が痛いと申しました、丁度その時母の四十七日になつてゐました。その晩見さんは食べる事ができませんでした。翌朝も起きられませんが、——大へん高い熱がありました、私共は一所懸命看護して夜ねないでわきにゐました、しかしよくなりませんでした。病氣になつてから三日目の朝私共は驚きました、兄さんが母さんに話をし始めたからです。母さんがなくなつてから四十九日でした、四十九日に魂が屋根を離れます、そして兄さんは丁度母さんが呼んで居るやうに物を云ふのでした「はいはい、母さん、ぢきに參ります」それから兄さんは母さんが袖を引つぱつて居ると申しました。指をさして私共に「あれ、あすこに居る、あすこに、見えないか」と申します。私共は何にも見えないと申します。さうすると「あゝ、早く見なかつたからだ、母さんは今かくれて居る、今疊の下へはひつた」と申します。午前中こんな風な事を云ひました。仕舞におばあさんは立ち上つて、床の上で足をふみならして大きな聲で母さんを叱りました。「たか」おばあさんは申しました「たか、お前は大へん間違つた事をして居る。お前の生きて居る時は私共は皆お前を大事にした。お前に邪見な事を云つた者は一人もない。今どうしてあの件をつれて行かうとするのか。あれはうちの黒柱である事はお前も知つて居るだらう。あゝ、たか、これは

ひどい、これは恥知らずだ、これは無茶だ」おばあさんは大へんに怒つてからだがふるへました。それから坐つて泣きました、そして私と妹が泣きました。しかし兄さんはやはり母さんが袖を引つばると云ひました。日の沈む頃、なくなりました。

『おばあさんは泣いて、私共をなでて、自分で作つた歌を歌ひました。今でも覚えてゐます、——

親のない子と濱邊の千鳥

日ぐれ日ぐれに袖ぬらす

『そこで第三の墓ができましたが、人形の墓ではありませんでした、そしてそれが私共のうちのお仕舞でした。私共は冬になるまで親類にゐましたが、その時おばあさんがなくなりました。おばあさんは夜誰も知らないうちになくなりました。朝眠つて居るやうでした。たがなくなつてゐたのです。それから私と妹は分れました。妹は父さんのお友達のお友達の疊屋の養女になりました。大事にされてゐます、學校へも参ります』

『あゝ不思議な事だ、困つたね』と萬右衛門はつぶやいた。それから暫らくの間同情の沈黙があつた。稲はお辭儀をして、歸らうとして立ち上つた。草履の鼻緒に足を入れた時、

私は老人に質問をしようと思つて、彼女の坐つてゐた場所へ動いて行つた。彼女は私の意向を認めて直ちに萬右衛門に何か不思議の合圖をした。萬右衛門は丁度私が彼女の側に坐らうとしたのを止めて、その合圖に答へた。

彼は云つた『稻は旦那様に先づその疊をおたき下さいと願つてゐます』

『しかし、何故』と私は驚いて問うた、ただその子供の坐つてゐた場所が心地よく暖まつて居る事だけを、靴をはかない足に感じた。

萬右衛門は答へた、

『外の人のからだだて暖かくなつた場所に坐ると、その人の不幸を皆取る事になるから、初めにその場所をたたかないといけません』とこの子は信じて居るのです』

そこで私はその『まじなひ』をしないで坐つた、そして私共二人は笑つた。

『稻』萬右衛門は云つた『旦那様はお前の不幸を御自分にお取りになります。旦那様は』
(私は萬右衛門の使つた敬語を譯する事はとてもできない) 『外の人の苦しみがお分りになりたईと思つておいてです。お前は心配をしなくてもいゝよ、稻』

第七章 大阪にて

たかきやに上りて見れば煙立つ

民のかまとはにきはひにけり——仁徳天皇

一

約三百年前、東印度商會の任務を帯びて日本を訪問した船長（譯者註）ジョン・セーリスは、大阪の都會について書いた——

譯者註 ジョン・セーリスは平戸に於ける英國商館の創立者。三隻より成る商船隊に船長として、リチャード・コックスと共に東洋に航し、千六百十三年六月十一日、平戸に着し、領主に歓迎され、宛に安針アダムスの斡旋により、江戸及び駿府に赴き、家康より通商の許可を受けた。

「我々は大阪の頗る大都會たることを見出した。その大いさは郭内の倫敦に比すべきほ

どて、幾多の壯麗な、高い、木造の橋を、倫敦に於けるテムズ河ほどの幅を有する河に架けて、交通の便が圖つてある。我々は若干の立派な家屋をそこに見た。しかし、多くてはなかつた。それは日本全國の主要港の一つである。驚くばかり大きく、且つ堅固な城がある……」

西曆十七世紀の大阪について船長セーリスがいつたことは、今日の大阪についても殆ど同様に眞實である。それは今猶ほ頗る大都會であつて、また日本全國の主要港の一つである。それは西洋人の見解に従へば、『若干の立派な家屋』を有し、『テムズ河程の幅を有する河』——淀川——に架せる『幾多の壯麗な木造の橋』（並びに鐵材及び石材を用ひたる橋をも）を有してゐる。それから、漢時代の支那に於ける城塞の様式に基づいて、秀吉によつて築かれた『驚くばかり大きく、且つ堅固な』城は、數層の高さある櫓が失せ、また（一八六八年に）立派な宮殿が破壊されたのにも關らず、依然として工兵技師を驚嘆せしむるものがある。

大阪は二千五百年よりもつと古い。だから日本の最古の都會の一つである——尤も現今の名は、大きな川の高い土地といふ意味の『大江の阪』を略したので、それは僅々十五世紀に始つたものと信ぜられてゐるが、それより以前は浪速なみはと呼ばれてゐた。歐洲人が日本

の存在を知つたよりも數世紀前に、大阪は帝國の經濟と商業の大中心であつた。して、現今に於てもさうである。すべて封建時代を通じて、大阪の商人は日本の諸侯に對する銀行家と債權者であつた。彼等は米穀の租税を金銀に兩替をした——彼等はその數哩に互る防火の倉庫内に、全國用の穀類、綿、絹を貯藏した——して、彼等は諸大名に軍資金を供給した。秀吉は大阪を彼の軍事上の首府とした——嫉妬的で、且つ慧眼なる家康は、この大都會を恐れた。して、その大資本家輩が有する財政的勢力に鑑みて、彼等の富を殺ぐことを必要と考へた。

今日の大阪——一八九六年の大阪——は、廣大なる面積を占め、約六十七萬の人口を有つてゐる。廣袤と人口に關しては、現今ただ帝國第二の都會たるに過ぎないが、大隈伯が最近の演説に述べた如く、財政、産業、及び商業の上では、東京に優つてゐる。堺、兵庫、及び神戸は、實際ただその外港である。しかも、後者はめきめきと横濱を凌駕しつつある。内外人共に、神戸が外國貿易の最要港となるだらうと、確信を以て豫言してゐる。何故なら、大阪が全國で最も優秀なる商業的手腕あるものを牽引しうるからである。現今大阪の外國貿易に於ける輸出入高は、一箇年約一億二千萬弗を示してゐる。して、その内地と沿海の商業は莫大なものである。殆どすべての人のすべての需用品が大阪で製造される。し

て、帝國のいづれの地方に於ても、苟も愉快に暮らしてゐる家庭の用具調度に對し、大阪の工業が幾分の貢獻をしないものは殆ど無い。これは東京がまだ存在しなかつた餘程以前にも、多分さうであつた。今猶ほ残つてゐる一つの古謠には、「出船千艘、入船千艘」といふ繰り返しの文句がある。その謠の作られた頃には、和船だけであつた。今日は汽船もあれば、種々の裝具を備へた大洋航海の船もある。埠頭に沿つて數哩の間、帆檣や煙筒が一見殆ど限りなく列つてゐる——尤も太平洋航路及び歐洲郵便線路の巨舶は、吃水の深いため入港ができないから、大阪の荷物を神戸で取扱つてゐる。しかしこの元氣旺盛なる都會は、數個の汽船會社を有し、今や千六萬弗の費用を投じて、その港灣改良の工事を企ててゐる。二百萬の人口と、少くとも三億弗の外國貿易額を誇るべき大阪は、次の半世紀に實現し難き夢ではない。大阪は各種の大なる商業組合^註の中心であり、また紡績會社の本場であるといふことを、私は殆どいふに及ぶまい。その紡績機械は一晝夜の中に、職工の交代がただ一回に止まり、二十三時間運轉を續け、その製造糸量は、英國の工場に比すれば、一錘に就いて二倍に達し、印度ボンペー市の工場を凌ぐこと三割乃至四割に及んでゐる。

註 大阪には四百個以上の商業會社がある。

世界の各大都市は、その市民に或る特質を與へるものと信ぜられてゐる。して、日本では大阪人は殆ど一見してわかるといはれてゐる。私は東京人の性格は、大阪人の性格ほどに顯著でないといひうると思ふ——丁度米國に於てシカゴの人は、紐育或はボストンの人よりも一層早く認め得られるのと同様である。大阪人は一種の機敏な理解と輕快なる元氣を有し、且つ一般に最新式流行に通曉し、或は更に少々それよりも先だつてゐるやうな風がある。これは工業上及び商業上、相互の競争の烈しい結果を示してゐる。要するに、大阪の商人或は製造業者は、政治上の首府なる東京に於ける、その競争者よりは商業上、遙かに長い經驗の遺産を有つてゐる。恐らくはこのことが、大阪の旅商人の世間に認められたる優秀なる手腕を幾分説明するだらう。この旅商人は、現代化されたる階級であつて、目醒ましい型の人物を提供してゐる。汽車或は汽船で旅行の際、諸君は一寸談話を交じへた後にも、その何國人であるかを確に決定し難いやうな紳士と、偶然知り合ひになる事があるかも知れない、彼は最新式で、且つ最上型の衣服を着け、服裝に申し分なき趣味を示してゐる。彼は佛獨英のいづれの國語にても、同様によく諸君と語ることができる。彼はいかにも懇慫である。しかし極めて種々の人物と調子を合はせて行くことができる。彼は歐洲を知つてゐる。して彼は諸君が極東で行つたことのある地方と、また諸君が地名さへ

知らぬ場處についても、諸君に非常なる知識を與へることができる。日本に關しては、各地方の特産物とその比較的價値及び沿革に精通してゐる。彼の顔は愉快である——鼻は眞直であるか、またはやゝ彎曲してゐる——口は黒い繁つた鬚で蔽はれてゐる。眼瞼だけが、幾分諸君をして、東洋人と會話をしてゐるのだと想像することを得しめるのである。これが今日の大阪の旅商人の一典型である——日本の尋常の小官吏に優することは、恰も王公が従僕に於けるが如くである。若し諸君が大阪の都會で逢ふ場合には、諸君は多分彼が日本服を着用してゐるのを見出すであらう——立派な趣味の人ならば、なかなかできないやうな服装をしてゐて、且つ日本人よりは寧ろ假裝せる西班牙人或は伊太利人のやうに見えるだらう。

二

生産及び分配の中心として大阪が名を馳せてゐるため、日本全國の都會中、最も近代化した、最も純日本的特徴の乏しい都會と、大阪を想像する人があるだらう。しかし大阪は、その反對である。日本の他の大都會に於けるよりも大阪に於ては、西洋服を見受けること

がもつと稀である。この大市場の群集ほど、華美な服装をしたものはなく、またこれほど綺麗な町もない。

大阪は種々の流行を作りだす處だと思はれてゐる。して、目下の流行は色が多様へ向つて行く、愉快なる趨勢を示してゐる。私が日本に來た時、男子の衣服の主色は黒であつた——特に暗青色であつた。いかなる男子の群集も、この色の團塊を呈するのが普通であつた。今日はおもつと色調が軽快である。して、種々の灰色——濃い灰色、鋼鐵色の灰色、青がかつた灰色、紫がかつた灰色——が、優勢を占めてゐるやうに見える。しかしまた幾多の心地よい變色もある——例へば、青銅色、金褐色、『茶色』などである。婦人の衣服は、無論もつと變化に富んでゐる。しかし男女いづれも、成人に對する流行の性質は、嚴格なる良風美趣の法則を放擲するやうな傾向を示してゐない——はてやかな色彩は、ただ子供と藝妓の衣裳にのみ現はれてゐる——藝妓には永遠の若さの特權が與へられてある。最近流行の藝妓の絹羽織は、燃ゆるが如き青空色であることを、私はここに述べておく——熱帯のやうな色で、それを着てゐる人の職業が、遠方から見てもすぐわかる。しかし高級の藝妓は、服装の好尚が地味である。私はまた寒氣の節、戸外で男女の着ける長い外套のことを話さねばならぬ。男子のは、西洋のアルスター型長外套を適當に修飾したもの

やうである。して、小さな肩被が附いてゐる。地質は羊毛で、色は淡褐色或は灰色が普通である。婦人の中には、肩被がなく、大抵黒無地の大幅羅紗を用ひ、澤山に絹の縁がついて、前の襟が低く裁つてある。それは咽喉から足までボタンでとめてあつて、全く上品に見える。尤も下に結んでゐる、太く重い絹の帯の蝶形を容れるため、背部では餘程廣くゆるやかにしてある。

風習の點に劣らず建築に於ても、大阪は依然殆ど理想的に日本風になつてゐる。廣い大通もあるが、大抵町幅は甚だ狭い——京都の町よりも狭い位である。三階の家屋や二階の家屋の町もあるが、平家造りのものが數方哩にも及んでゐる。市の全部は、瓦葺屋根を有する低い木造建築の聚團である。しかし東京の町よりも、その看板や看板の繪に於ては、一層面白く、活氣を帯び、珍異である。また市全體が、その多くの水路のために、東京よりも更に景色がよい。日本のヴェニスと呼ばれるものも過稱ではない。何故なら、淀川の諸支流によつて、數個の大きな部分に分割されてゐる外に、運河が東西南北に通つてゐるからである。淀川に面した町よりも狭い運河の方が、もつと興趣に富んでゐる。

これらの水路の一筋を見通す眺めは、街路の通景のやうなものとして、これほど珍らし

いものが殆ど日本にあるまい。運河は鏡の面の如く静かに、兩岸の家屋を支へてゐる高い石造の堤壁の間を流れて行く——二階乃至三階の家屋が、すべて丸太を施して石垣の外へのばされ、正面はそつくり水上に張り出してゐる。それは後方からの壓迫を暗示するやうに、ごちやごちやに集つてゐる。して、この押し合ひ、詰め込んでゐる趣は、意匠の整齊が缺けてゐるため、更に増加してゐる——いづれの家も他の家と全然似てゐるといふことはなく、悉皆或る名狀し難き蕪東風の奇異さ——一種の民族的特性——を有してゐるので、時も場處も非常に遠いといふ感じが起こる。欄干の附いた可笑げな小さな縁側が、張り出してゐる。格子のついた、玻璃をはめない出窓の下に、鬼子のやうな小さな露臺があつて、上方には眉毛のやうな小屋根がある。瓦を葺いた彎曲した庇が出てゐる。また大きな檐は、或る時刻には、土臺へまで影を投ずる。木材の造作が大抵黒い——星霜を経たためか、または汚れたために——ので、影は實際よりも一層深いやうに見える。影の内部の方に、露臺の柱や、縁側から縁側への竹梯子や、磨いた指物細工の隅角など、いろいろの突出したものが、ちらつと見える。時には蕪蓆や、竹を割いて作つた幕、即ち簾や、大きな表意文字を書いた本綿の暖簾が吊つてある。して、すべてこれが忠實に水中に倒さに映つてゐる。種々雑多の色彩は、畫家を欣ばすべき筈だ——磨いた古い材木の黄焦茶色、チョコレ

ト色、栗色の褐色。葎蓆や簾の濃い黄色。漆喰を塗つた面の淡黄白色。瓦の落ちついた灰色など。……私が最近に運河を見た時、かやうな見通しの光景は、春靄の魅惑に鎖ざされてゐた。それは早朝であつた。私が立つてゐた橋から二百碼先までは、家々の前面が青くなり始めた。もつと向うては、透明な蒸氣のやうであつた。それから更に遠方では、明かるい光の中へ突然溶けて消えるやうに見えた。宛然夢の行列であつた。私は笠と蓑をつけた百姓が棹さしてゐる小舟の進行を注視した——それは昔の繪本にある百姓のやうであつた。小舟と人間が、輝いた青色に變はり、それから灰色に變はり、それから、私の眼前で——滑るが如くに涅槃裡に没入した。その輝いた春靄によつて、かやうに作られたる無形といふ觀念は、音響の無いために更に強められた。何故なら、これらの掘割の町は、商店の町が騒々しいと同じほどに静かだから。

日本で大阪ほど數多の橋を有する都會は、他にない。市區の名は橋に基づいてつけられ、距離も橋を標點としてある——いつも高麗橋から計算される。大阪の人は何處へ行くにも、その場處へ最も接近した橋の名を思ひ起こして、すぐに道筋を知るのである。しかし主要なる橋の數が百八十九個もあるから、かかる見當の定め方は、他國の人に取つては、あま

り役に立たぬ。若し商人であれば、橋の名を覚えなくても、仕入れをしようと思ふどんな品でも見出すことが出来る。大阪は帝國に於て商賣上、最も整頓せる都會である。また、世界中で最も秩序整然たる都會の一つである。それは昔から同業組合の都會であつて、種の商業及び製造業は、昔の習慣に基づいて、今尚ほ特別な區や町に集つてゐる。だから、すべての兩替屋は北濱に店を持つてゐる——これは日本のロン（譯者註）バード街である。反物商は本町を獨占してゐる。材木商はすべて長堀と西横堀にゐる。玩具製造者は南久寶寺町と北御堂前にゐる。金物商は安藤寺橋通を占有してゐる。藥品商は道修町にゐる。また指物師は八幡筋にゐる。その他多くの商賣も、それから娛樂の場處も、そんな風になつてゐる。劇場は道頓堀にあつて、手品師、歌ひ手、踊りの藝人、輕業師及び賣卜者は、すぐその附近の千日前にゐる。

譯者註　倫敦の商業區に於ける銀行通。

大阪の中央部には、幾多の頗る大きな建築がある——劇場、料理屋、それから全國に有名な旅館など。しかし西洋風の建物の數は、目立つて少い。尤も八百乃至九百本の工場の煙突がある。しかし工場の建築は、概して西洋式の設計でない。眞正の『外國』式建築は、

一軒のホテル、二重勾配屋根を有する府廳、花崗石の柱の古典式玄關を有する市役所、立派な近代風の郵便局、造幣局、造兵廠、數種の製造所及び醸造所である。しかしこれらのものは、非常に散在してゐるので、實際、此都會の極東的性質と反せる、特異な印象を與へない。だが、一つ全然外國風な一小區域がある——これは古い居留地で、まだ神戸が存在しなかつた時代に起つたものである。その街路は立派に作られ、建物は堅固に出來てゐるが、いろいろの理由で、宣教師の住居に委ねてある——ただ一軒の古くから残つてゐる商會と、多分一軒か二軒の代理店が開店してゐる。この荒廢したる居留地は、大なる商業上の荒野註に於ける静けさの沃地オージェニスである。大阪の商人間に、この建築風を模倣しようとの試みもない。實際、日本の都會で大阪ほど、西洋建築へ對して好意を示さないものはない。これは鑑識が足りないからではなく、經濟上の經驗によるのである。大阪は西洋風に——石材、煉瓦及び鐵を以て——建築するのが、その利益疑ふべからざる時と場處に於てのみさうするであらう。東京に行はれてゐるやうに、かかる建築を投機的に企てるといふことはないだらう。大阪の遣り方は、じりじり進む方であつて、また確實なものに投資する。確實な見込みのある場合には、大阪商人は盛んなる提案をする——二年前、或る鐵道の買取と復興のために五千六萬弗を政府へ提供したのは、その一例である。大阪のすべての家

屋の内て、朝日新聞社が最も私を驚かした。朝日新聞は日本の新聞紙中、最大なものである——恐らくはいかなる東洋語で發行せらるゝ新聞も、その右に出づるものはあるまい。それは日刊繪入新聞で、その編輯法は頗る巴里の新聞に似てゐる——文藝欄があつて、外國小説の翻譯や、時事に關する輕妙奇警な閑話などが載せてある。人氣の高い作家に多額の金を拂ひ、また通信と電報に莫大の費用を投じてゐる。その挿畫——現今或る婦人の手に成る——は、丁度倫敦のボンチ雜誌が、英國の生活に於ける如くに、新舊あらゆる日本の生活を充分に寫し出してゐる。それは兩面印刷機を使用し、特別な列車を契備し、して、その配布は帝國の大抵の場處へ及んでゐる。だから朝日新聞社は、大阪に於ける最も綺麗な建築の一つであらうと、私は確に期待してゐた。しかしそれは昔の武士屋敷であつた——その邊では、殆ど最も靜かて、また質素な趣のある場處であつた。

すべてこの地味で、且つ賢い保守主義は、私を欣ばせたといふことを、私は告白せねばならぬ。日本の競争力は、今後永く昔の質朴な生活を維持して行く力に存するに相違ない。

註 外國領事館は、一八六八年の内亂に際して、大阪を去つて神戸に避難した。それは大阪では本國の軍艦を以て、よく領事館を保護することができなかつたからである。一たび神戸へ移つてから後、その深い灣が興へる便宜は、大阪居留地の運命を終はらしめた。

大阪は帝國の大商業學校である。日本のあらゆる地方から、青年が工業或は商業の特殊な部門を學ぶために、ここへ送られる。いかなる缺員の地位へ對しても、澤山の志望者があつた。だから商人はその丁稚を選択するのに、頗る用心深いといふことである。志望者に關して、當人の人物と、身許をよく注意して調べる。丁稚の親、または親戚は、一文も金を拂はない。奉公の期限は、商工業の性質によつて異なる。しかし普通歐洲に於ける徒弟奉公期間と全く同じほどに長い。して、或る種の商業では、十二年乃至十四年に及ぶものもある。かやうなのは反物商の場合に、普通要求せらるゝ奉公期限であると私は聞いてゐる。しかも反物商の丁稚は、一箇月にただ一日の休みしかなくて、一日に十五時間も働かねばならない。徒弟の全期間を通じて、彼は何等の賃銀を受けない——ただ寢食と絶対に必要な被服を受けるだけである。主人は彼に一箇年に二枚の衣服を與へ、下駄を給することになつてゐる。恐らくは盛大な祝祭などの日に、少許の小遣錢を恵まれることがある——しかしこれは契約には規定してない。しかし彼の奉公年限が終はると、主人は彼が獨立して、

小規模な商賣を始めるに足るだけの資本を與へるか、若しくは何か他の方法によつて、實際有力なる援助を與へる——例へば、商品或は金員について、信用貸の便宜を計つてやる。多くの丁稚は、その主人の娘を娶る。その場合には、若夫婦が世の中へ乗り出すに當つて、大抵必ず好都合である。

これらの長い徒弟勤務の訓練は、品性の嚴格な試験であると考へることが出来る。假令丁稚は決して荒々しい挨拶を受けないけれども、彼はいかなる歐洲の事務員も堪へないやうなことを堪へねばならぬ。彼は毫も閑暇を有たない——睡眠に必要な時間を除いては、自分の時間と稱すべきものを有たない。彼は味爽から夜遅くまで、おとなしく、また着實に働かねばならぬ。最も質素な食物で満足せねばならぬ。さつぱりした身嗜みをせねばならぬ。して、決して不機嫌を見せてはならぬ。放蕩な性質を有つてゐるものとは思はれてゐない。またかかる過失に陥る機會も與へられてゐない。數箇月も引き續いて、晝夜その店を離れないやうな丁稚もある——營業時間に坐つてゐると、同一の疊の上で寢に就く。絹布類の大商店の店員は、特に室内にばかり居るので、彼等の不健康らしい蒼白色は、世間に知れ互つた事實である。年々歳々、彼等は毎日十二時間乃至十五時間も同一の場所に坐つてゐる。だから、どうして彼等の脚が、達磨のやうに落ちてしまはないかと不思議に

思はれる。

註 日本の通俗的傳説によれば、佛敎の偉大なる長老で、且つ傳道者なる達磨は、九年間の絶えざる冥想のため、兩脚を失つたと云はれてゐる。達磨の可笑げな人形が、善悪の子供の玩具となつてゐる。それは脚がなくて、また内部に重量を入れて、いくら投げても、いつも眞直ぐな態度を保つやうに仕組んである。

時としては道徳上の失敗者もある。恐らくは丁稚が店の金員を幾らか濫用して、放蕩に費消してしまふこともあるだらう。恐らくはもつと悪いことを行ふ場合もあるだらう。しかしどんな事件であらうとも、彼は滅多に逃亡しようとは考へない。もし彼が饗宴に浮かれたならば、それから一兩日身を隠してゐても、やがて自分から戻つてきて白狀し、詫びを入れる。彼は二三回、或は多分四回位までも、その放縱の過失を宥されるだらう——もし眞に内心が姦悪であるといふ證據がない限りは——して、彼の前途、彼の家族の感情、彼の祖先の名譽、それから一般商人の資格などの諸點に照らして、彼の缺點について、懇懇と説諭されるだらう。彼の境遇の困難は、親切な思ひやりを以て考へられ、決して小過失のために解備されることはない。解備は多分彼の一生を破滅させることになるだらうから、その明白な危険に對して彼の蒙を啓くため、あらゆる注意が加へられる。大阪は實際

馬鹿な行爲を演ずるのには、日本中で最も不安な場處である——大阪の危険で、且つ邪惡な階級は、東京のそれよりも更に怖ろしい。して、この大きな都會の日々の新聞は、正しく丁稚が學ばねばならぬ義務の一部である、行狀上の法則に背いたために、或は貧窮に陥つたり、或は餘儀なく自殺をしたりする人々の恐るべき實例を與へてゐる。

丁稚が極めて幼年の頃、奉公に入つて、その商店に於て殆ど養子のやうに育て上げられた場合には、主人と丁稚の間に頗る強い愛情關係が生じてくる。主人へ對し、或は主家の人々へ對して、非常な獻身的な美談が、屢々傳へられる。時としては、破産した商人が、昔の番頭によつて、その商賣を復興されることもある。また、丁稚の愛情が奇異なる極端となつて現はれることもある。昨年一つの珍事があつた。或る商人の一人息子——十二歳の少年——が、惡疫流行の際、虎列刺病で殞れた。亡くなつた子供と非常に親密であつた十四歳の丁稚は、葬式の後、間もなく汽車の前へ身を投げて自殺した。彼は一通の手紙を遺した——

長い間、御世話様に相成り、御高恩は言葉に申し述べ難く候。只今これ限り相果て候こと、不義理の至りに存じ候へ共、再び生まれ變はつて御恩を報じ可申上候。ただ妹あのとこのことのみ心配に候。何卒同人へ宜しく御目をかけ下され度願上候。

御主人様

四

舊日本がどしどし、亡くなりつつあるといふのは、事實ではない。少くとも、今後百年以内に、亡くなる譯には行かない。恐らくは、全然滅亡することは、決してないだらう。幾多の珍らしい美しいものが消え失せたけれども、舊日本は依然として藝術の中に、信仰の中に、風俗習慣の中に、國民の心と家庭の中に、今猶ほ生き残つてゐて、苟も具眼の士は、隨處にそれを見出しうるのである。しかも造船、時計製造、麥酒醸造、紡績などが行はれてゐる、この大都會ほど容易にそれを見出しうる處は、他にあるまい。實を申せば、私が大阪へ行つたのは、主もに寺院を見るため、特に名高い天王寺を見るためであつた。

天王寺、もつと正確に云へば、即ち四天王寺註は、日本中で最古の佛寺の一つである。西暦第七世紀の昔、用明帝の皇子で、推古女帝（西暦五七二——六二一年）の世の攝政であ

つて、今は聖徳太子と呼ばれる厩戸皇子によつて建立された。太子は日本の佛教に取つてのコンスタンタイン大帝と呼ばれるのは尤もな事である。初めは父、用明天皇の世に於け

譯者註

註 四天王は、持國（ドリタラーシトラ）増長（ヴィルードハカ）廣目（ヴィルーパークシャ）毘沙門（ヴィシヌマナ）である。彼等は世界の四方を防禦する。

譯者註 コンスタンタイン大帝（二七四—三三七年）は、始めて基督教を羅馬の國教とした初代教會の恩人。

る大争鬪によつて、それから後には律令の制定と佛教の學問の保護によつて、日本帝國に於ける佛教の運命を決定したからである。その前の敏達天皇は、朝鮮の僧侶に佛教を説くことを許し、また二個の寺院を建立したのであつた。しかし用明帝の御代には、物部守屋といふ有力な貴族で、且つ外來宗教の猛烈なる反對者が、かかる寛容に對して反抗し、寺院を焼き、僧侶を追放し、天皇の軍隊に向つて戦を挑んだ。傳説によれば、皇軍が撃退されつつあつた際に、皇子——當時僅に十六歳——は、もし勝利を得たならば、四天王に對して寺院を建立することを誓つた。すると、立ちどころに、彼の軍勢の方に一個の巨大な姿がぬつと現はれ、守屋の軍勢はこれに睨まられて、散亂遁走した。佛教の敵は全然ひと

い敗北を蒙つた。して、その後聖徳太子と呼ばれた若い皇子は、彼の誓願を守つた。天王寺が建てられた。して、叛賊守屋の富は、その維持に利用された。太子は寺の金堂と稱する部分に、日本に渡來した最初の佛像を安置した——如意輪觀音の像——して、その像は或る祭日には、今猶ほ一般へ示される。戦闘中に出現した巨大の姿は、四天王の一つなる毘沙門であつたと云はれてゐる。今日に至るまで、毘沙門は勝利の授與者として崇拜されてゐる。

店肆の並んだ、陽氣な狭い賑やかな町から、天王寺の廢朽せる境内へ移つて行つたときの感は、何とも云ひにくい。日本人に取つてさへも、千二百年前日本に於ける最初の佛教傳道事業の頃の生活状態へ、記憶の上では後戻りをする事となつて、一種超自然的の感があるに相違ないだらう。他の場所では、私の眼には紋切形で見慣れきつた信仰の象徴も、ここで見ると、まだよく見慣れない、異國的な、原始的形式のやうに映ずる。それから、私が未だ嘗て見たことのないものは、現實世界を離れた時處の感を與へて私を驚かした。實は元の建築は、あまり残つてゐない。焼けてしまつた個所もあれば、修繕された個所もある。しかしその印象は矢張り一種特異である。それは改築されたり、修繕されたりしても、どこまでも韓唐の偉大なる建築家の作つた原型が保存されてゐるからだ。此境内の古

色蒼然たる光景、異様な淋しげな美を筆で述べようとしても駄目である。天王寺がどんなものであるかを知るには、その凄いやうな頽廢を見ねばならない——古い木材の美しい漠然たる色合、消え行く幽靈のやうな灰色や黄色の壁面、風變はりな不順序、檐の下の異常なる彫刻——波や雲や龍や鬼の彫刻の、嘗ては漆と黄金を塗つて華麗であつたのが、今は歲月のため褪せて煙の如き色になつて、煙と共に渦を卷いて消え去らんとするやうである。彫刻で最も目醒ましいのは、奇想を凝らした五重の塔のものである。塔は今荒廢して、屋根の諸層の角から吊るした青銅の風鐸は、殆ど落ちてしまつてゐる。塔と本堂は、四角形な庭の中に立つてゐて、庭の周圍には、開いた廻廊が連つてゐる。更に向うには、他の中庭、佛敎の學校、及び巖壘な石橋を架せる、數多の龜の住んでゐる大きな池がある。石像や石燈籠や唐獅子や巨大な太鼓がある——玩具や珍奇な物品を賣る小屋もある——休憩のための茶店もある——それから、龜や鹿のために菓子を買ふことのできる菓子賣店もある。飼ひ馴らされた鹿は、餌を求めため、そのつやつやした頭を屈めて、參詣者に近寄つてくる。二階作りの樓門があつて、大きな仁王の像が鎮護してゐる。仁王の手足は、アツシリヤの彫刻に於ける王の四肢の如き筋肉を有し、胴體には、信心深き人々が唾をつけて投じた白紙の小球が、満面に點々してゐる。今一つの樓門は、堂内が空虚である。多分昔は

四天王の像があつたのであらう。珍らしいものが、なかなか夥しいのであるが、私はただ二つ三つの、最も異様な經驗を書いてみよう。

先づ第一に發見したことは、私が境内に入つたとき念頭に浮かんだ一個の臆測が、實際に確かめられたことである——この建築が特異である如く、禮拜の形式もまた特異ではな
いか知らんと思はれたのであつた。どういふ譯で、こんな感じが起つたかわからない。
ただ外門を入つてから直ぐに、建築に於けると同様に、宗教に於ても異常なものを見るや
うな豫感を覺えたと言ひうるのみである。すると、私はやがてそれを鐘樓に於て發見した。
これは二階作りの支那風建築で、そこに『引導の鐘』と呼ばれる鐘がある。何故といふに、
その鐘の音が、子供の靈魂を冥途に於て案内するからである。鐘樓の階下の室は、禮拜堂
の設備がしてある。一見した時、ただ佛教の禮拜が營まれつつあるのが眼についた。蠟燭
が燃えて、厨子は金色に輝き、香煙が騰つて、一人の僧は祈を捧げ、女や子供は跪づいて
ゐた。しかし厨子の中の像をよく見ようと思つて、一寸入口の前に立ち止まると、私は忽
ち見慣れぬ驚くべきものに氣がついた。厨子の兩側の棚の上、臺の上、厨子の上方下方、
それから向うの方に、何百といふ數の子供の位牌が並んでゐて、それから、位牌と共に數
千の玩具が並んでゐる。小さな犬、馬、牛、武者、太鼓、喇叭、厚紙製の甲冑、木刀、人

形、紙鳶、假面、猿、船の型、小型の茶器一式、小型の家具、獨樂、滑稽な福神の像——近代の玩具や、いつ頃流行したのか分からぬ玩具——數世紀に亙つて集つたもので、昔から今まで代々の死んだ子供全部の玩具がある。天井から入口の近邊へ、鐘を鳴らす一本の大きな綱が垂れてゐる。直徑約四吋、種々の色を帯びてゐる。それは引導の鐘の綱である。しかもその綱は死んだ子供の涎掛て作られたもので、黄、青、赤、紫や種々の中間の色合を帯びてゐる。天井は見えない。それは數百枚の死兒の小さな着物で遮ぎられてゐる。僧侶の側で、疊の上に坐つたり遊んだりしてゐる男女の子供達は、彼等の亡くなつた兄弟とか姉妹とかの位牌の前に納めるため、玩具を持つて來たのである。子を失つた父とか母が、絶えず戸口へ來て、鐘の綱を引き、疊の上へ銅錢を投げては祈をささげる。鐘の鳴る度毎に、亡兒の靈魂がそれを聞きつけるのだと信ぜられてゐる——もう一度、好いた玩具や親の顔を見るために、歸つてくるのだとさへ信ぜられてゐる。南無阿彌陀佛といふ哀れげな小聲、鏡の響、僧の讀經の深い唸り聲、貨幣の落ちる音、心地よい重げな抹香の薫り、厨子の冷靜な黄金色に輝いた美しい佛陀、玩具の華麗な光、子供の着物の暗影、種々の色をした涎掛の驚くべき鐘の綱、座敷の上で遊んでゐる子供の樂げな笑聲——すべてこれは私に取つては、またと忘れられない凄いやうな哀れさの經驗であつた。

鐘樓から遠からぬ所に、貴い泉を蔽へる珍らしい建物がある。床の中央が開いて、長さ十尺幅八尺位で、欄干が繞らしてある。欄干から見おろすと、下の暗い中に大きな石の水盤がある。古くなつて色黒く、唯だ半分しか見えない大きな石の龜の口から、その中へ水が注いでゐる。龜の後部は床の下の暗い所へまで入つてゐる。この水を龜井水かめいずみといふ。この水の注ぐ盤は、半分以上白紙で充ちてゐる——無數の白紙の片に、一つ一つ漢字で戒名、即ち人が死んでから附ける佛教的の名が書いてある。堂の一隅の疊を敷いた處に、僅の料金で戒名を書いてくれる僧がゐて、死人の親類とか友人が、戒名を書いた紙片の一端を、長い棹の先きに直角に附けた竹の窩、と云はんよりは寧ろ竹の接ぎ目の口へ挟んで、字を書いた面を上に向けて龜の口へ紙を下げ、始終佛教の呪文を唱へ乍ら、逆る水の下へやつてゐると、水盤の中へ洗ひ流される。私が泉へ行つて見た折、人が山をなして、五六人が戒名を龜の口の下へ持つて行つて、その間夥多の信心深い人々は、手に紙片を持つたまゝ、棹を用ひる機會を待つてゐた。南無阿彌陀佛のつぶやきが激流の音のやうであつた。水盤

は數日毎に一杯になつて、それから中を開けて、紙を燃してしまふのだと、私は告げられた。これを眞實とすれば、この繁忙な商業的都會に於ける佛教の力の顯著なる證據である。こんな紙片が數千枚もなくては、水盤は一杯にならないからである。この水は死んだ人の名と、生きた人の祈とを齎して、聖徳太子の許へ行き、太子は信者のために阿彌陀に向つて執り成しの力を用ひ玉ふのだといふことである。

太子堂といふ堂には、聖徳太子と侍者どもの像がある。高貴の人の用ひる椅子に坐せる太子の像は、實物大で、且つ彩色を施してあつて、千二百年前の服裝に、華麗なる帽を被つて、その支那式或は朝鮮式の靴は爪先きが反つてゐる。極めて古い陶器や、襖模様などに、これと同様の服裝を見ることがある。しかし顔は、その髭が支那風に垂れてゐるにも拘らず、典型的日本人の顔であつて、品位が備はり、親切らしく、冷靜である。私は像の顔から振り返つて、私のぐるりの人々の顔を見た時、矢張り太子と同一の型であつて、同じく落ち着いた半ば好奇心のある、不可思議な凝視の眼に出逢つた。

天王寺の古代建築に對して、強大なる對照を呈するものは、大きな東西兩本願寺である。これは東京の兩本願寺に殆どそっくり似てゐる。大抵日本の大都會には、かやうな一對の

本願寺がある——それぞれ十三世紀に創立された、大きな眞宗の東西兩派の一つに屬してゐる。その建築は地方の富及び宗教的に重きをなす程度如何に従つて、大いさを異にするけれども、大抵同一の形式であつて、それは佛教建築中、最も近代的且つ最も純日本的な形式を現はしてゐるといふことができる——大きく、莊嚴で、華麗である。

註 この宗旨が、十七世紀に二派に分かれたことは、宗教上でなく、政治上の原因を有つてゐた。だから、兩派は宗教的には一致してゐる。その法主は皇族の血統を承けてゐる。因つて御門跡といふ稱號がある。この宗旨の寺の境内を繞る塀は、皇居の塀と同様の裝飾的鋸形を有することを、旅人は注目するだらう。

しかし兩寺院は、共に象徴、偶像、及び外部の儀式については、殆ど新教的嚴肅を示してゐる。その質素にして、どつしりした門は、決して巨人の仁王によつて護衛されてゐない——その大きな檐の下には、龍や惡魔の群像はない——佛や菩薩の黄金色の群が、列を重ね、光背を積んで、聖殿の薄明裡に聳えてもゐない——隨喜渴仰のしるしの珍らしい殊勝なものを、高い天井から吊るしたり、佛壇の前へ懸けたり、または玄關の格子に結んだりしたのもない——繪馬もなく、祈を書いた紙を結んだものもない。唯だ一つの外、象徴はない——それも大抵小さい。それは阿彌陀の像である。多分讀者は、佛教に於て本願寺

派は、ユニテリアン派が自由派基督教に於て代表するのと、敢て異らざる運動を代表するものだといふ事を知つてゐるだらう。その獨身生活とすべて禁欲的修行を排斥する點、その呪符、卜筮、奉納物を禁じ、また救ひのための祈りの外、一切の祈りを禁ずる點、勤勉なる努力を人生の努力として強調する點、結婚の神聖を宗教的束縛として維持する點、唯一永遠の佛陀を父とし救主として仰ぐ教義、善い生活の直接の報酬として、死後に於ける樂園の約束、また就中、その教育に熱心なる點——すべてこれらの諸點に於て、淨土の宗教は、西洋の基督教の進歩的形式のものと多大の共通せるものを有つと云つても妥當であらう。して、それは滅多に傳道團や布教隊へ足を向けないやうな、教養ある人士から、たしかに尊敬を博してゐる。その富、その尊嚴、その佛教的迷信の低級な形式に對する反抗から判斷すれば、すべての佛教宗派の中で、最も感情的分子の少いものと思はれるだらう。しかし或る點に於ては、多分最も感情的といふべきであらう。いかなる他の佛教宗派も、

譯者注

所謂正統派基督教の諸派が、三位一體説を信奉してゐるのに對して、ユニテリアン派はただ一位

の天父を信じ、基督をただ至高の人格と認め、その神性を認めないで、最も自由なる信仰を有し、儀式最も簡單である。

京都の東本願寺を實現せしめたやうに、強く普通人民の信仰と愛情を動かすことはできない。しかも本願寺派獨得の宗旨宣布法によつて、最も質樸無學な人々に手を伸ばしうると共に、一方またその學問によつて、知的階級をも動かす事ができる。この派の僧侶で、西洋の主もなる大學を卒業したのも少くはない。して、佛敎研究の種々の方面に於て、聲譽を歐洲に馳せたものもある。古い方の佛敎の宗派が、絶えず隆盛に赴きつつある眞宗の勢力に壓倒されて、衰微に陥るべきか否かは、少くとも興味ある問題である。たしかに後者は一切のものが好都合である——皇室の御思召、富、學殖及び堅固なる敎團組織などがさうである。これと同時に、眞宗よりも更に幾世紀も古い思想感情の習性を向うへ廻はして戦ふ場合、かかる便宜が果たして有効であるか否かは、疑問とならざるを得ない。恐らくは西洋の宗敎界は、此問題に關して預言の根據を置くべき先例を提供するだらう。羅馬舊敎が今日も依然、どんなに強大なまゝで存在してゐるか、ルーサーの時代以來、どんなにあまり變化しないてゐるか、今日の進歩的信仰箇條が、どんなに或る具體的崇拜物に對する古い靈的飢渴——何かに觸れ、何かを胸に押しつけようとする欲求——を満足させる力に缺乏してゐるか、——これらの事實を思ひ浮かべてみると、もつと古い佛敎諸派の偶像崇拜が、今後數百年、矢張り民衆の愛情裡に廣やかな領域を占めて行かぬとは限らない。

それから、また眞宗の擴張に對する一つの珍らしい障害は、自己の犠牲といふ問題に關して、頗る深く根ざせる民族感情に存するといふことは、注目に値する。たとひ多くの腐敗が、疑もなく古い諸宗派に存するにせよ——たとひ食物及び獨身生活たに關する誓を守らうともしない僧侶が、幾多あるにせよ——古い理想は決して未だ亡びてゐない。して、日本の佛教徒の多數は、まだ眞宗僧侶の比較的愉快な生活に不賛成を表はしてゐる。僻陋に於て、眞宗が特に嫌惡の眼を以て見られてゐる處では、子供達がいたづらな歌をうたつてゐるのを聞くこともある——

眞宗坊主よいものだ。

女房持つて、子供持つて、

うまい魚さかなをたべてゐる。

これは私をして佛陀在世の時、佛教徒に關する世間一般の批評を想起せしめた。これは屢々『毘那耶』の經文に記され、殆ど歌尾の疊句の觀を呈してゐる——

『そこで、民衆は不快を感じた。して、呟いて不平を訴へた。「これらの人々は、依然

としてこの世の愉快を樂んでゐるやうな行動をしてゐる！」それから、彼等はこのことを佛尊に告げた』

註 僧侶の妻帯を禁ずる民法が撤廢されてから、特にさうである。眞宗以外の宗派の梵妻は、滑稽で、且つあまり敬意を含まない名稱で呼ばれてゐる。

天王寺以外、大阪には頗る古い歴史を有つた幾多の神社佛閣がある。高津の宮は、その一つである。そこでは、人々が日本のあらゆる天皇のうちで、最も愛慕さるゝ仁徳天皇の靈に對して祈りをさゝげるのである。現今天皇の社祠が立つてゐる場處に、天皇の宮殿があつた。して、市の眺望を恣にし得られる、この場處こそは、『古事記』に保存さるゝ樂い傳説の舞臺である——

、、於是天皇登高山、見四方之國、詔之、於國中煙不發、國皆貧窮、故自今至三年、悉除人民之課役、是以大殿破壞、悉雖雨漏、都勿修理、以械受其漏雨、遷避于不漏處、後見國中、於國滿煙、故爲人民富、今科課役、是以百姓之榮、不苦役使、故稱其世、謂聖帝世也。

それは千五百年前であつた。今もしこの善い天皇が、かの高津の宮から——多くの人々が信ずる如く——現代大阪の煙を見そなはし玉ふならば、天皇は當然「朕の民はあまりに富すぎてきた」と考へ玉ふことであらう。

市外に、神功皇后の三韓征伐を助けた海神を祀れる、もつと有名な住吉神社がある。住吉には綺麗な巫女、美しい境内、大きな池などがある。池に架せる橋は非常に彎曲してゐるので、靴を脱がずに、そこを渡るには、胸墻にすがりつかねばならぬ。堺には妙國寺がある。その庭には數株の頗る古い蘇鐵の樹がある。その一本は十六世紀に信長によつて移されてから、泣き悲しんだので、また寺へ戻されたといはれてゐる。これらの蘇鐵の下の土地は、満面厚い、光つた、亂雜になつた毛皮の塊のやうなもので蔽はれてゐる——半ば赤味を帯び、半ば銀灰色である。それは毛皮ではない。幾百萬の針の堆積である。これらの樹は鐵を好み、その鏽を吸つて強くなるといふので、巡禮者が「蘇鐵に食はせるため」そこへ投じたのである。

樹木の話の序に、私は難波屋の傘松のことを挙げねばならぬ。それが巨大な木であるといふことよりも、それが堺街道に小さな茶店を開いてゐる大家族を養つて行くことのためである。この木の枝は、柱を組み合はせた柁の上で、外方と下方へ向けて伸びるやう馴ら

してあるため、全體は百姓が被る笠といふ種類の、すばらしい緑色の帽子の觀を呈してゐる。松の高さは六尺にも足りないが、恐らくは二十方碼に擴がつてゐる——其幹は、枝を支へてゐる梓の外部からは、無論毫も見えない。多くの人が茶屋へ来て松を見物する。して、一碗の茶を飲む。それから大抵誰れも或る紀念品を買ふ——恐らくはその樹の木版畫、その樹を賞めて詠んだ歌を刷つたもの、少女の簪などである。簪はこの松——柱の梓をも含めた——全體の、緑色の立派な小模型で、一羽の小さな鶴が止まつてゐる。茶店難波屋の一家は、この樹を人に見せたり、かかる土産品を賣つたりして、ただ立派に暮らして行けるばかりでなく、その子供達をも教育することができる。

私は大阪の他の有名な社寺——非常に古くて、頗る珍異なる傳説の纏はつてゐるのが、幾つもある——のことを述べて、讀者の忍耐を煩はさうと欲するものではない。しかし私は敢て一心寺の墓地について數語を試みよう。その墓石は、私が見たものの中では、頗る奇抜なものである。本門の近くに、朝日五郎八郎といふ力士の墓がある。彼の名は、多分重量一噸もありさうな、圓盤状の大石の面に彫つてある。して、この圓盤は力士の石像の背上に載せてある——力士は怪奇な形姿を呈し、金泥を施せる眼は、眼窩から飛び出て

て、容貌は努力のため、いかにも扭れてゐる。それは半ば滑稽的で、半ば猛惡な光景である。その近くに、平山半兵衛といふ者の墓がある。これは瓢箪の恰好をした石碑である。瓢箪は旅人が酒を運ぶために使用するもので、最も普通の形は沙時計に似てゐて、ただ下部が上部よりも、やゝ大きなだけである。して、その器は、酒が満ちてゐるか、または一部分満ちてゐる場合にのみ眞直ぐに立つことができ——だから、日本の或る歌の中に、酒好きの人が、その瓢箪に向つて、『お前と一緒に倒れる』といつてゐる。たしかに酒豪連中が、この墓地の一區を占領してゐる。何故なら、同じ列にこれと類似せる形の墓が、他に數個もあるからである。また、一個の墓は一升徳利の形をしてゐて、碑面には經文から取つたものではない句が刻んである。しかしすべての中で最も奇異な碑石は、眞直ぐに坐つて、前肢を以て腹つづみを打つてゐるらしい大きな石の狸である。その腹の面に井上傳之助といふ名と共に、次の句が刻してある——

月夜よし念佛唱へて腹鼓

この墓の花瓶は、酒瓶の形をしてゐる。墓石の臺は、岩を積んだもので、處々岩の間に、狸坊主の像が散見してゐる。私の著書の讀者は、日本の狸たぬきが、人間の形に化け、腹を打つ

て太鼓のやうな音を出す力を有つものと信ぜられてゐることを、多分知つてゐるでせう。それは悪戯をするため、屢々佛僧の姿に化け、また甚だ酒が好きだといはれてゐる。無論、墓地に於ける、かやうな像は、ただ奇僻を現はすに過ぎないので、且つ惡趣味だと判斷されてゐる。希臘や羅馬の墓にも、死に關して——否、寧ろ人生に關して——現代人の感情に取つて嫌惡不快の感を催させるやうな情操、または情操めいたものを現はせる可笑げな繪畫及び彫刻のあつたことが思ひ出された。

註　狸は通常 *Daimon* と英譯してあるが、狸といふ名の獸は、眞正の *Daimon* でなく、一種の食果狐である。それは「洗熊あらしくまの顔をした犬」とも呼ばれてゐる。しかし眞正の *Daimon* も日本に棲んで居る。

六

私は前の論文で、日本の都會は木造の小屋の荒野に過ぎないといつた。して、大阪もまたこの例に洩れない。しかし家屋の内部に於ては、いかなる日本の都會の脆弱な木造建築も、多くは美術的構造である。して、恐らくは大阪ほど多くの立派な住宅を有する都會は

ないだらう。京都は實際庭園については、一層富んでゐる——大阪には庭園を設ける餘地が比較的乏しいから。しかし私はただ家屋についていつてゐるのである。外面だけでは、日本の町は木造の納屋とか、厩舎の並んだのに過ぎないやうであるが、その町の家屋の内부는驚きばかり美麗なことがある。普通日本家屋の外側は、往々一種の面白い奇異な形はあつても少しも美しくはない。して、多くの場合に於て、裏側または側面の塀は黒く焼いた板で蔽つてある。その焦げて、堅くなつた表面は、いかなるペンキ或は化粧漆喰よりも、よく熱と濕氣に抵抗するといはれてゐる。恐らくは石炭小舎を除いて、これほどくすぶつた風のものゝ想像し得られないだらう。しかし黒塀の内側の方は、審美的の趣向、人を歡ばすものがある。比較的低廉な住宅でも、この點に於ては左程影響を蒙つてゐない——何故といふに、最少の費用を以て最大の美を獲るといふことにかけては、日本人は萬國の民に優つてゐるからである。一方西洋國民の中で、最も工業的に進歩せる、實際的の米人は、最大の費用を投じて最小の美を獲ることに成功してゐるだけである！日本家屋の内部に關しては、モールヌ氏の『日本の家庭』から、大いに學ぶことができる。しかしその立派な著書でさへ、この問題について唯だ墨繪ほどの觀念を與へるに過ぎない。しかもかかる内部の美趣の半ば以上は、殆ど名狀し難き色彩の愛撫的魅力に存してゐる。色彩美を説明す

るやうにモールルス氏の著書に挿畫を施すことは、ラシネー氏の著書、『歴史的服裝』の出版よりは、もつと費用のかかる、困難な事業であるだらう。假令さうしてさへも、常夏の感情を捉へて、それを保つやう工夫されたと見え乍ら、部屋の隅毎に、人目を待つてゐる和らいだ明かるさ、完全な平靜、優雅繊細の祕密は、依然想像され得ないであらう。日本の活花といふ藝術を少々知つたため、西洋で私共が花束と呼んでゐる下品な、或は寧ろ粗暴なものを眺めるに忍びなくなつたと、私は五年前譯者註一に書いた。今日では、また私は日本室に親炙してきたので、西洋室は幾ら廣かつたり、便宜に出來てゐたり、贅澤に裝飾してあつても、嫌ひになつたといふことを加へねばならない。もし今、私が西洋の生活に歸つたならば、七箇年間仙郷に暮らした後、醜惡と悲しみの世界へ再び戻つたトマス・ザ・ライマのやうに感ずるに相違ない。

譯者註一 本全集第三卷二一六—二一七頁參照

譯者註二 十三世紀に蘇格蘭ペリクシヤー州に住んでゐた名物男。豫言的の詩を作つた人。仙女に愛せられ、數年をその女の許でくらしたと云はる。

世間で唱道されてゐる如く（尤も私はそれを信じ得ないけれども）、西洋畫家は日本畫

の研究からさほど學ぶべきものがないといふ事は、ありうるだらう。しかし西洋の家屋建築者は、日本室の研究から、莫大の事實——特に壁面の處置と着色法について——を學ばねばならぬと、私は確信する。これらの無数の室内様式が、分類され得るか否かも、私には疑はしいやうに思はれる。十萬戸の日本家屋に就いて、二戸の内部が全然同一の場合はあるまいと、私は思ふ（勿論、極めて貧しい者の家屋を除いて）——何故といふに、設計家は避けうる場合には、決して同一設計を繰り返さないから。彼が與へる教訓は、種類の無盡藏なる變化と結合せる完全なる趣味といふ事である。趣味！それは私共の西洋の世界に於て、何といふ稀有の事だらう！また、それはいかに材料の如何を問はざる、直感的な、俗物に傳へ難いものだらう！しかし趣味は日本人の生得權である。それは到る處に存してゐる——たとひ境遇に隨つて、且つまた境遇に基づく遺傳に隨つて、發達の量を異にするとも、普通一般の西洋人は、ただその比較的平凡な方の形式——主として輸出貿易によつて見馴れた種類——を認めるだけである。して、概して西洋人が日本の因襲的趣味の中で、最も歎賞するものは、日本では寧ろ劣俗と見做されてゐる。それは西洋人が、苟も本來美麗なものを歎賞するのが、間違つてゐるといふのではない。代價二仙の手拭に染め出した意匠さへ、眞に優れた畫のこともある。それは時としては、立派な美術家が描いたものな

のである。しかし最高な日本趣味の貴族的嚴正——均勢、性質、調子、抑制など諸條件の決定に於ける、その精巧絶妙なる複雑——に至つては、未だ嘗て西洋人の夢想だもせざる處である。この趣味が天晴れ立派に發揮されてゐるのは——特に色合に關しては——私人の邸宅内部に及ぶものはない。一組の部屋の裝飾配置に於ける、色彩の規則は——たとひ餘程の種類を許容するにせよ——衣服の問題に於ける色彩の規則にも劣ることなく嚴密なものである。一私宅の色合の調子だけでも、その主人の修養程度を示すに充分である。ベ
ンキ塗や、ワニシ塗はなく、壁紙も張つてない——ただ特別な部分に色を着けたり、磨き
をかけたたり、また掃除や塵掃ひの際の用意として、壁の底に沿つて約一尺五寸ほどの高さ
に、一種の紙の縁を施しただけである。漆喰はさまざまの色の砂や、貝殻と螺鈿の斷片や、
水晶片や、雲母で製せられる。壁面は花崗岩を真似たり、黄銅鑲の如くきらめいたり、濃
厚な樹皮の塊に彷彿したりしてゐる。しかし原料は何であらうとも、その發する色合は、
羽織や帯に用ひる絹の色合に於けると、同一の完全無缺な趣味を示さねばならない。……
この美の内部世界——正しくそれが内部世界であるがために——は、一切まだ外來の漫遊
者には鎖ざされてゐる。外來者は漫遊中、古風な宿屋とか、茶店を訪問するときに、そこ
の室内に於て、精々その暗示を發見しうるだけである。

西洋の旅客中、日本の宿屋の妙味を解したり、或は單に身廻はりの世話についてばかりでなく、美しいものを作つて、眼をも娛ましめて、宿泊を愉快にするやう、大いに盡くされてゐることを考へる人が、幾らあるか知らんと私は思ふ。瑣々たる、癪に障はつた事柄——彼等が蚤に攻められた實驗談や、彼等の親しく遭遇した不快なことも——を書いてゐる人は澤山ある。しかし毎日新しい花が備へられ——いかなる歐洲の花屋も企及し得ないやうに活けられ——且つ屹度青銅か、漆器か、陶器など、眞の美術品が置かれ、これに添ふるに季節の感情に適はしい一幅の畫を以てせる床の間の妙趣を書いてゐるものは、幾人あるだらうか？これらの瑣末な美的の待遇は、決して宿屋から代價を要求してゐるのではないけれども、茶代を遣る場合、これに對する、親切な心持ちを含ませるのが當然である。私は幾百軒の日本の宿屋へ泊まつたが、何等珍異なもの、または綺麗なものを見出し得なかつたのは、一軒しかない——それは新開の鐵道驛で、客を捉へるため急造された、ぐらぐらした避難所のやうな宿屋であつた。

大阪の私の宿に於ける、床の間について一言する——壁は砂と一種の鍍屑のやうなものを混せて塗つてあつたが、銀鑛の美しい表面の如く見えた、床柱に結んである竹の花瓶に

は、一本は淡紅、他の一本は白の、美しい花盛りの、一對の藤の枝が挿してあつた。掛物
——雄勁奔放、墨痕淋漓たる名家の揮毫——には、互に道を避けかねて、まさに闘はんと
する二匹の大きな蟹が、寫してあつた。して、『横行世界』と題せる漢字によつて、畫興
更に一段を加へてゐた。その意味は『世の中のことは、一切よこしまに行く』
譯者注

譯者注 蟹の歩き振りを傍若無人と見立てて、『横行世界』と題せる讀句を、『世事すべて邪行す』といふ意味に取つてあるのは、通辯者の誤解とすれば、面白い誤解である。しかし或は先生が、意識的に特にこのやうな解釋を選ばれたのかも知れない。いづれにしても、この横へそれを解釋、人生一般に適用した廣い解釋の方が、文趣更に一段を加へてゐる。

七

私の大阪滞在に於ける最後の日は、買ひ物に費やした——それは主もに玩具屋と絹布商の方面であつた。或る日本の知人が、自身も商人であるが、私を伴れて廻つて、私の眼が痛んでくるまで珍らしい物品を見せた。私共は有名な絹布商店へ行つた——群集が非常に

雜沓を極めてゐたので、日本の店に於て、椅子と勘定臺を兼ねた疊の平床へ押し分けて達するのが、可也の骨折りであつた。そこで幾十人の踝足の輕快な少年が、走つて商品の束を顧客へ運んでゐた。何故といふに、かやうな商店では、商品を棚へ載せて陳列するといふ事がないからである。日本の販賣員は疊の上の彼が坐つてゐる場處を離れない。彼が客の欲するものを承つてから叫んで命令を發すると、少年が間もなく兩腕で一杯見本を抱へて走つてくる。客が選擇をした後に、擴げられた商品は、また少年の手で卷いて收められ、店の背後の耐火倉庫へ運び去られる。私共の訪問の際、疊の平床の大部分は、さまざまの色、種々の代價の絹布や天鵝絨が、投げ散らされて、絢爛陸離たる混沌を展開してゐた。玄關の近くに、福の神のやうに肥つて、陽氣な顔の、稍々老いた監督が、繰り込む客を注意してゐた。二人の鋭い眼付の男が、店の中央の臺に立つて、ゆるゆる反對の方向へと轉じながら、窃盜の見張りをしてゐた。また他の番人も、横の入口に陣取つてゐた。(序に、日本の萬引は甚だ巧妙である。大抵の大商店が、一箇年間に、彼等のために蒙る損害は、可也に多額だと、私は告げられた)店の側翼の建物の、低い天窓の下には、高さ二尺にも足らぬ小さな机を前にして、ずらりと並んだ簿記係、會計係、通信係が忙殺されつつあるのを、私は見受けた。夥しい販賣係は、銘々同時に澤山の客に應接してゐた。商賣の多忙

さは烈しかつた。しかも執務の迅速は、組織の徹底的の完全を證明した。私はこの店が幾何の人を使用してゐるかを尋ねた。して、私の知人は答へた――

『多分ここには二百人もゐませう。まだ數個の支店があります。この店では、仕事が餘程つらいのです。しかし勤務時間は、普通の他の絹物商店よりも短くて、一日十二時間を越えることはありません』

『給料は何うです?』と、私は質ねた。

『給料はありません』

『この店の一切の仕事は、無報酬で行はれるのですか?』

『多分一人や二人、極上手な販賣係は、少しばかり貰つてゐませう――給料といふのはありませんが、毎月少額の特別報酬です。それから、老監督(あの人はここに四十年も勤めてゐます)は、給料を受けてゐます。その他のものは食料以外、何も貰ひません』

『よい食料ですか?』

『いえ、極安い、粗食です。誰れてもここで年季奉公――十四年乃至十五年――を勤めた學句には、自分で獨立して一軒の店が持てるやう、補助を與へられることになりました』
『大阪のすべての商店で、みなこんな情況ですか?』

『さうです——何處でも同様です。しかし今頃は澤山の丁稚が、商業學校の卒業生です。商業學校へ送られたものは、餘程遅くなつてから奉公を始めます。そして、子供から教へ込まれたやうな、よい丁稚にならぬといふことです』

『外國商館に備はれてゐる日本人の店員は、もつと立派に暮らしてゐますよ』

『私共はさう思ひません』と、私の知人はきつぱり云つた。『成程、英語を上手に喋つて、外人の取引のやり方を知つてゐるものは、一日に七時間か、八時間働いて、一箇月五六十弗を貰ひますが、その待遇が日本の商店で受けるのとちがひます。伶俐な人は外人の下に働くことを好きません。外人は日本人の店員や召使を非常に虐待したのです』

『しかし今はさうではないのですか？』と、私は尋ねた。

『多分あまり虐待しません。それは危険だと知つたのです。しかし昔は擲つたり蹴つたりしたものです。日本人は丁稚や召使へ不親切な言ひ方をするのさへ、恥づかしいことと思つてゐます。ここのやうな店には、不親切な待遇といふことは、少しも存在してゐません。主人も監督も決して粗暴な言葉を發しません。御覽の通り、大人も子供も無給料で、このやうに勉強して働いてゐます。外人がたとひいくら澤山の給料を出しても、こんな風に日本人を働かせることはできませんよ。私も外國商館で働いて、知つてゐます』

日本の商賣や、技巧を要する工業に於て、氣の利いた奉公振りは、大抵無給だといつても過言ではない。恐らくは、全國の商賣仕事の三分の一は、賃銀なしで行はれてゐるだらう。主従の關係は、双方の側に於ける完全なる信任となつてゐる。また道徳的狀態の最も低級なものによつてさへ、絶對服従が確實に守られてゐる。これは私の大阪滞在中、最も深く印象された事實であつた。

奈良への夜行列車が、大都會の賑やかな喧囂から私を運び去りつつある際、私はこの事實について不思議がり乍ら考へてゐた。私は數里に互る屋根の上に——惠み深い仁徳天皇の宮へ、永遠に煙の供物を捧げつつある。幾多工場の林立せる煙突の上に——夕闇が深くなりつつ行くのを眺めながら、猶ほそれを考へつづけた。不意に、無數の軒燈がきらめいてゐる上に——電燈が白い星の如く點々たる上に——次第に増し行く暗がりの上に——私は夕陽の名残の赤い光の中へ輝いて聳立せる、堂々たる天王寺の古塔を見た。して、その塔の象徴せる信仰が、日本の最も偉大な都會の、あらゆる富と元氣と力の根柢なる、忍従と愛と信頼の精神を作ることを助けたのではないだらうかと、私は自ら尋ねてみた。

第八章 日本 of 民謡に現れた佛教引喩

日本民族の心の土壤が如何なる程度迄佛教の理想に潤され又肥やされたかを委しく知らうとするには、昔のこの國の文化を代表してをる物をただ一つだけ見てもそれで十分であるのだ。ところが歐羅巴人になるとどうしてもこれが出来ぬ。何故かといへば極東の宗教と極東人の生活の全部的關係を理解するためには、どんな歐羅巴人でもその一生涯を費して然かも到底學ぶことの出来ぬやうな或る種の經驗を必要とするのであつて、この經驗がなければどんな學識があつてもこの問題を了解することが出来ぬからである。併し過去に於て佛教が如何なる感化を日本に及ぼしたかといふことは日本に來た西洋人の目にも到る所で明かに映じてをることである。一切の美術乃至大部分の工業的作物は象徴主義に訓練された人の目には常に佛教傳説の表現として映じてをるのである。形式の上に何等かの特色を有してをるもの、或は苟も美しいと思はれるやうな手細工品にして——例へば子供の

玩具類から王者の重代の寶物に至る迄——これを造り出した手業その者から考へてみて、或る意味に於ては最初佛教に負ふところがあつたのだと公言し得ぬ物は一つも無い。大阪の工場から來る安物の更紗の中には京都の西陣織にも劣らぬ佛教思想が織り込んであるのがわかる。鐵瓶の上の浮彫、番頭さんの火鉢の柄になつてをる唐金の象の頭、紙襖の模様、或は門口に見らるる極めてありふれた裝飾用の木細工、金屬製の煙管に施した蝕鏤細工、或は高價な花瓶の上に加へた瑠瑯細工——是等は皆同一の雄辯さを以てこの國民の傳統的信仰を物語り得るのである。亦庭園設計の上にも佛教の反映と反響が見られる。同様に長くつらなつてをる店看板の無數の象形文字の上にも、或は果實や花に與へてあるところの驚嘆すべき適切な名稱に於ても、或は山、岬、瀑布、村落等の名に於ても、或は近代的な鐵道驛の名に於ても悉く佛教の影響が現はれてをる。故に新文明といへどもかくの如く明らかになつてをるところの感化力を大いに動搖させるといふことは出來ぬのである。今や汽車と汽船とに依りて名高い靈廟に參詣人を送り出す一箇年間の人數は昔一箇年にあつた數よりは遙に多くなつてをる。お寺の鐘は柱時計や懷中時計の用ひられてをる時代なるにも拘らず依然として數百萬の人達に時の過ぐるを報じてをる。人々の言葉は昔ながらに佛教口調で詩化されてをる。文學も戲曲も依然として佛教言葉で滿されてをる。街道で最も

普通に響いてをる聲——戯れてをる子供の歌、働きながら歌つてをる労働者の齊唱、街頭で大聲張り上げて物賣り歩く商人の叫び——是等の音ですら私の耳には尊者、菩薩の物語や、お経の句を思ひ出させることが屢々ある。

以上のやうな事柄を私は見たり聞いたりしたので、それを機縁に、佛教徒のいろいろな事柄や引喩等を含んでをるところの歌謠集でも編んでみようかと最初考へてみた位である。併しその仕事の範圍が餘りに廣汎に亙つてをって何所から手を下してよいのか直に決定することが出来なかつた。日本の歌謠は私達を當惑させる程種類が多いが——種類が餘りに多いのでそれに名をつけるだけで既に多くの頁をとることになる——次のやうなのが主なる物である。先づ名高い物の一として謠曲がある。謠曲は戲曲的の歌謠であつてその大部分は高僧の作つた物である。恐らくその中の何れの十行をとつて見ても佛教に關係の無い所は無い。次に長唄といふのがあるが、これには屢々非常に長い歌がある。又淨瑠璃といふのがある。これは詩句で書いた全部小説的の物であつて、これを専門の謠手達が歌つて、一回に五時間乃至六時間の長きに亙つて彼等の聽手を樂しませることが出来るのである。併しかういふ長い物は必然的に私の計畫から除外されたのである。だがその残つた物の中には選擇することの出来るもつと、短い形式の物が多かつた。最後に私は主として都々逸に

私の計畫を限定することに決定した。都々逸は僅に二十六字を四行に列べた——（七、七、七、五）——小唄である。これは前に論じた街上で歌はれる歌謠よりは形式が正しく出来てをる。併し非常に流行してをる。随つて都々逸は他の優秀な歌謠の多くに比較してみても佛敎の感化を受けてをる程度が大である。私は私のために集めた非常に澤山な歌謠の中からこの種類の典型として四十乃至五十だけ選擇した。

前生觀と未來再生觀を反映してをる歌謠は恐らく西洋人にとりて格段に興味が多からうと思ふ。併しそれは詩歌として價值が多いといふのでは無くて寧ろ比較的珍しい思想がその中に含まれてをるからである。この種の想像を宿した詩は英吉利の文學に於ては極めて稀であるが、日本では多きに過ぎる程澤山あつて寧ろこのやうな思想は陳腐であるとさへ考へられてをる。ロゼッティの『光りは俄然と』と題した詩のやうな美しい文藝的作品は——この詩が私達の心を魅するのは主として或る一つの透徹した精緻な思想がその中に宿つてをるからであつて、然かもその思想が過去一千八百年の久しきに互つて私達の凡ゆる正敎固執主義の因習に依つて呪詛されてをつたのであるが——日本人に興味を與へることが出来るが、それはただに日本の最も無智な百姓でも常に起し得るところの空想乃

至感情を西洋人が珍しくも翻譯的に改作したのだと思ふ程度に過ぎぬのだ。それにしても何人といへども是等の日本の歌謠の中に——或は寧ろ私自身が頗る無味乾燥的に譯して仕舞つたところの是等の拙譯の中に——ロゼッティの神韻漂渺たる思想その物の倅をすら見出すことが出来ぬのは明白である。

是所ぞ、我れその昔かみ、住みにし所……

されど何時？ 如何に？

そは、いかて語りえん。

草は扉とばせの彼方に、

(汐風) は強く、香ばしく、

(波) の音、かこつが如く、

光りは岸に沿うて、

これぞ、我が知れる物。

汝いまし、以前もと、我が有あり……

されど幾年の昔？

そは、いかで知りえん。

燕つばくらの高く舞ふ時、

汝いましの頸動うなじゆぎて、

面掩巾ウエーブルは地に……

これぞ皆、我が知りにしことか、その昔かみ。

譯者註 この詩は小泉先生が最も愛誦された英詩の一である。詩の大體の意味は二人の新婚の夫婦が静寂な海岸に佇みながら何とほなしに汐風に吹かれてゐる間にふと前世のことか思ひ出したといふ意味なのである。即ち夫はこの磯邊は遠い遠い昔住んだことのある所だと感じたが、併しそれが何時のことであつたのか判然と記憶してをらぬ。と同時に我が新妻も遠い遠い昔既に我が戀人であつた様を感じて來たのである。その時燕が一つ高く空中に翔んだ。妻の白い頸筋がその燕の方へと向けられた。その刹那彼は俄然として彼の過去世を明確に意識した。そして彼の眼前に在る一切の物は彼が前世に於て既に知つてゐた物であることを悟つた。面掩巾ウエーブルが地に落ちたといふ句は心の曇りが晴れたことを意味するのであらう。

譯中に（沙風）、（波）等々あるは小泉先生の解釋を尊重する意味で特に原詩に無い語を補入した譯だ。

西洋の夢の神苑みそのに實みのつて然かも神の嚴命に依りて人間の口に入ること許されてをらぬ
果實！そしてこの果實と同じ意味に見られてをつた思想は、今やロゼッターに依りてか
くの如く謎でもかけるやうに巧妙に取扱れたのであるが、この不可解な詩人的態度はかの
古い東洋の宗教から直接に湧いて來るところの日本人の毎日の叫びに比して實に明々白々
たる事實的相違を持つてをる。例へば日本の歌謠にかういふのがある、

譯者註 原文に日本の歌謠を羅馬綴りで示してないのは、英詩そのままに直譯することにした。これ
はその出所が不明であるばかりでなく、小泉先生がこれを耳で聽かれたのか、それとも書物で讀まれ
たのかそのへんのこと不明だからである。

色は思案の外とはいへど、これも前生まきせうの縁えんである、

註 縁とは親和といふ意味の佛語である、生から生への因果關係を表す語。

二つ結んだ纜わづらさへも、遠い前世の契り綱、（大意）

袖觸り合ふのも他生の縁よ、況て二人が深い仲、

この様な親切な男と同棲してをるのだからこの世は果報、私は前生の善報をこの世で收穫してをるのだ、(大意)

註 佛語の果報は通常カルマ即ち因果、因縁等と同意義のものとして用ひられてをる。前世の行の悪報よりは寧ろ善報を表す場合が多い。併し時としては善惡兩様に用ひられることもある。ここでは通俗的に果報の善い人即ち幸運な人といふ意味に用ひてあるやうだ。

この種の歌謡の多くは概ね情人同志が二世も三世も契らうとする時に誓ひ合ふ習慣を述べたもので、その源は佛教の格言に胚胎してをる。即ち

親子は一世、

夫婦は二世、

主従は三世。

夫婦の關係がこのやうに二世だけに限定されてはをるが場合によりては熱烈にも七世ま

てかけて誓つてをる實例も屢々在る。これは日本の戯曲が實際に證明してをるのみならず、戀愛のために自殺した者の書置が事實的に證據だてゝをる。次の例はこの題目を取扱つてをる點で特色のあるものだ——熱情から諷譏へと調子が變つてゆく點で——

(一) 髪は斬つても二世までかけた、深い縁えにしは切るものか、

(二) 二世と契りし寫眞をながめ、思ひいだして笑ひがほ、

(三) とてもこの世で添れぬならば、蓮うてなの臺で新世帯、

註(一) 髪を斬るといふことがあるからにはこれは女が主人公である。恐らくこの女の夫又は許婚の戀人が死んだのであらう。彼女は佛教徒の習慣によつて亡夫の菩提を弔ふために己が黒髪を斬つて貞操を守る心をここで表したのである。この題目に關する委しき事柄は私の "Glimpses of Unfamiliar Japan" 及び "Of Women's Hair" を参考して貰ひ度う。

註(二) ここには寫眞といふ言葉が用ひてあるからこの作は時代は古く無い。

註(三) 二人の情人が一緒に自殺するといふ思想はここに胚胎してなる。これは情死歌と名をつけることが出来よう。

二世までと約した間ではないか、今離れる位なら私は死に度い、(大意)

さあ何としよう、二世かけた二人であるに、二人坐つた時に、三味線の糸がぶつたり切れて、

(大意)

註 諳ひ女の間では三味線の糸がこのやうな時に切れて仕舞ふと近い間に離別の悲が來ると考へられてゐる。

三世の因果を説いて二人の中の約束を固めるとは實に横着な僧である、(大意)

註 獨身生活を守ること誓つておきながらその戒を破つた僧侶のあることを歎つたもの。

人間は幾度も幾度も殆ど限り無しに生を易へるやうに運命づけられてゐるものである。

併しそれかといつてただ一つの生の刹那的幸福はそれ自身に於て貴さが劣るといふことはならぬ。例へばかうある、

一夜會はぬのは實に悲の原因になる、何故ならばただ一生涯の中に同じ夜は二度と來ぬから、
(大意)

だが、例年に無く暑い夏は、例年に無い酷寒の冬を豫言し得ると同様に、この生に於て

餘りに幸福であるのは來世に於て大なる苦を受けることを表す、

いつも私はこの様に苦しんでばかりをる、恐らく私は前世で幸福が過ぎたのであらう、苦み方が足らなかつたのだ、(大意)

前世と後世の信仰を歌つた歌謡が外來思想(佛教思想)に依つて影響されたものであることは上述の如くであるが、これにつぐべきものは因果即ちカルマの教を説いた歌謡である。私は是等の歌謡の中から數種の自由譯をこゝに提供すると共に、都々逸よりはもつと手のかゝつた、そして普通はもつと長い形式を有つてをるところの端唄の中から類例を上げることにした。私の選んだ端唄は少くともその原形に於て——螢ホタルに關する美しい眞喩シメタリを含んでをる——非常に立派な物である。

泣かないで私の方を向いて下さい、私の嫉妬心は皆消えて仕舞つた、不親切なことをいうたのを許して下さい、因果の力が私の舌の根を抑へつけました、(大意)

これは明かに嫉妬深い情人が己が罪を後悔して相手の女に許しを請うてをる有様を歌つたものである。そして次の例は恐らくこの情人のために泣かされた女の返答である。

妾は何の因果で貴郎の様な不實な男と戀仲になつたのだらう、(大意)

或は又このやうに叫んでをる、

めぐる縁かや車の私、引くにひかれぬこの因果、

註 ここに言葉の戯れがあつて私が特に英譯しないで置いたものである。大體の意味は許婚又は結婚した男女の不幸を歌つたもので、運まきながら女の方からその結婚を斷らうとしてをる意がここに現れてをる。

因果の車といふことに關してもつと著しい例は次の如くである。

親の意見てあきらめたのを、またも輪廻て思ひ出す、

註 佛語の輪廻又は輪轉は車の廻りといふ意、生から生への移りゆきを表す言葉である。ここでいふ輪と迷ひの大車即ち因果の輪のことである。

ここに端唄の實例がある、

可愛い可愛いと鳴く蟲よりも、鳴かぬ螢が身を焦す、

何の因果で實なき人に、しんを明かして嗚呼悔し、

若し以上の歌謠が私達と心理的に全く正反對の立場に在るところの人達のみによつて作り出さるゝものとするならば、かの無常轉變の大法を攝取し耀映したところの民謡その物の類聚に於てこれと全く異つたものゝあるのを認むるのである。例へば一切の物質的事物が悉く不定滅却の相を具へ、現世の快樂は如法空虛の夢であるといふ思想は基督教も佛教も大いに一致してをる點である。併し此二者の間に存する大きな相違は、私達が靈的の物についての兩者の教——特に自我の性質に關しての兩者の説明の方法を比較した場合にのみ見出さるゝのである。但し自我その物が一つの非永遠的の混合體であるとか、或は物我は眞の識に非ずと説いてをる東洋の教は、是等の流行歌の中に稀に現れてをるのみである。普通の人には自我といふ物がある。自我は一つの眞なる——假令それは増加性を有するものであるにせよ——人格それ自身であつて、生から生へと推移してゆくものである。深遠玄妙な教は私達が自我であると自ら想像してをる物は實は全部私達の迷ひ——因果に依りて編れたところの闇冥の掩ひ——であつて、無限の自我、永遠の絶對以外に如何なる自我

も存在し得ずと説いてをる。併しこれを理解し得る者は僅に教養のある佛徒のみである。次に掲げた都々逸の中には普通の経験に一致してをるところの思想乃至感情が多分に含まれてゐる。

月に村雲、花には嵐、とかく浮世はまゝならぬ、

註 これは特に不遇の戀愛を歌つたもので、二つの佛教の諺の月に村雲花に嵐とまゝにならぬは浮世のならぬ——あてが外れて失望するのはこの物憂き世界のつねである——といふ意を取入れたのである。浮世——飛去る又は不幸なこの世の意——といふ言葉は佛教で最も普通に用ひられてゐる常用語の一つである。

梅の香ばしい花が咲いたかと思つたら無常の風が吹いて來て散つて了つた、(大意)

明日ありと思ふ心のあだ櫻、夜半に嵐の吹かぬものは、

影も形も消ゆればもとの、水とささとるぞ雪達磨、

註 達磨は禪宗第二十八代の師祖であつて長い歲月の圓面壁坐禪をやつたために双脚を失つたと傳云。

脚の無い多くの玩具の人形に彼の名がついてゐる。こ 玩具の達磨は脚が無いが能く體の平均を保つてゐていくら倒しても、いつも、もと通りに起上る。亦日本 子供の造る雪 形も昔から同型を持つてゐる。

私が是等の歌謡を英語に譯した時、私のために助力してくれた日本の友人があつたが、その人は私に前記の歌謡の中に出て來た影、といふ語を説明してきかせたが、それによれば、この語は或る靈的の意味を伴つてゐるさうだ。してみると、この語はこの歌謡の全體に互つて更に深遠な意味をつけ加へることになる。

十五夜の月の如く、Heart は十五歳迄、十五になると光りが衰へて闇が來る、戀ひといふもののために、(大意)

註 陰曆に依れば月の十五夜は常に満月にあたつてゐる。この歌謡の中に出て來る佛教引喻は迷ひ、即ち愛執の迷ひといふことである。そしてこの心の迷ひなるものを更に正道を暗くする闇その物にたぐひたのである。

變る愛世に變らぬ物は、變るまいとの戀の道、

ほんにつれないあの稻妻は、ふため見ぬうち消えてゆく、

註 佛教で電火の光いでんくま、石の火ひかり——燧石の閃光——をもつて一切の快樂の一时的なることを象徴してゐる。ここではこれを戯れに用ひたのである。この歌謡は情人と會ふことの餘りに短いことを嘆じたものである。

可愛がられてつらさはまさる、ほんに憂世は歎きの巷、(大意)

註 戀ひはしてゐるが嫉妬心の強いところの女が歌つたものである。私の日本の友人はこれを次の如く解釋した。曰く、男が親切であればある程、女の方ではその男が他の女と關係してその女に對しても同様に親切であるだらうと心配して氣も狂はんばかりになつてをる、その意をこの歌で表したのである云云。

老少不定の身でありながら、時節待てとはされことば、

註 老少不定は佛語である。この歌謡の意は下の如くである。この世の事は皆不定であるのに、私に婚證することを待てといふのは實際貴殿は私を愛してならぬからだ、何故なら貴殿のいはれる時節が來ないうちに私達二人の中の何れかが死なぬとも限らぬから。

會ふは涙の原因たなとは知れど、會はぬ歎きはなほつらい、(大意)

註 生者必滅、會者定離及び哀別離苦の佛書の句に據る。

一つになることを考へて喜んでゐるが其の反面に於て夕の笑が曉の涙の源となることのあるのを忘れてゐる、(大意)

無常を教へてゐる俗語が一面にあるかと思へばその反面には次の如き都々逸もある。

あだな笑顔に迷はぬ者は、木佛、金佛、石佛、

いしほかけ

註 石佛とは特に墓地に置かれてある石の佛像のことである。この俗語は日本の隨所で流行してゐる。私は各地でこれを聞いたことが幾度もある。

然らば何が故に木佛、金佛、石佛がそのやうに無情であるか。それは活佛いっほとけは次の例にもある如く——これは滑稽的に非禮を犯したものはあるが——木佛、金佛、石佛のやうに無感覺の者で無かつたのは明かであるが故である。

憂世を捨てよとはそれや、釋迦様(逆さま)よ、羅睺羅らごらといふ子を忘れてか、

し、か、ひ、に（釋迦牟尼）は、さ、さ、や、む、に、を日本風に譯した形である。故に釋迦様とはさ、さ、や、む、に、様又は佛陀様といふことになる。併し逆さまは日本語であべこべ又は顛倒の意に用ひられてをる。だから釋迦様と逆さまの發音差にはこの地口を示すだけの餘地が一寸ある。不安の戀には非禮の罪は免れぬ。

回向するとて佛の前へ、二人向ひてこなべだて、

註 佛とは死者即ち一人の佛のことである。これは私の著“Glimpses of Unfamiliar Japan”及び“The Houschaki Shrine”に掲げてある。こなべだてとは情人同志の秘密會談をやることを表す日本の慣用語である。ちんちん鳴鍋——一つの鍋で鴨を煮て食べること——といふ句から出たものである。相思の男女か同一の膳で食事する樂みを形容したものに外ならぬ。ちんちんとは鳴鍋の液汁が沸騰する時の音を寫した語である。

次に戀の邪魔者に對しては、かう言うてをる。

花を凋落させる風と雨は憎い奴ではあるが、それよりも憎い奴は戀路の邪魔をする者、（大意）

それでも神々のお助けを一所懸命に願つてをる。例へば、

戀の關路にお百度踏んで、主に會ひ度い神頼み、(大意)

註 お、百度といふことは百度お宮に参拜して一度毎にお祈りをする事である。戀の關路とは愛は迷ひより生ずるものなるが故に心の關の有様を表すものだといふ佛教用語である。主とは主人、持主又は屢々地主といふ意味に用ひられることがある、戀愛上に關して用ひられる場合には愛着の心を起させた主人公即ち情人を意味することとなる。

次に掲げた戀愛歌謠に於て興味のあるのは佛教引喩に主として關係してをることである。

賽の河原と主待つ宵は、こひしこひしが山となる、

註 この俗諺には實に美妙な語呂合せが仕組まれてをる。こひしは文字に書かないでただ音の上だけで見れば小石又は戀ひしといふことで、ここに言葉の戯れがある。次に賽の河原とは空想上の河床のことであつて、其所へ子供達の亡靈が小石を積み往かなくてはならぬことになつてをる。ところが可哀相にもその石の重量が彼等の力を極度迄緊張させるやうに増加してくるのである。この歌にはこれ以外には「地蔵和讃」の句、即ち是等の俄鬼が彼等の父母を慕つて父、こひし、母、こひしといつて

叫ぶその聲を引用してをる。これは私の『Chimpanzee of Unfamiliar Name』の巻一、五九―六一頁にある。

戀の闇路に迷うてゆけば、明るい世界がよく見える、(大意)

註 戀の闇路を遠く歩いて來た者は俗事がよく分るといふ意である。

冷い心で外部から見れば戀ほど實に馬鹿なものはないが、迷つた経験の無い者では戀の味は分らぬ、(大意)

三千世界に男はあれど、主ぬしにみかへる人はなし、

註 三千世界といふ言葉は佛教で普通用ひられてゐるものである。

浮氣に見えても操は堅い、泥はちすの中から蓮が生える、(大意)

註 佛教で常用してをる直喩シキリは西洋の讀者がこの英譯から想像し得る以上にここで顯著にあらはれてゐる。是等の言葉は木職の唄うたひ女むすめか又は女郎の言葉であると想像されてをる。女郎の職業は嘲弄的に泥水家業どろみづかぎと呼ばれてゐる。女郎が自己辯護のために佛教で用ひらるる有名な比喩——泥中の蓮——をここで格段に且つ熱心に引用してゐるところに興がある。

血の池地獄も劍の山も、二人連れなら厭ひやせぬ、

註 血の池地獄は女の地獄である。劍の山は男が特に地獄で罰を受ける場所として一般に佛書に書いてある。

墨の衣に身はやつさねど、心一つは尼法師、

髪は斬らねど心は佛、こん度會ふ迄尼法師、(大意)

このやうにいうてはをるものゝ、法師でも尼でも迷ひの力から脱却することが困難なこともある。例へば、

墨の衣をつけてはをれど、戀の闇路に迷ひ入る、

私は都々逸の極めて真面目なものゝ中から主として是等の實例を以上の如く選み出したのである。併し軽い氣持で謠つた都々逸の中には恐らくもつと屢々佛教引喩が宿つてをることゝ思ふ。次にこの種のを五組だけ擧げて數百種の見本に代へることにする。

餘りに迅速あはたしくに話したので思ひ出すことが出来ぬ、そのために戀人は闇靡顔で願ひを容れる、

(大意)

註 この意味はこの男が履行しようと思つてゐる事柄以上のことを輕率に約束して了つたといふ意に外ならぬ。闇魔——梵語の Yama——は地獄の王又は靈魂の裁判人といふことである。佛典及び佛畫に書いてある闇魔 見るからにそれは恐しいどころの話では無い。この歌謡の中にある句は佛敎の但言に借りるとき、地、善、顔、返す時の闇魔顔とあるのに明かに關係を持つてゐる。

私は佛顔でその顯ひを三度聽いてやつたが餘りに顯ひが多いのでその後は闇魔顔で聽くてせう、
(大意)

彼等は一緒に楽しんでゐるが彼等のボートの下は地獄だ、河風よ早く吹け、私のためにつむじ風よ吹け、(大意)

註 地獄は種々の地獄を總稱した佛敎用語である。ここで言つてゐることは船板一枚下は地獄といふ句、即ち海上の危険を形容した句に關係してゐる。この歌は嫉妬を皮肉つたものである。ここでいふ小船は恐らく屋根のある遊覧船で管絃の遊びに用ひられるやうな物であらう。

私は彼をとどまらせるために今囀いた鳥は月夜鳥だというたが甲斐が無かつた、曉の鐘は淋しくひびく、(うそを) つけない鐘が……(大意)

(月夜鳥といふてはみたが、うそのつけない曉の鐘)

註 月夜鳥とは普通の鳥が曉を告げるのに反して夕陽の没する頃から旭日の昇る時迄常に鳴いてをる鳥である。次に鐘とお寺の鐘のことである。曉の鐘は日本の各地でお寺から響いてをる鐘のことだ。次の句には洒落がある。即ちつけない、はうそをつけないの意味と鐘をつけないの二つの意味を音の上 に於て持つてなると解釋することが出来よう。

三千世界の鳥を殺し、主と朝寝がしてみたい、

私はこの最後の歌を珍しい物といふ意味で引用した。その理由はこれには不思議な歴史があるばかりで無く、この歌が直ぐその前に掲げた歌に類似した或る歌で明かに眞意が示されてをるとはいふものゝ、實際は外見と事實とは相違してをるからである。これは勤王の志を歌つた俗謡であつて、その作者は長州の木戸さんであつた。木戸さんはあの將軍家を顛覆して王室の權力を恢復し、日本の社會を造り直し、西洋の文明を輸入し適用するに至らしめたところの大運動の指導者の一人であつた。木戸、西郷、大久保は明治維新の三傑だといはれてをるのは當然のことである。木戸さんはその友人の西郷さんと一緒になつて京都で彼の計畫をたてゝをつた間にこの歌を彼の眞情の發露したものとして作り且つ謠

つたのである。三、千、世、界、の、鳥、といふ句は徳川派を表現したものである。主（君主又は心の主）とは天皇を指示したものである。そ、へ、ね、は——共に寝ることであつて、將軍や大名から新たに妨害を加へられること無しに、玉座に對して直接の責任を帯び度いと望んでゐる意を示したものである。これはかの率直な言葉で發表したならば暗殺を招いたかも知れぬやうな意見を吐露するための手段としてわざと流行唄を用ひたものであつて、これは日本の歴史上に於て必しも最初の實例では無かつた。

私は本戸さんの歌に關して上の如く説明してゐる間に、佛敎用語の三、千、世、界、（讀者の知らるゝ通りこの集て二回起つてゐるが）といふことは私に二三の感じを與へてくれたから、その事柄をこゝで述べてこの論文を適當に片附けて仕舞ふやうにする。私は數年前に初めて佛敎哲學の大様を知らうと志した時、特に私の心を刺激した一つの事柄は佛敎の宇宙觀の廣大無邊なことであつたと記憶してゐる。私は佛敎を研究して感じたことは、この宗教はただに人類の住んでゐる一世界に對して救世の信仰を授けてくれたのみでは無くて、幾千萬劫の無量恆河沙の世界の宗教として現れて來たものであつた。故に星辰の進化離滅に關する近世の科學的示現は、私の考によれば、宇宙の原則についての或る佛敎理論の大斷

案の如きものである。そして私は今でもなほこの考をもつてをる。

今日科學者は天體が物語つてをるところの新しい物語の驚くべき暗示を無視することは出来ぬ。今日の科學者は所謂心なるものゝ發達を目して宇宙を通じての惑星の生命成熟の一般的事相乃至出來事であるとして考へざるを得なくなつて來た。彼は私達自身の小さな世界と星辰及び天體の大集團との關係を比較して、恰も、ただ一つの夜光蟲と大海の燐光との關係以上のもので無いと觀察せざるを得ぬのである。東洋人の知力はこの驚くべき示現に接するや、これを以て彼等に悲みを加へるための知識としてよりは寧ろ信仰を促すための知識としてこれを認め得るやうに心の準備が出來てをつた。特にその點では西洋人よりは好都合であつたのだ。私は西洋人の知識と東洋人の思想とが將來何等かの結合をつくり得るやうになつたならば、その結果として、一種の新佛教が新たに生れて來て、それが一切の科學の力を己れ自らの中に繼承し然かも内部的にはかの『金剛經』第十二章に預言してあるところの報酬を以て、これが眞理を求むる者に報い得ることを思はざるを得ぬ。今この經文をその儘に示せば——註釋家の言はともかくとして——**彼等は無上の驚異を授けらるべし**といふ句に於て既に約束してあるところの報酬よりも、もつと多くの物が、如何なる精神的教訓の中からも果して公平無私に期待し得るや否や。

第九章 涅槃

總合佛教の研究

—

『須菩提に告ぐ、この經典は信仰の少き者、——我相、人相、衆生相、及び壽者相を信ずる者によつて聞かるべき物にあらず』——『金剛經』

涅槃とは、佛教徒の心に取つて、正に絶對の無、——完全なる寂滅の意味に外ならないと云ふ觀念が歐米に今も廣く傳はつて居る。この觀念は誤つて居る。しかしそれには半分の眞理を含んで居るがために誤つて居るのである。この半分の眞理は、今一つの半分と結合しなければ、價值も興味もない、否、分りもしない。ところでその半分については普通の西洋人の頭では疑うて見る事もできない。

實際、涅槃は絶滅の意味である。しかしこの個性の絶滅と云ふ事を魂の死と解するやうでは、私共の涅槃の概念はまちがつて居る。或は印度の汎神教によつて豫言されたやうに、涅槃は有限を無限に再び吸収する事と解すれば、再び私共の觀念は佛教と無關係になる。けれども、もし私共が、涅槃とは個人的感覺、情緒、思想の消滅、——自覺ある個性の分散、——『我』と云ふ言葉の下に包含さるべき一切の物の絶滅の意味であると云へば、——それなら私共は佛教の一面を正しく云ひ表はして居る。

以上述べた事が矛盾したやうに見えるのは、ただ私共西洋の自我に關する見解から來るのである。私共に取つては自我は感情、觀念、記憶、執意を意味する、そしてドイツの唯心論を知らない人には、意識は自我ではあるまいとさへ考へて見る事もなからう。それに反して、佛教徒は私共が自我と呼んで居る物は皆偽りであると云ふ。佛教徒は我の定義を下して、人種の肉體的及び精神的經驗によつてつくられた、——この滅すべき肉體に凡て關係して、それと共に分散すべき運命を凡て有して居る感覺、衝動、觀念のただ單なる一時的總計と考へて居る。西洋の推理から見て、あらゆる實在のうちで最も疑ふべからざる物と思はれる物を、佛教の推理では、あらゆる迷妄のうちの最大の物、そしてあらゆる悲

みと罪の源とさへ述べて居る。「心、思想、及び凡ての感覺は生死の法則に服従する。自我の知識及び生死の法則には觸むべきところも、感官を以て知覺すべき物もない。自我を知り、感覺の作用を知れば、「我」の觀念の餘地、或はその觀念をつくるべき根據はない。「自我」の思想は凡ての悲みの基となつて、——世界を鎖で縛るやうになる、しかし縛るべき「我」のない事を發見すれば、凡てこれ等の鎖は切斷される」^註

註「佛所行讚經」

以上の文句は甚だ明白に、意識は眞の自我ではない事、及び心は肉體と共に死ぬ事を暗示して居る。佛教思想を知らない讀者は、つぎのやうな道理ある質問をするだらう、「それなら、業の説、道德進歩の説、應報の説の意味がどうなるか」實際、西洋の本體的觀念を有するだけでは、『東邦聖書』にあるやうな佛典の繙譯の研究を試みる事は、ページ毎に見たところ望みのない謎と矛盾とに對面する事にならう。私共は再生の説を發見するが、靈魂の存在は拒否されて居る。私共は現世の不幸は前世に犯した罪の罰であると聞かされて居るが、個人的の輪廻と云ふ事はない。私共は生類は再び個性を取ると云ふ記事を見るが、個性も人性も皆迷妄であると云はれる。深い種類の佛教信仰を知らない人が、『彌蘭

陀王問經」第一卷のつぎのやうな抜萃を果して理解する事ができるかどうかを私は疑ふ、

王問うて曰く、『那伽犀那尊者よ、死後生れかへらない者はありますか』那伽犀那は答へた、『罪障ある者は生れかへり、罪障なき者は生れかへりませぬ』

『那伽犀那尊者よ、世に靈魂なる物がありますか』『靈魂と云ふやうな物はありませぬ』
(同じ記事がその後の章に、『第一義門から云へば、陛下よ、そんな物はありませぬ』と云ふ説明づきでくりかへしてある)

『那伽犀那尊者よ、この體から他の體へ轉移する何者がありますか』『いえ、ありませぬ』

『那伽犀那尊者よ、輪廻のないところに、再生があり得ませうか』『さうです、あり得ます』

『那伽犀那尊者よ、將に再生せんとする者は、彼が生れかはるだらうと云ふ事が分るてせうか』『さうです、陛下よ、それは分ります』

當然西洋の讀者は問ふだらう、——『どうして靈魂なくして生れかへる事ができよう。どうして輪廻なくして再生があらう。人性なくしてどうして、再生の個人的豫想ができよう』しかしこんな質問に對する答は、今云つた書物には發見されない。

今ここに出した拔萃は例外的に困難なところを提供して居ると想像する事は誤りである。自我絶滅説に關して、今日英語の讀者に達し得べき殆ど凡ての佛典に、夥しい證據がある。恐らく大般涅槃經は『東邦聖書』にある最も著しい證據を與へて居る。涅槃に達する解脱の八種を叙して、私共が西洋の見方から、絶對的寂滅の行程と呼んでもよいと思ふ物を明細に説明して居る。その説明によれば、この八階段のうちの第一段に於て、眞理を追求する佛教徒は未だ——主觀客觀の——形の觀念をもつて居る。第二段に於て、形の主觀的觀念を失つて、ただ外界の現象として形を見る。第三段に於て、もつと大きな眞理の知覺が近づく事を感じて來る。第四段に於て、形の凡ての觀念、抵抗の觀念、及び差別の觀念以上を達して、殘る物は無限の空間の觀念だけになる。第五段に於て、無限の空間の觀念が消えて凡て無限の平等と云ふ思想が來る。(ここは汎神論的唯心論の極度の境であると多く人は想像するだらうが、それは佛教の思想家が追求すべき道の半分の休息所である)第六段に於て『一切無』と云ふ思想が來る。第七段に於て無と云ふ觀念それ自身も消える。

第八段に於て、凡ての感覺も觀念も存在しなくなる。それからそのあとに涅槃が来る。

同じ經は、佛の死を述べるに當つて、佛が速かに第一、第二、第三、第四の瞑想の階段をへて、『無限の空間だけが現れて居る心の状態』へ、——それから『無限の思想のみが現れる心の状態』へ、——それから特に『何物も全く現れない心の状態』へ、——それから『意識と無意識との間の心の状態』へ、——それから『感覺と觀念の兩方共、全く消え去つた心の状態』へ、通過するやうに表はしてある。

佛敎の一般觀念を得ようと眞面目に考へる讀者に取つては、こんな引證は必要である、即ち原因結果の連續の根本的敎理と雖も、自我の實在を同じく否定して、同じやうな謎を暗示して居るからである。無明は行、即ち業を生ずる、業は識、識は名色、名色は六處、六處は觸、觸は受、受は愛、愛は取、取は有、有は生、生は悲と老と死を生ずる。疑もなく讀者は十二因縁の破滅に關する敎理を知つて居るから、ここにそれを詳しくくりかへす必要はない。しかし讀者は觸を止めて受を滅し、受を止めて名色を滅し、名色を止めて識を滅する事を、この敎から想ひつく事ができる。

明らかに、こんな文句によつて提供された謎を豫じめ解かないで、涅槃の意味を學ばう

とする事は望み難い。今日翻譯によつて英語の讀者に親しくなつて居る經文の本當の意味を理解する事のできる前に、神と靈魂、物質、精神に關する普通の西洋の觀念は佛教哲學には存在しない、それに代る物は西洋の宗教思想に於て丁度それに相當する物のない概念である事を理解する事が必要である。特に、讀者は靈魂に關する神學的觀念を念頭から去つてしまふ事が必要である。すでに引用した文句から見ても、佛教哲學には個人的輪廻、及び單獨的永久的靈魂のない事が明らかになつて居る筈である。

二

『世尊に申す、我相の觀念は觀念にあらず、人相、衆生相、壽者相の觀念は觀念にあらず。

その故は、尊き佛菩薩は一切の觀念を脱したればなり』——『金剛經』

そこで今度は死ぬ物は何であるか、再生する物は何であるか、——過を犯す物は何であるか、罰を受ける物は何であるか、——不幸の状態より幸福の状態に到る物、——自覺の絶滅のあとて涅槃に入る物、——『寂滅』のあとに残つて、涅槃から歸る力のある物、——

—凡て他の感情が滅したあとで、四つの無限大の感情を経験する物は何であるか、それを理解する事を試みよう。

涅槃に入る物は感覺のある、又自覺せる自我ではない。我とはただ無數の煩惱の一時の集合、空しきまぼろし、破れるにきまつて居る泡に過ぎない。それは業が作つた物、——或はむしろ佛教の人の主張するところでは、それは業その物である。この意味を充分理解するためには、讀者は、この東洋哲學に於ては、行爲と思想は、物質的及び精神的現象と、——私共の所謂客觀的及び主觀的外見と——結合する力である事を知らねばならない。私共の踏む土地その物、——山と森、河と海、世界と月、要するに目に見える世界は行爲と思想の結合である、業註、或は少くとも業によつて定まつた存在である。

註 「今我が現生は過去の業影なり。業影を執て自身と思ひ内にして眼耳鼻舌身外にして園林田宅僮僕婢妾、我が所有の思ひをなす。而して造業無量牽纏相引て窮極あることなし。過去の過去際を推すもその始めを知らず。……」——黒田眞洞「大乘佛敎大意」

「草、木、土、——凡てこれ等の物は佛になる」——「中陰經」

「劍でも金屬でも精神の發現である、そのうちに凡ての力が充分に發達し完成して存する」——「醇藏寶

「有情と云ふも無情と云ふも、物質は法身なり」——「智勝秘疏」

「顯教では四大（地水火風）を無情として取扱つて居る。しかし密教ではこれを三昧耶身、即ち如來の應身と云ふ」——「即身成佛義」

「我々の心のどの形でも、佛の心と一致する時は、……その時は佛界に入らない塵一つもない」——「圓覺疏」

私共が自我と呼ぶ業の我は心であり又體である、——二つとも衰へる、二つともたえず新しくなる。知られない始めから、この主觀客觀の二重の現象は代る代る分解し結合して居る、結合は生であり、分解は死である。或形か事情かて、業の生死する外に、生も死もない。しかし再生の度毎に、再結合は決して同一の現象の再結合ではない、——丁度生長から生長が起り、運動から運動が起るやうに、——別に起つた結合である。それで幻影の自我は、形と事情に於て變るばかりでなく、又新しき合體と共に、實際の人格に於ても變る。一つの實在はある、しかし永久の個性、變らない人格はない、ただ幻影の自我、生と死の物すごい海の上の、うねりにつぐうねりのやうな、ただまぼろしの自我につぐ自我があるだけである。そして海のあるのでも、うねりの運動であつて、變形ではない、——動くのは波の形だけで、波その物ではない、——その通り生命の生死はただ形、——精神

の形、物質の形、の出現と消散しかない。測られない實、在は變らない。『金剛般若波羅密經』に、『凡ての形は眞でない、凡ての形よりも上に上る者は佛である』と書いてある。しかし體の全分解と精神の最後の消散のあとで、凡ての形の上に上る何物が残つて居るのだらう。

不完全なる人の誤れる意識のうしろに、——感覺、知覺、思想の向うに無意識に存在して、——私共が魂と呼ぶ物（それも實は厚く織つてある迷の幕に過ぎない物）に包まれて、永久の神聖な物、絶對の實在がある、魂でも、人格でもない、ただ自我のない我、——無我の大我、業のうちに包まれた佛がある。各のまぼろしの我のうちにこの聖い物が潜んで居る、しかも無數の物はただ一つである。生ある物には悉く無限の叡智が眠つて居る、——それは未だ進化しない、隠れた、未だ知られない、未だ感じない物であるが、最後にあらゆる無窮から覺めて、煩惱のすさまじき蛛巢を拂つて、永久に肉の蛹さなぎを捨てて、時間、空間の最上の征服をするやうに定まつて居る。それで『華嚴經』に書いてある、『佛の子よ、如來の智慧をもたない者は一人もない。凡ての者がこれをさとらないのは、ただ迷へる思想と感情のためである。……自分は彼等に聖い道を教へて、愚かなる思想を捨てさせ、彼等の心に潜んで居る廣大深遠なる叡智は佛自身の智慧と違つてゐない事を示さうと思ふ』

ここで私共はこれ等の佛教の根本的教理と西洋の科學の概念との關係を考へて見よう。佛教がこの浮幻世界の實在を否定するのは、現象としての現象の實在を否定するのではない、或は客觀的或は主觀的に現象を生ずる力を否定するのではない事は明白である。業としての業を拒否する事は全部の佛教系統を拒否する事になるからである。眞の意味はかうである、即ち、私共の知覺する物は決して實在その物でない、それから知覺する我と雖もそれ自身不定にして煩惱の性質を有せる感情の集合の不安定な叢である。この立場は科學的には強い、——恐らく難攻不落である。本體その物については私共は全く何物をも知らない、私共は宇宙は廣大なる力の働きてある事をのみ知つて居る、そしてそれ等の力の働きて現れた法則の一般相對的意味を識別しても、一切の非我なる物（外物）は、如何なる二人の人間にも決して同一てはない神經構造の振動によつてのみ、私共に現れるのである。それでもこんな變化のある不完全な知覺によつて、私共は凡ての形——凡ての客觀的或は主觀的聚合物の永續性のない事を十分に會得するのである。

實在をためす物は永存性である、そして佛教徒はこの見ゆる宇宙に於てただ永久に流轉する現象を見て、物質的聚合物を實在でないと言つたのは、無常であるから、——少くと

も、泡の如く、雲の如く、蜃氣樓の如く實在性をもつてゐないからである。それから、相對は思想の宇宙的形式である、しかし相對は永久性をもたないとすればどうして思想は永久性をもつ事ができよう。……かう云ふ見地から判斷すれば、佛敎の敎理は非實在論でなく、眞の變形實在論である、正しくハーバート・スペンサーの言葉にそれと同じ意味がある、——「凡ての感情と思想はただ一時的であるから、——こんな感情や思想から成立して居る一生も亦同じく一時的であるから、——否、その間を人生が通過する對象も、それ程一時的ではないが、早晚、時々刻々にその個性を失ふ途中にあるのだから、——私共は永久の物は凡てこれ等の變化する物の下にかくれた不可知的實在である事を知る」

その通り、私共の自我と云つて居る物は一時的の聚合體、——感覺的迷妄であると云ふ佛敎の敎は、——もし丁寧に調べたら、如何に眞面目な哲學者も拒否する事は殆んどできない事が分るであらう。科學的心理學者に知られたところでは、精神は色々の感情と、それから色々の感情の間の色々の關係からできて居る、そして感情は、生理學的に微細な神經の衝動と同一の簡單な感覺の單位から成立して居る。凡ての感情機關は、同じ形態學的要素の進化的變形であるから、根本的には相似て居る、——そして凡ての感官は觸覺の變化である。或は、この上もなく簡單な言葉を使用すれば、感覺の機關——視覺、嗅覺、味

覺、聽覺でも、——皆皮膚から發達したのである。人間の頭腦その物と雖も現代の組織學及び發生學の證明によれば、『その最初はただ真皮の層の包みに過ぎない』そして思想は、生理學的及び進化論的に見れば、このやうに觸覺の變化である。視覺機官を通じて働く或振動は、頭腦のうちにその運動を起す、それによつて光と色の感覺が續いて起る、——別の振動は聽覺の構造に働いて音の感覺を起す、——別の振動は特別の組織に變化を起して、味、香、觸の感覺を起す。凡て私共の知識は、直接間接、肉體的感覺から、——觸覺から得られて發達する。勿論これは究極の説明にはならない、何故なれば何人も何がその觸覺を感ずるかを説明する事ができないからである。『形而下の物は一切又同時に形而上である』と云つたシヨウベンハウエルの言は至當である。しかし科學は充分に佛教の立場、即ち私共の所謂自我は凡て人種及び個人の肉體的經驗に關する感覺、情緒、觀念、記憶の束である事、及び私共の不滅の願はただこの感覺的及び自己的な意識を無窮に續けたい願である事を正しく認めて居る。そして科學は、佛教が感覺的自我の永久を否定する事にさへ加勢して居る。ヴントは云ふ、『心理學は私共の感覺のみならず、その感覺を新しくする記憶の心象も、その源は感覺と運動の機官の働きによる事を證明する。……この感覺的意識が永續すると云ふ事は經驗の事實と調和ができないやうに見えるに相違ない。そしてた

しかに私共はこんな永續は倫理的要件であるかどうかを疑ふ、殊にこの永續の願が、もし成就するとしたら、堪へられない運命になりはしないかと一層疑ふ』

三

『須菩提、もし我、我相か、人相か、衆生相か、壽者相かを有すとせば、我又嗔恨の念を有するならん。……色、聲、香、味、觸を信する者は布施すべからず』——『金剛經』

自覺した自我の無常であると云ふ教理は、佛教哲學の最も著しい物であるのみならず、又道徳的に最も重要な物の一つである。恐らくこの教の倫理的價値は未だ西洋の哲學者によつて正しく評價されてゐない。どれ程人類の不幸は、直接間接にこれと反對の信仰によつて、——安定性の物があると云ふ迷によつて、——性格、境遇、階級、信條の區別は不變の法則によつて定められると云ふ迷によつて、——それから變らない、不朽の、感覺ある靈魂が神の氣まぐれて無窮の福か或は永遠の火かに運命が定められると云ふ迷によつて、——起されたであらう。疑もなく永久の憎惡によつて動かされる神の觀念、——不變

の状態に定められる永久不變の實體のある靈魂の觀念、——償ふ事のできない罪と、終る事のない罰の觀念は、以前の社會進歩の半開状態では價值がないわけてもなかつた。しかし私共の未來の進化のうちには、これ等の觀念は全然なくなるべき物である、そして西洋と東洋との思想の接觸によつて、これ等の觀念の衰亡の速度が増すと云ふ好結果になるであらう。これ等の觀念によつて起つた感情が残つて居る間は、本當の容赦の念、人類同胞の感、博大なる愛の眼ざめがあり得ないだらう。

それに反して、恆久、有限的安定性を認めない佛教、一時的現象としての外は、性格や階級や種族の差別を認めない、——否、神と人との相違をさへ認めない——佛教は、根本的に容赦の宗教である。阿修羅と天人は、同じ業のただ變化ある發現に過ぎない、——地獄と極樂はただ永久の平和に達する旅の一時の休み場に過ぎない。凡ての人類に取つてただ一つの法則、——不變の神聖なる法則があるだけである、——その法則によつて最低の者が最高の者の場所に上らねばならない、——その法則によつて最惡の者が最善の者にならねばならない、——その法則によつて最も卑しい者も佛にならねばならない。こんな教法には偏見の餘地も憎惡の餘地もない。愚痴だけが誤りと苦みの源となる、そして凡ての愚痴は自我の解體によつて、結局無限の光明のうちに消散すべき物である。

たしかに私共が永久の人格、銘々に一つの化身だけの古い教理を固執するうちは、今存在するやうな宇宙には何の道徳的教訓をも見出す事はできない。現代の知識は宇宙の行程に何等の正義をも發見しない、——私共に對して倫理的獎勵のために、提供してくれる精神のところは、その不可知力は單なる惡意の力ではないと云ふ事だけである。ハックスレイを引いて云へば、『道徳的でもない、ただ單に無道徳的』である。進化論的科學は、分散しない人格と云ふ觀念と一致するやうにはならない、そして私共は精神的發達及び遺傳の教理を受け入れるとすれば、私共は又個體的解散の教及び不可解の宇宙の教をも又受け入れねばならない。それは又、實際、人間の高尚な能力は努力苦痛によつて發達した物である事、それから長く續いて、そのやうに發達する事を私共に教へて居る、しかしそれは又進化につぐに必ず解散がある事、——發達の頂上は同時に又退歩の始まる點である事を教へる。そして私共は銘々皆單に死滅すべき種類の物、——草や木のやうに死滅すべき運命の物であるとすれば、——私共は未來を裨益するために苦しんで居ると云ふ證言に於て、どんな慰安を見出す事ができよう。私共が比較的不幸な境遇に生れて死ぬ事しかできない場合に、一萬年代も経たら、人類が多少幸福になれるかどうかの問題は、どうして

私共の氣にかかるやうな事にならうか。或はハックスレイの反語を借りて云へば、『これから數百萬年後に、自分の子孫のうちで、ダービー競馬で勝つのであると云ふ事實で、どんな償ひをイオヒツパスの馬がその悲哀に對して得られよう』

譯者註 北米、ニユメキシコ州のイオシーン河近傍から發掘された骨から推定して世界最古の馬の一族となつて居る物。

しかし宇宙の行程も、佛教徒のやうに、凡て實在は唯一である、——人格は眞如をかくす迷に過ぎない、——『我』及び『汝』の凡ての差別は、滅すべき感覺から織り出したまぼろしの幕である、——私共の小さい感官に現れた時間と場所も空しい影である、——過去現在未來は正に一である——と考へて見る事ができたら、全く別種の様子を示すだらう。ダービー競馬の勝利者がイオヒツパスであつた事を記憶する事が充分できるとしたらどうだらう。一度人間であつた生類が生死の凡ての幕を通して、進化の進化を悉く通して、無情から有情への第一のかすかな發生の時までも、回顧する事ができたら、——閻多伽じやたか（本生譚）の佛のやうに、その無數の化身の經驗を記憶してゐて、それを別の阿難陀のためにお伽噺のやうに物語る事ができたらどうだらう。

私共は形から形へと變る物は、我ではなく非我——あらゆる現象の背後にある一つの眞如——である事を知つた。涅槃に達せんとする努力は眞と僞、光明と暗黒、肉慾的と超肉慾的との間の永久の争である、そして究極の勝利は精神的及び肉體的個性の全き解體によつてのみ得られる。自我の征服は一回では充分でない、幾百萬の自我は征服されねばならぬ。即ち僞りの我は無數の時代の構成物で、——宇宙のささまでも續く活力を有して居るからである。一つの蛹さなぎを破壊して四散すれば、それが一々新しい蛹となつて現れる、——事によればもつと稀薄な、もつと透明かも知れないが、同じやうな感覺的材料で織つた物、——無數の生命から遺傳した煩惱、激情、慾望、苦痛、及び快樂から業が織り出した精神的及び肉體的織物が現れる。しかし何が感ずるのであらう、——まぼろしか實體かどちらだらう。

自我意識の凡ての現象は誤りの自我に屬する、——しかしただ生理學者が云ふやうに、感覺は、感覺の説明をしない感覺傳通機官の産物に過ぎない。生理的心理學に於けると同じく佛教に於ても、二つの感ずる實體の本當の教はない。佛教では唯一の實體は絶對である、そしてこの實體に對して、僞りの自我は、それによつて正しい知覺が横に曲げられ歪められる中間物、——そのうちに、そしてそのために感情と衝動が可能になる中間物の關

係になる。無制限の絶對は凡ての關係から離れて居る、私共の所謂苦痛や快樂をもたない、『我』と『汝』の相違、場所や時の差別を知らない。しかし人性の煩惱によつて制限されると、苦痛や快樂に氣がつく事は、丁度夢みる人が彼等の不實在的な事を意識しないで不實在を認めるやうである。自我意識に關する快樂苦痛及び凡ての感情は幻想である。誤りの自我は眠りの状態が存在するやうにのみ存在する、そして感情、欲望、それから凡ての悲哀と激情はその眠りの幻影としてのみ存在する。

しかし私共はここで科學と佛敎の分岐點に達する。現代の心理學は種族と個人の經驗を通して進化論的に發達しない感情を認めない、しかし佛敎は不死にして神聖なる感情の存在を信ずる。佛敎はこの業の状態に於て、私共の感覺、知覺、觀念、思想の大部分はまぼろしの自我にのみ關係して居る事、——私共の精神生活は利己主義に屬する感情欲望の流れと殆ど同様である事、——私共の愛と憎、希望と恐怖、快樂と苦痛は迷^註である事を宣言する、——しかし又私共の知識の程度に應じて私共のうちに多少かくれてゐて、誤りの自我とは關係のない、そして無窮である高尚な感情があると宣言する。

註 「快樂と苦痛は觸から起る、觸がなければ起らず」——「阿吽婆拘」一一。

科學は快樂と苦痛の究極の性質を不可解と云ふが、その無常の性質について佛敎の教ふるところを幾分確かめて居る。兩方とも感情の第一要素でなく、むしろ第二の要素に屬するやうである、兩方とも進化、——本當の快樂も本當の苦痛もなく、ただ極めてぼんやりした鈍い感情しかなかつた原始的狀態から、幾十億の生命の經驗を通して、發達した感覺の種類——であるやうに思はれる。進化が高ければ高い程苦痛が多く、凡ての感覺の量も一層多くなる。平均狀態が達せられたあとで、感情の量が減少し始める。美妙なる快樂と鋭敏なる苦痛は先づ消滅するに相違ない、それから次第にもつと複雑でない感情が、その複雑の程度に應じて消滅する、遂に凡て冷却して行く行星のうちに、最も下等な種類の生命にもあり得べき最も單純なる感覺も残らなくなるだらう。

しかし佛敎徒に隨へば、最高の道徳的感情は人種や日月宇宙よりも長く生きる。粗野な性質の人に不可能な、純粹に無我の感情は、絶對に屬する物である。貴い性質の人には、その神聖なる分子は感覺を生じて來る、——煩惱の殻のうちに動いて來る事は丁度胎内で胎兒が動くやうである（それで煩惱の事を胎藏界〔如來の胎内〕と云ふ）もつと高い性質の人に取つては、自我的ではない感情は強く現れて出る、——まぼろしの自我の中から輝く事は丁度光明がその器を貫いて輝くやうである。個人よりも大きい純粹な無私の愛、——

絶大の同情、——完全なる博愛はこれである。これ等の感情は人間の物でなく、人間のうちの佛の物である。これ等の感情が増大すると共に、自我の感情は悉くうすくなり弱くなり始める。まぼろしの自我の状態は同時に淨化する、心の蜃氣樓のうちに心の實體を暗くした不透明體は明くなり始める、そして無限の感覺は、光の戰慄のやうに、個性の夢を通じて神聖なる覺醒の方へ行く。

註 一切縛着の苦惱を解脱して究竟の樂を得るを大寂涅槃となす。德愛等の心相悉く滅すればなり。爰
愛の心相滅するが故に心性顯現して無量の徳相を具へ雜思の業用を示現す——黒田「大乘佛教大意」

しかし眞理を求むる普通の人に取つては、この自我を清淨にして、最後にそれを解體せしむる事は名狀のできない精進不退轉によつてのみてきるのである。このまぼろしの個性は、ただ一生の間だけ續くが、それが天賦の性質の總計から、及びそれ自身の特別の行爲と思想の總計から、それに續く新しい結合、——新しい個性、——無我の我のために新しい煩惱の牢獄を造るのである。名と形としては、誤りの自我は消散する、しかしその衝動は生き永らへて、再び結合する、そしてそれ等の衝動の最後の破壊——それ等の無形の活力の全滅——は幾十億の世紀を通して長い努力を要する。たえず燃えつくした激情の死灰

の中から一層微妙な激情が生れる、——たえず煩惱の墓から新しい煩惱が生ずる。人間の激情のうちで最も強い物が最後まで残る、それは超人間界までも遙かに押しよせる。その粗野な形が消え去つても、その偏向はやはりもとはそれから出たり、或はそれに織り込まれたりした感情、——たとへば美の感覺、及び美はしい物に對する心の喜悅、——に潜んで居る。下界ではこれは高尚な感情のうちに入れてある。しかし脱俗の境にあつては、この感情に耽る事には危険が伴ふ、觸れる事見る事は肉欲の束縛の鎖が切れたのを再び直す事にもならうから。兩性の凡ての世界以外に、そのうちで思想と記憶が觸知し得べき見らるべき客觀的事實となり、——そのうちで情緒的想像が實體になり、——そのうちで極めてつまらない願も創造的になると云ふ不思議な區域がある。

註　業の教理が偏向の遺傳に關する現代科學の教と幾分合致するのは、性格の、この傳播と永續の問題についてである。

この大きな巡禮の道の大部を通して、それから欲望の凡ての地帯に於て、抵抗の精神的の強さに應じて、誘惑が増加すると西洋の宗教的語法では云はれよう。續いて上るに隨つて、娛樂の可能性が更に加はり、力が増大し、感覺が高まる。自己征服の報酬は非常に大

さい、しかし誰でもその報酬を得ようとして努力するのは空虚を得ようとして努力する事になる。人は快樂の境遇として天を望んでほならない、天の樂みに關する誤りの思想はやはり肉欲の強いひもで結ばれると書いてある。人は神や天使となる事を願つてほならない。『比丘よ、「この徳によつて私は天使にならう」と考へて如何程宗教生活をやつても、その人の心は熱心、忍耐、努力の方へは傾かない』と世尊は云つた。福德を得た人の義務を最も明瞭に叙述した物は『金光明最勝王經』に出て居る物である。この大王はありとあらゆる富と勢力を所有するやうになつてから、快樂を遠ざけ、榮華を賤しみ、『諸神の美』を授けられた女王の愛を拒んで、彼女自身の唇で、彼が彼女を遠ざけるやうに彼女から彼に頼ませる。彼女は從順に、しかし自然の涙を流して、彼に従ふ、そして彼は直ちに存在しなくなる。徳の力で得た賞與をこんなに於て拒否するのは、更に一段高い境遇の生類に、更に幸福に生れ變るやうな助けになる。しかしどんな境遇も望んでほならない。涅槃が達せられるのは涅槃に對する願その物がなくなつてからである。

そこで今度、私は佛教の實體學の最も空想的なところへ少し入つて見よう、——そのうちに述べてある心的進化論の一通りの多少明瞭な概念がないと、この教理の暗示的價値が

正しく判断されない。たしかに私は讀者に、人間の知識で可能な究極の境以上に存在する物に關する説について考へて貰ひたい。しかし人間の知識の範圍内で研究され調べられたところでは、佛説はどの外の宗教的臆説よりも、よく科學的の意見と合致する事が發見される、そして佛説の或物は、現代の科學的發見の不思議な豫想である事が分る、——それ故私共自身の信仰よりも、遙かに古い信仰、そして最も博く發展した十九世紀の思想と遙かによく調和する事のできる信仰である事をただ想像するだけでも、尊敬すべき考慮の價値があると要求する事が不道理に見えるだらうか。

四

『無存は大乗の入口に過ぎない』——『大品經意』

『師波よ、眞實の事を語る者はどうして自分の事を「瞿曇は寂滅を説く、寂滅の教を教へる」と云ふのであらう。師波よ、自分は肉慾、惡意、煩惱の寂滅を説く、自分は惡にして、不善の(心)の色々な状態の寂滅を説く』——『摩訶婆拘』四卷三二章七節。

『人を見て法を説け』と云ふのは、佛法は相手の能力に應じて説かるべき物である事を教ふる日本の諺である。そして佛教の大系統は實際學ぶ者の智力程度に應じて順次に進歩的階段（普通は五段）に分けてある、或はその他の方法で學ばれるやうにしてある。それから色々の宗門及びそこから分れた宗派にも特別に色々の教理があるから、——満足な佛教の本體學大意をつくるためにはこれ等の澤山の教義の間に、重要なそして衝突しない總合をつくる事が必要である。普通の佛教は私共が講究してゐたやうな概念を含んでゐない事は云ふまでもない。人々は本當の輪廻と云ふもつと簡単な信仰を固守する。人々は業を前生で犯した過の罰或は報をなす法則と解して居る。人々は涅槃について餘り心を勞しない、それよりは極樂の方をもつと考へる、極樂註と云ふのは多くの宗門の人々が、直ちに來世に於て、善い人々の魂によつて受けられると信ずる物である。近代の宗派のうちで、最大のそして最も富んだ宗門——眞宗——の信者は阿彌陀佛の助けによつて、正しい人は死後直に西方淨土——蓮華の極樂——に行かれると信じて居る。私はこの小さい研究に於て一般の信仰、或は單に一信仰に固有の教理の説明をするのではない。

註 私は因果、極樂、後生、——或はその外そのやうな言葉を聞かない日は一日もない。しかし普通の人

で「涅槃」の言葉を使ふのを聞いた事はない、そして涅槃のやうな事について質問して見るといつもその哲學的の意味は分つてゐない事を發見した。それに反して日本の學者は涅槃を實在として、——極樂を一時的の状態或は寓話として話す。

しかし涅槃に到達する事については、高い教理にも色々の相違がある。或人はその最上の福德はこの世でも得られる、或は少くとも見られると云ふ、又或人はこの現在に餘りに腐敗して居るから完全な生涯はできない、ただ善根を積んで、もつとよい世の中に再生する特權を得て、最高の福德に達するその聖さを得る機會を望む事ができるだけだと云ふ。もつと優れた生存の状態を他の世界に置くこのあとの方の意見は、日本に於ける現代の佛教の一般の思想をよく表はして居る。

人間と動物の生存状態は所謂欲界に屬する、——その數が四つある。その下に地獄がある、それについて多くの不思議な事が書いてある、しかし欲界も地獄もその小論文の目的と關係して考へるには及ばない。私共はただ人間界から涅槃までの精神進歩の行程に關係があるだけである、——私共は現代佛教と共に、死生を通る巡禮は、少くとも人類の大多

數に取つては、この地上に於て最高の状態に到達したあとまでも續かねばならない事を假定する。この行程はこの世の状態から、外の優れた世界にまで及んで居る、——先づ六つの欲天から、——それから十七の色界を通つて、——そして最後に四つの無色界を通る、そのさきに涅槃がある。

肉體生活の要求——食物、睡眠、男女關係の必要——は欲界で引續き減ぜられる、——私共が『天』と云ふ言葉で普通理解する物よりも、もつと高い實際界であるらしい。實際そのうちの或境遇は私共自身の世界よりもつと悪まれた行星——もつと有難い太陽によつて温められるもつと大きな天體——に存在すると想像されるやうな境遇である。そして或佛經のうちには事實これを遠く離れた星座のうちに置く物もある、——そしてこの途は星から星へ、銀河から銀河へ、宇宙から宇宙へ存在の限度まで通じて居ると云ふ。

註 この存在の高等な境遇或はその他の『佛土』の天文學的限定は讀者の微笑を促すかも知れないが、實は否定のできない可能性をもつて居る。

四、王天と云はれるこのところの諸天の第一では、生命は年の數ではこの地球より五倍長く續くが、その一年はこの地球の五十年に相當する。しかしその住民は飲食や結婚の習慣

は人間と同じである。そのつぎの天、三十三天では生命の長さが倍になる、同時に外の事情がそれに應じて進歩する、そして下等な種類の感情はなくなる。男女の結合はやはりあるが、しかもクリスト教の或長老が可能になる事を願つたやうな風、即ち、——ただ抱擁だけで新生命を生ずるやうになる。第三天（焰摩天と云ふ）では生命の長さは再び倍になつて、最もかすかな觸でも生命を創造する。第四天或は満足の天（都史多天）では生命の長さはさらに増加する、第五天、或は化樂天では、不可思議な新しい力が得られる。主觀の快樂は意の如く客觀の快樂に變はる、願も思想も創造の力となる、——そして見ると云ふ行爲でも受胎出生の原因ともなる。第六天（他化自在天）では、第五天で得られた力がさらに發達する、そして客觀的快樂に變はつた主觀的快樂は、——實際の物のやうに、——外の人にも贈られ、或は外の人とも分つ事ができる。しかし、一瞬の眺め、——眼の一瞥、——は新しい業をつくる事ができる。

欲界は凡て肉感的生活の諸天である、——美術家と愛人と詩人の夢に答へさうな諸天である。しかし落ちないでそれを通り越す事のできる人は——（そして云つて置くが、落ちる事はむづかしくはない）——超肉感的地帯に入る、そして先づ入るところは有心有事靜慮、或は客觀の諸天である。それには三つある、——銘々にそれぞれ前のより高尚で、——

梵、衆天、梵輔天、大梵天と名づけられて居る。その次に無心無事靜慮と云ふ諸天が来る。それにも三つある、その名にはそれぞれ少光、無量光、光音光或は朗音光と云ふ意味がある。ここでは一時の境遇に可能である最高度の超肉感的歡喜が得られる。その上に離喜靜慮と名づくる境遇がある。そこには喜びも苦しみも、或は何の種類の強い感情も存在しない、ただ靜かな消極的な歡喜、——神々しい平靜の歡喜^註があるだけである。これ等の天よりさらに高いのは離喜樂靜慮の八界である。それは無雲天、福生天、廣果天、無煩天、無熱天、善見天、善現天、色究竟天である。ここには快樂と苦痛、名と形は全くなくなる。ただそこには觀念と思想が残るだけである。

註 讀者はこの考によつて、スメンサー氏の平靜の美しい定義を思ひ出す、——「平靜は無数の色から成立して居るが無色である白色に喩へられる、同時に楽しい又苦しい心の氣分は或光線の割合を増して、他の光線の割合を減する事の結果である光の變化に喩へる事ができる。」——「心理学原理」

こんな超肉感的の界を通りぬける事のできる人は直ちに無色界に入る。これには四つある。第一の無色界では、凡て個性の感覺がなくなる、名と形の思想さへも減して、ただ空無邊識無邊、或は無の觀念だけ残る。第二の無色界ではこの無の觀念も消える、そしてその

代りに識、無邊の觀念が來る。しかしこの識無邊と云ふ平等觀は擬人的である、一種の煩惱である。それで第三界の無色界即ち無所有處では消える。ここにはただ無限の無の觀念があるだけである。しかしこの界も、人の心の働きの助けによつて達せられる。この働きの止む、そこで第四の無色界に達する、——それを非想、非々、想、塵と云ふ。幾分人の心、——業の究極の絶えかかつて居る顛動、——存在の最後の消えかかつて居るもや、——それがここに續いて浮んで居る。それが融ける、——そして無邊の天啓が現れる。自我の最後の靈的の鎖から逃れて、夢を見てゐた佛が、直ちに涅槃の無邊の福德の中に入る。

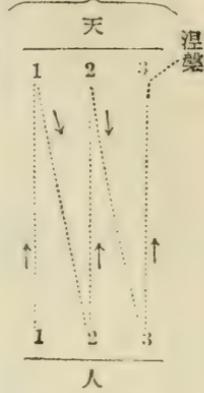
註 涅槃と同意義に「無邊の福德」と云ふ言葉を使ったのは、「彌勒陀王問答」による。

しかし凡ての人は以上に擧げた凡ての界を通過するわけではない、上る力に遲速のあるのは、打ち勝つべき業の性質と、ならびにその人の天賦の徳によるのである。或人は現世から直ちに涅槃に達する、或人はただ一度新しい生れ變りのあとで、或人は二回三回幾回となしに生れ變つたあとで、同時に多くの人はこの世からすぐに超肉感的諸天の一つへ上る。こんな人は超と云はれるが、——そのうちで最高級の人は死後直ちに男として或は女

として涅槃に達する。超には二大別がある、——不還註と還註である。時として還は長い退歩の性質を有する事がある。そして世界の成立の佛教傳説によれば、最初の人々は光音天から落ちて來た人々であつた。進歩の全體の教理に關する著しい事實は、その進歩は（甚だ珍らしい場合を除いて）直線に進む物とは考へられないで、波狀に進む物、——精神的運動律によつて進む物と考へられる。これは還が涅槃に到達し得る色々の短い進路に關する不思議な佛教の分類で例證される。この短い進路は同と不同に分けられる、——前者は天と下界とに生れ變る數の同じ物、後者は不同な物である。この中間の階級には四通りある。日本の友人は私のためにつぎの表を作つてくれた、それによればこの問題が明瞭になる。

註 「大般涅槃經」にこの界に達した婦人の例がある、——「阿難陀よ、樂陀尼はこの世に人々を結びつける五つのきづなを破つて、最高の天に住む事になつて、——全くそこへ移つて、——そこから再び歸りぬ事になつた」

三つの同じ
生れ變りに
よつて天か
ら涅槃に達
する



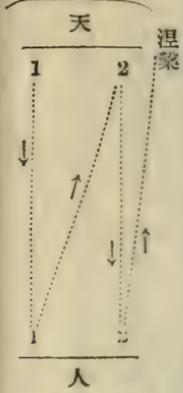
三つの同じ
生れ變りに
よつて人間
界から涅槃
に達する



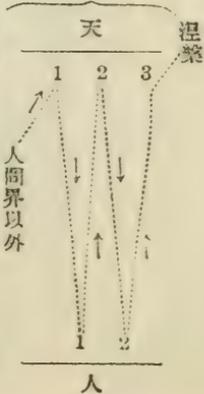
二つの同じ
生れ變りに
よつて天か
ら涅槃に達
す



二つの同じ
生れ變りに
よつて人間
界から涅槃
に達する



三つの不同
の生れ變り
による



三つの不同
の生れ變り
による



二つの不同
の生れ變り
による



二つの不同
の生れ變り
による



これは空想的に見えるかも知れないが、凡ての進歩は必ず律動的であると云ふ眞理と調和して居る。凡ての人はこの大旅行の悉くの階段を通るわけではないが、どんな進路によつてなりとも解脱を得た人は皆、生れ變りの特別の境遇に屬しないが、心的發達の特別の境遇にのみ屬する或種類の才能を得る。これが六神通である、——(一)神足通、如何な障礙あつても、——たとへば厚い壁でも、——どこへでも通れる力、——(二)天眼通、無限の視力、——(三)天耳通、無限の聽力、——(四)他心通、外の人々の心を讀む力、——(五)宿命通、前生を思ひ出す力、——(六)漏盡通、思ふままに涅槃に入る力を有する無限の智慧。この六神通力は先づ聲聞の階級で發達し、それ以上緣覺と菩薩の階級で開展する。聲聞の力は二千の世界に及ぶが、緣覺や菩薩の力は三千の世界に及ぶ、——しかし佛の力は全宇宙に及ぶ。たとへば、この第一の神聖な階級では、いくつかの前生の事を記憶すると共に、同じ數の來生を豫見する力がある、——つぎのもつと高い階級では前生の記憶の數が増加する、——そして菩薩の階級になると、凡ての前生は記憶に現れて來る。しかし佛は自分の前生を悉く見るばかりでなく、これまであつた或は有り得る凡ての生涯、——それから凡ての過去、現在、未來の人々の過去、現在、未來の思想及び行爲を見る。……さてこんな超自然的力の夢は注意の價値がある、それに關する倫理的教訓があるからである、——その教訓

と云ふのは、合理的な物でも考へられない物でも、どの佛教の臆説にも識にも織込んである物、——即ち自己否定の教である。超自然的力は個人的快樂のために使用してはならない、ただ最高の善行のため、——教理の宣傳、人の救のためにのみ使用さるべきである。それよりも小さい目的のために使用すれば、その力がなくなつて、——必ず退歩^註の途につく事になる。感嘆や賞讃を得ようとしてその力を示す事は、聖き事を弄ぶ事になる、それで世尊自らも不必要にそれを見せびらかしたと云つて一度ひどく弟子に非難された事が記録にある。

註一 縁覺や菩薩の増進に迷した人は退歩する事や、大きな誤りをする事はないが、それよりも低い精神の状態ではさうでない。

註二 「毘那耶論」——廣律小部、「東邦聖書」中「ピナヤ本」カリバツガ第五、八、二、にある不思議な話を見よ。

かくの如く一生ばかりでなく、無數の生、——一つの世界ばかりでなく、數へきれぬ世界、——自然の快樂ばかりでなく超自然の快樂、——人格ばかりでなく神格——を拋棄する事は、寂滅と云ふ哀れな特權のためではなく、極樂が興へる物にも遙かにまさる特權のためである。それは相對から絶對へうつる事、——凡ての精神的及び肉體のまぼろしが

消えて全能、全知、無色の光明に入る事の意味である。しかし佛教の臆説では、短い人生の生れ變りや境遇を一度記憶する事ができたら、それが永存性を有する事、——諸佛は凡て一であるとか教へてゐながら、涅槃に入つて居る諸佛も一々識別のできる永存性のある事について幾分暗示を與へて居る。どうしてこの一元論と涅槃に入つた者が、希望によつては下界の人性を再び取る事ができると云ふ色々の證言とを調和させる事ができよう。この點に關して『妙法蓮華經』に甚だ著しい文句がある、たとへば多寶如來が『玉座の上に、全く滅して』坐り、そして『千萬億阿僧祇劫の間全く入滅してゐたが、今この妙法を聽きに來た大聖』として大聽衆に紹介されて、その前で話す事になつて居る。これ等の文句は統一のうちに多様性があると云ふ謎を私共に與へて居る、それは多寶如來及び同時に現れた無數の他の入滅した諸佛はそのただ一人の佛の化身であると云はれるからである。

この調和は多元的、一元論と云はれる臆説によつてできよう、——即ち獨立であつて、しかも互に相たよる意識の群、——或は物質の言葉で純粹な精神の事を云へば、原子的精神究極からできて居る單一實在の臆説である。この臆説は、佛教の文句には教理的には述べてないが、本文にも註釋にも明瞭判然と含蓄されて居る。佛教の絕對の一である事はエーテルが一であるのと同じである。エーテルはいくつかの單位註の集合としてのみ考へられる。

註一、この見地はハルトマンのと非常に違つて居る、ハルトマンは「個體の多元性は凡て現象論の範圍に屬する」と云ふ。(英譯第二卷、二三三) 讀者はむしろガルトンの思想を想ひ出す、ガルトンの説では、人間は「自分自身よりも遙か高い生活の發現に、多少無意識に貢獻する事がある、——『變雜なる動物の個體的細胞はもつき高い種類の人性の發現に貢獻するやうに』(『遺傳の天才』三六一) 今引用した書物の同じページに出て居るもう一つの思想はもつと佛教概念を強く暗示して居る、——「私共は銘々の人間を、超自然的に自然の中へ加へられた物と考へてはならない、むしろすでに存在してゐたが、新しい形となつて以前の狀態の一定の結果として、分離した物と考へねばならない。……私共は又「個體」と云ふ言葉にだまされてはならない。……私共は銘々の個人を両親の源から全然別にならないものとして、——不可知の無限の大洋に於て、普通の状態によつて上げられ、形成される波として、見るべきである」

讀者は佛教の應説では涅槃には個性をも人性をも含蓄してゐない、ただ單に實體、——私共の言葉の意味で、精神體ではなく、ただ聖い意識だけ、——を含蓄して居る事を記憶せねばならない。聖い精神と云ふ意味の「心」は、こんな實體を表はす言葉として日本の書物に使用される。たとへば「大日經疏」にこんな文句がある、——「業の種子が全く燃えつくして滅絶した時、その時真空の佛心が得られる」(「佛教の形而上學では、實體の高い狀態を説明する時にも「空性」と云ふ言葉を使用する事を云つて置く)、「大藏法數」の第五十一卷から取つたつぎの文句も亦興味があらう、——「經驗によつて如來は凡ての形、——宇宙の塵の粒程數へられない無數の形、——を有す。……如來は自ら欲する所へ、或は人の欲する所へ生れ出て、そこで、——生死の大海の上で凡ての衆生を濟度する。どこでも住むところ、見出せば、そ

こゝで體現する、これを産生身と云ふ……佛は法をその體として、空間のやうに、清淨のままである、これを法身と云ふ」

絶對は（日本の教理のどの總合的試みに随つても）諸佛から成立した物としてのみ會得される。しかしこゝで讀者は、西洋の哲學者がこれまで進んで來た思想の門以上に進んで來た事を考へる。一切は一である、——銘々は結合して一切と同一になる。私共は究極の實在は意識ある者の無數の單位から成立して居る事を想像する事を命ぜられるのみならず、——又銘々の單位が永久に外のどの單位とも同一で、又將成態に於て無限である事を信ずるやうに命ぜられて居る。凡ての生物の中心の實在は眞の佛である、それを取り圍む見える形と、考へる我とは業に過ぎない。佛敎は私共の物理學上の原子説の代りに、精神的單位の宇宙と云ふ臆説をもつて來たと云つても多少の道理があらう。それは私共の物理學的原子説を當然非難してはゐないが、こんな言葉で表はせるやうな地位を取つて居る、『諸君が原子と云ふ物は實は結合物、全然無常不確實な集合體であるから、全然實體ではない。原子はただ業である』そしてこの見方は暗示的である。私共は本質や運動の究極の性質については全然知らない、しかし私共は知られたる物は知られざる物から進化して來た事、私共の元素の原子は結合物である事、それから私共が物質と勢力と呼ぶ物は單一にして無

限の不可知の實在の種々の現れに過ぎない事の科學的證據をもつて居る。

註二 この佛教思想の半分はテニヌンの句に實際現はれて居る、——

「原子に於て、内部へ無限に、全體に於て、外部へ無限に」

不思議な佛畫がある、一見したところでは外の日本の繪のやうに熟練なる筆の思ひ切つた運びでできて居るやうだが、丁寧に検査すると、もつと遙かに不思議な風にできて居る事が分る。その姿、その容貌、そのころも、その後光、——それから背景、霞や雲の色や見映までも、——悉く調子や線の微細な點までも、顯微鏡的な漢字の集合でできて、——位地に隨つて着色し、光と影の必要に應じてその濃厚を異にしてある。要するに、この繪は全部經文でできて居る、即ち微細な文字の寄木細工である、——その一字づつもいくつかの畫の結合で、聲と意味とを同時に表はして居る。

私共の宇宙はそんな風にできて居るのだらうか、——想像のできない親和力によつて性質と形狀を有するやうになつた單位の結合の結合の結合のみでき上つた際限のない幻影であらうか、——今は濃い影になつて密集したり、今は戰慄する光と色とになつて震へたり、——いつてもどこでも或洪大なる技術によつて兩極性のある一つの大きな寄

木細工ザイッになるやうに集められるが、それでも銘々の單位がそれ自身で不可解な複雑物であり、そしてそれ自身又象徴であり、文字であり、無限の謎の解けない文句の單一なる文字であると云ふやうにできて居るのであらうか。……化學者と數學者に尋ねて見よう。

五

……『生ある者は皆

その複雑なる形、——天なり地なりに、

暫らくの個性をかりに與へる

精神と肉體の性質の

集合體——を離脱する』——『涅槃經』

凡ての目的論的系統には現代の心理學的分析の試験にたへないやうな考がある、そして一、大宗教の臆設に關する以上の不充大な大意のうちには、疑もなく『形而上學者がいつも出られなくなる言葉の命題の迷路に出没する信仰のいくつかの幽靈』が認められるであら

う。しかし眞理も亦認められる、——即ち倫理的進化の法則、進歩の價、及び凡ての變化を超越せる不變の實在と私共との關係、これ等の達觀が認められる。

人間が征服せねばならないと云ふ道德的進歩の故障の絶大なる事についての佛教の見解は、過去に關する私共の科學的知識、及び將來に關する知覺によつて充分に後援されて居る。これまでの精神的及び道德的進歩は、理性や道德的感情よりも古い遺傳に對して、——原始的野獸生活の本能と肉慾に對して、——絶えず争闘して始めてなすとげられたのであつた。それから、普通の人々は將來數百萬年を経過しないでは、悪い方の性質を脱する事は望まれないと云ふ佛教の教は、一つの理論と云ふよりもむしろ眞理である。ただ幾百萬回の生れ變りによつて始めて、この現在の不完全な状態に達する事もできたのであつた、そして私共の最も暗黒な過去の暗黒な遺産が、今もやはり私共の理性や倫理感を左右する程に強いのである。道德の途への將來の前進の一步一步は、過去の數百萬の意志の集合の努力に反抗して踏み出されねばならない。何故なれば、僧侶や詩人が、高尚な物への足場として使用するやうに教へた過去の自我は死んで居らない、なほ將來一千代程は死ぬらしくもない、——登つて行く足を捉へる力がある、——どうかするとその登る人を原始の粘泥の中へつき落す力さへある。

それから欲望の諸天に關する傳説については、——そこを通つて進む事は勝利を得た徳がすてに得た物を捨てる力によるのだが、——佛教は進化論的眞理の多い不思議な話を私共に與へる。道徳的自己向上の困難は物質的社會狀態の改善と共になくなる事はない、——私共自身の時代ではかへつて増加する。世の中がもつと複雑になり、もつと多様になるに隨つて、——思想も行爲の結果も同じく複雑多様になる。智力の廣大、感性の上品、同情の博大、美感の強い活力、——凡てこれ等は倫理的機會を多くすると共に、又、倫理的危險をも多くする。文明の最高の物質的結果、及び快樂の可能性が増加すれば、自己征服の働さと倫理的平衡の力が必要になるが、これは古い下等な生存状態には不必要で又不能であつた。

無常に關する佛教の教訓も亦現代科學の教訓である、どちらか一方の言葉もそのまま他方の言葉になる、ハックスレイは最近のそして最も立派な論文の一つに書いた、『自然の知識は、益々「天の凡ての唱歌團と地上の家具」とは、朦朧たる將成態から、——太陽と行星と衛星の際限なき生長を通して、——物質のあらゆる變化を通して、——生命と思想の際限なき不同を通して、——恐らく私共がそれについて概念もたない、又、どんな概念をつくる事もできない種類の存在を通して、——彼等が元來生じて來た名狀のできない

潜伏状態へ戻る進化の路に沿うて進む宇宙的實體の數塊の一時的體形に過ぎないと云ふ結論に導く。かくの如く、宇宙の最も明白なる屬性はその無常である事である』^註

註「進化と倫理」

そして最後に、佛教は凡ての結合の不安定、遺傳の倫理的意義、精神的進化の教訓、道德的進歩の義務に關する十九世紀の思想と著しく一致するばかりでなく、又それは私共の唯物論と唯心論の説、造物者と特別の創造に關する説、及び私共の靈魂不滅の信仰を一樣に否む點に於ても亦科學と一致する。しかし佛教は西洋の宗教の基礎その物を拒否するにも拘らず、私共に大きな宗教上の可能性を現示して、——これまで存在したどの物よりも貴い博い科學的信條を暗示する事ができる。人格的神の信仰の消失して行く時、——個人的靈魂の信念が不可能になる時、——私共が宗教と呼んでゐた一切の物から、最も宗教的な心の人も避けるやうな時、——世界的懷疑が倫理的向上心に絶えず増加する重みのやうになつて行く時、——そんな私共の智力的進化の時代に、光明は東洋から捧げられるのである。そこにもつと古いもつと大きな信仰、——不可思議の實在に對して變な擬人論的觀念を有しない、そして靈魂の存在を否定するが、それにも拘らず外の如何なる系統よりも

優れた道徳の系統を教へて、如何なる種類の將來の實際知識も破る事のできない希望を有する大きな信仰、に面して、私共は立つて居る。科學の教によつて更に強くなつたこのもつと古い信仰の教は、數千年間私共がさかさにもてに考へてゐた物である。唯一の實在は一である、——私共が實體と考へた物はただ影に過ぎない、——有形の物は眞實の物でない、——そして肉體は幽靈である。

第十章 勝五郎の轉生

—

これから書き下す事柄は作り物語では無い——少くとも私の作り出した物語の一つでは無い。これは日本の古い一つの記録——或は寧ろ記録類系ともいふべき物を翻譯したのであるが、それにはちやんと署名もしてあれば捺印もしてあり、その上この世紀の初期に溯つての日付さへ記入してあつた。私の友人の雨森氏あめのもりは日本や支那の珍しい寫本をいつも獵あそつて歩く仁ひとで、さういふ珍本を掘出すことにかけては非凡な腕前を持つてをるやうに見えるが、その仁ひとがこの寫本を東京の佐佐木伯爵家の書庫で見出したのである。氏はこれを珍しい本だと思つたので親切にも私にこれを寫させてくれた。私はその寫した書物を臺本としてこの譯をもしたのである。私は本書の附録として書いたところの二三の註釋以外の事柄に關しては何等の責任を持つてをらぬ。

この譯文は讀み始めは多分面白味が讀者にうつつて來ぬと思ふが、それを忍耐して終り迄全部通讀して貰ひ度い。と言ふのはこの書は人間の前生追憶の可能であることを私達に教へてをる以外に多くの事柄を暗示してをるからである。例へば既に消え去つて了つたところの封建時代の日本に關して、或はこの國の昔の宗教——假令それが高尚な佛敎で無かつたにせよ、西洋人の目から見て容易に真相を捕へることの出來なかつた物のその幾部分かをこの記事によつて窺ふことが出来る——換言すれば日本の人達が前生と更生とに關して一般に抱いてをつた思想がこの書の中に能く現れてをる。故にこの事實の上に立つて觀察すればお役所の吟味が正確であつたこととか、或は證據として認められた事柄が信ずべき筋の物であつたとかなかつたとかいふことは當然小さな問題となつて仕舞ふ。

二

(一) 多聞傳八郎の調書寫

私の地内の百姓で日今武藏國多摩郡中村に住んでゐる源藏と申す者の二男で當年九歳になります藤

五郎の一件は次のやうな次第であります。

昨年しんねんの秋の間のことでありましたが、或時、源藏の子、前記勝五郎がその姉に彼の前生ぜんせいのことや轉生てんせいのことを物語つたさうですが、姉はそれを子供の出鱈目な話だと思つて注意を拂はなかつたのです。併しその後勝五郎は同様の物語を幾度も幾度も繰返すので姉も初めて不思議なことと思つて終にこれを両親にも告げたのであります。

去年十二月の間に源藏自身がこの事柄について勝五郎に質ねましたところがそれに對して勝五郎はかう公言したのであります。

『私は前世では武藏國多摩郡の小宮様の領内程窪村ほどくぼむらの百姓久兵衛とかいふ者の子でありました——

『久兵衛の子と生れたこの私勝五郎は六歳の時に疱瘡を病んで死にました——

『それから後源藏の家に轉生うまかへしたのであります』

この話は嘘のやうでしたが勝五郎は餘りに委しく餘りに明かにその物語の事情を繰返して話しますので、その村の庄屋や長老等おらたちはこれを形式かたの如く調べてみました。ところこ

の事が早速世間に廣く知られたので伴四郎とかいふ者の家族の耳に入りました。伴四郎は程窪村に住んでをつた者であります。彼は私の地内の百姓、前記源藏の家へと參りました。そしてこの少年が彼の前世の両親の肉體からだの容子や顔の特色等おつこに關してかねがね話してゐた事柄や、或は又、彼が前生で住んでゐた家の様子等について物語つてをつた事柄が皆一つとして事實で無い物は無いといふことを知りました。そこで勝五郎は程窪村の伴四郎の家に引取られました。村の人達は勝五郎を見て藤藏さんをつくりだと申しました。藤藏といふのは餘程以前に、然かも六歳の時に死んで仕舞つた子供であります。その時以來この二家族は折さへあればお互に往復してをります。他の隣接村の人達はこれを傳聞したものと見え、勝五郎の顔を見に来る人が毎日毎日絶えないといふ有様であります。

以上の事實に關する證言が私の地内に住んでをる人達に依つて私の面前でなされましたから、私はその源藏なる男を私の家へ呼出して調べてみました。私の訊問事項に答へた彼の言葉は他の人達の述べた前記の口供事項と何等矛盾もつするところはありませんでした。

この種類の評判は世間に於て人々の間にひろがることは時々あるものであります。このやうな事柄は信ずることが困難であるのは固よりでありますが、私はただこの差當つての

事件を御耳に入れまして、私の怠慢の罪を免れ度いばかりに御報告申上げる次第でありませす。

〔署名〕 多聞傳八郎

文政六年（一八二三年）四月

(二) 泉岳寺の僧貞金に與へた和直の書狀寫

多聞傳八郎の調書が志田兵右衛門様の手で寫されて、それが私の掌中に入つたので私は好都合でありました。私は今それを貴僧にお送り致すことの出来るのを光榮と存じてをります。貴僧はこの調書寫本と、それから貴僧が先般私に見せて下さいました觀山様の御書とを一緒に、永く御保存相成ることは、貴僧にとりて御利益のことと思ひます。

〔署名〕 和 直

六月二十一日（他に年代の記入無し）

(三) 松平觀山から泉岳寺の僧貞金に與へた書狀寫

この書面と同封て勝五郎轉生の物語書をお送り致します。この書は私が通俗的に書いてみたもので、その趣旨はかの佛教の難有い御教へを信じない人達を沈黙させる爲にはこの書が効果が多いと思つたからであります。言ふ迄も無くこれは文學書としてはつまらぬ作であります。私が今これを貴僧にお送りするのは、かういふ見方でこれを御覽下さつた場合にのみ御興味を引くことが出来得ると思つたからであります。併しこの話其物について申せば誤謬の點は一つもありません。と申しますのは私がこの話を勝五郎の祖母の口から直接に聞いたからであります。これをお讀みになつたら何卒私に御返却を願ひます。

〔署名〕 觀

山

二十日(他に如何なる年代の記入も無し)

勝五郎轉生の話

(四) 僧貞金が序じしがに書いた説明書

これは一つの眞實の出來事を書いた書である。その證據には編者松平觀山様がこの事柄を委しく取調べる爲に本年三月二十二日親しく（中野村に）御出馬になつてをるてはありませんか。觀山様は勝五郎を一瞥なされた後にその祖母に凡ゆる委しい事をお質ねになつた。そして祖母の答へるまゝに委しくお書きになつた。

その後この觀山様は辱け無くもこの四月の十四日に是所（この寺）へお出でになつて、前記勝五郎の家族訪問の事柄をその貴い御口からお話になつた。剩へ同月二十日には前記の書を私に讀むことをお許しになつた。て私はこの御厚意に甘えて時を移さずこれを寫した。

〔署名〕 貞金僧 （書きは、ん即ち筆で個人用の署名印を書いたものと寫し）

泉 岳 寺

文政六年（一八二三年）四月二十一日

【寫し】

(五) この二家族の人達の名前

源藏の家族

勝五郎——文化十二年（一八一五年）十月十日生、文政六年（一八二三年）當九歳、武藏國多摩郡中村、谷津入に住める百姓源藏の二男——この村は多聞傳八郎の所有地（多聞の屋敷は江戸根津七軒町にあり）に在つて柞木管^{ひざき}内。

註 西洋人が記憶すべきことは日本では生れたばかりの子供は一歳として計算されるのが當り、あるといふ事實である。

源藏——勝五郎の父、姓は小矢田氏、文政六年當四十九歳、貧のため日夜籠を造つて江戸で商賣す、江戸居住中の旅宿は馬喰町相模屋といふ、宿屋の亭主は喜平と呼ぶ者。

せい——源藏の妻、勝五郎の母、文政六年當三十九歳、嘗て尾張様に事へたことのある弓術家村田吉太郎と呼ぶ武士の女、せい十二歳の時本田大之進殿の家に下女となつたと傳云、十三歳の時父吉太郎何かの理由で尾張様から永のお暇がでて浪人となつた、そして文化四年（一八〇七年）四月二十五日七十五歳で歿した、彼の墓は下柞木村しもつゆきの永林寺といふ禪寺の墓地にある。

註 浪人とは主君を持たぬ流浪の武士を云ひ、一般にこの徒は自暴自棄の甚だ危険な者共であつたが、中には立派な人物もあつた。

つや——勝五郎の祖母、文政六年當七十二歳、若い時松平隠岐守殿（大名）の御殿女中を勤めた。

ふた——勝五郎の姉、本年十五歳。

乙二郎——勝五郎の兄、本年十四歳。

つね——勝五郎の妹、本年四歳。

伴四郎の家族

藤藏——武藏國多摩郡程窪村で六歳の時に歿した、こゝは江戸下谷新橋通あらはしに屋敷を持つてをる中根右衛門の所有地、小宮管内……（藤藏）は文化二年（一八〇五年）に生れ文化七年（一八一〇年）二月四日四刻（午前十時）頃死す、病名は疱瘡、前記の程窪村の丘上の墓に葬る、菩提寺は三澤村の醫王寺、宗門は禪宗、去年文化五年（一八〇八年）藤藏の爲に十三回忌にの法會營まる。

註 佛教では亡者の爲に一定の年毎に法會を營むことになつてゐて、それが次第に永さが多くなつて來て死後百年目に至るやうに定めてある。十三回忌とは死後十三年目の法會である。第十三回といふ數は前後の意味から考へて死者の死んだ年が第一年目として算へられてゐることを讀者が了解しなくてはならぬ。

伴四郎——藤藏の養父、姓は鈴木、文政六年當五十歳。

しづ——藤藏の母、文政六年當四十九歳。

久平——（後に藤五郎）、藤藏の實父、原名は久平、後藤五郎と改名す、文化六年（一八〇九年）藤藏五歳の時四十八歳にて死す、彼の代りに伴四郎入婿。

註 入婿とは兩親と同棲してをる女の第二番目の夫となること、但し養子。

子供、二男二女——何れも藤藏の生母と伴四郎の間に出來た子。

(六) 大名松平觀山殿が通俗文で書かれた物語の寫し

去年十一月の或日のこと、勝五郎が姉のふさと出で遊んでゐた時このやうなことを質ねた、

『姉さん、貴女はこの家へ生れて來る前に何所ををつたの？』

ふさは答へた、

『生れる前にどんなことがあつたかどうして分るものか』

勝五郎は驚いた様子で叫んだ、

『では姉さんは生れる前に何があつたか思ひ出せないの？』

ふさは問うた、

『お前さんがそれを覚えてをるの？』

勝五郎は答へた、

『覚えてをりますとも、僕は程窪の久平さんの子でその時は藤藏といふ名であつたんだ

よ、姉さんはそれを皆知らないの？』

ふさは言うた、

『あらまあ！何を言ふんですか、お父さんとお母さんに告げるわ』

勝五郎は直に泣きだした。そして言うた、

『姉さん告口しないで頂戴、お父さんとお母さんに告口したら大變だ』

暫時の後ふさは答へた、

『よし、よし、この度だけは言はないで置きませう、でも復こんどこのやうな善くないことを

少しでも言うたらその時こそは告口するよ』

その日以後二人の間に喧嘩が持上る毎に姉は弟を嚇して『いゝわ、いゝわ、——あの事をお父さんとお母さんに告げてやるから』と言つてゐた。これを言はれると勝五郎はいつも姉に降参して了つた。ところがこれが幾度も起つたのでたうとう或日のこと兩親はふさが弟を嚇してをるのを立聞きして了つた。そこで兩親は勝五郎が何か善くない事をやつたに相違ないと思つて、それを何とかして知り度いと考へた末ふさにこの事を質ねたのである。ふさは終に事實を明かした。これを聽いて源藏夫婦も勝五郎の祖母も何といふ不思議な事だらうと愕いて了つた。そしてその結果彼等は勝五郎を呼んで最初は甘言で賺し次には嚇して、一體お前は、どういふ意でこのやうなことを言ふのだからと質ねた。

勝五郎は躊躇した後かう答へた。

『残らず申します、僕は程窪の久平さんの子でありました、そしてその頃の僕のお母さんはおしづさんといふ名でありました。僕が五歳の時、久平さんは死んで、その代りに伴四郎さんといふ男が養子に来て僕を大變に可愛がつてくれました、併し僕はその翌年丁度六歳になつた時に疱瘡にかゝつて死んで了ひました、それから三年目に僕はお母さんのお腹に宿つて復生れて來ました』

これを聽いて兩親も祖母さんも大に驚いた。そして彼等は程窪の伴四郎といふ者について出來得る限り委しく調べて見ることにした。併し何といつても彼等は生活の糧を得ることに毎日追はれてゐて、他の事柄の爲に殆んど時間を用ひることが出來なかつたので直に彼等の目的を遂行しようとしても駄目であつた。

勝五郎の母せいは今はその女兒つね——四歳註一の——に夜な夜な乳をくれなくてはならなかつた。それが爲に勝五郎は祖母のつやに抱れて寝た。彼は時々寝ながらお祖母さんに話すことがあつた。或夜彼が非常に打寛いだ様子で何事でも彼女に話しかけるといふ氣分になつてをつたので、お祖母さんは彼にお前が死んだ時にどんな事があつたのか私に教へてくれぬかと言ひ出した。さうすると彼はかう答へた。——「四歳の時迄僕は何でも記憶してゐたが、それから後といふものはだんだん物忘れするやうになつて、今では澤山の事を忘れてをる。それでも未だ忘れてをらぬ事は抱痞にかゝつて死んだことだ。それから未だ覚えてをることは壺註二に入れられて丘の上に埋められたことだ。丘にゆくとその所の地面に穴が一つ造られた。そして其所へ來た人達はその穴の中へ私の入つてをる壺を落した。ぼんといつて落ちたよ——あの音だけは今でも能く覚えてをるよ。それからどうしたのか知らぬがともかく僕は家へ戻つて僕の枕註三の近くを離れなかつた。暫くすると或る老人——お祖

父らしい老人——が来て僕を連れ去つた。歩いてゆく時何だか飛行でもやるやうに虚空を突切つて走つた。二人が走つた時は夜でも晝でも無かつた事を僕は記憶してをる。それは常に日没時の様であつた。暑くも寒くも無く亦お腹もへらなかつた。二人は餘程遠く迄往つたやうに僕は思つてをるが、それにしても僕は僕の家で人々の話してをる聲をいつも聽くことが出来たよ、幽かではあつたが——そして僕の爲に念佛の聲が上げられてをるのが聞こえた。亦家庭の人達が佛壇の前に温い牡丹餅を供養してくれると僕はその香氣を吸ひ入れたことも記憶してをる——お祖母さん、佛様に温い食物を供へることを忘れてはいけません、お坊さんにもさうですよ——これは大きな功德になるんだよ——それから、これはつい思ひ出すだけのことであるが、その老人は何か迂廻した道を経て僕をこの場所へ連れて來たやうである——僕達の通つたのはこの村の向うの所だ。そして僕達は是所へ來た。彼はこの家を指差して僕に言うた——『さあ是所て轉生するんだよ、——お前は死んでから三年目になるが今この家で生れかはるることになつてをる、お前のお祖母さんに成る人物は大いさう親切だ、だから其所でお腹に宿つて生れて來るのはお前の幸福さ』かう言つて了うと老人は消え去つた。僕はこの家の入口の前で柿の樹の下で暫く立止つてゐた。それからいよいよ家に入らうとすると家の内側から話し聲が聞こえて來た。誰れかが言う

た、「お父さんの収入が餘りに少いから、お母さんが江戸へ奉公に出掛けなくてはならぬだらう」。僕は『これではこの家へ入らないことにする』と思つた。そして三日間庭の中に留つてゐた。三日目になると結局このお母さんが江戸に出掛けないことにした。そこで私はその夜雨戸の節孔から家の中に入つた——その後三日間といふものは竈の側にとどまつてゐた。そしてその後初めてお母さんのお腹に入つた——私は全く少しの苦痛も知らずに生れて來たことを覚えてゐる。——お祖母さん、「これはお父さんとお母さんに話してもいゝがその外の人には誰れにも話さないで下さいよ』

註一 日本の貧しい階級では西洋であるならば當然乳離れをさせる年齢に子供が達した頃でも容易に乳離れをさせないで大きくなる迄乳をくれてをる、併しこの本に書いてある四歳は西洋の算へ方による三歳よりも著しく少いことになる。

註二 死者を大きな壺に納めて埋葬する風習は日本の遠い昔から見られる例である、骨壺は普通に赤い土器である、所謂かめといふものである、かういふ壺は今日でもなほ用ひられてをる、但し今日では死者の大多數は西洋で知らない一種特有の形をした木棺の中に納められてをる。

註三 この意味は枕に頭を横へて寝るといふつもりでは無くして枕のあたりをさまよふとか、或は昆蟲でもとまる様にその上に休むといつた風のこゝろを意味するものである、肉體の無い靈魂は普通に家の家根の上

に体むといはれてをる、次の文章に述べてある老人の幽霊は佛教よりは寧ろ神道の思想であるらしい。

註四 佛教のお禱りの句は南無阿彌陀佛を繰返すことである、念佛は阿彌陀宗——真宗——以外の多くの佛教宗派で繰返すものである。

註五 牡丹餅は米の飯に砂糖を混じて造つた一種の菓子。

註六 日本の佛教文學の中にはこの種の忠告は陳腐となつてゐる、こゝでいふ佛様の意味はこの子供の心では佛其者を指差すのでは無くして寧ろ死者を愛した人達が後生の幸福を希ふつもりで佛と呼んでゐる人達の靈魂を指差したものである、これは恰も西洋に於て死者を呼んで天使といふことが時々あるのと同様である。

註七 日本の臺所に於ける料理場である、西洋のかまどと非常に異つた意味を持つことがある。

註八 こゝで私は原文の二句を省くに如かずと思つた。それは西洋趣味にとりて餘りに露骨だと思つたからである。併しその句は興味が無いといふ譯では無い、省略した句の意味をいふならばこの子供は母親のお腹の中に居つてさへ慎重な態度で動作し、特に孝道を守つてをつたといふことを書いてをるに過ぎぬ。

祖母は勝五郎が彼女に話してくれた事柄を源藏夫婦に語り聞かせた。そしてそれ以後勝五郎は少しも恐るゝことなく自由に彼の前生話を兩親にしてゐた。彼は屢々兩親に『程窪へ行き度い。久平さんのお墓參りをさせてくれ』と言つてゐた。源藏は勝五郎が變な子だから遠からず死ぬかも知れぬ、だから伴四郎といふ者が程窪に事實居たかどうかを迅く調

べてやつた方がよからうと考へた。併し彼はこのやうな事（このやうな事情の下でか？）を爲るのは男としては輕率でもあり亦出過ぎたことにも見えると考へたから自分からすゝんでこの調べを實行することを欲しなかつた。そんな理由で彼は程窪へ自分で行くことは止めてお母のつやにこの年の一月二十日に其所へ孫を連れていつてくれと頼んだのである。つやは勝五郎を連れて程窪へ行つた。二人が其村へ入ると彼女は手近の家を指差して勝五郎に『どれなの？この家？あれ？』と問うた。勝五郎は『否、もつともつと遠くだよ』と答へた。そして彼女の前に立つてさつさと急いだ。やつと一軒の住家に着いたので彼は『これなんだよ！』と叫んだ。そしてお祖母さんの來るのも待たないで其家へ走り込んだ。つやは彼の後について家に入つて、この家の主人の名を問うた。問はれた者の一人は『伴四郎の家だよ』と答へた。お祖母さんは更に伴四郎の妻の名を質ねた。答へは『しづ』といふことであつた。次に彼女はこの家に藤藏といふ子が生れたことがあつたかと問うた。『あるよ、併しその子は六歳の時に死んで仕舞つて今は十三年目になる』といふのがその答へであつた。

この時つやは初めて勝五郎が今迄事實を話してをわつたことを知つて溢れ落ちる涙を禁ずることが出来なかつた。彼女はこの家の皆の人達に勝五郎が彼の前生を覚えてをわつて彼女

に話してゐたことを語り聞かせた。これを聽いて伴四郎夫婦は非常に驚いた。彼等は勝五郎を撫でて涙にかきくれながら、勝五郎は昔六歳の時に死んだところの藤藏として美しくつたよりも、今の方がもつと遙に美しいなぞと言つてゐた。そのやうなことのあつた間勝五郎は周圍を見廻してゐた。そして伴四郎の家の向側に在る煙草屋の屋根を見て其所に指差しながら『あれは彼方になかつたんだが』と言つた。亦こんなことも言つたのである、『彼方の樹木はあんな所に無かつたが』と、是等は悉く眞實であつた。こんな譯で伴四郎夫婦は終に心の底から疑念を棄てて仕舞つた（我を折つた）

同日につやと勝五郎は中野村の谷津入に戻つて來た。この後源藏はその子を幾度も幾度も伴四郎の家に遣つて彼の前生の實父久平の墓に參詣することを許した。

時としてはこのやうなことを勝五郎は言ふのである——『僕は佛様だ、だから何卒僕を大切にして下さい』亦お祖母さんに『僕は十六歳になると死ぬよ、でも御嶽様が僕に教へて下さつたことによると死ぬことは何でも無いさうだ』と言ふことも時々ある。兩親が彼に『お前は出家する心はないか』と問ふと彼は『そんな氣は無いよ』と答へる。

註一 ののさん又はののさまは子供の用ひる言葉であつて亡者の靈、即ち佛様のことである、神道では神

様といふ。の、さん、を拜むといふことは神々を祭るといふことで兒童の用ひる言葉である、先祖の靈魂はの、さんになる、即ち神道の思想によれば神になる。

註二 御嶽様を引合ひに出したことに關しては特に興味が多い物がある、併しこれにはやゝ長い説明を必要とする。

御嶽おんたけ又は、み、た、けは信濃國の一靈峰の名である、巡拜人の靈場として崇められてをる所だ、徳川將軍家の時代に律宗派の一心と呼ぶ僧侶がこの山に參詣した、彼は彼の生れた場所——江戸下谷坂下町——に戻つてから新しい宗教を説き始めた、そして彼は御嶽山に參詣してなつた間に修め得たといはるゝ法力を以て奇蹟を行ふ者として大に名聲を上げた、將軍は彼を危険な人物と見做し八丈島に流した、彼は其所へ流されて數年を送つた、後許されて江戸に還りあづま、教といふ新しい宗派を興した、これは神道を做ねた佛教であつた——即ちこの宗教の信者が特に崇めてゐた神は佛の權化としての大國主命及び少彦名命であつた。開闢かいびやく神話にこの宗派のお祈禱いのりであるがそれにはかう書いてある——「神聖な物ありその名を不動といふ、不動なれども動く、又形無し、形無けれども自ら形をとりて現はる、覺知し得ざる神聖の體たり、天地にありては神かみと呼ばれ、萬有の中にありては靈と呼ばれ、人間にありては心と呼べる、天も、四海も、三千世界の大世界も、この唯一無二の實在から生れ出たものである、即ち唯心から三千大千世界の形が出て來る」

文化十一年（一八一四年）に下山應勳といふ、もと、江戸、淺草、平衛門町の油商人であつた男が一心の教法に基づいて巴講といふ宗教團體を組織した、この派は將軍家滅亡の時迄榮えてゐたが、幕府の滅亡

した時、混合の教義を敬へたり或は神佛兩教を混同したりすることを禁止する法令が發布された、下山應助はその時御嶽教といふ名の下に新しき神道一派を興すことの許可を願ひ出た——御嶽教は通俗的には御嶽教と呼ばれてゐる、そしてその願ひは明治六年（一八七三年）に許されたのである、應助は其後不動經といふ神輿を神道の祝詞に改作し、之に名づくるに神道不動祝詞の名を以てした、この宗派はなほ穢いてゐる、その主なる寺院の一は東取の私の現住宅から約一哩にある。

御嶽さん（又は様）はこの宗派の崇めてゐる神の通俗的名稱である、即ち實際は御嶽又は御嶽の峰に住んでゐる神のことであるが、それは亦時としては御嶽の神の御告げによつて或は御威力によつて實相を啓示する高僧を指差すことにも用ひられる、勝五郎の言うた御嶽の意味は其頃（一八二三年）の高僧、即ち應助自身を指差したことであるのは殆ど十中八九迄明かである、何故ならば應助はその當時巴教の教主であつたから。

村の人達は彼を最早勝五郎とは呼ばないで程窪小僧（小僧とは僧侶にならうとして修業する若者のことである、併しこれは使走りをする者や或は時としては下僕の年若き者を呼ぶに用ひられたこともある、恐らく昔は男の子供は頭を剃つてをつたからだ、私はこの文の場合に於ての意味は佛敎の僧にならうとしてゐる若者といふことだと考へてをる）と渾名をつけた。誰れかが彼に會はうとして家を訪れると彼は直に羞しがつて奥へ走つて隠れ

て了ふ。だから彼とめん、と向つて話をするには出来ぬ。私はこの話を彼のお祖母さんから聞いたままに書き下した。

私は源藏、その妻及びつやにお前さん達は何か功德をしたことがあるんだらうと質した。源藏夫婦は別にこれといった善行は行つた覚えは無いが、ただお祖母さんのつやが毎日朝と晩には必ずお念佛を繰返して唱へることにしてをる、そしてお出家さんや巡禮者が戸口に來れば二文もん（當時にありては最も小さな貨幣で一仙の十分の一に相當す、今日厘といふ銅貨があつて中央に四角な孔が一つ明いてゐて、表面に支那文字のついでをるのがあるが文はそれと略々同じものである）施すことにしてをつたと答へた。併しつやは是等の小功德の外に特に目立つた大善事を行つたことは無かつたのだ。——（勝五郎轉生の話はこれで終つた）

(七) 譯者の註

以上は『椿説集記』と題した寫本から採つた物である。年代は文政六年四月から天保六年十月（一八一三年——一八三五年）迄の間のことである。寫本の終に……『文政年間から天保年間に至る……』所有

主、南仙波、江戸、芝、車町』とある。又その下に『西の窪、大和屋佐久治郎より購入、明治二年（一八六九年）廿一日（？）』と書いてあつた。これに據つて考へて見るとこの寫本は南仙波と呼ぶ者が一八二三年から一八三五年の末に至る十三箇年間親しく耳に入れた話や、或は手に入れた寫本等からこれを寫し出したものと見える。

三

今、誰れても私の信、不信がこの事柄に何か關係でもあるかの如く考へて、お前さんが一體この話を信じてをるのかねと質問する者があるとすれば、それは恐らく理由のたぬ無理な質問だと思ふ。前生を思出すことが出来るかどうかといふ問題は、追憶する物は何であるかといふ問題に據依してをることと私は考へてをる。若しそれが私達各人に宿つてをるところの無限性の全我といふものであるならば、私は『佛本生譚』の全部を苦も無く信ずることが出来る。これに反してかの感覺や慾望の經緯たてよのじで織りみだされてをるところの妄我といふものに就いて考へるならば、私が夢に見たことのあるものを話せば私の考が最も能く現れることになる。これが夜の夢であつたか或は白晝の夢であつたかといふ問題は何人にも關係の無いことだ——それはただ一場の夢であつただから。

第十一章 環中流轉相

私達の一身上の苦痛や歡樂は言葉で實際的に發表することは出来ぬものである。これをその儘の形で告げることは全く困難のものである。ただこれを惹起するに至つた事情を鮮明に描寫して、同情のある人の心に同種類の性質の感情を幾分なりとも喚起させることが出来得るのみである。併し若しその苦痛なり歡樂なりを惹起した事情其物が全然一般の間經驗と没交渉の性質の物であるならば、如何にこれを表現したところで、それが惹起したところの感じ其儘の物を充分に他人に知らしめることが出来ぬ。故に私は私の前生を見る苦痛の實感を語らうとしてもそれは見込の無い企である。私の言ひ得ることは各個人に起り來る苦痛は如何にこれを結合してみても、このやうな苦痛——無數の生命の錯綜した苦痛とは別種の物であるといふことである。それは言はば、私の凡ゆる神經が伸されるだけ伸されて、百萬年を通じて織られに織られた感覺の或る驚くべき織物に成りあがつた様

なものであつた。——又それは、言はば、その無限無量の經緯たよの絲の全部が、その凡ての震へる絲にわたつて、過去の深淵の中から私の意識の中へ名の無い或る悽愴の物を——人間の頭腦の中に入れるには餘りに大き過ぎる恐怖を注ぎ込んでをるやうである。と言ふのは私は過去の世を眺めた時私自身が二倍、三倍、乃至八倍になつたからである。——私は等差級數によつて増加した。——私は百となり千となつた。——千の恐怖を以て畏れた。——千の苦悶を以て失望した。——千の惱を以て戰慄した。併し如何なる歡樂も知らなかつた。一切の快樂は霧の如く又夢の如く現れたが、ただ苦痛と恐れのみは事實であつた。——然かもいつも、いつもこの苦とこの恐怖のみが増していつた。感覺が消滅したその刹那に一つの神聖な或者が俄然として現れて來てその恐怖に満ちた幻影を滅し、ただ一つの實在の意識を私に再び興へてくれた。このやうに忽然として複雑の我がより縮小して單一の我に復歸することの心地よさは到底言語に盡し得ざるものがある。嗚呼あの廣大無限の我がが潰崩して個性の宣目的、健忘的麻痺性に還るその有様の心地よさよ！

かくの如くにして私を救濟してくれた神聖な者の聲は言うた、『他人にも——同じ状態に在るところの他の人達にも彼等の前生について或物を見ることが許されてあつた。併し

彼等の中の何人といへども遙に遠いその前生を見渡すことに耐へ得なかつた。凡ゆる前生を見渡すことの出来る力は、我の束縛から永劫に脱離した人の方に與へらるゝ力である。かくの如き力を所有してをる人は迷ひの外に住するのである——形と名を脱却して住するのである。故に苦痛は彼等に近寄ることが出来ぬ。

『併し汝は迷ひの中に住してをるが故に佛陀といへども汝にただ手近の道以外に後を顧みる力を與へ得ぬのである。』

『汝は依然として美術、詩歌、音樂の戲事に迷はされてをる——色と形の迷ひに——淫らな言葉、淫らな音に迷はされてをる。』

『自然と呼ぶ幻影——空虚と陰影の別名である——は依然として汝を欺き汝を迷はし、且つ物慾を熱愛する夢を以て汝の心を満す。』

『然れども眞に識を愛する者はこの幻の自然を好愛してはならぬ——晴れたる天空の耀映を歡喜してはならぬ。——海の眺めにも——水の流るゝ音にも——山、林、谷の形にも——是等の物の色に於ても歡喜悅樂を見出してはならぬ。』

『眞に識を愛する者は人類の事業を企圖することに、或は人類の會話を聞くことに、或は人類の感情的遊戯を觀察することに興味を持つてはならぬ。是等の凡ては煙の棚引ける

が如く、蒸氣の薄くかがやくが如きものである——凡ては一時的で——凡ては幻影である。

『人類が高尙崇高と呼んでをる快樂は淫逸の大なる物と、虚偽の巧妙なる物に外ならぬ——利己の心は形のみ美しく見ゆる有害の花に過ぎぬ——凡ては慾情の古き粘土に根を張つたものである。晴れたる日の耀映を悦び——山の色の日輪の廻轉によつてその色を變ずるを見て樂み——波のうねりの消えてゆく跡を見、夕陽の消えてゆくのを見——草木の花の中に魅力を見出すことは皆これ感覺の迷ひである。亦人間の行爲の大なるもの、或は美なるもの、或は英雄らしきものを見て歡喜することも等しくこれ感覺の作用である——何が故にと問へば、かくの如き歡樂は人類がこの憐れむべき世界に於て淺間敷くも手に入れようとして努力するところの事物を空想することの快樂と同一の物であるが故である。人類の欲して止まざる物とは何か、東の間の愛と名聲と榮譽——是等の凡ては東の間の水泡の如く空虚である。

『天、太陽、大海——山、森、平野——美しく輝ける物、形をなせる物、色ある物の凡ては——幻である。人間の感情、思想、行爲——上下貴賤は何れに考へたにせよ——永久の目的以外の爲に考へられ又は爲されたところの一切の事柄は夢から生れた夢であつて、空虚を生むより外に何事をも爲すことが出来ぬ。明かな目には一切の自我の感じは——一

切の愛憎、歡苦、希望乃至悔恨は等しく陰影である——老少、美醜は其の間に差別が無い——生死は一にして同、空間と時間は不斷の影遊びの舞臺乃至順序としてのみ存在するものである。

『時の中に存在する凡ての物は消滅しなくてはならぬ。目覺めた者には時も無く所も無く變化も無い——夜も無く晝も無く——暑も無く寒も無く——月も無く季節も無く——現世も過去も亦未來も無い。形及び形の名は等しく無である。知識のみは事實である、故に知識を得る者にとりて宇宙は實體の幽靈と映ず。併しかう書いてある——「過去と未來に於て時に打勝つた者は卓越した純知識の人たらざるべからず」と。

『かくの如き知識は汝の有する物では無い。汝の日には影は依然として實質と映じ——闇黒は光明と寫り——空虛は美として映じてをる。故に汝の前生を見ることは汝に苦を與へるに過ぎぬ』

私は問うた——

『では、若し私が起原に溯つて——時といふものゝ發端迄溯つて觀察するだけの力が見出されたとしたならば——私は果して宇宙の秘訣を讀破することが出來得るだらうか』

答は與へられた、『否、その祕訣を讀み得るものは無限力のみである。若し汝は汝の有つてをる力以上に遙に遠くの過去を眺め得たにしても、その目に映じた過去は汝に未來となつて映じ來るであらう。その時汝はなほこれに耐へ得たならば、その未來は轉廻し來つて現在となるであらう』

私は驚きながら私話した、『でもそれは又何が故に？——圓とは何か？』

答はかうであつた、『圓とは別な物に非ず——圓とは生死の大きな幻の渦卷に外ならぬ——無知の徒は彼等自身の考へと行爲によりてこの幻の渦に身を墮して其所に留つてをる。併しこれは時の中に於てのみ實在を有つてをる。然かも時はそれ自身に於て迷ひである』

異國情趣と回顧

横濱の（前米國海軍）

ドクトル・シー・エッチ・エッチ・ハウルへ

かはらざる友情の記念として

此卷を成す諸篇はその一を除く外すべて初めて世に現はれる。此書の第二部を形つくる小論文、むしろ幻想は東西兩半球に於ける經驗を叙述する。されどこれに共通の表題を附けたるは、これ等の文が何故にその事實を離れて編せられたるかの説明となる。何等かの眞に科學的なる想像には、進化的心理學の或る教訓と東洋の信仰の或る教訓、——特に一切の有情は羯磨カルマにて一切の所有は唯だ行と想との所現に過ぎずとする佛教の教義、——との間に存する不思議なる類同は、私の『回顧』の集録よりも層一層有意義なるものを暗示するやも知れぬ。これ等の諸篇は認識するよりも、定義することの比較し難き程困難なる眞理を、單に暗示するものとしてのみ提示せられたのである。

一八九八年二月十五日 日本東京にて

ラフカディオ・ヘルン

異國情趣

富士山

來てみればさほどまてなし富士の山 —— 日本のお話

日本で最も美麗なる光景で、世界中でもまさしく最も美麗なる光景の一つは、雲のない日、殊更春と秋に於て、山の大部分が残んの雪や初雪に蔽はれて、遠く空に浮かび出でた富士の姿である。雪のない麓も、空と同じ色を呈して殆ど見分けがつかない。ただ天に懸かつたやうな白色の圓錐形を認めるのみだ。して、日本人が倒懸せる半開の扇にその形を見立てた譬喩は、刻み目のついた巔から扇の骨の影のやうに下方へ擴がつてゐる立派な筋のために、いかにも旨く適合する。扇よりも更に輕やかな姿、寧ろ扇の精か、扇の幻かと思えるが、しかも百哩かなたの實體は、世界の山々の中で堂々たるものである。約一萬二千五百呎の高さに聳えて、十三箇國から望まれる。それでも高山のうちでは登るに最も容易な方で、千年以來毎夏幾多の巡禮者が登り來つたのである。それは、ただ貴い山であ

るばかりでなく、日本中で最も貴い山、神國で最も神聖な山、太陽を拜む最高の神壇であつて、少くとも一生に一度登るのは、すべて昔の神々を敬ふものの義務だからである。だから帝國のあらゆる地方から巡禮者が年々富士山へ辿つてくる。して、殆ど各國にこの靈峯へ詣らうと願ふものを助けるために組織された、富士講といふ巡禮團體がある。もしこの信心の勤行を自身で出来ない場合には、少くとも代理を立ててもよろしい。いくら僻遠の小村でも、富士の神社に祈を捧げ、あの貴い絶頂から朝日を拜むために、折々は一人の代表者を送ることが出来る。かくて一組の富士巡禮は、百も異つた村々から出た人々で組織されることもある。

神佛兩宗教から富士山は崇敬を受けてゐる。富士の神は美しい女神の木花咲耶姫である。姫は火の中で苦痛なく子供を産んだ。姫の名は木の花の如くに美しい色が輝くといふ意味だ。或る註釋家は、花を美しく咲かせるといふ意味だともいつてゐる。絶頂に姫の祠がある。して、古書には、姫が輝ける雲の如く、火口の縁のほとりを逍遙してゐるのが、人間の眼に見えたと書いてある。人間には見えぬ姫の召使が、絶壁の側に見張りをして待つてゐて、少しでも汚れた心を懐きながら、敢て姫の祠へ近寄らうとする者を投げ落とすのである……佛教でこの雄峯を愛する所以は、その形が神聖な花の白い蕾の如くて、絶巔の八

頂點は蓮華の八枚の花瓣の如くに正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八正道を示すからである。

しかし富士に關する古譚傳説——一夜の中に地から聳えて出たとか——嘗て勾玉の雨が降つたとか——最初の祠が千百年前に頂上に建てられたこと——赫姫（たけひめ）に迷はされて、或る帝は火口に行つた限り見えなくなつたので、今猶ほその場所に小祠を建てて祀つてあること——毎日巡禮の足で轉がり落ちた砂は、毎夜また元の所へ上つてくること——かやうな話は、すべて悉く種々の書に載つてゐるではないか。實際富士については私が登つた經驗の外に、あまり話すべきことはない。

私は御殿場口から登山（登り）した。これは六つ七つ選擇勝手な道の中では、一番景色はよくないが、恐らくはまた一番困難が少からう。御殿場は主にも巡禮宿から成れる一小村で、東京から東海道線約三時間の距離である。線路がこの偉大な火山附近へ近附くと、數哩の間上りになつてゐる。御殿場は海拔二千呎よりは可なり高い。だから極暑の節にも比較的涼しい。附近の開豁な野原は、富士の方へ勾配をなしてゐるが、その勾配がゆるやかだから、高原は殆ど水平のやうに見える。極めて晴天の日には御殿場から、山が氣持ちわるい位近く見える。實際は數哩を距ててゐるが、迫つて見えるから怖ろしいやうだ。梅雨の頃は一

日に何回も隠見して、巨大な幽霊のやうである。しかし私が巡禮者となつて御殿場へ入つた八月の灰色な朝、景色は蒸氣に包まれて、富士は全く見えなかつた。あまり遅く着いて、その日には登山を試みる事ができないので、直ぐに翌日の支度にかかつて、二名の強力を雇ひ入れた。私は彼等の廣い、正直さうな顔と、嚴重な態度を見て充分安心した。彼等は錫杖、重い紺足袋（即ち草鞋と共に使用する）、指先きの割れた靴下、富士の形は藁笠、その他巡禮の支度品を私に呉れて、明朝四時に立つ積りてゐて下さいと告げた。

譯者註　ヘルン先生は明治三十一年の夏、焼津の避暑を終つてから、松江中學の舊弟子の一人、藤崎八三郎（舊姓小豆澤）氏を伴ひ登山された。

以下に書いたことは、旅行中書き附けた心覺えを後になつて修正増補したのである。登山の際にかきつけたことどもは、倉卒不完全を免れないから。

一

明治三十一年八月二十四日

宿の室が縁側に向つて開いて、縁側の上方に張つた絲からは、數百の手拭が旗の如く垂

れてゐる。青や白の手拭に漢字で富士講の名と富士の社名が染めてある。これは宿屋へ贈つたもので、廣告の用に立つ……雨が降つて、空は一樣に灰色。富士はいつも姿を見せない。

八月二十五日

午前三時半——一睡もできなかつた——夜更けて山から下りてきた連中や、參詣のため到着した者共て夜中のどさくさ——下女を呼ぶ手の音が絶えない——隣室は飲めや歌への大騒ぎ、折々どつと哄笑が起こる……朝食は汁と魚と御飯。強力が仕事衣を着けてくると、私は最早用意が整つてゐる。が、強力は私に今一度着物を脱いで、厚い下衣を着るやうに強いた。山の下では土用の頃も、絶頂では大寒だからと私に警告した。それから強力は食糧と重い着物の包を負つて先發した……三人曳きの車が私を待つてゐる。上り阪で仕事に骨が折れるから、二人が曳いて、一人が推すのである。車で五千呎の高さまで行かれる。細かな雨が降つて、真暗い、やゝ冷たい朝だ。しかし私はやがて雨雲よりも上へのぼるのだ……町の燈光は後になつて消えて、車は田舎道を走つてゐる。先頭の車夫の提燈でてきた搖曳する半陰影の外には、一としてはつきり見えるものはない。ただ樹木の影と、折嶮しい屋根のある百姓家が微かにわかる。

灰色の弱い光が、徐々と濕つばい空氣の中に漲つてくる。細雨の中から夜が明けようとしてゐる……次第に風景の色がわかつてくる。道は藁葺の家の前を過ぎて行く。が、耕作地は何處にも見えぬ。

落葉松や松などの木立が散在せる開豁の野だ。茫茫たる野の縁と思はるゝ所の上に、ごつごつした樹梢が見えるのみで、眼界無一物。富士の影さへ見えぬ……始めて氣がついたのは、道路の黒いことだ。黒い砂と灰、即ち火山灰らしい。車輪と車夫の足がぱりぱりと碎ける音をして、その中へはまりこむ。

雨は止んで、空はもつと明らかな灰色となつた……進むに従つて樹木は小さくなり、數も減じた。

前面に當つて、地平線と思つてゐたものが、急に裂開して、煙の如く卷いて左右へ去りはじめた。大きな裂け目の中に暗青色の大塊の一部が見えた。富士の一部分だ。殆ど同時に太陽が私共の背後の雲に射した。しかし道は今や低い山の背の裾を蔽へる矮林へ入つて、眼界は鎖ざされた……巡禮の休憩所なる樹間の一小屋で休んだ。すると、車夫よりも一層速かに進んだ強力は待つてゐた。卵を買つた。強力はそれを幅の狭い藁蓆に卷いて、卵と卵の間を藁でしつかり結んだので、卵の絲つなぎは何となく腸詰の絲つなぎのやうであつ

た……一頭の馬を雇つた。

進むにつれて、空は晴れて、白い光が萬象に漲つた。道はまた上りとなり、それからまた荒野へ出た。すると、すぐ前面に富士が現はれた。絶頂まで裸で、素晴らしく偉大で、新たに地から聳え立つたばかりと思はれるほど目醒ましい。これほど美しいものはあるまい。大きな青色の圓錐形——濃青色で、まだ朝陽に消されない霧のために殆ど莖菜色を帯びてゐる。頂に近く二本の白い小筋がある。ここからはやつと一時の長さには見えませんが、雪の満ちた大きい整なのだ。しかしこの姿の美は色彩美よりも均勢美である——あまり広い距離にのべ渡したので、緊張のできない錯鎖のやうな、美しい二つの曲線が釣り合ひを得てゐるのだ。(この喩はすぐ心に浮かんだのではない。あの優美の線が與へた第一印象は女性的といふ印象であつた——私は兩肩両肩が頸の方へ立派な勾配をしてゐることを考へたのであつた)これを一見して、すぐ描くといふことは、なかなかむづかしいだらうと私は思ふ。しかし日本の畫家は、毛筆の驚くべき器用さ——代々の畫家から遺傳した技倆——によつて、譯もなくこの難事に直面する。一秒も立たぬ間に描いた二本のなだらかな線で、影法師の輪郭を作り、曲線の正鵠を得るやうにする——丁度弓の名人が、意識して狙はずとも、多年の手と眼の正確な習慣で的中させる如く。

譯者註　これは直譯であるが、兩眉から頭の方へと、曲線が上つて行く見方である。日本人ならば、曲線が頭から兩眉へかけて、なだらかな勾配をして下つてゐる風に見立てる。東西心的作用の差異の一例と見るべきだらう。

二

強力は遙か向うの方を急いで進んで行つてゐる。其一人は頸に卵を巻きつけてゐる……最早、樹木と名づくべき樹木もなく、灌木の如き短矮な植物が散在してゐるばかりだ。黒い道路が茫々たる草原を越えて曲つてゐる。緑色の表面の此所彼所に大きな黒い斑紋——灰や火山滓の露出せる場所——がある。この薄い緑色の皮は、近い頃の大きな火山の堆積物を蔽うてゐるのだといふことが、それでわかる……實際すべてこの地方は千七百七年、譯者註

富士の側面の爆發によつて、二碼の深さに埋められ、遠く離れた東京に於てさへ、灰の雨が十六センチメートルの深さに達するまで屋根を蔽うた。この邊には眞正の土壤が乏しいから、畠がない。また水は皆無である。しかし火山の破壊は永久の破壊ではない。爆發は結局土地を肥沃ならしめる。して、貴い『花を美しく咲かせる姫』が、數百年の後にこの

荒野に再び笑顔を呈せしめるであらう。

譯者註 東山天皇寶永四年（一七〇七年）十月二十三日巳中刻（午前十時頃）、富士山忽然鳴動、煙雲騰上、吹飛砂礫、寶永山出現。

緑の表面に於ける黒い孔は、もつと數多く、もつと大きくなつた。僅の矮小な灌木が、まだ荒々しい草とまじつてゐる……水蒸氣はのぼつて行く。して、富士は色を變へつつある。最早輝ける青色でなく、褪めて、くすんだ青色だ。曩には土地の高い隆起にかくれて見えなかつた凸形状が、大きな曲線の下部に現はれた。これら凸形状の一つで、左方に當つて、駱駝の隆肉の形をなせるものは、最も新しい大噴火の焦點を示してゐる。

土地は今や黒い斑點を帯びた緑でなく、緑の交つた黒色だ。灌木はなくなつた。車輪と車夫の足は、火山灰に一層深く沈む……車に馬を繋いだので、私はもつと早く進まれるやうになつた。それでも山は遙か遠方に見える。しかし實際私共は五千尺以上の高さの側面を上りつつあるのだ。

富士は青がかつた色合を全く失つた。それは黒くて、炭のやうな黒さて、露出した灰や鐵滓や熔岩などの、火の消えた怖ろしげな堆積だ……緑色のものは大部分なくなつて、一

切の幻覺もまた消えた。黒裸々たる現實の光景は、ますます鋭く、怖ろしく、猛惡に分明さを加へ、人を昏迷させる惡夢となつて現はれた……仰げば數哩の上で、黒い色を背景として、散點せる雪が、怖ろしげに睥睨したり幽光を發したりしてゐる。齒だけ白く光つて、その他は煤けて碎けさうに焼けた婦人の頭蓋骨を見たことを私は思ひだした。

この世の最も美しい光景でないまでも、最も美しい光景の一つであるものさへ、かやうな風に恐怖と死の光景に歸してしまふ……しかしすべて人間の美に關する理想は、遠方から眺めた富士の美の如く、死と苦みの力によつて創造されたのではないか。すべてその性質から云へば、幾多の死滅したものが集つたので、遺傳的記憶といふ摩訶不思議の縊を通じて回顧的に眺めたものではないか。

三

緑は全くなくなつた——すべて黒い。道はない——ただ廣い漠々たる黒い砂の傾斜が、きらきらと齒をむきだしたやうな雪の斑紋の方へ、だんだん幅狭く上つて行つてゐる。しかし小徑がある——巡禮のぬぎ捨てた幾千の草鞋によつてつくられた黄色の足跡。この黒

い砂礫の上では、藁の草鞋は、直にすりへらされる。巡禮は數足の草鞋を用意してゐる。私が獨り登山するにしても、その破れ草鞋の跡を辿つて行けば、道はわかる……黄色の線が、黒い山を紆餘曲折して、見えなくなる所までのぼつてゐる。

午前六時四十分——十個の休憩所の第一番目なる太郎坊に達した。高さ六千呎。この休憩所は大きな木造で、二つの室は杖、笠、蓑、草鞋など、一切巡禮者必需品の賣店になつてゐる。そこに巡回寫眞師がゐて、安價で、立派な、山の寫眞を賣つてゐた……ここで強力は朝食を喫べ、私は休んだ。車はこれからは行けない。三人の車夫を返し、馬はまだ留めておく。温順な、足のたしかな馬だ。二合五勺までは乗つて上がられる。

二合五勺へ向つて黒い砂の阪を上る。馬を並足で打たせる。二合五勺の坊は當季閉鎖してあつた……阪が今や梯子の如く急峻になつて、馬では最早危険となつた。馬からありて、徒歩で攀ぢ上る支度をした。寒風が強いので、私の笠をしつかり結はひ附けねばならなかつた。一人の強力は腰から長い強い木綿の帶をほどいて、一端を私に捉へさせ、他端を彼の肩の上からかけて私を曳いた。して、彼は強い步調で、かがんで砂の上を進む。私は彼について行く。今一人の案内者は私がすべるのを防ぐため、すぐ後についてきた。

砂と鐵滓の中を歩むのが疲れるだけで、登つて行くのにさほど困難はない。砂丘の上を歩むやうだ……阪が今や峻しいから、足下を用心し、また絶えず錫杖を使はねばならない……私共は白い霧の中にある。雲の中を通つてゐるのだ。振り返つて見ようと思つても、この霧の中から何も見えないだらう。しかし私は願望する氣は更でない。風が急にやんだ。多分山の背に遮られたのだらう。すると、西印度に居つた頃の經驗で思ひ起こした静かさを感じた。譯者注聖地の平和だ。この静かさを破るものは、足に踏まれて碎ける灰の音のみだ。私の心臓の鼓動が判然と聽こえた。案内者が私はあまり屈みすぎるといつた。眞直ぐに歩いて、いつも足をおろすのに、踵を先きにするやう、彼は私に命じた。さうしてみると、成程樂であつた。しかし倦きるほど、いつまでも灰と砂のまじつた中を上つて行くのは、なかなか苦くなつてきた。私は汗をかき、喘いでゐる。案内者は私に『お口をつむりなさい。お鼻からだけ呼吸をなさい』といつた。

譯者註　ヘルン先生は日本へ来る前、西印度に放浪すること二箇年に及んだ。聖地云々は、西印度の山の上に、基督や聖母の像などを祀れる祠堂聖域の靜肅を指す。

霧からまた出た……忽然すこし離れた上方に、山の面に方形の孔の如きものが見えた。

戸口であつた。第三の坊の戸口だ。黒い堆積物の中へ、半ば木造の小舎が埋れてゐる……薪の青い煙の中で、煤けて黒ずんだ垂木の下とは云へ、再び蹲まるのは愉快であつた。時刻は午前八時三十分。高さ七千〇八十五呎。

薪の煙はともあれ、小舎の内部は充分心地がよい。清らかな筵や座布團さへある。無論窓はない。また戸以外、開いた處はない。といふのは、建物は山の側面に半ば埋れてゐるからである。私共は晝食をたべた。小舎の番人の話によると、最近に或る學生が御殿場から山の頂上を窮はめて、歩いて下りたさうだ——下駄で！下駄は木で作つた重い履物で、足の拇指と第二指の間へ緒を挟んだだけで、足へ固着させる。その學生の足は鋼鐵でできてゐるに相違ない！

憩んでから、私は外へ出て、あたりを見廻はす。遙か下方に、白雲が大きな、絨毛のやうな渦輪を巻いて轉がつてゐる。小舎の上の方に、また實際その上に垂れかかり乍ら、黒い圓錐形が空へ聳え立つてゐる。しかし驚くべき光景は、左方の怪奇な傾斜線だ——今や少しも曲線を示さなくて、雲の下へと、また果てしない上空へ、さながら緊張せる弓の弦の如く直線に、勢よくのびてゐる。右側面は岩が多くて線がとぎれてゐる。しかし左側に

ついでには——私はかくまで絶對に眞直ぐに、滑らかに、またかやうな驚くべき角度をなし、かやうな大きな距離に互つてのびてゐるといふ事は、たとひ火山に於ても、實際あり得るとは夢にも思はなかつた。そのすばらしい傾斜の角度は私に眩暈の感を與へ、また全然奇異なる感を覚えさせた。かかる整正均勢は不自然で、怖ろしく、人爲的のやうにさへ思はれる——しかし超自然的、惡魔的規模に於ける人爲的だ。私はそこから落ちるのは、數里を落ちて行く事となるだらうと想像する。一切つかまるものはない。が、強力は、その斜面は危険でなく、すべて柔らかな砂だと斷言した。

最初、骨折つて攀ち上つたので、汗びつしよになつたが、最早乾いてしまふと、寒くなつた……また上る……阪は前の如く灰や砂の中を通つて行く。やがて砂に大きな石が混じ出した。して、道はたえず峻しくなつてきた。私はたえず滑る。立ちどまるべき、しつかりしたものは何もない。ゆるやかな石や焼石が一步毎にころがり下る……もし上から熔岩の巨塊がはづれて落ちたら！私は強力に支へられ、また杖にすがりながらも、いつも滑り、また汗だくだくだくなつた。殆ど私の踏む一つ一つの石が、私の足の下で、ひつくり返る。強力の足で一つもひつくり返らないのは、どうしたものだらう。彼等は決して滑らな

い——間違つた踏みやうをせぬ——疊の上を歩くのと同じく氣樂さうだ。彼等の小さな褐色の足は、いつも小石の上へ、正しく適當な角度で立つ。私よりも重い身體であり乍ら、鳥のやうに軽く動く……今や五六歩毎に私は憩はねばならなかつた。破れた草鞋の線が、私共の紆餘曲折してのぼる道につづいてゐる。遂に山の面に今一つ戸口が見えた。第四の坊へ入つて、蓆の上へ私の身體を擲げた。時刻は午前十時半。高さは唯だ七千九百三十七呎。しかし非常な距離の如く思はれた。

また出立する……道はますます悪くなる……空氣稀薄のため新たに一つの苦痛を感じた。心臟は高熱の際のやうに鼓動した……阪は凸凹が甚だしくなつた。もはや石のまじつた軟らかな灰や砂でなく、石ばかりだ——熔岩の斷片、輕石の塊、あらゆる種の鐵滓が、悉く鎚で新たに破碎したやうな銳角を示してゐる。またすべてのものが、踏まれると、ひつくり返るやうにわざわざ出來てゐる如く見える。しかしそれは強力の足の下では決してひつくり返らぬことを、私は告白せねばならぬ。捨てられた草履は、ますます殖えて散らばつてゐる……強力の補助によらねば、私は幾たびもひどい躓きをしたであらう。彼等は私を滑らぬやうにすることは出來ないが、決して私を倒れさせぬ。たしかに私は登山に適

してゐない……高さは八千六百五十九呎——しかし第五の坊舎は閉鎖してあつた！つぎの小舎まで迂曲をつづけねばならぬ。私がそこまで行けるか知らん！……しかも世の中には、實際單に娛樂のために三回も四回もここへ登つた人があるのだ……後へ振りかへつて見ようともしない。私の下でいつも轉がる黒い石と、決して滑ることなく、喘ぐことなく、決して汗をかかぬ強力の青銅色の足の外、私は何も見ない……錫杖のため手が痛み出した。強力は私を後から押し、前から曳く。強力にこんな面倒をかけるのは濟まない、私は大いに恥ぢ入つてゐる。やれやれ第六の坊だ！八百萬の神々様、私の強力を祝福し玉へ！時刻は午後二時七分。海拔九千三百十七呎。

休憩をして、戸口から下の深い谷を凝視する。茫茫たる白雲の裂け目からやつと微かに土地が見える。して、その裂け目の中の一切のものが殆ど黒く見える……水平線があそろしく高く上つて、擴大したことは驚くばかりだ……まだ頂上は數哩も遠い。私はあまりに遅かつた。私共は上の方へ急がねばならぬと、強力は私に警告した。

羊腸たる道はたしかに、前よりも更に急になつた……石に角の多い岩がまじつた。して、私共は時としては玄武岩の如き、奇異な黒い塊に沿つて行かねばならぬ……右の方には、

ぎざぎざに裂け目のついた、猛威凄い、黒い背が、目も届かない上へと昇つてゐる——昔の熔岩の流れだ。左方の傾斜線は依然として弓の弦の如く、眞直ぐに上を射てゐる……もつと道が峻しくなるか知らん——これよりも一層、道が荒々しくなるだらうか？私の足のために外づれた石は音をたてずにくろげ落ちる——私はその石の方へ、後をふりかへつて見るのが怖はい。石が音なくして没し去るのは、さながら夢の中で落下して行くやうな感じをさせる。

上の方に白いものがびかびかする——大きく横がつた積雪の最下端だ……今や私共は雪てみたされた溝に沿うて進んでゐる——今朝絶頂を初めて見たとき、一時の長さとしか思はれなかつた、あの白い斑點の最下端を通るのに、一時間ばかりかかるだらう……一人の案内者は、私が杖によつて休んでゐるうちに、走つて行つて、大きな雪の球を持つて歸つた。何と珍らしい雪！片々たる柔らかな白雪でなく、透明な小球の塊——まさしくガラス玉だ。すこしばかり食べると、快爽云ひやうがなかつた……第七の坊は閉ぢてゐた。どうして私は第八の坊へ達するだらう？……幸と、呼吸はやゝ苦さが減じた……風がまた私共に吹きつけて、黒砂も加つてゐる。強力は極めて私に接近して、警戒して進む……私は道の曲り

目毎に歩をとどめて休まねばならぬ——疲れて話しも出来ぬ……どんな風にやつてきたのか知らないが、兎に角私は第八の坊へ漕ぎつけた。十億弗を呉れても、もう今日はこの先き一步も御免だ。午後四時四十分。高さ一萬〇六百九十三呎。

四

冬の着物がなくて、ここには寝るのにあまりに寒い。成程、案内者が用意した重い衣類の價值がわかつた。それは紺地に、大きな白い漢字を背に染め抜いて、蒲團のやうに厚く綿が入れてある。しかしそれでも軽い感じがする。實際二月の霜に冴えたやうな空氣だから……炊事をしてゐる最中だ——こんな高い所では、炭火はなかなか我が儘強情で燃え上からぬから、絶えず注意を要する……寒氣と疲勞が食欲を刺激する。私共は驚くほど多量の雜炊——御飯の中へ卵と少許の肉を煮込んだもの——を食べつくす。私の疲勞と時刻の理由で、今夜はここで泊まることになった。

疲れてゐても、戸口まで跋を曳いて行つて、驚くべき景色を眺めずには居られなかつた。

敷居を距つる數呎内の所から、岩や鐵滓の凄い傾斜面が、數哩の下で、澤山の雲が大きな圓盤狀になつた中へ垂下してゐる。雲はそれぞれ種々の形狀をしてゐるが、多くは捲いたり、絨毛の如く積み重つてゐて、ごちやごちや集つて、全團塊が殆ど眼界の高さに達して、日光を受け眩しいやうに白い。(此大きな雲が擴がつたのを、日本人はうまく『綿の海』と名づけてゐる)非常に高く昇つて、幻の如くにひろがつた地平線は、地球から半分上へのぼつてゐるやうだ。廣い、輝いた帯が、空虚な幻影を取り捲いてゐる。空虚と私がそれと呼ぶのは、輪郭線下の遠いまでは、天空の色を帯び、茫漠としてゐるからだ——だから、私は穹窿の下の一地點に立つて居るといはんよりは、寧ろ此巨大な地平線が赤道帯を代表してゐるやうな、すばらしい青い球體の一地點に立つて居るといふ印象を受ける。かやうな光景に對しては、去るに忍びない。私は落日の光に、光景の色彩が變はり、『綿の海』が『黄金色の羊毛』になるまで、注視に耽つてゐる。眼界の半ばを取り捲いて、黄色の華やかさが増加して、燃えてくる。其下あちこちに雲のとぎれた處から、ぼんやり色を帯びた所々が見えてくる。金色の海が見え、紫色の長い帯が延び出でて、青紫色の群帯が其背後に連つてゐるのが、妙に着色地形圖の場面に似てゐる。しかし大體の光景は全然幻影であつて、長い經驗と驚の如き視力を持てる案内者さへも、殆ど虚實を辨じ得ない——何故

なら、『黄金色の羊毛』の下に動く青と紫と青紫の雲は、遠い峯や岬の輪郭と色合にそつくり似てゐるからだ。ただ徐々に移動して行く形状のため、蒸氣を識別し得るのみだ……黄金はだんだん輝いてくる。影は西から射してくる——それは積雪の上へ積雪が投ずる影だ。それは雪の上に暮影の映る如く、莖菜色の青だ……次に、眼界へ橙黄色が現はれる。それから潜んだやうな深紅色。すると、今度は『黄金色の羊毛』の大部分は、また綿に變はつた——石竹色のまじつた白い綿……星が竦動し始める。雲の廣野は滿面一様に白くなる——地平線へまで厚く、積み重なり乍ら。西が暗くなる。夜がのぼつてくる。して、あの不思議な、白い、連綿として世界を巻いてゐる『綿の海』の外、一切の物が暗くなる。

坊の主人が燈火を點じ、樹枝を焚き、寢所を備へてくれた。外氣は刺すやうに寒い、日が暮れたので猶ほ寒い。それでも私はこの驚くべき眺望を振り棄つるに忍びない……無數の星がちらちらして、青黒い空で戦いてゐる。私の足先きの黒い傾斜面の外、物質界のものは何も目に見えなくなつた。下方の大きな雲の圓盤は白く續いてゐるが、いかにも水の如く平らかて、無形の白いもの——白い洪水——のやうに見えた。もはや『綿の海』ではない。それは『牛乳の海』だ。古代印度傳説の『宇宙の海』だ——して、いつも幽靈の

生動によるかの如く、みづから光を發してゐる。

五

焚火の傍にしゃがみ乍ら、強力と坊の主人が山の不思議な出來事を語るのに、私は耳を傾けた。彼等が話し合つてゐる一つの事件を、私は東京の新聞で少しばかり讀んだ覚えがある。今や私はその事件の中に活躍した人物の一人の口からそれを聞くのだ。

日本の氣象學者、野中といふ人が、昨年科學的研究のため富士の絶頂で冬を過ごすといふ、向う見ずの企をした。立派な煖爐と生活を快適ならしむるに必要な一切の物を備へた堅牢なる測候所を、山頂に於て越年するのは困難でないかも知れぬ。しかし野中氏はただ木造の一小舎しか作り得なかつた。しかもその小舎の中で火なしに嚴冬を送らねばならなかつた！彼の若い細君は彼と勞苦を共にすることを主張した。九月の末、二人は絶頂の滞在を始めた。冬の眞最中になつて、二人は死に瀕してゐるといふ報道が御殿場に傳つた。親戚と友人は救助隊を組織しようとした。しかし天候はひどく悪るかつた。頂上は雪と氷に蔽はれてゐた。死の危険は多大であつた。して、強力輩も生命を賭する事を欲しなかつた。

つた。數百圓を提供しても彼等を誘ふことができなかった。遂に日本人の勇氣と忍耐の代表者として彼等に必死の懇願がなされた。一たびも勇敢なる努力を試みずして、科學者を見殺しにするのは國の恥辱だと告げられ、國の名譽は彼等の掌裡にありと斷言された。この哀訴は二名の勇俠者を出した。一人は『鬼熊』の綽名ある大力且つ剛勇の男、今一人は私の強力の年長の方の男であつた。彼等は屹度死ぬるものと信じてゐた。親類縁故に訣別し、家族と水杯をくみ交はした。それから綿毛を厚く身體に巻いて、氷を攀ぢのぼる一切の準備をして立つた——一人の勇敢な軍醫が、無報酬で、救助のため、進んで參加した。非常な困難を冒して、一行は小舎に達した。

しかし舎内の人は、戸を開けることを拒んだ！野中氏は企圖失敗の恥辱に面せんよりは寧ろ死すると抗言し、細君は夫と共に死する決心だといつた。強いたり、すかしたりしてから、夫婦をおとなしい精神状態に致すことができた。軍醫は藥と興奮劑を與へた。患者によく衣を巻きつけ、案内者の背に縛つて、下山を始めた。細君を運んだ私の強力は、氷の阪路で神々の御助けがあつたものと信じてゐる。一度ならず彼等は死んだことと思つたが、一回も大災難に至らないで、麓に達した。行き届いた看護數週の後、無謀なる若夫婦は危険圏内を脱したことを告げられた。細君は夫よりも病軽く、また早く恢復した。

強力は夜間彼等と呼ばないで、坊舎の外へ敢て出ないやうにと、私を戒めた。何故か、その理由を云はない。して、その警告は一種氣味がわるい。日本の旅行に於ける經驗上、私はその暗示さるゝ危険は超自然のものと推測する。しかしその理由を尋ねても駄目だと思ふ。

坊の戸は鎖ざされた。私は案内者二人の中間へ横になつた。二人が直ぐに眠つたのは、その重い呼吸でわかる。私はすぐ眠れない。恐らくは一日の疲勞と驚異のために少々神經が興奮したのであらう……私は黒い屋根の垂木を見上げる——草鞋の包み、木の束、判別し難き種々のものの束が、そこに藏まつてあつたり、吊るされたりして、洋燈の光で妙な陰影を作つてゐる……三枚の蒲團を被つても、非常に寒い。して、戸外の風の音は不思議にも巨濤が響くやうだ。絶えずどつと轟いた後に、一しきり叱罵の聲がつづく。

小舎は重い岩と吹き寄せた砂の下に埋もれて動かない。しかし砂が動く。垂木の間から滴つてくる。また小石も、引く波にさらはれる礫の如く、がらがら音を立てて、烈しい一陣の嵐毎に動く。

午前四時——昨夜の警告にもかゝらず獨りて外へ出る。尤も戸の附近を離れない。強い氷の如き風が吹く。「牛乳の海」は變はらぬ。それは遙かにこの風の下方に横はつてゐる。上の方に月が消えかかつてゐる……案内者は私が居ないのを見て、はね起きて、私のそばへきた。私は彼等と呼び醒まさなかつたことを責められた。彼等は私を獨りては戸外に置かないから、彼等と共に私はまた内へ入つた。

黎明。一帯の眞珠色を取り捲いて、星は消え、空が輝いた。綿が搔きみだされて、破れんとしてゐる。黄色の光が風に吹かれた火の光の如く東方を走つた。遺憾ながら、旭日の初めて昇るのを富士から見たことを誇る幸運者の一人と、私はなることが出来ないだらう。重い雲が旭日の昇るべき邊に漂つて行つたのだ……最早太陽は水平線上に現はれたものとわかつた。あの紫雲の裂片の上端は、炭火の如く燃えてゐるからである。だが、私の失望はこの上なかつた！

空虚な世界はますます明かるい。數哩に亘つて堆積せる綿雲は、ころがつて分裂する。非常な遠方に當つて、水の上に金の光がある、太陽はここからは見えませんが、海からは見

えてゐるのだ。その光はちらつとした光でなく、磨いたやうな輝きである——かかる遠距離では、漣は見えない……更に一層、雲は散亂開展して大きな灰青色の風景を現はす——數百哩が忽然視界に集る。右に東京灣と鎌倉、それから神聖な江ノ島（いといふ文字の上にある點ほどの大いさ）を私は認める——左にはもつと荒い海の駿河灣と青い鋸齒の伊豆の岬を認める。それから私がこの夏を暮らしてゐた漁村の邊は、山や海岸がぼんやりした夢の色に浮かんだ中に、針頭大になつて見える。川は蛛網の糸に太陽の光がひらめいたやうだ。漁舟の帆は海の灰青な玻璃にくつついた白い塵だ。して、この畫面は雲がその上をただよひ移るまゝに、隱見出沒して、すべて極樂淨土の亡靈の如き島や山や谷の形に變はる……

六

午前六時四十分——頂上へ向つて出發した。熔岩の塊の累々たる間を経て、ここは登山阪路中の最難所だ。黒い齒の如く突出した醜い岩塊の間を曲折する。脱ぎ棄てられた草鞋の痕は、更に幅が廣い。數分毎に憩はねばならぬ。

雪の今一つの長い斑點に達する。ガラス玉のやうな、その雪を少し食べる。次の坊——半途の坊——は閉ぢてある。して、第九の坊はなくなつた……不意の恐怖が起こつた。それは登ることとなく、心地よく坐わることさへ出来ぬ急峻な道を、また降つて行くことについてである。しかし案内者は危険がないと斷言し、また歸途の大部分は他の道によるのだと私に告げた——昨日私が驚嘆した、あの果てしなき、殆どすべて柔らかな砂で、石の少い、『走り』といふ表面を越えて、一ト走りておりののだ！

忽然一族の野鼠が慌てて私の足もとから散亂した。後の方にゐた強力が一匹を捉へて私にくれた。私はしばらくその震へてゐる小動物を手につけて見てから、放してやつた。これらの鼠は頗る長い青白い鼻をもつてゐる。この水のない荒野に——またこんな高い處に——特に雪の季節には、どうして生きてゐるだらう？ 私共は最早一萬一千呎以上の高さにゐる！鼠は石の下に生ずる草根を見出すのだと強力は云つた。

道はますます凸凹で、ますます峻しい。私だけは折々匍匐せねば攀ち上れなかつた。關門のやうな場所では、梯子の助けを藉つて登つた。賽の河原などといふ佛教の名の附いた恐ろしい場所があつた——佛教の來世の繪にある、子供の亡靈が積みあげる石のやうに、

積み重つた岩が散らばつて、一面黄色を呈して、荒涼たる光景。

一萬二千呎と少しばかり。ここが絶頂なのだ。時刻は午前八時二十分……石造の小舎が數個。鳥居があつて、社祠がある。金明水と稱する氷のやうな井。漢詩と虎を刻んだ石碑。以上のものを取り卷いた熔岩塊の荒塚。この塚は防風のためと思はれる。それから巨大な死火口がある。恐らくは一哩の四分の一乃至半哩の幅であるが、火山の岩層によつて、縁端の三四百呎以内まで淺くなつてゐる——その凹んだ處は、黄色の、崩れかかつた壁の色合さへ恐ろしげに見える。焦げたあらゆる色の條が立つて、汚れてゐる。私は草鞋の列が火口で終つてゐる事を認めた。怖ろしげに張り出た黒い熔岩の尖角が、奇怪な癩痕の破れた端の如く、火口の兩側で數百呎の高さに突兀としてゐる。しかし、私は敢てそれへ上ることはしない。しかも是等の尖角を百哩の霞を隔てて、春の蒼空の柔らかな幻覺を通して眺めると、清淨なる蓮華の蕾のまさに開かんとする雪白の花弁と見えるのである……蓮華が燃え殻になつた末端と見做すべき此所に立つて見ると、これほど恐ろしく、これほど兇猛陰凄な地點が、またと此世にあるべしとも思はれない。

しかしこの景色、百哩も見渡すこの眺め、遠い微かな夢のやうな世界の光、仙界の如き

朝煙、捲き去り捲き來たる雲の不思議な形狀——すべてこの光景は、またこの光景だけが、私の骨折りと苦痛を慰めてくれる……もつと早く登つた他の巡禮達が、一番高い岩に乗つて顔を東天に向け、壯大な太陽を拜んで、神道の祈を捧げ手を拍つてゐる……この刹那の偉大なる詩境は、私の心魂に徹した。眼前のこの大きな光景は最早消すべからざる記憶となつたのである。私の智力は消滅し眼は土に化して仕舞つてから、私の生まれなかつた遠い昔、矢張り富士の絶頂から旭日を眺めた億兆の人々の眼の土化したのと、相混ざる時まで、この記憶の一寸明細な點は消滅することはない。

蟲の樂師

蟲よ蟲ないて因果が盡きるなら —— 日本の歌

—

諸君がいつか日本見物をされるなら、少くとも社寺の祭——縁日——を一つ是非見に行
くやうにされたい。どんなものが無数のラムプと提燈との光で、非常に引き立つて見え
る夜分に、このお祭は見なければならぬ。此の經驗を有たぬうちは、日本はどんなものか
諸君に分かりやうが無い——尋常一般の人達の生活に見出さるべき、風變りと可愛らしさ
との眞の妙味を、奇怪と美しさとの不思議な融合を、諸君は想像も出来ないのである。

そんな晩には、筆にも書けぬいろんな玩具——優雅な子供じみた品物、破れ易い驚嘆さ
せる品物、笑を催させる珍妙な品物——が一パイに並べてある小屋掛の口の眩むやうな小

徑をば、諸君は多分見物人の流れと共に暫く自己を漂はしめるであらう。——鬼や神や化物の見世物を認めるであらう。——萬燈——怪異な顔が描いてある、非常に大きな透かし繪の提燈——に膽を潰すであらう。——手品師、輕業師、劍舞師、占者を瞥見するであらう。——人聲の騒々しさを抽んで、絶え間無しの笛の音、太鼓の音を到る處に耳にするであらう。そんなものはどれも立ち停つて見る價值は無いかも知れぬ。然しやがて諸君は、自分はさうと殆ど確信して居るが、その遊歩の間に、何とも喻へやうの無い鋭い聲が出て來る小さな木製の籠を澤山備へて居て、幻燈のやうに光り輝いて居る小屋掛を立ち停つて見ることであらう。その小屋掛は歌ふ蟲をあきなふ商人の小屋掛で、聲音のその嵐は蟲が發するのである。それは奇妙な觀物で、外國人は殆どいつも之には惹きつけられる。

だがその一時的な好奇心を満足してから、特殊な色々の子供の玩具があつたことは見たが、他には何も大して目に立つものは見なかつたといふ念を抱いて、外國人は大抵は歩いて行く。東京だけの蟲商賣が幾千弗の價值のものだと云ひきかせれば、それは容易に了解するであらう。が、蟲が發する音色の特性の爲めに、蟲それ自體が珍重されて居ると證言されると、屹度驚くことであらう。非常に上品なまた藝術的な國民の美的生活に於て、此の蟲なるものが、西洋の文明に於て、鸚、紅雀、ナイティングエル及びカナリヤが占め

て居る地位に劣らぬ重要な若しくは十分至當な地位を占めて居る、といふことを納得させるのは容易ではあるまい。千年も経つて居る文學が——奇妙なそして微妙な美に充ちた文學が——この短命な寵愛者たる蟲といふ題目の上に存在して居ることを、どんな外國人が想像し得よう？

此の一文の目的とするところは、さる事實を解説して、日本人生活の最も興味ある委細な點に對して、我が西洋の旅客が無意識に如何に皮相な判断を下すことがあるかを示すにあるのである。が、そんな誤つた判断は避け難いものであると共にまた當然なものである。どんな親切な意向を以てしても、日本人の慣習中の異常なものに就いては——異常なものといふものは外國人はそれに就いて少しも知り得ない感情や信仰や或は思想に殆どいつも關係を有つて居るものだからして——そのどんなことをも、ただ一寸見ただけで、正確に評價することは不可能である。

話を進める前に、自分が語らうとして居る、家に飼ふ蟲は、大抵は夜の歌ひ手で、前自分が書いた隨筆の中に記載した蟬と混同してはならぬと述べさせて貰はう。自分は蟬は

——音樂的な蟲に日本ほど斯くも格別に豊富な國に於てすら——それ獨得な不思議な樂手であると思ふ。が、日本人は夜の蟲と蟬との聲音に、我々が告天子と雀との聲音に見出すと同じ差別を見出して、蟬をば饒舌家といふ下等な位置へ黜けて居る。だから決して蟬を籠へ入れぬ。籠の蟲に對する國民的愛好は、ただの騒音を好んで居るといふことを意味して居るのでは無い。——一般に好かれて居る一々の蟲の聲音に、何か呂律の上の妙味があるか、或はまた、詩歌に若しくは傳説にもてはやされて居る何か類似の性質があるか、しなければならぬ。蛙の歌を日本人が好むのに就いても同一の事實が認められる。どんな種類の蛙でも音樂的だと思つて居るのだと想像するのは誤解で、好い音を出す、特別な種類の非常に小さな蛙が居るので、籠に入れて飼つて愛玩するのはその蛙である。

言ふまでも無く、その語の本當の意味で、蟲は歌ひはせぬ。が、これからの頁の中に、自分は時折『歌ひ手』とか『歌ふ蟲』とかいふ語を使用するかも知れぬ、——それは一つは、さういふ語が便宜な爲めと、一つは、こんな動物の『聲』を述べる折の、日本の蟲賣や詩人が使ふ言語と一致して居るからである。

舊日本の古典文學の中に、好い音を出す蟲を飼ふ習慣を示した珍らしい文句が澤山にある。一例を挙げると、十世紀の後半に、紫式部が書いた『源氏物語』といふ有名な小説のうちの『野分』^{のわか}といふ章に『わらはべあろさせ給ひてむしの籠^こどもに露かはせ給ふなりけ

「ノワキ」といふは普通秋の末ころ起くる或る破壊的な暴風に與へて居る名である。「ゲンジモノガタリ」の各章は悉く非常に詩的な、そして感銘的な題名を有つて居る。末松謙澄氏がされた、初めの十七章の英語譯がある。

り』といふ文句がある。だが歌ふ蟲を入れる籠のことを初めて判然と記載してあるのは、『著聞集』といふ書物のうちにある次記の文であるやうに思はれる。――

〔嘉保二年（西曆紀元一〇九五年）八月十二日殿上のをのことも嵯峨野に向て蟲を取て奉るべきよしみことのりありて、むらごの絲にてかけたる蟲の籠を下されたりければ、貫首已下みな左右馬寮の御馬にて向ひける。藏人辨時範馬のうへにて題を奉りけり。野徑尋蟲とぞ侍ける。野中に

至りて僮僕をちらして蟲をばとらせけり。十餘町ばかりはおの馬よりおり歩行せられけり。ゆふべにをよんで蟲をとりて籠に入れて内裏へかへり参り、萩女郎花などを籠にかざりたりけり。中宮の御方へまるらせて後殿上にて盃酌朗詠など有けり』

ハギは英國のフツシユ・クロロヴに普通興へて居る名、ヲミナメシは學名ブレリアナ・オフィシナリスの通俗な名。

これが蟲取りの最も古い日本の記録のやうに思はれる、尤もその娛みは嘉保年代より前に發明されて居たかも知れないが。これは十七世紀までに一般の娛樂となつたらしく、そして夜間取るとは晝間取ることと同様好んで誰れもが行つた。承應二年（一六五三年）に死んだ貞徳といふ詩人の全集の『貞徳文集』といふ書物に、此詩人の一通の手紙の、此題目に關した頗る興味ある文句の含まれて居るのが、保存されて居る。其友人へ詩人は斯う書いて居るのである。『晚景蟲吹可罷出候黒月闇無用心候へ共盆前は墓參仕る者繁候而路次賑敷候行燈挑灯聚置候へ者促織松蟲菘幾等も寄聚候』

死者の大祭の前に墓を飾りに、墓地へ每晚行く人が澤山にあるから、との意。

それからまた、蟲賣（ムシヤ）の商賣が十七世紀にはあつたものらしい。といふは、『其角日記』といふ、當時の或る日記に、作者は江戸で蟲賣を一人も見つけなかつたので失望したと述べて居る。——他處でそんな者に會つたことがあるといふ可なり立派な證據である。『貞享四年（一六八七年）六月十三日、さりぎりす商賣致し候者相尋候町々覺、四谷、麴町、本郷、湯島、神田すだ町二丁分相尋候處一人も見え不申』と書いて居るのである。

この町名の多くは現今の東京の誰れも知つて居る區の名に残つて居る。

諸君にやがて分かるであらうやうに、その後百二十年許り經つまで、東京ではキリギリスを賣らなかつたのである。

だが歌ふ蟲を飼ふことが流行にならぬずつと以前に、蟲の奏する音楽は秋の美的快樂の一つとして詩人に賞讃されて居たのである。十世紀に出來た、従つて確にそれよりも前の時代の作品を多く含んで居る歌集に、歌ふ蟲に關した面白い記述がある。そして、櫻だとか梅だとか或は他の花咲く木とかで有名な場所へ、その季節の花を見るといふ愉快を買ふ

だけのことに、今なほ定つて毎年幾千幾萬といふ人が見物に行くと丁度同じて、——古代にあつて、都會に住居つて居た人達は、單に蟋蟀や蝻斯の——殊に夜歌ふ蟲の——啼き合はす合奏を聽くといふ快樂を得んが爲めに、田舎へ秋の遠足を試みたものである。この音樂的な寄せ物があるといふだけのことで遊樂地として著名な場處が數世紀前に在つた。

——それは武藏野（今の東京）、越前の國のやた野、それから近江の國の眞野であつた。多分、それから少し後れて、歌ふ蟲の主もなものはどれもこれも、或る特別な地方を特に好んで棲んで居るので、其處へ行けばその特殊の歌唱を最も好く聽くことが出來るといふことを發見した。で、しまひには、異つた種類の蟲音樂に、日本中で、十一箇處も有名なところが出來た。

松蟲を聽くのに一番好い處は——

(一) 山城の國の京都に近い 嵐山、

(二) 攝津の國の 住吉、

(三) 陸奥の國の 宮城野。

鈴蟲を聽くのに一番好い處は——

(四) 山城の 神樂が岡、

(五) 山城の 小倉山、

(六) 伊勢の 鈴鹿山、

(七) 尾張の 鳴海。

蟋蟀を聴くのに一番好い處は——

(八) 山城の 嵯峨野、

(九) 山城の 竹田の里、

(十) 大和の 龍田山、

(十一) 近江の 小野の篠原。

其後、歌ふ蟲を育てて賣ることが儲けになる商賣になつてから、蟲聞きに田舎へ行くといふ慣習は段々流行らなくなつた。然し今日でも都會に住居つて居る人は、宴會など催す折、客にこんな小さな動物の音楽を味はしめる計りて無く、その音楽が喚び起こす田舎の平和の懐ひ出や感じを味はしめようといふので、時に歌ふ蟲を入れた籠を庭の灌木の繁み

の間へ置いたりする。

三

啼く蟲を常職の商賣にすることは比較的近代の起原のものである。東京ではその濫觴はやつと寛政年代（一七八九——一八〇〇年）に溯るだけのことである。尤もその時代には將軍職の首府はまだ江戸といつて居つた。この事に關する完全な歴史——一部分は舊記から編纂し、一部分は幾軒かの有名な現在の蟲商人の家に保存されて居る言ひ傳へから作つた歴史——が近い頃自分の手へはひつた。

東京での此商賣の元祖は、元越後から出て來たもので、十八世紀の後半に江戸の神田區に住居つてゐた、食べ物を賣り行く忠藏といふ男であつた。或る日のこといつもの町廻りをやつて居るうち、當時根岸の里に澤山に居たスズムシ即ち鈴蟲を二三匹捉へて、それを家で養つて見ようとした。蟲は幽閉の中に殖えて、好い音を出して啼いた。そこで忠藏の近處の人達が、その美しい啼聲に魅せられて少しの御禮をするからスズムシを呉れないか

と乞うた。此の偶然の手始めからして、鈴蟲の需用が俄に増して來たので、この食べ物賣は以前の職業を棄てて蟲賣にならうと決心した。

忠藏は蟲を捉へて來て賣るだけであつた。之を飼養繁殖させればもつと利益にならうとは想像もしなかつた。ところが繁殖の事を問も無くその購客の一人——當時青山下野守に仕へて居た桐山といふ人——が發見した。桐山は忠藏から鈴蟲を幾匹か買ひ求めて、それを濕つた土を半分入れた壺に入れて飼つて居つた。蟲は寒さの時候に死んだ。が、翌年の夏、最初壺に閉ぢ込められて居たのが土の中へ残して置いた、卵子から生まれ出たに相違無い、小さなが澤山壺の中に今棲まつて居るのを見て驚き喜んだ。大事に育てた。すると、自分の歴史家の言ふ處に據ると、やがて『小き聲にて啼き初』めるのを聞いて大いに喜んだ。それから實驗を試みて見る事に決心した。そして、雌と雄とを持つて來て呉れた忠藏の力を藉りて、單に鈴蟲ばかりでは無く、他の三種の歌ふ蟲を——邯鄲、松蟲、それに響蟲を——養殖するに成功した。同時に、壺を暖かい部屋へ置いて置けば、天然の時候よりも餘程前に蟲を孵化さす事が出来る事を發見した。忠藏は桐山の爲めにその家内で養殖した歌ひ手を賣つてやつた。そして兩人は此新事業が思ひの外利益になる事を知つた。

桐山が出した手本を、神田區に住まつて居た、安兵衛といふタビヤ即ち足袋製造者（そ

の職業の理由で普通足袋屋安兵衛として知られて居たが眞似をした。安兵衛も同様に、蟲の養殖をやる目的で、心を留めて歌ふ蟲の習性を研究した。そして間も無くそれて一かどの商賣がやつて行けることを發見した。此時分までは、江戸で賣る蟲は、壺か箱の中に入れて置いたもののやうである。安兵衛は蟲の爲めに特別な籠を造らうといふ念を抱いた。ところが、本所區の龜井家の家來で近藤といふ男が此事に興味を持つて、可愛らしい小さな籠を澤山に造つたので、安兵衛は大いに喜んで續々注文をした。此の新發明はすぐと一般の好評を博した。て、近藤はその後すぐと蟲籠の最初の製造場を建てた。

歌ふ蟲の要求は此の時から俄に増加したので、忠藏は買つて呉れるお客總てに直接供給するの不可能なことを直ぐと知つた。そこで自分の商賣を卸商に改め、小賣商人だけに賣ることに決定した。注文に應ずる爲めに彼は廣く郊外及び其他の百姓から買ひ求めた。多勢の人を使用した。そして、安兵衛や他の者共は、色々な權利や特典の爲め、年々一定の金額を彼に拂つた。

それから暫くして、此の安兵衛が歌ふ蟲を賣りあるく元祖になつた。商品を高聲で呼ばはつて町を歩いた。だが大勢の下男を傭つて籠をかつかせて居た。傳ふる所に據ると、彼は、町を廻はりあるく時は、透綾といふ貴重な絹の織物でつくつた帷子を着、立派な博多

カタビラといふは夏衣として使用する種々な軽い織地の名である。材料は普通は麻であるが、時には、此處に述べてある場合のやうに、薄い絹のこともある。そんな著物は透き通つて居るのもあつて非常に美しい。ハカタは、九州に在つて、其處で出来る帯で今なほ有名である。その織物は厚くて丈夫である。

帯を締めて居たさうである。そして此の優雅な身なりが商賣の上に大いに役に立つたといふことである。

ここに、二人の人が、その名前は残つて居るが、それが間もなく安兵衛と競争を始めた。一人は、元の職業はサハイニン即ち財産の世話人であつた、本所區の、安藏安造やすくらやすざうといふのであつた。繁昌して、ムシヤス即ち「蟲賣安」として廣く名を知られるやうになつた。その成功は、元同じくサハイニンをして居た、上野の源兵衛といふ者の心を勢ひ附けて、同じ商賣に入らしめた。源兵衛もまた蟲賣は儲けになる商賣であることを知つた。そして、今でも人の覚えてる、ムシゲンといふ渾名を得た。此男の東京の子孫は飴製造者になつて

アメは小麦や他の物質から取つた澱養に富む膠質の抽出物である。キャンデーとして、糖蜜に類したシラップ汁として、熱い甘い飲料として、堅いゼリイとして——いろんな形で賣つて居る。子供は頗る之を好む、その主成分は澱粉糖である。

居るが、夏と秋の間は、祖先傳來の蟲商賣を今も營んで居る。そしてその店の一人が、親切にも此の一小隨筆に記録した事實の多くを自分に供給して呉れたのである。

此の珍らしい商賣の父であり、創立者である忠藏は子無くして死んだ。そこで文政年間（一八一八——一八二九年）の或る頃、その遠縁の山崎清次郎といふが其跡を引き受けた。山崎は自分の商賣——玩具屋——と忠藏の商賣とを一緒にした。その頃此の都會の蟲賣の數を三十六人と限る法令が出た。その三十六人がそこでオホヤマカウ（大山講）といつて、

相模のオホヤマは遮護者で大いに賑はふ。あの美しい富士の女神の姉妹のイハナガヒメ（「岩長姫」）を祀つた有名な社がある。セキソンサンといふはその神にも、山そのものにも用ふる通俗な名である。

相模國大山の石尊様せつせんといふ神様かみりやみを守神とした組合を造つた。が、商賣の方では此の團體はエドムシカウ即ち江戸蟲講として知られて居た。

キリギリス——詩人其角が千六百八十七年に江戸で買はうとして買へなかつたといふあの蟲——が江戸で賣られたことを我々が聞くのは、上述の商組合が出来てから後初めてである。ムシヤカウジラウ（蟲屋孝次郎）といふ、本所區で商賣をして居た、此組合の一人が、その郷里上總へ一寸行つて江戸へ歸る時、澤山の蟋蟀を携へ歸つて、それを賣つて大

いに儲けた。他所では長い間有名であつたのに、江戸ではそれまで此蟲は賣らなかつたのである。

『水野越前守マチブギヤウ（町の奉行）となりし時、蟲賣の人数を三十六人と限る法令廢止されたり』と歴史は言うて居る。前記の組合は其後解散したかどうか、此の歴史は記載して居らぬ。

歌ふ蟲を人工的に養殖した元祖の桐山は、忠藏の如く、商賣に繁昌した。龜次郎といふ息子を殘して死んだが、その子は牛込區早稻田に住居して居た湯本某の一家へ養子に入つた。龜次郎はその父の職業の貴重な秘傳を湯本家へ持つて來たので、湯本家は今でも蟲の養殖業に有名である。

今日東京で一番大きな蟲商人は四谷區左門町の川住兼三郎だと云はれて居る。小商人は大抵はその秋の仕入を此人から得る。然し人工的に養殖して夏賣る蟲は、多くは湯本家から供給せられる。他の知名な商人は下谷區の蟲清と淺草の蟲徳である。此等二人は田舎で捕つて百姓が東京へ持つて來るのを買ひ込むのである。エンニチ即ち宗教上の祭禮中、寺社の附近で——殊に日が暮れてから——商賣をする多勢の蟲商人へ、籠も蟲も卸商人が供給するのである。一年中殆ど毎晩のやうに此都會の何處かに縁日がある。だから蟲屋は夏

と秋の幾月の間減多に閑ては居らぬ。

歌ふ蟲の東京の目下の値段の下記の表は、或は讀者に興味があるかも知れぬ、――

馬	鉦	閻魔こほろぎ	蟋	大和	響	黒雲	草雲	金雲	邯鄲	松	鈴
追	叩		蟀	鈴	蟲	雀	雀	雀	鄂	蟲	蟲
十	十二	五	十二	八	十	八	十	十	十	四	三錢五厘から
錢	錢	錢	錢から	四錢							
			十五	十二	十五	十二	十二	十二	十二	五	
			錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	

が然し、この値段は、蟲商賣の多忙な時節だけのものである。五月から六月の末までは人工的に養殖されたのだけが市場へ出るものであるから——値段が高い。七月には、田舎から持つて来る蟋蟀は一錢といふ安値で賣る。邯鄲、草雲雀、大和鈴は時には二錢といふ廉價で買はれる。八月になると闇魔こほろぎを十匹一錢で買へる。九月には黒雲雀、鉦叩、馬追が一匹一錢若しくは一錢五厘で買へる。だが鈴蟲と松蟲との値には、どの季節にも餘り變化は無い。非常に高いこともないが、三錢より安いことは無い。そしていつも需用がある。鈴蟲が一番人氣がある。毎年蟲商での利益の大部分はこの蟲の賣却で得られるのだといふことである。

四

前掲の値段表で分かるやうに、啼く蟲を十二種類東京で賣つて居る。人工的に養殖の出来るのは九つ、——即ち、鈴蟲、松蟲、蟋蟀さびざりす、邯鄲、轡蟲、闇魔蟀、金雲雀、草雲雀（朝鈴ともいふ）、それに大和鈴又の名吉野鈴。三種類は聞くところに據ると、養殖して賣るのでは無くて、捉へて來て市へ出すのである。それは鉦叩、馬追又の名機織、それと黒雲

雀である。だが毎年賣りに出る此等蟲類全體のうち、餘程の數はその本來住まつて居る處で捕獲したものである。

夜啼く蟲は、殆ど例外無しに、容易に捕ることが出来る。提燈の助を藉りて捉へるのである。明かりには直ぐ惹き附けられるから、提燈へ近寄つて来る。人に見えるほどに近附いた時、網か小さな籠かて容易く蔽ふことが出来るのである。雄と雌とは通例同時に取れる、對になつて歩き廻つて居るから。雄だけが歌ふ。が雌も繁殖の目的を以て、或る數だけいつも捉へる。雄と雌とは繁殖の爲めだけに同じ器に入れて置く。籠の中へは決して一緒に置いて置かぬ。番ふと雄は歌はなくなり、交尾後間も無く死んでしまふからである。

繁殖用の夫婦ものは濕つた土を半分許り入れた壺か或は土燒の器かへ入れて置いて、毎日新しい食べ物を供給してやる。長くは生きて居らぬ。雄が先きに死ぬるが、雌も卵を生んでしまふ迄しか生き延びて居らぬ。その卵から孵化した蟲の子は、生後四十日許りて皮を脱いで、それからずんずん大きくなつて、やがて充分の發達を遂げる。自然の状態では、ドヨウ即ち舊曆で極暑の時節の一寸前頃——即ち七月の央ば頃——孵化する。——そして十月に歌ひ始める。が、温かい部屋で育てると、四月の初に孵化する。そして注意して養ふと、五月の末前に賣りに出せる。極く若い折には、食べ物は搗き碎いて、それを滑ら

かな木片に貼つて與へるが、成長したのへは調理してないものを通例あてがふ——茄子だとか、瓜の皮だとか、胡瓜の皮だとか、或は白葱の柔らかい内部だとかの切り屑である。が然し特別な食物の要る蟲もある。——例をあぐれば、油きりぎりすは砂糖水と甜瓜の薄片とて養ふ。

五

東京の値段表に記載した蟲が總て皆同一様の興味を有つて居るのでは無い。そして、或る一種の單なる變種を指したもののやうに思へる名が幾つもある——尤も此點に於て自分は斷定的には言へないが。この蟲どものうちに未だ科學的に分類をされて居ると思へないのがある。ところで自分は昆蟲學者では無いのである。が、自分は此の小音楽者共のうち、より重要なものに就いて一般的な註釋と、彼等に關した無數の歌のうち二三の自由譯とは提供が出来る。——先づ、一千年前に日本の詩に讀へられて居るマツムシから始める。

マ
ツ
ム
シ

表意文字で書くと、此蟲の名は『松蟲』である。が、發音の上から見ると——『まつ』（待つ）といふ動詞と『まつ』（松）といふ名詞と同じ音であるから——『待つ蟲』といふ意味にもなる。マツムシを詠んだ日本の詩の大多數の基礎を爲して居るのは、主として此語の發音の上の此の二重の意味である。頗る古いものもある、——少くとも第十世紀へは溯れる。

決して稀な蟲では無いのであるけれども、松蟲は（擬音辭的にチンチロリン、チンチロリンと日本語で現はしてある）その音色——遠くて電鈴の音を聞くに似て居ると述べるが一番宜いと自分は思ふ銀のやうな小さな鋭い聲——が殊に清らで美はしいので大いに尊重されて居る。松蟲は松林や杉の森に棲んで居て、夜間その音楽を奏する。濃い鳶色の背をして、黄ばんだ腹をした、甚だ小さな蟲である。

松蟲を詠んだ一番古い歌で現存して居るのは多分『古今集』に——九百〇五年に宮廷詩人の貫之とその友人の貴族共が編輯した有名な歌集に——載つて居るものであらう。此蟲の名前の發音の上の前述の戯れを我々は此歌集に初めて認める。これは九百年以上の文學に通じて非常に澤山な詩人が幾千通りにも異つた様式に繰り返して居るものである。

あきの野に道もまとひぬまつ蟲の

聲するかたに宿やからまし

(讀人不知)

『秋の野で自分は路に迷つた。待つ蟲の聲の方角に宿を求めようか』で、言ひかへると『あの蟲が自分を待つて居る草の上で今宵は眠らうか』である。同じ『古今集』に松蟲を詠んだ貫之のもつと美しい歌がある。

夕されは人まつ蟲のなくなへに

ひとりある身そ置き處なき

(「玉葉集」)

同じ蟲をうたつた次の歌はそれほど古くは無いが、それに劣らず興味のあるものである。

來んと言ひしほとや過ぎにし秋の野に

人まつ蟲の聲のかなしき

(讀人不知、「後選集」)

大方の秋のわかれも悲しきに

涙をそへそ野邊の松蟲

(「源氏物語」賢木の巻)

風も無く更け行くまゝに松蟲の

聲すむ庭の月そ身に沁む

(作者不詳、「草野集」)

すずむし

此名は『鈴蟲』といふ意味である。が、斯くその音を指示して居る鈴は、頗る小さな鈴か、又は神道の巫女が神聖な舞に使用するやうな小さな鈴ひよたはの一束になつて居るのである。

鈴蟲は蟲類愛好者に非常に愛せられ居るもので、市へ出す爲めに極めて數多く飼育せられる。野生状態では、日本の方々に居るもので、夜間、或る淋しい處で、その群集が立てる音は——自分も一度ならずさう思つたのだが——つい早瀬の音と思ひ誤る位である。日本人が此蟲の形を『西瓜の種』——黒い種類の——に似て居ると述べて居るのは巧い形容である。非常に小さな虫で、背は黒く、腹は白いか黄味を帯びて居るからである。日本人がその音を形容して、リイイインだというて居る音は、容易に鈴のチンチンいふ音と間違へられる。松虫も鈴虫も延喜時代(九〇一——九二二年)の日本の歌に記されて居る。

次に記載する鈴虫の歌のうちには頗る古いのがある。他は比較的近時のものである。

こゝろもて草のやとりをいとへとも

なほ鈴蟲の聲そ古りせぬ

源氏物語「鈴蟲の巻」

たまさかに今日あひみれば鈴蟲は

むつましなから聲そきこゆる

(?)

小鈴振るすゝむし聞けは秋ゆふへ

野を思ふかな家に居ながら

(?)

月はなほくさ葉の露に影とめて

ひとり亂るゝ鈴蟲の聲

〔新英集〕

よその野になく夕くれの鈴蟲は

我が故郷のおとときこゆる

(?)

鈴蟲の聲の限りをつくしても

なかき夜飽かすふる涙かな

〔源氏物語「桐壺の巻」

ふり出て、なく鈴蟲は白露の

玉に聲ある心地こそすれ

(「新竹集」)

村雨の降るにつけても戀しきは

いかゝなるらん鈴蟲のはて

(「輪池叢書」蟲の歌合)

ハタナリムシ

ハタオリは、非常に優しい形をした、冴えた緑色の——美しい螽斯である。「機を織るもの」といふ意味の此の妙な名に對して二つの理由が與へられて居る。一つは、或る特別な持ちやうをして支へて居ると、そのものがく身振りが機織娘の舉動に似て居るといふのである。も一つの理由は、その虫の奏する音楽が、手織機で物を織つて居る折の、箴チヌと梭ヒの音——ダイイイ——チヨンチヨン！——ダイイイ——チヨンチヨン！——を眞似して居るやうに思へるといふのである。

ハタオリとキリギリスとの素性に就いて、古昔日本の子供等によく話してきかせた、面

白い民間物語がある。その話によると、ずつとずつとの古昔ひまじに、手仕事でもつてその盲目の老父を扶養して居た非常に親孝行な娘が二人居た。姉娘は織りものをし、妹娘は縫物をするのであつた。その盲目な老父が到頭死ぬると、この善良な二人の娘は非常に歎き悲しんで、これも亦間も無く死んでしまつた。或る晴れた美しい朝、今まで見た事の無い動物がこの姉妹の墓の上で音楽をやつて居るのが見つかった。姉の墓石の上には、娘の子が機を織る時にするやうな音を——ダイイイ、チョンチョン！　ダイイイ、チョンチョンといふ音を——立てて、緑色な可愛い蟲が居た。これが最初のハタオリムシであつた。妹の墓石の上には『ツヅレ——サセ、サセ！——ツヅレ、ツヅレ——サセ、サセ、サセ、サセ！』（襪襪ま綴せ、襪襪綴せ——つづれ、つづれ——綴せ、綴せ、綴せ！）と叫びつづけて居る蟲が居た。これが最初のキリギリスであつた。そこで誰れもその善心な姉妹の魂がその姿になつたのだと知つた。今でも秋ごとに此の二つの蟲は世間の人妻や娘子に、上手に機を織れよと叫び、寒さの來ないうちに一家の冬衣を繕へよと警めるのである。

ハタオリに就いて自分が手に入れることの出來た歌は一寸面白い空想といつただけのものである。自分がその自由譯を此處へ提供する二つの歌は古代のものである。初のは貫之ので、二番目のは、古典の上で『顯仲卿女』として知られて居る女詩人のである。

秋くれははたおるむしのあるなへに

唐錦にもみゆる野邊かな

〔古今和歌六帖〕

さゝかにの絲引かくる叢に

はたおる蟲の聲そきこゆる

〔金葉和歌集〕

うまおひ

ウマオヒは時々、それに能く似て居るハタオリと混同されて居る。が、本當のウマオヒ（出雲ではジュンタといふ）はハタオリよりも短くて太つて居るし、尾に鉤形の突起があるが、機織にはそれが無い。その上に、此の二つの蟲が出す音に幾分の差異がある。馬追の音楽はヂイイイ チョン、チョンではなくて、ツイインツヨ——ツイインツヨ！だと日本人は言ふ。

キリギリス

人が大いに珍重する此蟲には種々な變種がある。晝間歌ふアブラキリギリスといふは弱

い蟲で、容れ物に入れて置いて大事に飼養しなければならぬ。夜間歌ふタチキリギリスの方が市場で普通賣つて居るものである。捕獲して來て東京で賣るキリギリスは多くは板橋、仁井會及び戸田川附近のもので、そして高價を呼ぶ其邊からのが一番好いのだと考へられて居る。丈夫な大きな蟲で、甚だ明亮な音色を出して歌ふ。上總の九十九里からもつと廉い別種なキリギリスを東京へ持つて出る。が、これは不快な色をして居るし、一種特別な寄生蟲に犯されるし、そして聲の弱い樂師である。

他のところで述べたやうに、キリギリスが立てる音は日本語の『ツヅレ サセ、サセ』(襦袢綴せ綴せ!)といふ音に似て居ると言はれて居る。そして此蟲に就いて書かれて居る多くの詩歌の大部分は、その面白味は、上記の語への巧妙な然し反譯不可能な暗示に頼つて居る。だから自分はキリギリスの歌のただ二つだけの反譯を提供する。初のは『古今集』の中の一失名詩人ので、二番目のは忠房のである。

秋はきのいろつきぬれはきりきりす

わかぬことやよるはかなしき

きりきりすいたくな鳴きそ秋の夜の

なかり思ひは我そまされる

クサヒバリ

クサヒバリ即ち『草雲雀』は——アサズズ即ち『朝鈴』とも、ヤブズズ即ち『藪鈴』とも、アキカゼ即ち『秋風』とも、コスズムシ即ち『小鈴蟲』ともいふが——晝間歌ふ蟲である。非常に小さな蟲で、——ヤマトスズを除いて、これが蟲の合唱者中最も小さなものであらう。

キンヒバリ

キンヒバリ即ち『金雲雀』は有名な不忍池——東京の上野のあの大きな蓮池——のあたりに非常に澤山居たものである。が、近年稀になつた。東京で今賣るキンヒバリは戸田川や志村から持つて來るものである。

クロヒバリ

クロヒバリ即ち『黒黄雀』は稍々稀なもので、割合高價である。東京附近の田舎で捕るが養殖は出来ぬ。

コホロギ

この夜の蟋蟀には多数の變種がある。コホロギといふ名は、その音楽のキリキリキリキリ！——コロコロコロコロ——ギイイイイイ！から來て居る。その一變種エビコホロギ即ち『蝦コホロギ』は何の音も立てぬ。だがウマコホロギ即ち『馬蟀』や、オニコホロギ即ち『鬼蟀』や、エンマコホロギ即ち『閻魔蟀』はいづれも立派な樂師である。色は黒味

エンマは梵語ではヤマ。その名が此の虫に附けてあるのは眼が大きくてぎろぎろして居るからであらう。
閻魔大王の像はいつもその眼を大きくまた怖ろしげにしてある。

がかつた鶯色か黒て——一番上手に歌ふ變種のは翅に妙な波模様が付いて居る。

コホロギに關して興味ある事實は、多分八世紀の央ごろに編纂された『萬葉集』に——世に知れて居る日本の一番古い歌集に、此蟲が記載されて居る事である。一失名詩人の作として此蟲の名が記されて居る。次記の歌は、だから一千百年よりも餘程前のものである。

庭草爾村雨落^ふ而蟋蟀^つ之鳴音聞者秋付爾家里

クツワムシ

此の——擬聲的にガチャガチャとも呼ばれて居る——字書には「やかましく啼く一種の蝻蝻!」と頗る癢に障はる記述がしてある——異常な蝻には變種が數々ある。東京で普通賣つて居るのは、背が緑で、胸が黄がかつた白だが、鳶色のや赤味を帯びたのも居る。蝻は捕りにくい。が、飼ふのは易い。ツクツクボウシが太陽を愛する蟬類のうち一番驚嘆すべき樂師であるが如くに、クツワムシは夜の蝻蝻のうちで最も驚嘆すべきものである。

『響蟲』といふ意味のその名は、その音が、日本の昔風の響(クツワ)をチャリンチャリン鳴らす音に似て居るから來て居る。然しその音は實際はクツワ一個のチャリンチャリンとは、遙か聲高で、遙か複雑したもので、此の比喻の精確か否かは、此蟲が諸君の横で盛んに啼いて居る間は容易に識別の出來ないものである。自分自らの眼でもつて實際に見なくては、こんな小さな生物があんな素敵な音を出し得るとは信じ難からう。確に此音の振動は非常に複雑したものに相違無い。その音は、蒸氣を洩らす時のやうな、ヒユウといふ

鋭い、かすかな音で始つて、徐々に強まる。——それからそのヒユウへ突然に、四つ竹の音のやうな急速な、潤れた、カタカタいふ音が加はる。——それから、全機關が突進して運轉を始めると、そのヒユウとカタカタとの上に、銅鑼を叩くやうな急速なチャンチャンいふ音の流れが聞こえる。この音は、始まるも最後だが、歇むのも亦最初である。それから四つ竹の音が止まり、最後にヒユウといふ音が消える。——だが此の完全な合奏はひと休みも無しに、一度に數時間演奏を續けて居ることがある。夜、遠くから聞いて居ると、その音は愉快である。そして實際いかにも轡のチャリンチャリンいふ音に似て居るので、『人の通へぬ道に靈的な護送の曲を奏して居る』のだと古昔からたゞへられて居る此蟲の名に、如何に多くの眞の詩美が存して居るか、それを感じずには居れぬ程である。

クツワムシを詠んだ最も古い歌は和泉式部の次記のものであらう。

わかせこは駒にまかせて來にけりと

きくにきかするくつわむしかな

カンタン

此蟲は『カンタンギス』とも、『邯鄲のキリギリス』とも呼ばれて——濃い蔭色をした、夜の蟋蟀の一種である。その音色の——ツイイイイイン——といふ音は一種特別なものである。弓絃のビインといふ長びいた響に一番能くたぐへ得ると自分は思ふ。だが、此蟲の音には筆には書けない、耳を貫く金屬的な音色がそのビインの中にあるから、此の比較は満足なものではない。

六

特殊の蟲の吟誦に關する詩歌のほかに、一般に夜の蟲の聲に就いて——主として秋の季節に關係して——詠まれた古代近代の日本の詩歌は無數にある。非常に澤山な中から、幾百首の感情或は空想の典型的な、より有名なもの三四だけを自分は選擇して翻譯した。自分の反譯は言語の方から言ふと、逐字譯を去ること遠いのががあるが、原歌の思想と感情とは可なり忠實に表明して居ると信じて居る。

我がために來る秋にしもあらなくに

蟲のねきはまつそかなしき

(「古今集」)

夕つくよほのかにむしのなく聲を

秋の哀の初めとそきく

(土満、「草野集」)

秋の夜はねられさりけりあはれとも

うしとも蟲の聲をききつつ

(筑波子、「草野集」)

露しけき野やいかならん終夜

枕に寒き蟲の聲かな

(「新英集」)

秋の野は分け入る方もなかりけり

蟲の聲ふむ心地せられて

(「新竹集」)

鳴く蟲の一つこゑにもきこえぬは

こゝろこゝろに物や悲しき

(和泉式部)

故郷にかへりて蟲の聲きけは

昔をかたる心地こそすれ

(「秋草集」)

秋の野の草の袂に置く露は

音になく蟲の涙なるらん

(土滴、「秋草集」)

上に掲げた歌のうちに、作者がさうと想像した蟲の心の苦みに對する、眞の同情或は伴つた同情を表明するつもりのものが數々ある、と思ふ諸君があるかも知れぬ。然しそれは解釋を誤つたものである。此種の多數の作にあつて、その藝術的な目的は、間接な手段に依つて、戀の情緒の種々な相を——殊に、それ自らの熱烈な調子をば自然の狀貌と聲とへ與へる彼の憂愁を——暗示せんとするにあるのである。露は蟲の涙かも知れぬといふ奇怪な空想は、其誇張な言ひ方の爲めに、人間の涙が新たに灑がれたのであるといふ事を暗示すると同時に、悲みが非常なものである事を示さうとする考である。非道い村雨が降る間鈴蟲に同情せざるを得なくなつて、戀しさが餘りに募つて來たと一婦人が陳述して居る歌は、大雨の時分に旅をして居る或る戀しい人に對してのやさしい心配を實は語つて居るのである。また、『蟲の聲踏む』といふ句では、さういふ優雅な躊躇は、戀が起す、あの女のやさしみの強まりを思はせやうが爲めに述べて居る躊躇である。そして此間接的な二重暗示のなほ遙かに著しい例は、此一文の冒頭の小さな詩によつて與へられて居る。即ち、

西洋の讀者は、此詩の蟲の境遇を或は蟲の生せいを述べて居るのだと或は想像するであらう。が、恐らくは婦人であらうと察せられる此作者の眞の思想は、自分自らの悲みは前生に犯した罪の報である、だからして軽くすることは不可能なのだ、といふに在るのである。

これまで掲げた歌の大多數は秋に關した物で、また秋の感じに關した物である、ことを讀者は觀察されたであらう。日本の詩人の或る者は秋が鼓吹する眞の憂愁に——祖先の苦痛のあの漠とした不思議な年々の復活に、幾百萬年の間夏が死ぬるのに伴ふ幾百萬たびの記憶の祖先傳來の朧氣な悲哀に——無感じてはなかつた。然し此憂愁を述べた言葉の殆ど總てに於て、實際に指示して居る物は別離の哀愁である。秋には色の變化があり、木の葉の旋轉があり、蟲の聲の靈的な哀哭があつて、秋は佛敎的に無常を——別離の必然を——あらゆる欲望に絡まる苦痛を、——そして孤獨の淋しさを、——表徴して居るのである。

然しながら、よしや蟲を詠んだこんな詩歌が本來は戀の情をほのめかす積りであつたにしても、それはまた自然が——在りの儘の純な自然が——人間の想像力と記憶力とに及ぼ

す最も微妙な力を我々に反影しはしないか。日本の文學に於てもまた日本の家庭生活に於ても、蟲がかなでる音樂に對して與へられて居る地位は、我々西洋人はまだ殆ど發かず^たに居る方面に、或る美的感受性が發達して居るといふ證左となりはしないか。夜の祭禮に出て居る蟲賣の鋭い聲を立てる小屋掛は、西洋では最も稀有な詩人だけが先見して居る事柄を——秋の美の愉快な心苦しき、夜の聲音の不可思議なうるはしさ、森林田野の反響によつての魔術的な回想速進を——人民一般が普遍的に了解して居ることをすら公言して居るのではないか。確に我々西洋人は、蟋蟀一匹の單純な歌をさいて其心へ群れなす優美繊細な空想を起こすことの出来る國民からして、或る物を學ばなければならぬのである。機械的なことには彼等の師匠であることを——あらゆる醜惡の變化を盡くした人工的なことには彼等の教師であることを——我々は誇つても好い。然し自然的なことに關する知識に於ては——大地の歡喜と美とを感ずる點に於ては、——彼等は、古昔の希臘人同様に、我々よりも優つて居るのである。だが、到る處美に代ふるに實利なもの、因襲的なもの、野卑なもの、醜陋極まり無きものを以てして、我々西洋の盲目的進撃的な殖産主義が彼等の樂園を荒廢せしめ、不毛ならしめてしまつてから始めて、我々が破壊したそのものの妙味を悔み驚いて我々は了解しそめることであらう。

禪の一問

—

私の友人はうすい黄色の書物を開いたが、一見この佛書の版木師の忍耐の分る驚くべき文字である。漢字の活版は甚だ便利であらうが、こんな古い木版の美しさに比べると、どんなによくできた物でも、醜その物である。

『珍しい話があります』

『日本の話ですか』

『いえ、——支那の話』

『何と云ふ書物ですか』

『その書物の名を日本風に私共は「無門關」と読んでゐます。禪宗で特別に研究される書物のうちの一冊です。禪宗の或書物の特色の一つは、——これがよい例ですが——説明のない事です。ただ暗示を興へるだけです。質問が出て居るが、その答は研究者が自分で

考へ出さねばならない。答を考へ出さねばならないが、それを書いてはならない。御承知の通り、禪は言外に思想の到達すべき人間の努力を表はして居る物です、それで一たび言語と云ふ狭い物になつて現れたら、禪の特色を失ひます。……さて、この話は本當の話となつて居るのですが、ただ禪の一問としてここに使はれてゐます。この支那の話が三通りに違つてゐますが、私はその三つの正味を申しませう』

つぎのやうに友人は話した、――

譯者註 『類説離魂記』『剪燈新話』等、少しづつ話が違つて居る。たとへば蜀にゐた年數、子女の數など小さい點に於て。

二

『類説離魂記』に記され、『正燈錄』に物語られ、禪宗の書物である『無門關』に批評されて居る倩女の話、――

衡陽に張鑑と云ふ人がゐた、その人の小さい娘の倩は非常に美しかった。王宙と云ふ甥もゐたが——それも立派な少年であつた。この二人は一緒に遊んで、仲が良かった。一度鑑は戯れに甥に云つた、——『いつかお前を私の娘に見合わせるつもりだ』二人の子供はこの言葉を覚えてゐた、そして彼等は言名村になつたと信じてゐた。

倩が大きくなつた時、或位の高い人が彼女を娶らうとした、彼女の父はその要求に應ずる事に決した。倩はこの決心によつて非常に煩悶した。張の方では、餘りに怒りかつ悲んで、家を捨てて他の州に行く事を決心した。その翌日彼は旅行のために船を用意して置いて、日没の後誰にも別れを告げないで河を溯つた。ところが夜中に彼は自分を呼ぶ聲によつて驚かされた、『待つて下さい——私です』——そして彼は船の方へ、岸に沿うて走つて来る一人の少女を見た。それは倩であつた。張はこの上もなく喜んだ。彼女は船に跳び乗つた、それからこの二人の愛人は蜀の國に安全に着いた。

蜀の國で彼等は幸福に六年暮らした、二人の子供をもつた。しかし倩は兩親を忘れる事はできなかつた、そして再び兩親を見たいと度々思つた。たうとう彼女は夫に云つた、——『以前私はあなたとの約束を破る事ができなかつたから、——私は兩親にあらゆる義務と愛情を負うて居る事を知りながら、——あなたと驅落をして兩親を見捨てました。もう

兩親の赦しを願ふやうにする方がよくないてせうか。『心配せんでも宜しい』張は云つた、
——『今度は遇ひに行かう』彼は船を用意した、それから數日後に妻をつれて衡陽に歸つた。

こんな場合の習慣に随つて、夫は妻を船に残したままて先づ鑑の家に赴いた。鑑は如何にも嬉しさに甥を歓迎して云つた、——

『どれ程これまでお前に遇ひたかつたらう。どうかしたのだらうとこれまでよく心配してゐた』

宙は恭しく答へた、——

『御親切な言葉をうける資格はありませんて、恐縮です。實は私が參りましたのは御赦しを願ふためです』

しかし鑑にはこれが分らなかつたらしい。彼は尋ねた、——

『お前の云ふ事は何の事だらう』

『實は情と逃げて行つた事で、怒つていらつしやると思つて心配しました。私は蜀の國へ連れて行つたのですから』

『それはどこの情だらう』鑑は尋ねた。

『お嬢さんの情です』宙は答へたが、自分の舅に何か悪意のある計畫でもあるのかと疑つて來た。

『お前は何を云つて居るのだ』鑑は如何にも驚いたやうに叫んだ。『娘の情はあれからずつと病氣だ、——お前が出て行つてからこの方』

『あなたのお嬢さんは病氣ぢやありません』宙は怒つて答へた、『六年間私の妻になつてゐます、それから子供が二人あります、それで御赦しを願ふために二人でここへ歸つて來たのです。それですからどうか嘲弄する事は止めて下さい』

暫らく二人は黙つて顔を見合せてゐた。それから鑑は立つて、甥について來るやうに手招きをしながら病人の少女の寢て居る奥の入室に案内した。そこで非常に驚いた事には、宙は情の顔、——綺麗だが、妙にやせて蒼白い情の顔を見た。

『自分では口を利く事はできないが、話は分る』老人は説明した。それから鑑は娘に笑ひながら云つた、『宙さんの話ではお前は宙さんと墮落ちして、今では二人の子もちださうだ』

病人の娘は宙を見て微笑した、しかし何も云はなかつた。

『今度は私と一緒に河へ來て下さい』途方にくれた婿は舅に云つた。『私はこの家で何

を見たにしても、——お嬢さんの情は今丁度私の船の中に居る事は保證して云ふ事ができます』

彼等は河へ行つた、そして實際そこには若い妻が待つてゐた。そして父を見て、娘はその前に低頭して容赦を願うた。

鑑は彼女に云つた、——

『お前が本當に私の娘なら、私はお前を愛するばかりだが、どうも娘らしくも思はれながら、分らない事がある。……一緒にうちへ來て貰ひたい』

そこで三人は家の方へ進んだ。そこに近づく、その病人の娘、——長い間床を離れた事のない娘、——は大層嬉しうに微笑しながら、三人を迎ひに來るところであつた。そこで二人の情は互に近づいた。ところがその時——どうしてだか誰にも分らないが——彼等は不意に互に融け合つた、そして一體、一人、一情となつて、前よりも一層綺麗になつて、病氣や悲哀の何のしるしも残つてゐなかつた。

鑑は宙に云つた、——

『お前が行つてからこの方、娘は哑になつた、そして大概は酒を飲み過ぎた人のやうであつた。今考へると魂が留守になつてゐたのであつた』

情自身も云つた、——

「實は私はうちにゐた事は知りませんでした。私は宙が怒つて黙つて出て行つたのを見ました、そしてその晩船のあとを追かけて行つた夢を見ました。……しかし今となつてはどちらが本當の私であるのか、——船に乗つて行つた私か、それともうちに残つてゐた私か、——分りません」

「それが話の全部です」友人は云つた。「ところで「無門關」に君に興味がありさうな註釋がある。その註釋に云ふ、——「禪宗の五祖（五祖山の法演禪師）かつて僧に問うて云ふ、——『倩女離魂、那箇かこれ真底』」この話がこの書物のうちに引用してあるのは、ただこの間のためであつた。しかしこの間は答へてない。著者無門はただ云ふ、——「もしどちらが眞の倩女であるか決定する事ができるやうなら、それなら殻を出て殻に入る事は丁度ただ旅舎に宿するやうである事が分らう。しかもしこの程度のさとりを開いてゐないやうなら、みだりにこの世界を走らないやうに警戒するがよい。さうでないと地水火

風の四大が突然一散する時になれば、熱湯に落ちた七手八脚の（七顛八倒する）蟹のやうになるだらう。その時になつてその事について聞かなかつたと云つてはならない……さてその事と云ふのは——

『その事はもう聞きたくはない』私は遮ぎつた、——『それから七手八脚の蟹の事なども。私はその着物の事を聞きたい』

『着物と云ふのは』

『二人が遇つた時には、二人の倩女は違つた、——恐らく餘程違つた服装をしてゐたであらう、即ち一人は處女、一方は妻であつたから。二人の着物も一緒になつてしまつたのだらうか。たとへば一方は絹の着物、他方は木綿の着物であつたとして、この二つは絹と木綿の交織ませむすとなつただらうか。一方は青い帯、他方は黄色の帯をしめてゐたとして、その結果は緑の帯となつただらうか。……それとも一方の倩女はその着物からぬけ出して、それを蟬のぬけがらのやうに地上に置き去りにしただらうか』

『どの書物にも着物の事を云つて居るのではない』友人は答へた、『それだからお話がかさない。しかし佛教の見方から云へばその問題は頗る見當違です。その教理的問題は、私は想像するに所謂倩女の個性の問題です』

『ところでそれが答へてない』私は云つた。

『答をしないのが』友人は答へた、『一番よい答になつて居るのです』

『どうして』

『個性と云ふやうなそんな物はないのだから』

死者の文學

死んだればこそ生きたれ —— 佛教の諺

一

自分の住宅の後ろに、だが樹木の非常に高い帷とほりの爲め眼界から隠されて、墓地がそれに附屬して居る佛寺が一字ある。その墓地そのものは幾世紀を経た松林のうちに在る。そしてその寺は寂寞たる古雅な大きな庭にあるのである。その宗教上の名は自證院である。が、その寺は生地その儘の材木で——形が美しいか珍らしいかてそれを擇んで、ただ其枝と皮とを除つただけで建築師に使はせた、ヒノキの大きな丸太で——建つて居るが爲め、『節ナのある』即ち『瘤ノのある』寺といふ意味の、『コブデラ』と人は呼んで居る。が、斯んな瘤ノがあり、節ナがある材木は貴重である。非常に堅いまた一番長持ちのするもので、——日本ニッポンの室内の美しい床とこや極上な部分ぶぶんは、それに似た種類の材木で仕上げがしてある事實から

して忖度し得らるゝやうに、普通の建築材料より遙か高價である。瘤寺を建築することは王侯ならては叶はぬ事業であつた。また、歴史的事實として、或る王侯が、家族的禮拜場として、それを建てたのであつた。建築者は二様の設計を提出したところ、生地その儘の材木の方が廉くかからうといふ無邪氣な考で、そのうちより、風變りな設計の方を擇んだ、といふ疑はしい傳説がある。が、この寺がその存在を思ひ違ひに負うて居るか、さうで無いかは措いて、瘤寺は依然として日本の最も趣味ある寺院の一つたるを失はぬ。世間の人は、今は殆どその存在を忘れて居る。——が、それは家光時代には有名なものであつた。しかもその自證院といふ名は、其偉大な將軍の夫人の一人のカイミヤウから採つたもので、其素晴らしく見事な墓を、其墓地に見る事が出来るのである。明治前には、此寺は林と田畠との間に孤立して居た。が、市は、嘗てはそれを俗世間と隔離させてゐた緑の空地をば今は大半呑み盡くして、其門の眞前へ醜陋極まる新しい街路を推し出して來て居る。

此門は 瓦葺の、反つた支那風の屋根のある、瘤丸太て出來てゐる建築物は——其寺その物の奇妙な様式へのふさはしい前置きである。門屋根の、どつちもの破風の端から、三本の角の下に口を開けて居る鬼の頭が、參詣者を見下ろして居る。境内は、祈禱の時間を除いては、全く緑の靜寂である。子供は——恐らくはその寺が私有の寺だから——その

註 この葵の物は、實は手の込んだ瓦なので、「オニカハラ」即ち「鬼瓦」と呼ばれて居る。鬼の頭がどちうしていつも佛寺の門口の上に置いてあるのか、と當然質問があるであらう。それは本來は、佛教の意味での鬼を現はす積りでは無く、鬼を逐ひ拂ふのがその任務たる守護神を現はす積りであつたのである。鬼瓦は支那から朝鮮から——多分朝鮮からであらう——日本へ輸入されたものである。それは、日本で最初の屋根瓦は、かの新信仰を朝鮮の僧が輸入してから間も無く、そして日本佛教の開祖であり擁護者であつた皇子、聖徳太子の指揮の下に、製造された、と書物に書いてあるからである。大和の小泉村で焼いた、——が、そのうちに斯んな異常な恰好のものがあつたかどうかは書いてない。が、次記のことは注意する價値がある。朝鮮では今日なほ、恐ろしい顔が家の戸の上に——王宮の諸門にすら——描いてあるのを見ることが出来る。そして、ただ悪魔を嚇かして逐ひ拂ふ積りのその物が、鬼瓦の眞の起原になつたのでは無からうか。そんな瓦を初めて見た時、その顔が佛教の鬼に因襲的に與へられて居る顔に似て居る爲めに、日本人がそれを鬼瓦と呼んだのである。そしてその來歴が忘れられて居る今、それは守護の鬼神を現はして居るのだ、と普通に想像されて居るのである。この想像には、佛教の信仰に悖る所は少しも無い。——善な鬼神の傳説が澤山あるからである。その上、永遠の神理な理法では、極惡な鬼といへども、最後には佛陀にならなければならぬからである。

庭では遊ばぬ。地面は、その上の種々な灌木の極めて鮮かな葉も、對照の爲め黒ずんで見える程に、如何にも暖かい色の、厚い美しい苔で、到る處蔽はれて居る。そして、壁の土

臺も、記念碑の臺石も、鐘樓の石垣も、古い井戸の石疊も、同じ輝かしい苔で掩はれて居る。楓と松と杉とが、寺の正面を見えぬやう隠して居る。若し諸君が秋に參詣されるなら、庭中がモクセイの花の甘い濃い香に充たされて居ることを知られるであらう。この奇異な

註 學名オスマンサス・フラグランサ。濃厚な香の花を咲かせる植物は日本には甚だ少いが、これはその一つである。

寺を見てから、庭の西側にある黒門を通つて、その墓地へ入る價值がある、と諸君は思はれるであらう。

自分はこの墓地を徘徊するのが好きである——一つには、その巨大な樹木の薄明りのうちに、且つまたそのあたりに寄つて居る幾世紀來の静寂のうちに、人は市街とその擾亂とを忘れて、ただ空間と時間について夢見ることが出来るからでもあるが——それよりも、其處が美に充ちて、偉大な信仰の詩趣に充ちて居るからである。佛教にはその宗派毎にその教義があり、禮式があり、形式がある。そしてそんなものの特性が、その埋葬地の物の像や碑銘に反映されて居る——だから、経験のある眼には、天台の墓場を眞言の墓場と、

禪の墓場を日蓮宗派に屬するものと、直ぐに見分けることが出来るのである。ところが瘤寺では、佛教の數派に特有な碑銘や彫刻を、同時に研究することが出来る。創立は法華即ち日蓮の式であつたが、然し此寺は數代のうちに他の諸宗の管轄となつて——最後には天台になつた。——だからその墓地は今、種々な信仰の、徽號並びに碑銘の形式の、頗る興味ある混合を提供して居るのである。自分が、東洋の或る友の辛抱強い教示の下に、死者の佛教文學に就いて或る物を初めて學んだのは、此處であつた。

苟も美を感じ得る人ならば誰れも——いつからとは知れぬ古い樹木があり、極めて奇妙な恰好に刈り込んだ灌木の常緑な迷路があり、絨氈のやうに軟い苔の蒸した小徑があり、珍奇ではあるが疑も無く藝術的な記念物がある——佛教の古い墓地の魅力を自認する事を否み得まい。そして、初めて見た時でも、この藝術の或る物を理解するのに、佛教の大した知識は少しも必要では無いのである。諸君は、墓や水容みづいけに蓮が膨つてあるを認めるであらう、そして墓石の模様に八瓣の蓮華がある事を——假令よしやその八瓣は八智はちちの象徴である事を知らぬにしても——必ず認めるであらう。諸君は、法輪ほんを象どつたマンジ即ち卍字を——それと大乘哲學との關係は知らずとも——認めるであらう。諸君は恐らくまた、或

る佛陀の像を——その姿勢或は表號の、神祕的忘我イクシクシニに關し或は六通力リクツリキの表現に關しての意義は、知つてゐないにしても——認めることが出来るであらう。そして諸君は、お供物の墓の前に捧げてある香かうと花、死者の爲めに濺ぐ水の——素樸な動情力ベイツクに——假令よしやその祭祀をさせる信仰のより、深い動情力を察する事が出来ぬとも——感動されることであらう。が、佛教哲學者であると同時に優れた漢學者で無ければ、この大宗教についての書物での知識は、謎に充ちて居る世界に、諸君を依然手縁り無いものにして置くことであらう。あの稀代な文言は——御影石の墓に彫り込んである、或は、ソトバの滑らかな木の上に麗はしい筆で書いてある、あの絶妙な漢字での經句は——ただ尋常ならざる才能を有つた解釋者にだけ、その神祕を洩らすであらう。そしてその文言の姿に親しめば親しむほど——その文字譯は、大多数の場合、全く何物をも意味しない！と知つた後は殊に——その神祕が一層多く我々をじらせる。

どんな奇異な思想が、斯く記録されてしかも隠蔽されて居るのであらうか。その思想は、その思想を代表して居る文字ほどに、複雑であり微妙であるのであるか。その上、その文字の如くに、——別な惑星の言語かと思はせるやうな、夢想だも出来ぬ、驚くべき美を有

つたその文字の如くに——美しいのであるか。

二

微妙なといふこと、複雑なといふことに就いては、此の埋葬文學の多くは、イ、シ、ス、の、面、紗に比べる事が出来る。その文言——その文字は、大抵一語が二通りに讀めるのである——の背後に、その句の神祕が存して居り、それからまた、その背後に、西洋のあらゆる智慧よりも古く、そして空間の底無しよりも深い、一諾斯士教ノスチシズムに屬する幾聯の謎がある。幸にも、その最も幽玄な文言は興味最も乏しいもので、この隨筆の目的には餘り關係が無い。その大多數は、彫刻物には存して居ないで、墓場の、筆で書いた非恆久的な文學に存して居るもので、——石の記念碑に屬して居るものでは無くて、ソトバトバに屬して居るものである。ソトバトバといふのは、百年の間、一定の、然し後のちほど年月が増す、間隔を置いて、墓へ建てて、高い狭い白木の薄板である。

註「ソトバ」といふ語は梵語の「ステュバ」と同一である。當初は靈廟の意。後——記念若しくは他の

目的の——單簡な記念物の意を有つに至つた此のステュバは、佛敎と共に支那へ輸入され、それから、恐らくは朝鮮を経て、日本へ輸入されたものである。石造の卒都婆の支那での形は、日本の古い寺院の境内に多く見ることが出来る。木製のソトバは卒都婆の表象に過ぎぬ。その形が念が入つて居れば居るほど、明白にその歴史を偲ぶことが出来る。その上端の横が少し切り刻んであるのであるが、その切り目が、その最も美しい埋葬記念神の意匠を爲して居る所の、彼の（五大の象徴たる）方、圓、三角、半月、圓形の重なり合あひを示して居るのである。

さういふ文言を精確に翻譯するの無益なことは、より古い宗派で使ふソトバの上に書いてある文二つセツテシスを、逐字譯にして見れば、例證となるであらう。『法、界、體、性、智』といふやうな言葉に、或は、『空、風、火、水、地！』といふやうな祈願（實際これは祈願の言葉なのである）の言葉に、どんな意味を諸君は發見することが出来るか。之を理解するには、その神祕な宗派の教義では、宇宙は五如来と同一たる五大から出来て居るといふこと、その五如来の各々に他の如来がまた含まれて居るといふこと、その五つは、現象的顯現に於ては異つて居るけれども、本體は一つであるといふこと、を先づ知つて居なければならぬのである。だから大一つの名に意義が三つあるのである。例へば、火といふ語は、客觀的現象として炎を意味する。それはまた或る特殊な一佛の顯現として炎を意味する。

そしてそれはその上に、該の佛の屬性たる特別な智或は力を意味するのである。恐らくはこの教義は、五大と佛との關係の、次に掲げる眞言の分類の助を藉りれば、一層容易に了解が出来るであらう。――

一、ホフ・カイ・タイ・シヤウ・チ

(梵語でドハルマ・ドハートゥ・ブラクリット・グニヤーナ) 即ち『法・界・體・性・智』――萬物の實體となる智を意味する。これは大としては空である。空は人格化してはダイ・ニチ・ニヨ・ライ即ち『大日如來』(マハーヴイルカナ タサガタ)で、『智の印を持して居る』

二、ダイ・エン・キヤウ・チ

(アーダルサナ・グニヤーナ) 即ち『大・圓・鏡・智』――は萬象を顯現する神聖な力である。大としては地である。地は人格化してはア・シユク・ニヨ・ライ即ち『阿闍如來』(アクシヨビヤ)

三、ビヤウ・ドウ・シヤウ・チ

(サマター・グニヤーナ) 即ち『平等性智』――は人或は物體を備ばない智である。大としては

火、人格化して、火は、徳と幸福とを主とするハウ・シヤウ・ニヨ・ライ即ち『寶庄如來』(ラトナサムビヤブ タサガタ)

四、メウ・クワン・サツ・チ

(プラトヤヱクシヤナ・グニヤーナ) 即ち『妙觀察智』——は正しきと誤れるとを分別し、法を説いて疑を斷つ智である。大としては水、人格化しては、水はア・ミ・ダ ニヨ・ライ即ち『阿彌陀如來』(アマタービヤ タサガタ)

五、ジャウ・シヨ・サ・チ

(クリトヤースシュ・サーナ・グニヤーナ) 即ち『威所作智』——は涅槃に入るを助ける神聖な智である。大としては風、人格化して風はフ・クウ・ジャウ・ジュ・ニヨ・ライ(普通にはフ・クウ・ニヨ・ライ) 即ち『不空成就如來』(アミギヤシッドイ、或はサーキヤムニ)

註 然し、上述の佛陀と五大との關係は、この教義に於て、恆久的に定つて居るのでは無い、——それは哲學的に明白な理由に因つてである。或る時は釋迦牟尼は空と同じだとされ、阿彌陀は風と同じだ、等等とされる。上記の類別は南條文雄博士の採つて居られる次序に従つたのであるが、博士もこの次序が永遠のものを目すべきで無いと、ほのめかして居られる。

さて、この五如來の各々が他の如來を含んで居るといふ、また一切の物は本質に於ては一つであるといふ、教義は、『ボンジ』といふ——梵語の文字だと認め得られる——文字の異常な使用法で、その文言に象徴されて居るのである。五大の一つ一つの名は、四通りの——發音と形とは異つて居るけれども、佛敎家には何れも同じ意味を有つて居る——文字のうち、どの文字で書いても宜いのである。即ち、火を現はして居る四文字は、日本の發音に従ふと、ラ、ラン、リアン、ラクと讀める。——また、空を意味する四文字は、キヤ、ケン、ケエン、キヤクと讀める。で、五組になつて居る文字二十を、様々に組み合わせさせて、種々異つた超自然な力と、種々異つた佛陀とを、表示することが出来る。その表示は、五大の名の直ぐ後に置く、『シユジ』即ち『種字』といふ、附け加への表象文字の助をも蒙るのである。

讀者は今や『空、風、火、水、地！』といふ、祈願の文句の意味と、卒都婆の上に書いてある聖智の妙な名の意味とを理解されるであらう。が、唯だ一基の卒都婆すらもが提供する謎は、前記の例が思はせるよりも、遙かに複雑なものがあり得る。想像も及ばぬ折句アノロステイツクがある。羅針盤の方位に従つてそれぞれ置くべき文句の位置に就いて、宗派に依つて異なる、規則がある。或る漢字の、幾重もの價值に基づく神祕カバツツムな敎がある。神祕な銘文のこの題目

全體は、説明するのに幾卷の書を要することであらう。だから讀者は、もつと單純な、もつと人間的な興味を有つた文句の爲めに、神祕な方面は此邊で打ち切つても、遺憾には思はれまい、と自分は想ふ。

佛教の墓地文學の眞に興味ある部分は、主として經スートラ或は論サストラから採つた文から成つて居る。そしてその興味は、その文が表明して居る信仰の、内的な美に基づくばかりで無く、佛教教義の全體を、要を摘まんで、述べて居ることが分かるといふ事實にも基づくのである。それは、上記の神祕な銘文同様、卒都婆に書いてあるのであつて、墓石に彫つてあるのは無い。が、その祈願の文は普通は卒都婆の上方と前方とを占めて居るが、この經語は大抵は裏面に書かれて居る。

どの卒都婆にも、經語と祈願の文との他に、建てた者の名と、死者のカイミヤウと、記念年忌の名とが書いてある。時には短い祈禱の句が記され、或はまた、その卒都婆を建てしめた敬虔な目的を叙べた文が書かれて居る。その經語その物を、教義の體現に關係して、考察する前に、卒都婆の銘文の一般性と雛形との例を書き記さう。言うて置かなければならぬが、これは木片の表裏に書いてあるのである。が、どの文句が表面にあつて、どの文句が裏面にあるのか——その位置に關する規則は宗派に依つて異ふから——明記するを必

要とは考へなかつた。

一、日蓮宗の卒都婆

(祈願文)

空、風、火、水、地！——南無妙法蓮華經！

(記念文)

奉修（此處へ戒名）居士第三回忌爲轉迷開悟離苦得樂

(論の文句)

妙法經力 卽身成佛

二、日蓮宗の卒都婆

(祈願文)

南無妙法蓮華經！

(記念文)

施餓鬼法要會 爲佛果菩提之卒都婆也

(祈禱文)

願^三以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成佛道

註 此の祈禱文は普通、御經を讀んだ後、或は神聖な文言を寫した後、或は法要を營んだ後、唱へるものである。

明治三十年七月五日建之（建てた人の名を此處へ）

三、淨土宗の卒都婆

(祈願文)

南無阿彌陀佛！

(記念文)

爲（此處へ戒名を）建之

(經からの文句)

大圓鏡智 金口日 光明遍照 十方世界 念佛衆生 攝取不捨

四、淨土宗の卒都婆

(論からの文句)

大圓鏡智 經曰 深入禪定 見十方佛

(記念文)

爲智照院光雲貞明大姉註頓生善提也註一

註一 「大姉」は女の戒名に附記する語。禪宗では有夫の女に附ける。未婚の女には「信女」と附記する。

註二 善提は最上智。佛陀の境涯。

(祈禱文)

一見卒都婆 永離三惡道註

註 三惡道は地獄餓鬼畜生の三境涯。

(記録)

明治三十年五月一日 井上家建之

前記のものは、銘文の尋常な形式の見本として、確に十分であらう。讃歎されたり祈願されたりする佛は常に、その引用文をその經か論かから選ぶその宗派が殊に尊んで居る佛である。——時に依つてはまた、次記の禪宗の銘文のやうに、或る菩薩の聖力を嘆賞して居る。——

觀音經曰、十方諸國土 無刹不現身

時には、銘文が、次記の併記が暗示するやうに、もつと判然と賞讃奉呈の性質を帯びて居る。——

光明名號 攝化十方

爲大堅隱學居士頓生菩提

時には、その宗派の創立者の、佛として祀られた靈に向つて述べた、賞讃若しくは祈願の文句を見ることがある。普通に見るのは眞言宗の卒都婆に於てである。

南無大師 遍照金剛

註 遍照金剛は眞言宗の開山たる空海即ち弘法大師の敬稱。

稀に、死者の救済を祈る短い祈禱が、次記の美しい例に見らるゝやうに、知らず識らず詩の言葉を採つて居る。――

爲（ここへ戒名）大姉建之。禱依此功德 至福蓮華開花 結佛果

が、普通には、祈禱の文は至つて單簡で、特殊の佛語を使つて居る處が、相互の異なる點である。――

爲（ここへ戒名）居士追福無上菩提也

爲 得三菩提建此塔^註

爲 得阿耨多羅三藐三菩提建此寶塔行供養

註 「塔」といふのは、言ふまでも無く、その卒都婆を指すので、その卒都婆は眞の塔を表象して居るか、或は少くとも、出來得たらそんな紀念物を建てたいといふ希望を表はして居るかである。

卒都婆の單に記念的な文句に屬して居る、今一つ興味ある題目は、まだ記さずに居る、——即ち、死者の爲め營む佛式の法要の名である。そんな法要には二種類ある。死後百日間に行ふものと、百年の間一定の間隔を置いて營むもの——死後一年、二年、七年、十三年、十七年、二十五年、三十三年、五十年、百年忌である。禪宗にはこの記念法要に——法要をつみ撒と呼んでよからう——特殊な神祕的な名目があつて、その宗派の卒都婆には、小祥、大祥、遠波、遠方、冷照、一會とかいふやうな語をしるす。

が、今度は銘文そのものの、——卒都婆に書いてある物の主要部分であつて、佛教信仰の最高眞理を説明して居るか、或は東洋哲學の最も深奥な思想を物語つて居るかする、經か論かから得來たつた彼の引用句の——研究に轉じよう。

自分が癡寺で研究を始めた時、卒都婆の文言の詩美と哲理とに感心したのに劣らず、その平穩であり喜ばしげであるのに感心した。どれにも、悲哀の影さへ自分は發見しなかつ

た。その大多數は、自分には西洋の信仰よりも廣く且つ深く思はれる或る信仰の告白であり、——思想は永遠無窮の性質を有つて居ることを、あらゆる心は一つであることを、普遍の救済の確實なことを、述べて居る崇高な聲明であつた。そして他の驚くべき事共が、此の奇異な文學の中に、自分を待つて居つた。初めそれを繙譯した時單簡極まつたものに見えた文句や文句の斷片が、深く考へて註解を加へて見ると、實に驚くに餘りある深遠な意義を示すのであつた。句が——一見何の巧みの無い句が——突然二重の暗示を、——二通りの觀念を——平凡であつて同時に神祕な一種の美を——露はすのである。この最後の類に屬する銘文については、次記のが好個の例である。——

『^註一夜花開世界香』

註　これは淨土宗の卒都婆にあつたもの。

高等佛敎の言葉では、これは、魂が死の爲めに、恰も花の香が荅が開いて放たれるやうに、迷の暗黒から解放されたといふこと、また神聖な絶對が、即ち法界が、その新しい靈

の爲めに、庭全體が或る貴い植物が花を咲かせて芳しくされると同じに、爽快にされたといふこと、を意味するのである。然し、佛教の通俗な言葉では、極樂の蓮池で又一つ不思議な花が、此世で愛されて、そして死んだ者が至福の境地に入るやう靈的再生をしたが爲め、開いたのであるといふこと、また天は更なる佛が到來したので悦んで居るといふこと、を意味して居る。

が、自分は、この碑銘文學の特殊な美點を指摘するよりは、寧ろ自分の研究の一般的結果を記したいと思ふ。で、自分の目的は、教義上の或る順序に従つて銘文を排列し、考察することによつて、最も容易に達せられるであらう。

卒都婆の文句は種々様々であるが、直接にまた間接に、阿彌陀の蓮華の極樂に、——即ち、もつと普通に謂ふ、西方極樂に——關して居る。次に掲げるのは、標型的なものである。

『阿彌陀經』曰「皆悉到彼國 白致不退轉」

註 淨土宗の卒都婆から。

譯者註 阿彌陀經とあるは無量壽經とあるべきもの。

【金言「但受諸樂 故名極樂」】

註 ゴクラクといふは佛教の天界ヘヴンに對しての日本での普通語である。淨土宗の一卒都婆にあつたのを自分分が譯して貰つた前記の銘文は、小スクハーヴテイ・ヴューハ（『東洋聖書』ブテイスト マハヤーナ テキスツ を見よ）にある一句で、マクス・ミュラー氏はそれを原句通り十分に斯う譯して居る。——
【舍利弗よ、このスクハーヴテイの世界では衆生に身心とも何の苦といふものが無い。其處では幸福の根源は無數である。その故を以てしてその世界はスクハーヴテイ、幸福な處、と呼ばれて居る】

【南無阿彌陀佛 金口曰「念佛衆生 攝取不捨」】

註 淨土宗の卒都婆から。

が、上記のやうな文句は、通俗な信仰には貴いものであるけれども、天界は一時の境涯に過ぎぬもので、智者は之を望むべきでは無いとする高等佛教には、何等訴ふる所無いも

のである。實際、大乘の、極樂を述べて居る文句を見ると、それは本質的に迷妄な性質のものであることを——寶池があり、香風があり、異鳥が棲んで居る世界ではあるが、其處での風の聲、水の聲、歌ふ者の聲は、悉く皆、自我の非現實性を説き、萬物の非恆久性を述べて居る世界である。ことを暗示して居る。そしてこの西方極樂の存在すら、より深遠な意義を有つた他の卒都婆文句では、否定されて居るやうに思はれる。——次記のがさうである。——

本來無東西 何處有南北

註 淨土宗の卒都婆。

『本來』といふは、『無限』に關係してである。制約されて居る者の關係や觀念は、制約なき者に對して存在しなくなる。だが、此の眞理は、他の關係の世界を——強い者がそれへ昇つて行く至福の境涯と、弱い者がそれへ降つて行く苦痛の境涯とを——否定して居ることを實際含んで居るのでは無い。ただ憶ひ出を爲させるものに過ぎぬ。あらゆる境遇

は非恆久である、だから、より、深遠な意味では非實在である。唯一の實在は絶對である——無上の佛陀である。この教義は多くの卒都婆文句に見えて居る。——

青山元不動 白雲自去來

註 淨土宗の卒都婆。

『青山』といふのは『心の唯一の實在』を意味し、『白雲』といふはこの現象的宇宙を意味して居る。だが、この宇宙は心の一つの夢としてのみ存在して居るのである。——

若人欲了知 三世一切佛 應觀法界性 一切唯心造

註 禪宗の卒都婆。

修習善法 證諸實相

譯者註 原文は之を譯したもののやうに思ふが明らかでない

宇宙は一つの幻であり、人間の身體もまた、其肉感的自我といふ複雑な物を構成して居る一切の感情、一切の思想、一切の記憶と共に、一つの幻である。が、此消え行く果敢ない自我が、人間の内在の全部であるか？さうでは無いと、次の卒都婆は宣べて居る。――

一切衆生悉有佛性 如來常住無有變易

註 禪宗の卒都婆。

譯者註 これは「大般涅槃經」にある句。

華嚴經曰『本來本法性 天然自性身』

變はること無き者の性質を分有して居るから、我々は永遠の實在性を分有して居るのである。最高の意義では、人間も亦神聖なのである。――

是心作佛 是心是佛

なのである。

圓覺經^注曰 『始知衆生本來成佛 生死涅槃猶如昨夢』

註 プラチエカ・ブダ サストラ？ 禪宗の卒都婆から。

が然し、逐次涅槃に融入して、融入しながら『その境地へ還り来る』佛達はどうなるのであるか。彼等も亦幻であるのか——その個性も亦非現實なものであるのか。多分この疑問には——佛敎の觀念論があると共に、佛敎の實在論があることだから——多くの異つた解答が爲し得られるであらう。が、現在の目的には、次記の有名な文句が、充分な解答である。——

南無^注一心三世諸佛

註 これは禪宗の卒都婆から得たのであるが、天台及び眞言の祕密宗派でも用ひるといふことである。

絶、對に關しては、佛と人との間にすら、何等の相違も存在して居ない。――

成所作智 金言曰 『是法平等 無有高下』

註 これは眞言宗の卒都婆から。

否、なほ一層著名な或る文句に據ると、人格の相違すら無いのである。――

自^註、他、法、界、平、等、利、益、

註 これは禪宗の卒都婆から寫したものだ。「自我」は「自我と非自我」。「己れ」「おまへ」の意。佛の境地では「己れ」の「おまへ」といふことは無い。

それから、禪宗の卒都婆から得た、なほ一層驚嘆すべき文句は（自分の考では、佛教のあらゆる文句のうちで、一番著しいものと思ふが）、世界そのものも、幻であるにしても、なほ心と異つたものには無い、と宣べて居る。――

草、木、國、土、悉、皆、成、佛、

文字通りでは『佛となるであらう』即ち、いづれも佛の境涯に入る、即ち涅槃に入る、であらうといふ意である。我々が物質と名づけて居る物が、だからして、性質を變へて心に——無限の感性と無限の視力と無限の知識といふ屬性のある心に——なるのである。現象としては、物質は非實在である。が、超絶的に、それはその究極の性質に依つて、唯一の實在に屬するものである。

斯んな哲學的命題は、尋常な讀者の心を惑はしさうに思はれる。物質と心とを、究極の實在の二相に過ぎぬと呼ぶことは、ハーバート・スペンサーの學生には不合理とは思はれぬであらう。が、物質は一つの現象である、一つの迷妄である、一つの夢である、と言ふことは、何の説明にもならぬ。——現象としてそれは存在して居るので、それに附與されて居る或る宿命を有つて居るから、之を客觀的に考察しなければならぬのである。同じく不満足に感ぜられるのは、現象は因果カルマの聚合であるといふ陳述である。その聚合を形づくる分子の本性は何であるか。即ち、極く平明な言葉で云へば、その迷妄は何から成つて居るのか。

元の佛教經典にも、況してや佛教墓地の文學にも、その答を探すことは出来ぬ。そんな疑問は、^{スートラ}經よりも、^{サストラ}論に、取扱つてある。——またその兩者への種々雑多な日本の註譯書に取扱つてある。この謎への答を含んで居る、頗る奇妙なそして餘り人の知らぬ眞言の文句を、或る友人が自分に提供して呉れた。

眞言宗といふは、自分は述べて宜からうと思ふが、一種神祕な宗派で、殊に心と物質との同一不二たる事を述べ、なほ大膽にもその教義を進めて、その最も遠い論理的斷案へ持つて行つて居るものである。その開祖であり父である所の、弘法大師としてよりよく知られて居る、空海は、物質は本體に於て靈と異つたものには無い、とその『祕藏記』といふ書物で述べた。かう書いて居る、『草木非情成佛ノ義。法身ハ微細ノ身ニシテ五大所成ナリ。虚空モ亦五大所成ナリ。草木モ亦五大所成ナリ。法身ノ微細ノ身ハ。虚空乃至草木マデ。一切處ニ無シ不レレコト遍サ。是ノ虚空是ノ草木即法身ナリ。於ニ肉眼ニ雖レ見ニト麤色ノ草木一。於ニ佛眼ニ微細之色ナリ。是ノ故ニ不レシテ動一セ本體一ヲ稱一スルニ佛ト無シシテ妨碍一』

註 漢字では文字通りでは英語の『グライド』であるが、涅槃の境涯を意味する『無上のグライド』のグライドである。が、此處では、究極の物質、即ち本源の物質を意味して居る。之を『ニール』（固より近代の

意味で無く、希臘語の意味で」と譯することは、南條文雄その他知名な梵漢兩學者の是認するところである。

前文に『非情』といふ語が用ひてあるのは、矛盾を含んで居るやうに思はれるであらう。が、『四曼義』といふ書物の中にある問答で合點の行くやう説明されて居る。――

問 非情草木等若ヲシ謂フベシヤ有情トモ耶

答 應シ爾カ云フ

問 已ニ稱ニ非情ト何ヲ謂フ有情ト乎

答 此ノ三昧耶ノ所ニ本來已具ニスルカ如來ノ智印ヲ一故ニ曰ニ有情ト無レ過トカ

『ポテンシヤリ可能的に有情なのだ』と讀者は推斷されるかも知れぬが、その推斷は誤つて居る。眞言思想では、可能的有情では無くて、我々には不可見であり不可想像であるけれども、眞實でもあり實際でもある所の潜在レ的有情トなのである。上記の弘法大師の語に註譯を加へて、宥快といふ巨僧は、嘗にその師の意見を反覆して居る計りて無く、草木並びに我々が無生物と呼んで居るものが、徳を修めること！が出来ることを、否定するのは理に悖つて居る

と斷言して居る。彼は曰ふ、『心は法界一切に遍きものなれば、心それに遍き草木國土は悉く心を有せざる可からず。またその心を佛に向けて徳を修めざる可からず。遍く流入するものと遍く流入さるゝものとは同一不二なることに就いて、單に普通の言葉の上に於て物と心とを差別するが故を以てして、我が宗派の説く教を疑ふことあるべからず』と。どうかいふ風にして、草木や石が徳を修めることが出来るのか、經は實際何にも言うて居らぬ。が、それは、經は人間の爲めに書いたもので、人間が知り且つ行ふべきことだけ教へて居るからである。

恐らくは讀者は、物質の本性に就いての此の實に驚く可き佛教假説を辿つて、その驚くに餘りある結論に至ることが、今や前よりか能く出来ることであらう。(五大といふ考が奇矯だといふのでそれを侮つてはならぬ。これは一つの究極なものの様式に過ぎぬと述べて居るからである)我々が物質と呼ぶ所のものの形式は、悉く皆實は靈的な單位の聚合に他ならぬので、實體が呈する眼に見ての相違は悉くその單位の間で行はれる結合の相違に他ならぬのである。結合の相違は、その單位の特殊な傾向と親和力とが惹起するのである。——その單位各々が有つて居る傾向は、その單位の特別な進化的(『進化』といふ語を、純粹の倫理的意味に用ひての)經歷が齎す必然の結果なのである。眼に見ゆる實體の——

宇宙の幾百萬の太陽や惑星の結合は、總て、そんな靈的な究極物の親和力を示して居るのである。そして人間の行爲或は思想は、悉く、善い方へ或は惡るい方へ働く諸々の力が、或は結んだり解けたりして、絶大な時間を通して、痕をしるして居るのである。

草木や土地や一切の物體は、肉眼は盲だからして、實際にはさうで無い物に、我々には見えて居る。生そのものが——日の絶大な面紗が空間の無數の星を隠して我々に見せないのと稍々似て——實在を隠す幕になつて居る。が然し、墓地の文句は、純化された心は、假令肉體の裡に囚はれてゐても、忘我の幾瞬間、絶對と一致することが出来る、といふことを述べて居る。

一輪明月照禪心^は

註 禪は禪定（梵語の禪那^{ヂヤーナ}）眞の禪那に在つては、心は絶對と交通が出来る、と信ぜられて居る。これは禪宗の卒都婆から。

『一輪の明月』は無上の佛陀である。情の純潔な者には彼を見ることすら出来るのであ

南註無妙法 一心觀佛

註 天台宗の卒都婆から。

それよりも偉大な歡喜は何一つ無いと云ふ。――

如來註慈顏 超世無倫

註 淨土宗の卒都婆から。

が然し、一佛の顔を見るのは即ち一切の諸佛を見ることである。――

大圓註鏡智 經曰『深入禪定 見十方佛』

註 淨土宗の卒都婆から。

金口曰『一佛二佛 三四五佛』

註 禪宗の卒都婆。

といふその言は次の如く説明せられて居る。――

妙ミチ観カン察サツ智チ 經曰『遠離一切 心爲佛心』

註 禪宗の卒都婆。

日本の佛寺の古いのに參詣する人は、或る種の佛像に附いて居る鍍金の後光が、その性質異常なのに氣附かぬことは殆ど無い。光明の圓環や圓盤や楕圓を見せて居るこの後光のうち、せりもちがまへ迫持構のやうな或は炎の渦卷のやうな恰好をした、無數の龕が入つゝて、その一に佛か菩薩かが安置されて居る。『觀無量壽經』にある一句が、この象徴主義を日本の彫刻師に、思ひ附かせたのかも知れぬ。――

於圓光中 有百萬億那由他恒河沙化佛

註 「東洋聖書」第四十九卷百八十頁。

像も句も共に、前掲の卒都婆の文句が暗示する、多の中に一があるといふ彼の教義を現はして居る。そして、一佛を見る者は一切の諸佛を見ることが出来るといふ保證は、進んで、一つの大眞理を充分に理解する者は無数の眞理を理解することが出来よう、といふ意味を有つて居るものと受け取つてもよからう。

が然し、靈的に盲な者にすら、光明が竟には來るに相違ないのである。墓場の文句の非常に多くのものが、無限の愛が一切の者を監視して居ること、究極の普遍の救済が必らず到ること、を述べて居る。――

具一切功德 慈眼視衆生

註 禪宗の卒都婆から。

金剛寶塔 銘曰『六道衆生 厭離癡着 心身解脫 入無上道』

註 六道は天上、人間、阿修羅、地獄、餓鬼、畜生。これは禪宗の卒都婆。

經曰『教化衆生 令入佛道』

註 日蓮宗の卒都婆。

が然し最高の征服は唯々自己の努力に依つて成し遂げられるものである。――

滅三毒 出三界

註 禪宗の卒都婆 三毒とは瞋、痴、貪。

三界とは過去現在未來時である。三界の上に昇る（もつと文字通りに言へば、『から出る』）といふは、だから、時間空間を越えること——無限と一つになること、を意味する。

時間、を征服することは、尤も、佛陀にのみ可能なことである。が、一切の物は佛陀に成れるのである。或る少女の墓の上に書いてあつた次記の日蓮宗の經句が證明して居るやうに、女でも、まだ女で居るうちにも、佛果に達することが出来るのである。——

皆遙見彼 龍女成佛

これは、『妙法蓮華經』に載つて居る、龍王之娘の娑竭羅に就いての彼の美しい傳説注を指して言うて居るのである。

註 この傳説に就いては「東洋聖書」に收められて居るケルン譯の第十一章を見られたい。

四

前掲の文句は、ソトバ文學の全範圍を代表するものでは無く、それを暗示するものでも無い、のであるけれども、その哲學的興味は如何なる性質のものか、それは充分に示

して居るであらう。ハカ即ち墓の文字には別種の興味がある。が、その文字に就いて説く前に、墓そのものに就いて數言述べなければならぬ。自分は詳説を企てることは出来ぬ。そんな記念碑の種々様々な形式を描寫するには、説明圖を多く挿入した大きな書卷を要するであらうし、その彫刻の研究は——この隨筆の目的には縁の無い——佛教像形記載學とアイコングラフイーいふ大きな題目に屬するからである。

佛教の埋葬記念碑は、極めて惻れな田舎墓場の、表意文字が三つ四つそれに彫り込んである、研り磨きのしてない丸石からして、一つの祠を多くの佛像で取り圍み、其上には——多分支那の古いストゥバを模してであらう——傘形の圓盤或は日傘パラソル（梵語のチャトラ）の尖塔スバイが載せてある、複雑な小塔カレプトに至るまで、幾百といふ——異つた形がある。一番普通な部類のハカは質素である。より、好い部類のものは、その多數は、その何處かに蓮の模様が刻まれて居る。臺石が、蓮の花瓣を示すやうに、彫つてあるか、或は花が一個、その碑の表面に浮彫若しくは凹彫に切り込んであるか、或は（が、これは稀であるが）一莖の、多くの葉と花とが附いた、蓮がその紀念碑の一方の側か兩側かに、浮彫模様になつて居る。佛教の五、大を象徴した、金のかかつた部類の墓には八瓣の蓮の徽號が、その巧緻な建物の三箇處若しくは四箇處に、裝飾的な變形で、繰り返されて居るの

を見ること出来る。時折、墓石の上に美しい——佛か菩薩の像の——浮彫を見ることがある。そして地蔵の像が一體、墓の上に立つて居るのを見ることは、稀ては無い。が、此の部類の彫刻物は、大抵は古いものである。——例へば、コブデラの墓地にあるうちで、非常に見事なのは、二三百年前に造られたものである。最後に、死者の一家の飾章クレステ即ちモンが、墓の前面に、そして時々その墓の前に置いてある石の小さな水容タンクにも、彫つてある、ことを述べてよからう。

墓の文字に聖經からの文句が含まれて居ることは、滅多に無い。その記念碑の前面には、紋の下に、カイミヤウが、大抵は梵字か漢字か神祕な文字一つと一緒に、彫つてあるのである。左側面に普通は死亡の年月日の記録があつて、右側面にその墓を建てた人か家族かの名がある。少くとも今は、これが尋常普通な排置である。が、夥多の例外がある。そして文字は大抵は縦列に並べてあるから、銘文悉くを、頗る狭い碑の表面に置くことは極めて容易なのである。たまたま實名が——死者の記憶さるべき行爲の單簡な記録と共に——その石の何處かに彫り込んでありもする。カイミヤウと、屢々それに伴うて居るその宗派の祈願の語句と、を除いては、尋常普通の墓に彫つてある文字は、その性質セキネウラ非宗教的な

もので、この銘文の眞の興味はカイミヤウだけに限られて居るのである。カイミヤウ（戒の名）といふは、一向宗（一）し眞宗を除いて、あらゆる宗派の慣習に従つて、死者の靈に與へた佛教的な名なのである。特別な意味では、カイ（一）即ち戒（一）といふ語は、行爲（一）の戒（一）を指す。

註 戒には——俗人の階級に應じて五戒、八戒、十戒とあり、僧には二百五十戒、尼には五百戒、等等と——非常に種類が多い。此處で述べて置かなければならぬことは、死者に與へる此の死後の佛教的な名は、此の世での行爲にいつも何か關係があるものと思ふべきでは無くて、寧ろ來世に於ける戒（一）に關係のあるものとして、研究しなければならぬといふことである。だからカイミヤウは心靈的入門の一稱呼なのである。日本佛教の或る宗派では百戒會といふことをする。その時それに加はる者は別種のカイミヤウを——（一）新參者（一）として許可の戒名を——授かる。

一般的な意味では、戒は『行（一）の救濟』と翻譯してよからう。が、眞宗はどんな人間にもカイを許さぬ。行（一）に依つて直接に救濟されるといふ教義は容さずして、阿彌陀を信ずる信（一）に依つてのみ救濟されるとする。だから眞宗が與へる死後の稱呼は、カイミヤウとは言はずに、ホフミヤウ即ち『法名』と言ふ。

明治前には、或る人が存生中占めて居た社會的階級は、その戒名で知ることが出来るの

であつた。戒名に、讀んでキン デンと發音するもので、『寺に住む者』とか『院に住む者』とかいふ意味の、二文字を使用すること——或は、『寺』とか『院』とかいふ意味の、キンといふもつと普通な一字を使用することは、貴族と紳士とだけ爲し得る特權であつた。階級の差別は、更に接尾語で示されてゐた。コジ——我々のレーブラザに稍々相當する語と、ダイシ即ち『大姉』とは、サムラヒと貴族との戒名に、尊稱的に附けられるのであつた。そしてそれぞれ『信實な（信仰のある）男』『信實な女』といふ意味の、シンシ及びシンニヨといふ、より、單簡な稱呼は、身分の卑しい人の戒名の後へ附けられたものである。この形式は今猶ほ用ひられて居る。が、それが元有つて居た差別は殆ど無くなつて、騎士的な『キンデン』や、それに附隨するものの特權は、求めてその爲めに金を拂ふ者は、誰れもそれを勝手に附けることが出来る。が、いつでも、『ドウジ』と『ドウニヨ』といふは、子供の戒名に附けられたやうである。ドウだけでは子供ラウドといふ意味であるが、ジやニヨと結合すると、形容詞の意義での『子供』チヤイルドを意味する。——だから、ドウジを『チヤイルド・サン』、ドウニヨを『チヤイルド・ドクター』と譯してよからう。十五歳——十五歳になれば軍務に服し得るものと考へられて、昔の士の法規では丁年であつた——に達しないうちに死ぬる子供はさう呼んだ。誕生一年内に死ぬる子供の場合には、『ガイニ』及

び『ガイニヨ』といふ言葉が時折『ドウジ』及び『ドウニヨ』の代はりをする。ガイといふ綴音は此處では『乳兒』^{サクリンク}といふ意味の漢字を現はして居るのである。

佛教の宗派が異なるに従つて、戒名とその附加物^{アゼンダ}の作成の方式が異ふ。——が、この題目は特別な一論文を要するであらう。て、宗派に依つての二三の慣習を述べるだけにしよう。眞言宗は、その戒名の前へ梵字を一つ——或る佛の表象を——時々置く。——眞宗はその戒名へ神聖な釋迦牟尼の略字一つを冠らす。——日蓮宗は屢々その戒名の文字の前置きに、彼の有名な『ナムメウホフレンジキヤウ』（『南無妙法蓮華經！』）を以てし、——時々まその後へ『センゾダイダイ』（『先祖代々』）の語を置く。——淨土宗は、一向宗の如くに、釋迦牟尼の略字を用ひ、或は時々『南無阿彌陀佛』といふ祈願の句を用ひる——そして『名譽』或は『名聲』の意味を有つた表意文字二つを藉りて、四文字の戒名を造る。

——禪宗は、——戒名がただ二字だけの時は除いて——戒名の最初の一字と最後の一字と、それを合はせて讀むと、或る特殊な佛語に、或は神祕な句に、なるやうに工夫する。

戒名の文字の中の『宮殿』といふ語は、多數の西洋の讀者には、或は天上界の宮殿といふ意味では無いかと思はせるであらう。が、その考は謬つて居る。この語は何等天界的意義は有つて居らぬ。だが、それを銘の文字に使用するに至つた來歴は頗る奇妙である。古

昔は、高名な人が死ぬると、その人の靈の爲め行ふ特別な法要の爲めと、且つ又その人の遺物若しくは記念品を保存する爲めとに、一宇の佛寺を建立した。孔子教が、支那人は之をシンシユと呼ぶ、位牌を即ち葬禮の牌を日本へ輸入した。そしてその佛寺の一部分が、

註 これはその漢字の日本訓みである。

釋者註 「眞俗佛事編」に「儒家ニ所用ノ位版又ハ神主ト名ツクルモノ是ナリ云云」、「和漢三才圖會」に「與儒門神主同義也」とある。

その位牌を置きまた祖先の崇拜を行ふ、一個の禮拜堂の用を爲すやうに、別にされてゐたのであつた。そんな紀念の寺院を——疑も無く、その尊靈が或る時期に其處を占めると信ぜられてゐたから——『キン』即ち『院』と呼んだのである。——その語は今でも多くの有名な佛寺の名に——京都の智恩院といふやうな名に——残つて居る。時の經つに連れて、この慣習が當然變更された。特典が擴められ、貴族の數が増すに従つて、知名な人一人一人に、別々に寺を建てることはやがてのこと不可能になつた、からである。顯著な個人悉くは『院殿』といふ死後の稱號を與へて——そして此稱號へ想像的の佛寺若しくは『院』の名を加へるといふことが困難なことに佛教はなつて來た。だから今日は、大多數の戒名

に於て、『院』といふ語は、事情が許せば建てたであらうが、今はただ死者を愛し敬ふ者其の敬虔な希望として存在して居る寺を指して居るのである。

それにも拘らず、この院號の詩美は眞の意義を幾分か實際に有つて居るのである。その名は、殆ど總てみな、本當の佛寺に附けるやうなもので——徳や神聖な感情や瞑想の名で——歡喜や威力や赫灼や光り輝く無邊際の開展の名で——六道を去つて『再三墓地の人となる』の悲哀を脱れるあらゆる手段方法の名で——ある。

戒名の一般的性質と排置とは、二三の標型的見本の助を藉りると、一番能く了解が出来る。第一の例は、瘤寺の墓地にある、それに瞑想に耽つて居るボディサツトヴ マハーサーマ（勢至菩薩）の像が浮彫に刻んである、或る美しい墓にあるものである。この場合は、文字はその記念碑の表面に、上述の像の左右に、彫つてある。羅馬字になほすと、斯う讀める。——

(戒 名)

テ、イ、シ、ヨ、ウ、キ、ン、ホ、フ、サ、ウ、メ、ウ、シ、ン、ダ、イ、シ、

シヤウ・トク・ニ・ネン、ジン・シン、シモツキ、ジフ・ク・ニチ

(辭 譯)

貞松院 法窓妙眞 大姉

正徳二年 壬辰 霜月十九日

註 舊曆では十一月が霜月である。正徳二年は紀元一七一二年に當たる。(『壬辰』といふ句の意味に就いては、讀者はレオン教授の『^{ヂャパン}日本』四三四——三六頁を参照されるがよろしからう)

明瞭にせんが爲め、自分は死後の名そのもの(ホウサウ メウシン)を小さな頭文字で、殘餘をイタリクテ印刷した。最初の三文字——貞松院——は寺或は『院』の名を成して居

譯者曰 譯文では前者に、印を、後者に、印を右側に附けることにした。

る。松は、宗教的並びに世俗的詩歌に於て、それが四季に通じて鮮綠であるが爲めに、善の不變な状態の表象である。戒名に『眞』といふ語を使用するのは、絶對と一致して居る

境涯を示す。——『法窓』（法は此處では佛の境涯を現はして居る）といふ言葉では、此の世に在つてすら該れによつて無限の眞理を認めることの出来る徳を行ふこと、を意味して居ると理解しなければならぬ。最後の話のダイシ（『大姉』）は、自分は既に説明した。これよりも神祕でないが、それに劣らず美しいのは、或る若いサムラヒの墓に彫つてある、次記の日蓮宗の戒名である。——

クワウ・シン・キン、ケン・ダウ・ニツ・キ、コ・ジ

〔^註光心院賢道日輝居士〕

註 この美しい戒名は、松江の長満寺の日蓮宗墓地に埋められて居る自分の親友西田の墓の上に在ると同一である。

同じその石に、その妻の戒名が彫つてある。——

シン・キャウ・キン、メウ・エン・ニツ・クワウ、ダイ・シ

〔^註心鏡院妙圓日光大姉〕

譯者註 原著者は西田氏の戒名と同一なのに違着したやうにして居るけれども、まことは西田氏の戒名を特に世に傳へようといふ真心から、わざと此處へ持つて來たのである。その妻の、とあるこの戒名も、實は西田氏令室のそれである。

多分讀者は、日本の學者が自分に翻譯して呉れた、次に掲げる戒名の選集に、今は興味を見出すことが出来るであらう。宗旨は様々で、時代も異つて居るが、自分はただ階級と性とに従つて並べた。

〔男の戒名〕

光鏡院法性永全居士

靜光院雪峰孤月居士

心曉院光音妙輝居士

照始院純蓮花心居士

祕徹院眞誠自足居士

智照院法雲妙輝居士

眞誠院法誓宣理居士

自性院理海靜滿居士

慈德院總願行仁居士

最了院圓覺靜光居士

順心院釋秋觀居士

顯德院釋秀明居士

圓成院宗榮日休居士

秋月永昌信士

無過妙壽信士

法光青山信士

妙音禪覺信士

冬嶽貞心信士

註「冬の山の上の雪のやうに純潔な心の信ずる人」といふ意。

〔女の戒名〕

白證院殿光山院桂大姉

註　これは、その人の爲めに痛寺を建てた夫人の戒名である。「自證院」といふ語は、此處では、（ジ
シヨウキンといふ）さういふ名の寺そのものを指して居る。その漢字は「ジ・シヨウ・キン・デン、ク
ワウ・ザン・ケウ・ケイ、ダイ・シ」と讀む。文字通りでは「自證の御ん院に住まはるゝ、光山の曉の
桂、大姉」である。カツラ（ハオレア　フラグランヌ）は日本の詩想では、月と不可思議な關係を有つて
居る木である。その名を、此處でのやうに、月の意味に屢々用ひる。カツラノハナ即ち「桂花」は月光
の詩的語彙である。この戒名は院といふ名の後に、教稱の「教」の字が附いて居るのが目立つ。死なれ
たその方が高貴な人であつた徴號である。彫つてある年月日は、「寛政十七年（紀元一六四〇年）仲
秋、舊曆八月二十八日」である。

譯者註　右記註の原英文には、「この戒名は院若しくは寺といふ名の前に、教稱の「オイゴスト徳」といふ語が附
いて居るのが目立つ」と書いてあるけれども、原著者の思ひ違ひかと察するので、右の如く譯して置い
た。

月心院妙蓮淨光大姉

慈海院馨願妙貞大姉

明香院妙現蓮心大姉

春管院淨月明光大姉

眞光院慈日純心大姉

法性院芳空妙蓮大姉

無邊歡道信女

理達妙勇信女

放光冬月信女

梅室光影信女

蓮譽妙薰信女

〔子供の戒名——男〕

純淨院殿圓和速到大童子

註 尋常な「ドウツ」(男の兒)といふ語の前へ「ダイ」(大)と字を置くのは稀にしか見ぬ。多分その幼兒は高貴の生れであつたのであらう。その墓は瘤寺の、他とは別な地域に在る。そして死亡の年は——一七四七年に當たる——「延享四年」である。

花芳院殿淨林徹透大童子

註 この戒名を有つて居る墓は、前記の戒名のあるものの横に立つて居る。多分この二人の兒は兄弟であつたらう。兩方とも院號を形容して居る「殿」の字を有ち、また「ダイ」といふ敬稱を有つて居る。死亡の年は「寛延二年」（一七四九年）である。

霜光孩兒

露幻童子

春夢童子

春霜童子

空性童子

幽雲法雨童子

〔子供の戒名——女〕

法樹院殿智高明照大童女

註 多分高貴な家の子——或は前記の高貴な兩男兒の姉妹であらう。癩寺のその二つの墓の横に葬られて居る。今度は「ドウニョ」即ち「童の娘」若しくは「童の息女」といふ語の前に、矢張り「ダイ」といふ語が置いてあるに注意されたい。恐らくは此場合ダイは「グレート」と譯するよりか「グランド」

と譯した方がよからう。此の場合にも院號に「殿」といふ字が添へてあることを見られよ。死亡の年は「寶曆六年」(一七五六年)としてある。

雪泡孩女

輝幻孩女

梅光童女

夢幻童女

貞春童女

智鑄淨觀童女

芳雪妙勝童女

前に引用した卒都婆の文句を研究した後であるから、讀者は上記の戒名の多くの意味を推察することが出来るであらう。兎に角、『月』とか『蓮』とか『法』とかいふ、毎度出て來る言葉の意味は了解されるであらう。が、他の言ひ現はしには惑はれるかも知れぬ。で、恐らくは、少しく進んで説明するのは、無用ではあるまい。

死んだ者がより、高い幸福を得るやうにとの敬虔な希望を述べたり、靈界に於て特殊な境

涯に入るといふ或る保證を言うたりする他に、大多數の戒名は、直接又は間接にその消え去つた人物の性格にも言ひ及んで居るのである。例へば、廣くその廉潔を認められて居り、且つ堅固な道德的目的を有つて居た人ならば——死んだ自分の友人のやうに——『賢道日輝』と名附けても不適當ではあるまい。麗はしい性質を有つて居たので殊に記憶に残つて居る、童女若しくは若い人妻ならば、『梅光』とか『梅室光影』とかいふやうな、死後の名で記念せられてもよからう。——このどちらの場合にも、『梅』といふ語は、日本では此花は婦徳の——特に義務に忠實で謙遜缺くる處無いことを示す——表象であるから、死者の徳性を直ぐと思はせる語である。また、その慈善事業で名高かつた人の靈は、『聽願行仁』といふやうな戒名で尊崇してもよからう。最後に、高さや光りや香を現はして居る戒名の語は、大抵は、道德的模範の意義を有つて居る、ことを述べてもよからう。が然し、どこの國でも、碑銘文字には因襲的な偽善があり過度がある。佛教の戒名にも宗教的阿諛が毎度澤山に含まれて居て、美しい死後の名が、逆に美しい生涯を送つた人々に屢々與へられて居る。

我々が女の戒名のうちに『妙蓮』とか、『麗如曉蓮』とかいふ名を見出す時は、大多數の場合、斯くそれに譬へて居る美質は、ただ倫理的のものであると信じてよろしい。だが

例外がある。そしてそのうち最も著しいのは兒童の戒名が提供するものである。「春夢」、
『輝幻』、『雪泡』のやうな名は、實際にその死んだ者の形を指しての——或は少くとも、
消え失せた美しさや、優しさを懐ふ親の思を察しての——言葉である。が、こんな名はそ
の上に、佛教の無常の教義をば、殊に慰藉の目的に用ひた例ともなるのである。この戒名
を媒介に、子を失うた親々は、眞理の最高な言葉で斯う言ひ慰められて居るのだ、と言
うても宜からう。——

「あなたの子の此世の生涯は美はしく、また短かつた。春の一夢であり、消え行く輝か
しい幻であり——雪の泡であつた。が、永遠の大法からして、一切の形體は皆消え去らね
ばならぬのである。物質的な恒久は此世には一つも無い。ただ如何なる物にも住んで居る
神聖な絶対だけが——我々人間の一人一人の心に宿つて居られる佛だけが——永久に持續
するものである。その大眞理をば、あなたの慰安ともし、且つまたあなたの希望ともする
が好い！」

時折死後の名に與へられる、懐古的意義を有つた異常な實例が、東京の泉岳寺に葬られ
て居る四十七浪人の戒名に依つて提供せられて居る。(彼等の話は、『テイルズ・オブ・オールド・ジャパン 舊日本の物語』の

中のミトフオード氏のその同情ある流暢な反譯で、今は英語を讀む世界に能く知られて居る。彼等の戒名の顯著な特性は、一々みな——象徴的な意味に用ひられては居るが、相當な武士的暗示をも有つて居る——『刃』と『劍』との二字を含んで居ることである。その首領の大石内藏之介良雄だけが『居士』と呼ばれて居る。——彼の配下の者共は、それよりは卑い『信士』といふ接尾語を有つて居る。大石の戒名は『忠誠院刃空淨劍』である。その院號の史的意義に就いては、自分は注意を呼ぶ要は殆ど無い。彼の配下の者どもの戒名三つ舉げれば、他のものの例とならう。間瀬久太夫正明のは『刃譽道劍』である。大石瀬左衛門信清の戒名は『刃寛徳劍』である。それから堀部安兵衛の戒名は『刃雲輝劍』である。

この四つの戒名のうち、最初のと最後のとは、曖昧に思はれるであらう。そして四十七士の戒名のうち、まだ多くのものが、初め一寸見た時には、同様に謎のやうである。普通は、戒名にある『空』とか『虚』とかいふ語は、心靈が絶対に清淨である境涯を——無制約の實在の境涯を——意味するのである。が、大石内藏之介の戒名では、その意味は、純然佛敎的ではあるけれども、餘程異つて居る。此場合の『空』は『迷妄』とか『非實在』とかに了解しなければならぬ。——で、『刃空』といふ句の充分の意味は『物質的形體の

空なことを見て、迷妄をば刃の如くに貫く智である。堀部安兵衛の戒名では、同様に、『雲』といふ語を『迷妄』と解釋しなければならぬ。て『刃雲』は『迷妄を貫く知の刃』と説明すべきである。現象は空であると悟る智は、鋭く分かるところの即ち識別するところの智である、妙觀察智（プラトヤエクシヤナ・グニヤーナ）なのである。

五

恐らくは自分は讀者の忍耐に餘りに附け上がつて居る。が、如上の研究は、海の如くに廣く且つ深い題目の、瞥見以上のことを殆ど與へて居ないやうな氣がする。若しこれが、佛教の碑銘文學の哲理と詩美とに、少しでも西洋の興味を惹起するならば、自分が希望しても尤もと思はれること總てを、確に成し遂げたことにならう。

自分は他の場合にもさうされたやうに、佛教の文句を『實際以上に美しく』しようとして居る、といふ非難をされることは、ありさうに思はれぬても無い。此の非難は大抵いつも原物を全く知らない人から來るもので、自分はそれに對して何等の同情を有たぬ、不公正の精神を露はして居るものである。宗教が、人類の社會的並びに道德的歴史に、啓發的

な感化力を有つて居たものといふことを自認する者は誰れでも——幾千年の間人間行爲のより、高尚な進路を形造つた信心に對しては、尊敬を拂ふべきであるといふことを許容する者は誰れでも——偉大な宗教ならばどんな宗教でも、それには永遠の眞理が幾分か存在して居るに相違無いといふことを承認する者は誰れでも——自己の思想、或は語詞をその同胞が寛大に解釋して呉れるやうにと願ふと同様に、外國人の信仰の概念を寛大に解釋するのが、翻譯者たるものの最高の義務である、と思ふことであらう。漢字で書いた物を翻譯する時には、この義務が一種特殊な方面に現はれる。文字通りに譯しようを試みたならば、その結果は無意味ナシセンスなものを作り出すか、或は、極東人の思想には全然縁の無い思想の連續を拵へ出すことになるであらう。さういふ文句を取扱ふのに無上に必要なことは、その原の——『書いてある語』とは實際非常に異つて居る——表意文字が東洋人の心意に傳へる思想を發見し且つ之を説明することである。この隨筆中に收めて居る翻譯文は日本の學者が爲したもので、その現在の形式で、權能のある批評家達が是認して居るものである。

丁度此邊の處を自分が書いて居る時、彼の寺の庭の樹木の上から、満月が自分の書齋を覗き込んで、佛教的な短い歌を自分に憶ひ出させる。

分け登る麓の道は多けれど

同じ高嶺の月を見るかな

この短い歌に納められて居る眞理が分かつて居る讀者は、自分と一緒に癪寺の間で過ごした一時間を悔ひはされぬであらう。

蛙

手なついて歌申上るかはつかぬ

——古句

—

旅行の感覺印象の、より單純なものの中で、音響ほど——野天の音響ほど——或る異國の記憶と關聯して密接に且つ鮮明に残るものは鮮ない。自然の聲が——森や川や野の聲が——帯に従つて異つて居ることを知つて居るものは旅行者だけである。そして感情に訴へ記憶に徹して、此處は外國である、遠く離れた處であるといふ感じを我々に與へるものは、殆どいつも、その聲の調子或は性質の或る地方的特性である。日本ではこの感じを特に昆虫の音樂が——その西洋の同族の音聲語とは驚く許りに異つた音聲語を發する半翅類の音樂が——起こす。それとは程度は劣るが、日本の蛙の歌聲にも——尤もその音は寧ろそれが遍在な爲めに記憶に印するものであるけれども——またこの異國的な語調を認めること

が出来る。稻が國中到る處に——管に山の斜面や丘の巔にだけは無く、都市の境域内にすら——耕作されるのであるから、到る處に水の溢れて居る平地があり、従つて到る處に蛙が居る。日本を旅行した者で稻田の喧しさを忘れる者は一人もあるまい。

晩秋と短い冬との間だけ静まるばかりで、春が初めて目醒めると共に、沼地の音總てが——生きかへりつつある土壤そのものの言葉かと思ひ誤るほどの、湧き立つ無限の合唱が——眼醒める。そして彼の普遍的な生の神祕がその偉大な發言に——忘れられた幾千年の間、忘れられた幾代の勞役者が耳にしたものではあるが、疑も無く人類よりも幾萬世古いその偉大な發言に——存する一種特有な憂愁にをのくやうに思はれる。

さてこの幽寂の歌は、日本の詩人に取つて、幾世紀の間、氣に入りの題目となり來たつて居る。が、日本詩人には、それが一個の自然表現としてよりも、寧ろ愉快な一つの音として訴へ來たつて居る、ことを知つて西洋の讀者は驚かれるかも知れぬ。

蛙の歌ひ聲に就いては無数の詩が書かれて居る。が、普通の蛙を詠んだものと合點して居れば、その大部分は不可解なものとなるであらう。稻田の全體の合唱が日本の詩歌に於て頌讚を享けて居る場合は、幾百萬の小さなガアガア聲の混淆が——降雨の人を眠らせる

音に好くも例へられて居る、實際に愉快な感銘を與へる混淆が——惹き起すあの偉大な音量にのみ詩人はその快感を言ひ表はして居るのである。が、詩人が一個の蛙の聲を好い音だと述べる時は、稻田の普通の蛙について語つて居るのでは無いのである。日本の蛙はその多くの種類はガアガア聲のものではあるけれども（木の蛙は言ふまでも無く）著しい例外が一つある。日本での眞の歌ふ蛙即ちカジカである。これがガアガアいふと言ふのは、その音調に對して不正な言で、實はそれは鳴禽の囀りの如くにうるはしいのである。それは『カハヅ』と呼ばれて居た。が、この古名が後世に至つて俗間で、尋常普通な蛙の總稱たる『カヘル』と混同さるゝやうになつたので、今はただ『カジカ』とばかり呼ばれて居る。この河鹿は家内の愛物として飼養さるゝので、東京では數多の蟲商人が賣つて居る。その下の處に砂と小石、新しい水と小さな植木、の入つて居る水鉢が置いてあつて、上の處は細い針金を紗張りにした柘細工になつて居る、或る特殊な籠に棲まはせるのである。時にはその水鉢がトコニハ即ち雛形の風景園のやうにしつらへてある。現今は河鹿を春夏の歌ひ手の一つと考へて居るが、前には秋の音曲家のうちに部類分けされて居たもので、その歌ふのを聴くといふだけの樂みに、世人は田舎へ秋の遠足をしたものである。そして丁度種々な場處が特別な種々な夜の蟋蟀の音楽に有名であつたやうに、ただ河鹿が多く棲

んで居る所として著名な場所があつた。次にしるすのは殊に世に知れ渡つて居つた。

玉川と大澤の池（山城の國の川と湖水）

三輪川、飛鳥川、布留ふりゅうの山田、吉野川（何れも大和の國）

昆陽こんやうの池（攝津）

浮沼うきぬまの池（石見）

いかほの沼（上野）

さて、極東の詩にあんなに屢々賞讃されて居るのは、この河鹿、即ちカハツの調子の好い啼き聲であつた。で、昆蟲の音楽と同様に、現存して居る最古の日本歌集にそれが記載されて居る。延喜の五年（紀元九百〇五年）に、勅命に依つて編纂された『古今集』といふ有名な佳句類集の緒言に、その編輯長であつた紀貫之といふ詩人が、こんな興味深い意見を述べて居る。――

「やまとうたは、人の心をたねとして、よろづのことの葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしけきものなれば、こゝろに思ふ事を、見るもの、きくものにつけて、言ひ出せるな

り。花に啼くうぐひす、水に棲むかはづの聲をきけば、いきとしいけるもの、いづれか歌をよまざりける』

註 セティア・カンタンス——日本のナイティンゲール。

貫之の言うて居るカハヅは勿論近代のカジカと同じ動物である。普通の蛙が、かの驚くべき鳥のウグヒスと同時に歌ひ手として記載された譯は無^{わけ}い。それに、普通な蛙では、どんな古典的詩人にも、

手をついて歌申上るかはつかな 宗 鑑

のやうな面白い想像を鼓吹することは出来なかつたらう。

この小さな詩の妙味は、長上に對つて物を言ふ折に極東人がする禮式の姿勢を——^{からだ}身體を恭しく屈め、指を外側に向けて兩手を床の上へ置いて跪く姿勢を——能く知つて居る人には一番能く了解が出来る。

註 少くとも男子に對して古い禮式で定められて居る姿勢はさうである。が、規則は頗る複雑で、性に依つて異ると共に位階に依つても幾分か差異があつた。女子はこの姿勢を執る時、指は外側に向けず内側

に向ける。

蛙に就いて歌を詠むといふ慣習が、どれほど古いか、之を決定することは殆ど不可能である。が、遠く八世紀の中頃に出来た『萬葉集』に、其の時代にさへ飛鳥川は久しく蛙の歌ひ聲に名高かつたことを思はせる歌がある。

今もかも飛鳥の川のゆふさらす

蛙なく瀬のきよくあららん

この佳句類集中（シロコジ）にまた、蛙の歌ひ聲に珍らしくも言ひ及んで居る次のやうなのがある。

おもほえず來ませる君を佐保川の

かはつきかせすかへしつるかも

それから今一つの古代編纂の『古今和歌六帖』に、同じ題目のこんな面白い歌が保存されて居る。

玉川の人をもよきす啼くかはつ

このゆふきは惜しくやはあらぬ

だからして千百年以上の間も日本人は蛙の詩を作り來たつて居るやうに思はれる。そしてこの題目での歌で、『萬葉集』に保存されて居るものは、第八世紀よりもつと前にすら作られたものといふことは少くとも考へ得られることである。この題目は最古の古典時代からして今日に至るまで、いつもあらゆる階級の詩人に愛好されて居る。この關係に於て注目すべき事實は、ホツクといふ音格で作つた、かの有名な芭蕉の最初の詩は蛙に就いてあつたといふ事實である。この極端に短い詩形（五、七、五綴音の三行）の成功は、感情を描いた一個の完全な繪を創造するにあるので、芭蕉の原作

古池や蛙とびこむ水の音

は——之を英語になほすのは、不可能では無くとも、困難であるが——その業を完成して居るのである。その後この音格で書かれた蛙の詩はその數は實に莫大なものである。今日てさへ文學本業の人が蛙に就いての短い詩を作つて樂しんで居る。そのうち著しいのは、

日本の文學社會に『露石』といふ雅號で知られて居る青年詩人で、この人は大阪に住んでゐて、その庭の池に幾百といふ蛙を飼うて居る。間を置いて一定の日に、銘々、響應中に、その池の住者について句を一つ作らねばならぬといふ條件で、その詩人友達を馳走に招く。斯くして得た句を蒐めたものが千八百九十七年の春、表紙を飾り本文を説明する面白い蛙の繪を添へて、私かに出版された。

が不幸にも、蛙文學の範圍と特質に就いて、明亮な觀念を英語譯で與へることは不可能である。その理由は、蛙に關しての作品の大多數は、その文學的價値が主として不可翻譯的な處に——例へば、日本の外では理解不可能な地方的な引き事に、言葉のしやれに、それから二重にも三重にも意味を有つた語の使用に——存して居るからである。翻譯が出来るのは百句毎に二三句も無いぐらゐである。だから自分が企て得ることは少許の一般的觀察に過ぎぬ。

戀の詩がこの奇妙な文學の餘程の部分を占めて居ることは、戀人の會合の時刻がまた蛙の合奏の最中であること、少くとも日本ではこの音の記憶が殆どどんな淋しい場所でもの秘密な會合の記憶と一緒に聯想されること、を想ひ起こせば、讀者は奇怪に感じはされぬ

てあらう。そんな詩に詠んである蛙は通例カジカでは無い。蛙の方が無限の巧妙な手段を用ゐて戀歌の中へ取り入れてある。此種の近頃の通俗な作のうち自分は例證を二つ與へることが出来る。初のは、有名な諺井ノナカノカハヅタイカイヲシラズ（『井の中の蛙大海を知らず』）の暗示を含んで居る。世間の事を全く知らずに居る人のことを、井の中の蛙に喩へるから、次記の句を詠んだ者は、可憐な頓智を以てつれない言葉に應答して居る、情こころのうるはしい田舎娘であると想つてもよからう。

井の蛙花も散るなり月もさす（？）

二番目のは嫉妬するのも無理からぬ或る女が詠んだものと想像される。

水濁る池も蛙の高音かな（？）

戀歌のほかには池や田の普通の蛙を詠んだのが幾百もある。或るものは主として蛙が出す音の量に關したものである。

田の蛙水が鳴くかと思ひけり 一笠庵

苗代の水増せば増す鳴く蛙 (?)

田から田へ聲の續くや鳴く蛙 (?)

更けるほど池の蛙の高音かな (?)

夜は池の廣しと思ふ蛙かな はる子

船さへも留める堀江の蛙かな (?)

この最後の句の誇張は固より故意のもので、原作では感銘に乏しい句でも無いのである。世界の或る地方では——例へばフロリダや南部ルイジアナの沼では——蛙の喧噪は荒海の怒濤に似て居る。て、それを聞いたことのある人なら、音を障害だとする想像を鑑賞することが出来る。

他の句では蛙の音を雨の音に比較したり結び合はせたりして居る。

降る雨の音より低し初蛙 祥 平

雨音と聞いて居たれば蛙かな 京 魚

雨の音と蛙の歌に寝ねんかな (?)

また、次のホツクのやうに、小さな繪——爪先きのスケッチ——をただ描く積りの句もある。

畦道やかかはづ飛びこむ右左 鳴 雪

また、次のもさうである。これは千年前のものである。

山吹のうつる沼水なくかはづ (?)

また、次の面白い趣向もさうである。

花散るや蛙のこゑの香に匂ふ (?)

この最後の二句は、言ふまでも無く、本當の歌ふ方の蛙を詠んだものである。

蛙そのものへ——カヘルであらうがカジカであらうが——直接に物を言ひかけて居る短詩が多い。憂鬱なものもあり、愛情のあるものもあり、諧謔なものもあり、宗教的なものもあり、哲學的なものすらある。時には蛙を蓮の葉の上に休んで居る精靈になぞらへ、時にはしほれかかる花の爲めに經を讀んで居る僧にたくへ、時にはこがれて居る戀人に、時

には旅人を迎へ入れる宿主に、時には神々にいつも何か『言ひそめ』はするが、いつも言ひ終へるのを恐はがる瀆神家に見たてて居る。次の例句の多くは、露石が出版した最近の『圭蟲句集』から採つたものである。自分の散文譯のいくさりいくさが箇々別々な句であることを記憶して居なければならぬ。

客去つて何の蛙のかしこまる 翠竹

手をついて雨を迎ふか鳴く蛙 昇

古井戸の星かき亂す蛙かな 鳴雪

さらぬだに雨はねむきを蛙かな 金泉

大空へ何か言ひ出す蛙かな (？)

世は空と悟りし貌や浮く蛙 静江

山川に聲のよどまぬ蛙かな (？)

この最後の着想はカジカの優れた聲の力が珍重されて居ることを示して居る。

自分は自分が蒐めて貰つた幾百といふ蛙の詩歌のうちに、蛙の冷たさや濡り氣を述べたものを唯だの一つも發見し得ぬのを不思議に思つた。この動物が時折執る奇妙な姿勢に就いての戲談めいた少數の句を除いては、その厭いやらしい性質に言ひ及んで居るもので自分が見出し得た唯一の句は、

晝見れば見にくき顔の蛙かな

繞 石

といふ温和しい評言であつた。

蛙の冷たい、しつとりと濕つた、緊りの無い天性に關して斯く詩人が無言で居るのを怪しんで居る間に、突然自分の胸に浮かんだことは、自分が讀んだ他の幾千といふ日本の詩歌に、觸覺に關して詠んだものが全く無いといふ事であつた。色、音、匂ひの感じは、精緻驚くばかりにまた巧妙に表はされて居る。が、味感あじは減多に述べて無い、そして觸覺は絶對に無視されて居る。この無言若しくは冷淡の理由は、之をこの人種の特殊な氣質又は

心的慣習に求むべきかどうかと胸に問うて見た。が、まだ自分はその疑問を決定することが出来ずに居る。この人種は、西洋人の舌には無味に思へる食物で幾代も生活し來たつて居ることを憶ひ起こし、また、握手とか抱擁とか接吻とか或は愛情の他の肉體的表明とかいふ動作を爲せる衝動は、極東人の性質が實際全く知らずに居るものといふことを憶ひ起こすと、愉快なものにせよ、不愉快なものにせよ、兎に角味感と觸感とは、その發達が日本人は我々よりも遅れて居るといふ説を抱きたくなる。然しそんな説の反證となるものが多い。日本人の手業てわざの成功は、幾多特殊の方向に發達して居る觸覺の、殆ど比較にならぬほど精緻なことを確證して居る。この現象の生理學的意義は何であらうとも、その道德的意義は極めて重要である。自分が判斷し得ただけの處では、日本の詩歌は、我々が美的と呼んで居る高等な感性に微妙極まる訴へを爲しながら、劣等な感性は普通之を無視して居るのである。この事實は、他の事は何一つ表示して居らぬにしても、自然じぜんに對する最も健全な最も幸福な態度を表示して居るのである。我々西洋人は、純然自然的な多くの印象をば、或る病的な觸官感受性によつて發達した嫌厭の爲めに、之を嫌がりはせぬか。この問題は少くとも考察の價值がある。そんな嫌厭は無視して或は制御して——了解すればいつも愛らしい赤裸々の自然じぜんをばそのあるが儘に受け入れて——我々が盲目的に醜陋とか不恰

好とか嫌悪とか想像する處に美を——蟲に美を、石に美を、蛙に美を——日本人は發見するのである。日本人だけが百足蟲の形態を美術的に使用し來たつて居るといふ事實は意義の無い事であらうか。……模様のある草の上をば炎の小波の如く走つて居る金の百足蟲きん！
が附いて居る京都製の自分の煙草入を讀者諸君に見せたいものである。

月の願

三歳になつた時——永遠のくりかへしの法則で定められた通り——月が欲しいと私に云つた。

愚かにも私はさからつた、——

『お月様は餘り高いから上げられない。どうしても届かない』

彼は答へた、——

『長い長い竹竿なら届くてせう、そしてそれでたき落せばいい』

私は云つた、——

『そんな長い竹竿はありません』

彼は思ひついた、——

『屋根へ上つたら、竹竿が大概届くてせう』

——そこで私は月の性質と位置についてなるべく本當の話をしなければならなくなつて來た。

それが私を考へさせた。私はあかるさが一般の生類——昆蟲類と魚類と哺乳類——に及ぼす不思議な魅力について考へた、——そしてあかるさと食物、水、及び自由と關係した何か遺傳的の記憶によつて、それを説明しようと試みた。私は月を取つてくれとせがむ數へきれぬ代々の子供とその願を嘲笑する代々の親の事を考へた。それから私はつぎのやうな冥想に耽つた、——

私共は子供の月の願を嘲笑する資格があらうか。これ程自然の願はあるまい、それからその不合理な點について云へば、——大きな子供である私共は、全く同じ程度の無邪氣な願、——たとへば月をおもちやにして遊びたいと云ふやうな迷を昔起したり、それから何もつと無邪氣でない迷を色々起したりしたその感覺生活、個性を死後も續けたいと云ふ願のやうな、——もし實現されたら私共の不幸になるばかりの願を大概抱いて居るではないか。

ただ經驗的推理から見て、子供の月の願が愚かに見えるかも知れないが、私は思ふに、最高の智慧は私共に月よりも遙かに多くを、——太陽と明けの明星と凡て天の星の群よりもさらにもつと多くを願ふ事を命じて居る。

二

私は子供の時分に草の上に寝轉んで、夏の青い空を見つめながら、その中に融けて行きたい、——空の一部分になりたいと思つた事を覚えて居る。そんな空想に對しては、私の信ずるところでは、私の宗教の先生が無意識に責任がある、私が何か夢のやうな質問をしたので、先生は先生の所謂『汎神論の愚と惡』を私に説明しようとした、——その結果私は未だ十六の未熟な年に直ちに汎神論者になつた。そして私の想像はやがて私に遊び場所として空をほしがらせたばかりでなく、空になりたいと願はせるやうにした。

今私は考へるに、その當時私は大きな真理に全く近づいて、——實はその存在を少しも知らないでそれに觸れてゐたのであつた。即ちなりたいたいと云ふ願はその願の大きさに正比例して合理的である、——云ひ換へれば、願が大きければ大きい程願ふ人が賢いのである、

しかるに所_レ有_レしたいと云ふ願はその大きさの割合に愚である事が多いと云ふ眞理を私は意味する。宇宙の法則は、私共の所有したいと思ふ無数の物のうち極めて少数をしか私共に與へないが、私共が或はなれるかも知れない物になる助けはしてくる。有限で、又それ程弱いのは所有の願であるが、その力に於て無限なのはなりたい願である、そして人間のなりたい願の方は結局満足を見出すに相違ない。ありたい願から、單元が象になり驚になり或は人間になつた。恐らくただ第十等の黄色の太陽に照されるこの小さな地球では、神になるだけの時間をもたない、しかしその願がもつと巨大な太陽に照される系統へ投入して、彼に神の形と力を與へる事にならないとも限らないではないか。その願が形體の限度以外に彼をひろげて全能と一になるとも云へるではないか。そして全能は、頼まないで、月よりもつと輝いたとしてもつと大きなおもちゃをもつ事ができる。

私共が所有したいでなく、ありたいと願ふとすれば、——多分一切の事はただ願の問題である。人生の悲哀の大概は、たしかに誤つた種類の願のため、及び賤しむべくつまらない願のために存在するやうになる。全地球を所有して絶對君主となると云ふ願でも、或は憐むべく小さい賤しい願であらう。私共はそれより遙かに大きい願を抱くやうにしなければならぬ。私共は數十億の世界のある全宇宙、——そして宇宙或は無数の宇宙以上、——

—そして時間と空間以上になる事を願はねばならないと云ふのが私の信仰である。

三

こんな願の力は必ずや本體の精靈を會得する事によらねばならない。昔は人は石と金に、草と木に、雲と風に、——天の光、葉と水のささやき、山の反響、海の騒がしき言葉に、

——凡て自然の形と運動と發言とに、心靈を與へた。それから段々賢くなつたと自慢して、同時に信仰が少くなつた、そして彼等は『無生物』だの『不活動物』だのと云ふ、——實はそれは存在しない、——そして物質と勢力とを區別し、心意をその兩方と區別するやうになつた。私共は今日原始的想像の方が結局眞理らしい物に近かつた事を發見する。實際私共は今日私共の祖先が考へた通りに自然を考へない、しかし私共は遙かにもつと不思議な風に自然を考へるやうに餘議なくなつて居る、その後の私共の科學の啓示は原始的思想を少からず復興して、それに新しいそしていかめしい美を注入して居る。そしてその間に、——いつでも私共の生長と共に生長し、私共の力と共に強くなり、私共の高尙な感覺性の進化とともに段々發展して行く——私共の存在の最も深い源から生ずる野蠻な自然に對す

る古い野蠻な同情は、最後に無窮まで開展し反應して行く宇宙的情緒の形に高まつて行く運命をもつて居るやうである。

讀者はそれ等のいつからとも分らない古い感情について考へた事はないだらうか。……どこか大きな火事を眺めて居る時、その火の勝利と壯觀とを見て何等良心の呵責を感じないで歡喜して居る事に氣がついた事はないだらうか。——その非常に軽い接觸の、粉碎する分裂する鐵を扭る花崗岩を割る力を、無意識に羨んだ事はないだらうか、その大幻燈の怒つた恐ろしい光彩、——その龍の如き貪食と哮吼、——その弓狀の畸形、——その尖端の物すごい冲天と動搖を喜んだ事はないだらうか。讀者は山の風が讀者の耳に鳴つた時、幽靈のやうにその風に乗つて、——それと一緒に方々の峯を吹廻つて、——それと一緒に世界の面を掃いて見る事を願つた事はないか。或は大波の高く上り、押し寄せる、つぶやく突進と雷の如き破裂を熟視して、その巨大な運動と似たやうな衝動、——その烈しい白い跳躍と共に跳び、その強大なる叫號に加はらうと云ふ願を抱いた事はないか。……凡てこんな自然のありふれた力に對するこんな昔からの情緒的同情——これが現代の美學的發達と共に、非常に微妙な力に對する珍らしい同情、及び私共の知る力によつてのみ限られ

る願の將來の發達を豫想して居るのではないか。星から星へと戰慄するエーテルを知れ、——その感受性を會得せよ、——さうすれば精氣のやうな同情が進化して來るであらう。數多の太陽を廻轉させる力を知れ、——さうすればその太陽と一緒に道はすてに達せられたのである。

それからさらに、數世紀に渡る世界大の僧侶や詩人の思想の堅固な擴がりのうちに、——昔の子供らしい個體的生命の意義を併吞する或は變形する統一としての生命と云ふものと後の意義に、——人間美の古い禮拜よりも優勢になつた世界美の新しい歡喜の調子に、——曙の紅くなる事、星の輝く事、——凡て色の震ひ、光の戦たかきによつて起されるもつと大きな近代の喜びに、こんな進化の暗示がないだらうか。物其自身、詳説、外見はただ人を魅する力のために研究される事益々少くなつて、凡ての現象はただその象形文字に過ぎない無限の謎に於ける單なる一文字として研究される事益々多くなるではないか。

否、——私共が凡てある物、これまであつたと知られて居る物、——過去現在未來を一にして、——凡ての感じ、努め、考へ、喜び、悲み、——そしてどこでも部分、——そしてどこでも全體、——てありたいと願ふ時は必ず來るに相違ない。そして私共の前に、

その願の増大と共に、永久に無限性は擴がる。

そして私は——私でも——その願のお蔭で、凡ての形、凡ての力、凡ての状態になるてあらう、エーテル、風、火、水、地、——凡ての見える或は見えない運動、光、色、音、乾から名づけられた振動、——實體を貫く凡ての戦慄、——X光線の恐ろしい視力のやうに黒く描く凡ての搖動、——になるてあらう。その願のお蔭で、私は凡ての轉成及び凡ての終止の源、——形成の力、解體の力となるてあらう、——私の眠りの影をもつて、私のめざめと共に消散する生命を創造するてあらう。そして眞夜中の海の潮流に於ける燐火のやうに我が生死の大海に於て數十億の太陽の燃焼、數萬億の世界の旋轉が閃いて動いて通過するてあらう。……

四

——『さうだね』私がこの空想を讀むのを聞いた友人は云つた、『君の想像には佛教思想がある。尤も君はわざと説の肝要な點をいくつか避けたやうです。たとへば君は涅槃は願つては達せられないが、願はないで、達せられる事を知つて居る筈です。君の云ふ『な

りたい願』は提灯のやうに、暗い方の道だけを照らす事ができよう。月が欲しいと云ふ事については、君は猿が水に映つて居る月をつかまうとして居る色々な古い日本の繪を見た筈です。これは佛教の比喻です、水は感覺と觀念のまぼろしの流れて、歪んだ影でない本當の月は唯一の眞如です。そこで君の西洋の哲學者は人間は一段高い種類の猿だと云ふのは實は佛教の比喻を教へて居るのです。即ちこの煩惱の世界では、人間はやはり水に映ずる月の影を捉へようとして居る猿に過ぎないのです』

——『なる程猿です』私は答へた、——『神々の猿、——しかし太陽をつかむ事のできる『ラマヤナ』の聖い猿でもあるてせう』

譯者註 『ラマヤナ』は『マハバーラタ』と共に印度の古い二大敘事詩

回
顧

『無限の海の囁きと香ひと』

マシウ・アアノルドの『未来』より

初の諸印象

—

コムボジツトウオトケラフ
重複寫眞の表號的意義が進化論の哲學者達に考へらるる事のかく少きは何故ぞと私は不思議に思ふ。それを作成する幾個の影の混化合體するは、無数の生の混合によりて人格の組織を結成するかバイテラズミツク・ムミストの原生質化學を暗示するては無いか。感光板の上に形影を重複するのは遺傳の限り無き重複から各個體の形を成すと似ては居らぬか。……たしかにこの重複寫眞は頗る不思議なもの、——更に不思議なる諸物の暗示。

各人の顔は無数の顔の生ける重複である、——それは大宇宙發展の過程の爲め、生の感

光フィルムの上に重ねられし幾代また幾代の顔を含む。而して如何なる生ける人の顔も、或は愛し或は憎みて、よくそれを見守ればこの事實を表現する。友人又は戀人の顔は異れる百の面相を有つ、そして我々は彼又は彼女の『似姿』が寫されるとき、此等諸相のうち最もなつかしい相が反影してあらねばならぬと要請することを知る。我々の敵の顔は、——如何なる敵意をそれが刺戟するとしても、——それ自ら不變に憎らしいのでは無い、我は少くとも我々自らにとりて、その顔が價なきにあらざりし表現をなせし瞬間を見たことあるを承認せざるを得まい。

思ふに祖先以來の諸々の模型のうちで顔面表現の變調のうちに現はれんと試むるものは概していつも比較的近代のものである、——極めて古いのは重複の下に壓されて、漠然たる下層に變形し了はり、ほんの原形質的背景に過ぎぬものとなり、それからは稀なる奇怪なる場合に於ての外は、輪郭が分離して出て來る事が無くなつたのである。然しすべて規範的の顔には種々の模型の諸時代が盡く、氣分の變化に應じて、臨機の出現をするのである。母たる人は誰れでもこの事を知る。彼女は己が子の姿を日々注目し居りて單に生長によつて説明されぬ變化をそこに見る。時には親の一方に又は祖父母の一人に似ると見え、時には他の、また更に遠い親類に似て、また稀には家族の何人にも似てもつかぬ特徴を見

ることがある。(かくして、今よりも暗かりし昔の代には、魔チエンゼリオンの取換兒といふ畏ろしい迷信もあり得たのみならず、或る意味ではそれが當然であつた)。青年と大人の時を通じて遙か老年に至るまでも此等の變遷が繼續する、——但しいつも、もつと徐々として、且つ微かに——その間、一般的特徴は確實に増して來る、而して死そのものが生の中に嘗て認められなかつた或る不思議な表情を容貌に現はすことがある。

二

概ね我々が顔を認識するのは、何か確實な線の記憶によるよりは、寧ろ居常その帶ぶる表情の様式により、それが通常示す性質の調子によるのである。然し如何なる顔も凡ての時、全然一様では無い、而して例外の變化の場合には表情は認識の爲めに十分ならず、我々は或る定まれる特徴を求め、容貌から獨立せる或る細密なる表面上の特點を捉へねばならぬ。一切の表情は唯だ關係的永久性を有するのみ、最も強き印ある顔に於てすら、其變化は測定を難からしむることがある。思ふに、移動性は、或る制限内に於て、容貌の不規則なることと直接に比例しありて、——理想の美への接近はまた關係的不動性への接近で

ある。何れにしても、我々が何れかの普通の顔と親熟するに従ひ、我々がそれに見る變形の多様な事が益々驚くべく、——其表情の定まりなき精微は益々記述を難くし且つ人を迷はすに至る。そして此等は祖先以來の生命の満干に外ならず、——魂の流れたる人格の測るべからざる泉に立てる底波に過ぎぬ。肉の流動組織の下には絶えず死者達が型に入り來りては動いて居る——それは單一にては無い（如何なる現象のうちにも何等の單一なるものは無い）、諸々の潮流のうちには、また諸々の波動によりてである。時には愛の精靈の渦巻くことあり、そして旭がそれを輝かせる如くに顔に夜が明ける。時には憎の精靈の波立ち擾ぐことあり、そして顔は悪夢の如く暗くなり且つ歪む、——そして我々はその顔の裏にある心に對していふ、『汝は今汝のより良き自我で無い』と。然し我々が自我と呼ぶところのものは、それがより良きにもより惡きにもせよ、その諸々の連合の順序を永久に變化しつつある複雑性のものである。希望又は恐怖、喜悅又は苦痛の刺戟に應じて、各人のうちに、異なるリズムに於て、變化ある遷移をなしつつ、祖先以來の生命の数ふべからざる振動があらねばならぬ。最も靜穩なる制規の存在に於て、過去一切の心理の調子は眠つて居る、——原始的感覺衝動の鮮かなる赤色から精神的渴仰の紫に至るまで——恰も白光のうちに凡ての知られたる色の眠るが如くに。而して感受的なる生ける假面の上に、

心的潮流の強き交代毎に、死せる表情の影の如き復活が閃く。

諸々の顔とその變化とを見て、我々は直覺的に、我々に對抗する諸我と我々の自我との關係を知る。極めて少數の場合に、如何にして此知識が來るか、——如何にして普通の談に於て『第一印象』と呼ぶるゝ結論に達するかを、我々は説明せんと試むることさへある。顔は讀まれぬ。顔の與ふる印象は唯だ感ぜらるゝのみ、そして音の印象と等しく漠然たる性質の多くを有し、——我々の内に快き又は不快なる、又は兩者の幾分宛を具ふる精神状態を作り、——忽ち危險の感覺を呼び起すかと思へば、また溶くる如き同情を生じ、折はやさしき悲哀を招く。そしてかかる印象は、誤りに陥ることは稀なれど、よく言語を以て説明されぬ。それが正確なる理由は同時にそれが神祕の理由であり、——それは我々個人の經驗の狹隘なる範圍に求めがたき理由、——我々よりもずつとずつと古き理由である。我々が我々の前生を記憶し得れば、我々の好みと惡みの意味をもつと正確に知る筈である。何となればかかる好惡は超個人的のものであるから。一の顔に認めらるゝあらゆるものを認むるのは個人の眼では無い。死者こそ眞の見者である。然るに死者等は心の快苦の絃に觸るゝ以外に我々を指導し得ざる故に、諸々の顔の關係的意味を力あれども漠たる方法に於てのみ感じ得るのである。

少くとも直覺的に、超個人性は普通に認識せらるゝ。故に「性格の力」、「道徳力」、「個人的魅力」、「個人的磁氣」などの成句があり、其他個人が個人に及ぼす影響は單なる身體的條件から獨立せるものと知らるゝことを示す句がある。極めて云ふに足らぬ體が、恐るべき體を制し導く力を内に蓄ふることがある。血肉の人間は無限の過去より現在の瞬間に達する力の見えざる柱の見ゆる端末たるに過ぎぬ、——即ち非物質的なる大群の物質的象徴たるのみである。二つの意志の争闘すらも幻影たる兩軍の争闘である。唯だ一人の意志によりて多くの人格の征服せらるゝことは、——強制者の背後にある優等なる見えざる力を被強制者が認むることを暗示するのであつて——それは魂を平等と見る舊説を以てしては決して解すべくも無い。科學的心理學によりてのみ或る恐るべき性格の神祕を一部なりと説明し得る。然し何らかの説明は、或る形式又は他の形式に於て、心理的遺傳の莫大なる進化的事實を承認する上に存す。而して心理的遺傳は超個人的を意味す、——即ち前生の存在が重複せる人格に甦るの意である。

然るに、我々の倫理的見地より見れば、その超個人性なるものは我々がその用ゆる言語に於て、無意識的に心理的征服を現はすと思ひ居れど、實はそれは低級なる表現である。善の爲めに働くことも屢々あれど、力それ自らは惡のものである。而して被征服者がそれ

を承認するのは高等の道徳力を承認するのでなくて、惡のより大なる進化的經驗、侵略的
巧妙のより深き蓄積、苦痛を與ふる爲めのより重き能力を意味する、高等なる心力を承認
するのである。如何なる美名を以て之を呼ぶとも、かかる力はその起原は動物的であつて、
人間と、より下等の食肉の動物とに、共通なる惡意と犷猛とに尙ほ連絡あるものである。
然し超個人の美は、死者が信用を得ん爲めに、理想を鼓吹せん爲めに、愛を創造せん爲め
に、光と音樂の言語に於ての外は決して記述されぬ人格の愛嬌と驚異を以て存在の全圓を
輝かす爲めに、生者に貸與するその稀なる力のうちに表現さるゝ。

三

若し重複寫眞を分解し順序を讎してそのうちに混合しありし凡ての印象を分離すること
を得れば、かかる過程は、見知らぬ顔の姿が生者の網膜から遺傳せる記憶の神祕なる局處
へ——警察寫眞ポリスウオトグラの如く——遠方より寫し還さるゝ時に起ることを、粗笨ながら代表し得
よう。そこに電光の閃く如く速かに、影の顔はそのうちに結合されたる一切の祖先的模型
に分解され、その結果たる死者の判決は、ただ明言しがたき感覺によりて爲さるとも、な

ほいかなる性格の筆記證文が信ずべきよりも一層信ずべきものである。然しその信頼性は、見る個人の見らるゝ個人に對する可能性關係に限らる。人格の繊細なる平均に應じ、——觀察者の心理的作成に於ける遺傳せる經驗の質的の量に應じ——異なる人心の上に同一の姿は差別の大なる印象を残すであらう。一人には強く反撥的なる顔も、他の人には同じ位に強く愛着的なることあり、感情的に同類の性質の人々の群に於てのみ、略ぼ同じき印象を生ずるのであらう、此の能力が顔の成分のうち、或は歓迎し、或は警戒する明言し難き或る物を認むるの事實はたしかに、倫理的觀相學の或る法則を決するの可能なることを暗示する、然しかかる法則は必然に極めて一般的にして單純なるものたるべく、その關係的價値は教育されざる個人の直覺と決して同じきを得ざるものである。

實に、如何にしてかくあらぬことを得よう。何の科學がよく心理的結合の無限の可能性を測定することを企て得るものぞ。而して各人の容貌に於ける現在と過去の複合である、——生者はいつも死者の復活である。顔を見て起こす同情と恐怖、希望と反撥とはすべて再生と反覆である、——不可測の時を通じて働ける不可測の經驗によつて幾百萬の心のうちに創造せられたる感受性の反響である。現時の我が一友は、彼の祖先達と異なること、恰も一の流の單一なる漣波がそれより先きに存せし一切の漣波と同じからぬと一様であるが、

それに關らず彼は魂の複合によつて、他郷に在りて、他の生命のうちには、——記録されし
時間に、また忘れし時間に、——今尚ほ残る都市に、また存在せざる都市に、——我が
失せたる幾千の自我によつて、知られ且つ愛されたる巨萬のものとしてある。

美は記憶

—

あなたがはじめて彼女を見たとき、あなたの心は躍り、血管中に電氣が突然傳つた様な刺戟を覚え、同時に一切の感覺は變化し、その後も久しく變つたまゝでしたらう。

その突然の鼓動はあなたのうちにある死者の覺醒であつた、——そしてその身顛ひはその死者達の群集するので覺えたのであつた、——そして其感覺の變化は彼等の多數の願によつてのみ行はれたのであつた、——その理由の爲めにそれが一の強烈なものとなつたと思はれた。彼等死者は、彼女にやゝ似たる多くの若き人々を愛した事を覺えて居た。然し何處で、また何時といふ事はもう知らぬ。彼等——（この彼等は勿論あなたである）——はそのときより以來幾度か物忘れの川の水を飲んで居る。

物忘れの川の眞名は死の川である——但しそのことは古典辭書には典據が見えないが。

然しその川の水が疲れた魂に過去の事を忘れさすといふ希臘の談は全く眞實であるとはいはれぬ。いかにも一掬の水は記憶の或る形を麻痺し、又曇らす事もあらう——時日や名や其他細事の記憶を拭ひ消す事もあらう、——然し百萬掬の水を以てしても全く忘却させる事は出来ぬ。世界を破壊してもその様な結果を生ぜぬ。不要の點の外、何物も全然忘却されぬ。要點は、最上限に於て、物忘れの川水を飲んで唯だ臚にされるのみである。

或る一人が日よりも美はしく思はるゝのは、幾億萬の生命を通じて集められ、我が内に混じて或る一の漠たる優美な姿となれる幾億萬の記憶が存する爲めであつた。迷想が彼女はこの複合に偶然似て居ると思はせた——この複合、それは我が數へがたき過去の生の愛に關りしすべての死せる女の記憶の影であつた。そして我々が了解し得なかつた時、——我々は愛するものが魔女であると思ひ、そしてその魔術が精靈の業であり得る事を夢にも想はなかつた時、——その時の我々の經驗のこの初の部分は、それは驚異の時代であつた。

二

何に對する驚異？美の力と神祕とに對して。(何となれば我々の内に於てのみなりと、

又は一部は我々の内、一部は外に於てなりと、我々が見て、驚かされたのは美であつた)。然し愛されたるものは人間の女が實に愛らしくあり得るよりも、愛らしく見えた事を我々は覺えて居る、——さう見えたのは如何にして、また何故、それが興味ある問題である。

我々は美を見る力をもつて生れる——それは全然では無いが幾分か、色を識別する力をもつて生れると似て居る。大概の人間は美の或るものを辨ずる、または少くも美に近いものを辨ずる——但し能力の容積が異なる人によつて異なることは、山の容積が沙粒のそれと異なるより以上である。生れながらの盲人もあるが、通常の人は何かの美の理想を相續して居る。それは生き活きとしたのも、漠然としたのもあるが、何れの場合にも、それは種族が受けた無數の印象の集積、——即ち出生以前の記念の無數の斷片が有機的記憶のうちに入り結晶して一の重複せる映像となれるものを代表する、そこにその有機的記憶はいまだ現像されぬ寫眞の乾板上の見えざる映像の如く、しばらく全然暗黒のうちに止まるのである。そしてそれは個人牽引の無數の人種記憶の複合であるが故に、此理想は必然に、卓越せる人の心に於ては、現存する何物より以上の或るもの——決して人類の現状に於て實現されず、況んや超越されぬ或るものを代表する。

そしてこの人間の可能より美はしき、此複合と愛の幻覺との關係は如何。若し想像し難きものの想像を語ることを容さるべくば、私はここに敢て一の理論を立てて見たい。青年成熟の時に方つて、遺傳せる理想の姿の或る輪郭と略ぼ似たる、或る客觀的の美しきものが認めらるゝ時は、直に祖先以來の感情の波が久しく暗くされてあつた姿を濡ほし、之を明らかにし、之を輝かし、——そして感覺を迷はすのである。——何となれば生きた對象の感覺反射は一時的に主觀の幻影と混じ、——記憶の億兆より成る美はしき光明の精靈と混ずるのである。かくて戀人には平凡も忽ちにして不可能者となる、何となれば彼は實に超個人及び超人間のもの为之に混ずるを見る故に。彼は何等の理解によりても、その幻覺を覺らせらるゝには、餘りに深くその超自然に迷はされて居る。彼の意志に勝つものは何等の生けるもの又は觸れ得べきものの魔術で無くて、火の如く迂曲し、逃げ廻はり、且つ明かるき魅力である、——それは考へられぬ程夥しき代々の死者によつて彼の爲めに備へられたる精靈的の畏である。

謎の如何にしてに關して私が試むる理論はこれだけを限りとする。然し何故に就いては如何、——測られぬ過去のうちより甦れる此精靈的の美によりて成れる情緒の理由は如何。

美は一切の美的感情よりも古き超個人の歡喜と何の關係があるか。美の魅惑の進化的祕密は何であるか。

一の答が與へられ得ると私は思ふ。然しそれは此眞理を十分に承認せねばならぬ、曰く、美、それ自らなるものは存せず。

我々の美學の諸系統の一切の謎と矛盾とは、美が絶對なる或るもの、先驗的實在、永遠の事實であるとする迷想の自然の結果である。我々が美と呼ぶ現象は一の事實の象徴であること、——それは平凡を超えた一の發展の目に見ゆる表現であること、——存在する平均のものより以上に進歩せる具體的進化であること、それは確實である。これと似たる様にて優雅グレイムといふものも勢力の經濟の眞實なる表現である。然し進化的可能性には何の宇宙的境界もなき理なる故に、關係的にして且つ本來變遷的ならぬ優雅又は美の何等かの標準はあり得ぬ、また身體上の理想も——希臘の理想すらも——人間の進化または超人間進化の過程に於て實現の度を過ぎて俗化せざるべきものは無い。美の究竟は不可考、また不能である、美學の如何なる辭も永久變遷の一階段てふ觀念、即ち比較的進化に於ける一時的關係より以上を代表することは出來ぬ。美、それ自らは客觀性と誤られたる唯だの感覺又は感覺の複合の名に過ぎぬ、——それは恰も音、光、色がかつて實在と思はれたるに同じ

である。

然し心を牽くところのものは何か、——我々が美、感と呼ぶ抑制しがたき感情の意味如何。光、色、または、香を感覺すると同じく、美の認識は事實の認識である。然しその事實は呼び起こされたる感情に對して、一秒間に五百萬億回のエーテルの振動の實在が橙黄色の感覺に對して有するより以上の類似を保たぬ、それでも何れの場合にも事實は力の表現である。高等の進化を代表する美と呼べるゝ現象はまた生命に對し比較的優等なる適合、即ち存在の諸條件を充たすべき高等の能力を示す、そしてそれは魅惑を生ずる此の表現の無意識的知覺である。起こされたる願望は何等の單なる抽象の爲めて無くして、自然の目的的手段としての能力のより大なる完成の爲である。各人のうちに存する死者にとりては、美は彼等の最も必要とするもの、即ち力の現在を意味す。物忘れの川あるに關らず、彼等は、彼等が風采良き身體に住みし時は、生命が概して彼等にとりて安易且つ幸福なりし事、及び虚弱または醜惡なる身體に籠りし時は、彼等の生命は賤劣又は困難なりし事を知つて居る。彼等は幾度も健全なる若き身體にまた住まんとことを願ふ、——即ち勢力と健康と喜悅と、生命の争鬭の最良の賞與を獲得する速さと、それを保持する勢力を保證する形態を希望する。彼等は爲し得れば、過去の何れよりも良き條件を要し、如何なることあ

るも、より悪るき條件を要せぬ。

三

かくて記憶として見れば謎は解かれる、——それは生の目的の爲めの一切の身體的適合の測り難き記憶である。疑もなくこれまでかかる適應と連合したところのある、一切の消滅したる喜悅の、同じく測り難き遺傳せる感覺によりて、光榮あるものと爲されたる複合である。

この複合——これを無限とは云はれまいか。さう云うてよからう、但し之を作る死せる記憶の多數が語り難き爲めのみて無い。時間の無邊を通じてのかかる記憶の範圍の廣さまた深さもまた同じく語り難い……あゝ戀人よ、汝の精靈中の精靈たる、美はしき魔女は如何に纖弱なることぞ。然もその精靈の深さは夜を横斷する星雲帯の深さである、——埃及が昔時太陽及び諸神の母として見られ、世界の上に彼女の長き白き體を横たへしときの輝きの影である。燐の煙霧の如く、または夜に於ける船の過ぎし跡の如く、唯だその如く我は肉眼を以てそれを見得る。然れども望遠的視覺に貫かれて、それは宇宙の環の先方の

側として表現さる、——即ち或る生體の細胞の如く集合して見ゆる、然しその恐るべく遠き爲めにのみ然か見ゆる、幾千萬の太陽の暗き帯として表現さる。時[○]の夜[○]の恐ろしさの中に、——幾世紀の無言の深奥により、年の幾千幾萬の距てにより、——若きものの爲めに美の光輝ある夢を作る此等の千萬の群る記憶は各自相離れて存し、ただ愛の望の爲めに唯一の暗き柔らかき甘き幻影として集合的の形を取る。

美のうちの悲哀

美しき物は悲哀を生ずと歌ひし詩人が、美しき物として擧げたのは音楽、日没、夜、晴れた空、および透明の水。それ等の悲哀を彼は樂園パラダイスの漠たる魂の記憶にて説明せんとした。この説明は甚だ舊式、されどそれは眞理の影を有つ。何となれば美感と連想さるゝ神祕感はたしかに此世の存在のものならで、多數前生の存在のもの、——故に追憶の悲哀であるから。

別のところで私は何故に音楽の或る性質や日没の或る光景が悲哀を生ずるか、悲哀以上のもものさへも生ずるかを説明せんと試むる。然し夜の印象に就いては、この第十九世紀に於て夜が呼び起す感情は、美がもち來る悲哀と同列におかるべきかを私は疑ふ。一の驚くべき夜、——例へば熱帯の一夜、——輝き且つ生温く、熟せるバナナの如く曲りて黄なる新月空に懸かる夜、——それが他の小さき諸々の感情のうち、やさしさの感じを吹き込む事がある、然し光景の莊嚴に喚び起さるゝ主もなる情緒は悲哀では無い。天を最高度まで打割りて、晝は面を掩ふ無限が見ゆるために、生死の限りを思ふ現代の想を夜が濶

くする。夜はまた我々の継の神祕、——即ちこの小なる憐れな世界へ我等を縛る見られぬ力の記憶を強ゆる。而してその結果は宇宙感情である、——それは崇高の何れの感覺よりも大で、——一切の他の情緒を溺れしむる、——が、美が起こし來る悲哀とは決して同類でない。昔は夜の情緒は比較し難き程、容量が少かつたに相違無い。天空をば固定せる穹窿と信ぜし人々は、とても我々が感ずる如く暗の洪大なる盛觀を感じ得なかつた。而して我々が『ヨブ記』にある畏懼すべき星の大疑問を益々感嘆するに至るは、科學の進歩と共に、かかる疑問が、とてもヨブの心に入ることのなかつた思想と感情の形式に益々大なる訴へを爲しつづける爲めである。

譯者註 『舊約聖書』ヨブ記第三十八章第三十一、二節「なんぢ昴宿の繩索を結びうるや、參宿の繫繩を解きうるや、なんぢ十二官をその時にしたがひて引出しうるや、また北斗とその子星を尋き得るや」(邦譯)

然し完全なる日の美により、または自然の最も光榮ある様式の感興により刺戟さるゝ悲哀は別種の事實であつて、別種の説明を要する。其感情は遺傳せるに相違なければ、——それは祖先以來の苦痛の何等の集積によるのか。曇らぬ空のやさしさ、夏の日の谷の柔らかなき緑の眠、日の班點の影の囁く平和、それ等は何故に悲哀の感を催させるか。美的知覺

に續く何れかの遺傳せる情緒が何故、喜悅よりは寧ろ幽鬱なのであるか、……私は勿論海を見て、または海に似たる空間を見て、または巨大なる山脈の莊嚴によりて起こさるゝ洪大、永續、また力量の感覺には言及せぬ。それは崇高の感情で、——いつも恐怖と關係あるものである。美的悲哀は寧ろ欲望と關係がある。

『凡て美しきものは悲哀を來たらず』とは、多くの一般的提言の如く眞理に近き提言である、然し悲哀とその進化の歴史とは場合に應じて變ぜざるを得ぬ。美しき顔を見て起こる幽鬱は、風景を眺め、音樂を聞き、または詩を讀みて起こるそれと同じきを得ぬ。然し美的悲哀に共通なる或る一の感情要素、——即ち自然美を見て感ずる幽鬱の謎を解くの助となる感情の一般的の種類が無ければならぬ。かかる共通要素は遺傳せる憧憬、——物を喪ひたりとの漠たる遺傳の感覺、それが相關の諸感情によりて種々に掩影せられ、また賦性せられたのであると、私は信ず。此遺傳の異なる諸形式は、異なる美の諸印象によりて覺まされるであらう。人間美の場合に、美的認識は、極めて古き苦痛の遺傳により調節されまた掩影さるゝことがある、——この苦痛は憧憬の苦痛、無数の忘れられたる愛人との別離の苦痛である。色彩、メロデー、日光または月明の効果の場合には、美感に訴ふる感覺

印象は、同様に種々の祖先以來の苦痛の記憶に訴ふることがあらう。美しき風景を見て感ずる幽鬱はたしかに憧憬の幽鬱である、——即ち我々の死者の幾百萬の經驗によりて成るが故に、漠然たると共に容積の大なる悲哀である。

譯者註

サライ曰く、『自然に對する美感の純粹なるものは近代に發達したるものにて——自然の荒涼たる寂漠に對する感情は殆どルソオより古くはあらず』と。蓋し多くの人々は西洋の諸人種に關してこの言は寧ろ強きに過ぐと思ふてあらう。——それは極東の諸人種にとりては真て無い、彼等の藝術と詩とが反對に古き證據を示して居る。然し自然美の愛が文明を通じて發達したること、及び現にその中に含まるゝ多くの抽象的感情は頗る近代に起れるものなることを否む進化論者はあるまい。故に美はしき風景を見て我々が覺ゆる悲哀の多くは比較的近代に生長したるものである、但しそれはその情緒に伴なふ美的快樂の高等なる性質の或るものより新しくは無い。私は思ふにそれは主として圍壁ある都市の建設と共に人間が自然と離別の苦を忍び之を遺傳したるものであらう。或はそれと共に比較し難き程古き悲哀の或るもの、——例へば夏の過ぎ去るを悲む極めて古き哀感の如きが混

じて居るであらう、然しこれと其他流浪の時代より傳へたる感情は、我々が尙ほ我々の魂と呼ぶところのものが秋の大なる漠然たる幽鬱を感じるとき特に甦るのであらう。

智慧を増す世界はまたその悲哀を増すと正に同じく、天高く築ける都市に住む我等は人類の幼稚時代の喜悅、——森、峯、原の昔の自由、山の水の輝、海の息の冷かなる鋭き快さ、及びその永遠の叙事詩の雷の如き轟、などの喪失を悔ゆ。而して凡てこの忘れられて歸らぬ自然に對する文明の悔恨は、風景の美が我々に感ぜしむる大なる柔らかき漠たる哀のうち何としてか甦ることがある。

光景の愛らしさが眼に涙をさそふといへば、一の意味にてはそれは慥に誤である。それは光景の愛らしさではあり得ぬ、——それは我々の心に湧き起る過去幾代の憧憬である。我々の語る其美は眞の存在を有せず、死者の情緒のみがそれを在るが如く思はせる、——即ち何れの美感よりも頗る單純てまた古き理由の爲めに自然を愛した男女の既に久しく埋もれる幾百萬人の情緒がさう思はせる。生命の家の窓に彼等死者の幻影は群り來ること、恰も囚人が彼等の鐵窓の外なる輝く空、飛ぶ鳥、自由なる丘、閃く流を見んとして集まる如くである。彼等は舊時の彼等の望を見る、——世界の廣き光と空間、蒼穹の風に吹かる

る清美、曠野の百態の綠、遙かに見る山頂の精靈の約束を見る。彼等は幸なる羽翼あるものの空を切る音、蟬や鳥の合唱、水の波打ち笑ふ聲、風そよぐ木葉の低調を聞く。彼等は季節の香を知る、——すべての樹液の鋭き甘き香、花と果との香も。彼等は生ける空氣の刺激を感じず、——大なる青き精靈の身震ひも。

されど凡てこれは彼等の再生の隔障と被幕とを通じ、望無き追放者には家郷の夢として、——荒廢の老齡には幼時の幸福の夢として、——盲者には記憶に残る視覺の夢としてののみ、彼等に來る。

若さの香

一人の舊友が彼の若き日のロマンスを私に語りていふ、『彼女が家に歸るときになれば、私は燈無き外套クロウ・レウムの室でも彼女の外套をいつも採ることが出来た。私は暗でもそれが判かつた、それには甘い新しい乳の香があつたから……』と。

このことが何としてか私に英國の曉、乾草の野の香、ホオソオンの咲く日の香を思ひ起こさせた、——すると我が友の終の語が私の耳に尙ほ残るうちに、私の半生の上に閃いた記憶の大きな弧線を通じて思ひ出の房また房が連続して輝き出た。そして追想が燦つて夢想になつた、——若さの香の謎に就いての夢想に。

私の友が述べた若さパアム・ドゥ・ジュネスの香のその性質は稀なものでは無い、——但し私はこれが南方よりは寧ろ北方の種族に屬すると思ふ。それは完全な健康と立派な強壯とを意味す。然しそれには人を牽く力のもつと繊弱な變種がある。時にはそれが人をして赤道直下の地より來たれる貴重な護謨または香料を思はせ、時には薄い快さで、——麝香の精靈の如くてある。それは個人的では無い（身體的人格はたしかに香があるが）、それは季節の香である、——

人生の春の香である。然し春の香は、何處でも移ろひゆく悦びであるが、それさへ國土や氣候によつて異なる如く、若さの香にも變化がある。

それが一の性のものたる以上に他の性のものであるかは言ひ難い。我々は主としてそれを女子及び長髪の小兒に於て認めるのは、思ふに香は特に髪の中にある爲めであらう。然しそれは白百合の快さが然あるが如く、何時も技巧から離れてある。それは文明人の青年にも蠻人の青年にも等しくあり、——王子の成年期にも農民のそれにも同じくある。ただし病弱者には無くて、完全に快活な健康にのみある。思ふに美と同じく、それは倫理的の條件と或る漠たる一般關係を有して居るものかも知れぬ。個人の香はたしかにこの條件を有つ、——犬の識別が證據を示す如くに。

我々が花の香にて受ける快感は、永劫の遠き昔よりの情緒的反射であらうといふことを進化論者等は暗示して居る、即ちその昔にはかかる香は人間より遙かに低き祖先的生命のものには美味の食物の存在を知らせたといふのである。同一の假説によれば我々の若さの香の快感は連想の何等の有機的記憶に基するのであらうか。

思ふに其香が現今我々がそれに附帶せしめ得る何れの意義よりも一層明確でまた特殊なる意義を有つた時代があつたのであらう。花の香にて生ずる快感の如く、若き身體の健全

なる香によつて與へらるゝ快感は、少くとも一部分は、香の印象が生命保存の最單純なる衝動に直接訴ふるものありし或る時代から存續せるものであらう。かかるあり得べき原始的關係より久しき以前に分離したれば、花の香と若さの香は今に共に我々にとりては高等なる感情生活の刺激者、——漠然たる、されど容積廣きそして極めて精妙なる美感の刺激者となつた。

美によりて起こさるゝ感情の如く、香の快感は追憶の快感である、——無數の生命の無數の記憶への感情の魔術的の訴である。そして花の香が記録されぬ春の億萬に於て經驗されたる感情の精靈を呼び起こす如く、——若さの香も亦我等の中に我等の背後に消滅したる一切の人間存在の各々の春の環と連想さるゝ感覺の靈の如き存續を搔き起こすのである。

そして新たなる存在者の此の香もまた、理想的感情を喚起す、——それは愛のやさしさと殆ど同じく親たるもののやさしさを喚起するのである、其故はそれが測られぬ時を通じて子供の愛嬌と美とを連合させた爲めである。夜と死とのうちより、その死者との交感により、喚び起こさるゝものは、滅びたる感情の歡喜より出る影の如き身震ひ以上のもの、——無數の婚儀の喜びから來る幻影の反射以上のもの、——初生兒の絹の如き頭髮へ愛撫の唇を押す歡喜の或るもの、埋められし母達の億萬の忘れし喜びからの微かなる反流。

自然が鳥と蟲と花とに與へた最も稀な色は、輝く純な青である。青い花の咲く植物は他の何れの原色の花が暗示するよりも停滞しなかつた發達のより長い歴史を保有するものと信ぜられる、此色の高價なことは園藝家が青い薔薇または青い菊を造ることが不能であつたことと凡そ暗示されて居る。生き活きた青は或る驚くべき鳥の羽や、或る珍らしい蝶——特に熱帶地の蝶の翼に現はれる、——然しそれは通常進化的分化の莫大な時代を思はせる條件の下に於てである。要するに青は花と鱗と羽の進化に於て發達した最後の純な色であつたと思はれる。そして青を認識する力は赤と緑と黄とを辨別する力が既に得られた後に漸く得られたと信すべき理由がある。

この假説の眞偽はさて置き、諸原色のうちで青のみが現代までも高等文明の人種の視覺

にも、その最純な強さに於て、快い色として残されたことはたしかに注意に價する。輝く赤、輝く緑、輝く橙黄色、黄、または黄色は我々の第十九世紀の衣服や裝飾に稀に用ゐらるゝのみである。此等の色はそれが與ふる感覺の激烈な爲めにその分光的の純粹性に於て嫌はしいものとなつた、——此等は小兒や、全く未教化の者や、蠻人の原始的的美感にのみ受納されて残つて居る。現代の美人で耕の衣を着たり、また華美な緑の衣を纏ふたりするものが何處にあらう。我々は我々の室を黄色や蕃紅花サフランの色に塗ることは出來ぬ——その様な考ばかりでも我々の神經は攪される。然し天の色は今も我々を喜ばすことを止めぬ。空の青はなほ我々の最も美しい人が衣の色としてもよい、そして蒼の天井と蒼の壁の表の光彩ある魅力は——光明と面積の或る條件の下に——今尚ほ認められて居る。

或る人は云ふであらう、『それでも我々は建物の外面フアサドを空の青色に塗りはせぬ、そして空の青色の家の正面フアサドは橙黄色や紅の正面よりもつと不快であらう』と。それはさうだ、——然しその色の大きな表面に及ぼす効果が必ずしも不快である爲めては無い。唯だ生き活きた青は、外の輝く色と異つて、我々の自然の經驗に於て決して大きな不透明な立體と連想せられぬ爲めにのみそれは眞である。山々が我々に青く見ゆる時、それはまた精靈の如くなりそして半透明になる。その色を家の正面にすれば、それは怪異に思はれる、

何となれば不自然の觀念、——巨大な青い死せる立體が手の觸れられる程近くにあるといふ觀念を與へるからである。然し青い天井、青い穹窿、青い廊下の壁はその色と深さ及び透明性との關係を暗示して、空間と夏の光との爽快な幻覺を我々に生ぜしめる。之に反して黄は家の正面にふさはしい色である、何故なればそれは蒼白い廣き表面の上に暮れ行く日の美しい効果と記憶に於て連想されるからである。

然し青の次には黄が諸原色中の最も快い色として残るが、それは青の如くその凡ての光彩ある力に於て藝術的目的の爲めに度々用ゐられぬ。黄の蒼白な調、——特にクリーム色の調は、——藝術的使用の百般の變種を可能にする、然し輝きて燃ゆる黄はさうはならぬ。唯だ青のみがその最も生き活きた純粹さに於て何時も快い——但しそれは青の堅さ及び青の不透明の如き變則を暗示する様な塊狀の表現に用ゐられぬことを條件とする。

註 青い寶石、青い目、青い花は我々を癒ます、然しこれ等に於てその色は變則若しくは柔らかく見ゆることを伴ふ。空の青色の表裝をした書籍が見るに耐へられぬのは堅い不透明と青との不釣合な爲めであるらしい。私はそれより非道いものな想像し得ぬ。

西洋の影響に基づく不調和が一時出現して居るに係らず、——今も尙ほ色彩學の完全な

良趣味の國といふべき日本に於ては、殆ど何れの通例の街路の通景も色ガイヌキに對する種族の經驗を談る。その通景の一般調子は上の方は青みがかつた灰色で、下は暗い青で、それが白や冷たい黄の多くの小さな物件で鋭く浮き上がらせてある。この透明に於て青みがかつた灰色は屋根の瓦と幕張りを示し、暗い青は店の暖簾で、輝く白は漆喰を塗つた表面の狭い切れ、蒼白い黄は主として滑らかな木地と疊表の微かに見ゆるのである。諸々の色の廣い幅が更に暖簾や看板に書いた白地に黒（時には赤）、青地に白又は金色の無数の文字の點點で浮き上がらせられた柔らげられる。強い黄、緑、橙黄、紫は見られない。衣服にもまた灰色と冷たい色が多い、若し小兒または若い娘が着けて居る、すべて輝く色の衣裳または袴を見ることあらば、その色は空の青か、または莖色で、それに蒼を燃え立たすに足るだけの赤が混じて居て、精妙な光彩の虹の莖色と見ゆるのである。

註 此論文は數年前に書いたのであつた。一八九七年の間に私は日本到着以來初めて、季節の流行に暗い線と薄い黄の散らしてあるのを注目した、然し衣服の一般調子はそんな古趣味にとりての例外の爲めに殆ど影響されない。薄い黄は唯だ小兒の或る帯にのみ見られた。

然し私は美術や工藝に關しての青の美的價值を談り、または光のエーテルの一秒に六千五百億回振動の産としての青の視覺的意義を語らうと欲するのでは無い。私は唯だ其色の心理に就いて、——その主觀的進化の歴史に就いて何か云はうと思ふ。

髓に同じ青の現はれて、異なる人々の心に感情の異なる程度を生じ、そして不同の經驗の記憶再現から全く異なる空想を活動させることがある。然しかかる主として個人的で且つ皮相的なる心理的變化は別として、此色が一般の人の心に快感の共通性を喚び起こすことは疑が無い、——それは活潑な身震ひ、——感受性と想像の一層高い地帯と誤無く關係しある情的活動の調である。

私自らの場合には生き活きた青を見るといつも漠然とした喜びの情が伴つた、——その強さは其色の光の度で多くなり少くもなつた。そして旅行中の一の經驗、——アメリカの熱帯地への航行、——の時に此感情は歡喜となつた。それは私をはじめて此世界に

於ける青の最も壯大な光景——メキシコ灣流の光榮——を見た時であつた、その魔術的莊嚴が私の感覺を疑はしめた、——百萬の夏の空がそれを作る爲めに純粹な流動の色に凝結したかと思はるばかりの燃ゆる蒼であつた。その船の船長が私と共に欄干に倚りかかり、我々は共に黙して長い間驚くべき海を眺めて居た。それから彼は云ふた、——

『十五年前に私は此旅路に妻を連れて居ました——私達が結婚したすぐ後、さうでした——そして妻はこの水に驚きました。妻は此水と同じ様な色の絹の衣を買つてくれといひました。私は随分方々で探しましたが、とても見附かりませんでした。或る時偶然に廣東に行きました、日々支那人の絹店を周つて、其色を探しましても中々見附からず、それでもたうとう手に入れました。家に持つて歸りましたとき、妻の喜びは一方で無かつたのです……妻はまだそれを有つて居ます……』

今も猶ほ、時々、眠の中に、私は再度あの目眩く波立つ蒼の驚異の上を南に航行する——そのうちに夢は急に世界を横斷して變じ、私は船長と、灣流の青の絹を尋ねめぐんで、狭い暗い奇妙な支那街を共に行く。そして青色が喚び起こす悦びの理由を先づ私に考へさせたのは此の熱帯の日の記憶であつた。

思ふに青の光輝ある視覺に刺激された快き情緒の波は、何れか他の純粹な色の巨きな現はれによつて起こされた感情に比して、一層複雑なものではあるまい、——然しその複雑の質に於てそれが高等である。何故なれば、その容積の中に混じた觀念的要素は、最も尊いものを少からず含有して居る、——宇宙的情緒の作成にも入り來るものを少からず有つ。

我々の地球の精靈の色、——世界の生の息の色、——と思はれて、——青はまた日の巨大と夜の深淵とを現はす色である。故にその感覺は高度、洪大、深遠の諸觀念に訴ふ。

なほまた時間、に於ける空間の觀念にも。何となれば青は距離と漠然との色なる故に。

運動の觀念にもまた。何となれば青は消滅と出現の色なる故に。峯と谷、灣と岬は我々が遠ざかるに従つて青くなる、我々が家路に還れば青の中から此等のものは現はれ出て再び定かな姿になる。

それ故に青の感覺が我々に起こす感情の容積の中に變化の經驗、——即ち數へがたき祖先の別離の悲、——と連合する情緒の或る者が有るべきである。然し何か、かかる臙げな

るものが残るとしても、それはかの夏と暖かさとに關係せる、——また雲なき日の光の中なる過去の人類の喜悅に關係せる、——凡て照り亘る情緒的遺傳のうちに全く陷没して失はれて居る。

なほ一層有意義なるは、青は神聖の色ではあるが、それが起こす感情の主調は喜びとやさしさであることである。青は我々に死者と神々のことを語る、然し決して彼等の畏ろしさや語らぬ。

また我々が、青は神明の觀念の色、汎神觀の色、倫理の色であつて、——我々の敬畏と正義、義務と渴仰の情操が附屬する思想の組織にまで最も深く浸徹する色であることを思へば、我々は何故にそれが喚び起こす情緒が至上の喜悅であるかを不思議に感ずることもあらう。それは青空の感覺的人種經驗、——有機的記憶に於て我々各自に傳へられた、光明と溫暖とに對する死者の無限の喜び——は宗教觀念よりも遙かに古く、それ故に、その色彩感覺に間接に關係せる何れの倫理感情をも濁らすに足る程に、容積がある爲めてはあまるまいか。一面は疑も無くさうである、——然し私はも一つ別の、甚だ單純な説明を試み

よう、——

青の印象に應ずる遺傳感情の波に於ける一切の道德的脈搏は、唯だ信仰の美はしき、やさしき光景にのみ屬す。

ここまで試みられたので、私はも少し先きまで進んで見よう。

我々の多くのものにとりて、青の視覺で喚び起こされる快感の此波に於ける最有力なる要素の一は、其語の十分倫理的な意義に於ての靈的であると私は想像する、——即ち其色と經驗的に連合する個人的情緒の移り去る表面の叢の下に、數へられぬ諸々の時代を傳へたる宗教的情緒が波の如く脈搏して居ると思ふ、——そして美としての青の遺傳感覺を勵まし生かしつつ、神秘的光榮として、——永久の平和の色として、——の青の遺傳されたる光輝の歡喜があると思ふ。これまで想像された一切のバラダイスに對する凡ての人間の渴望の或る者、——死後再會の約束に對する凡ての前存したる信賴の或る者、——終りなき若さと祝福の凡て消えたる夢の或る者——が、いくらか微かにこの蒼の悦びの身震ひのうちには我々の爲めに復活せられやう。熱帶地の潮流の寶玉の輝きの下に、更に大なる海よりの波動が、——その嗚咽と囁語と、その逃ぐる如き漂流と泡沫を以て、——通ずる如く、

その如く、輝く青の視覚によりて喚起された情緒を通じて、無限のうちより、——（一瞬の青の感覺を作る億萬のエーテルの振動の如く多様なる）——昔の信仰の一切の渴仰と、消滅した神々の力と、人間の口に唱へられた一切の祈禱の情熱と美とが、如何にかして我に捲れ還るのであらう。

晩歌

『破られた』といふと餘り唐突な語であつた。私の眠は破られたのでは無い、が急に外の夜からの音樂の流て溶かされて一掃された、——その優雅な最初の音で私に歡喜の豫期を充たした音樂、晩歌、——笛とマンドリンの演奏。

笛は鳩の鳴く調子で、それがククと鳴き、悲しさうに鳴き、また水の渦卷く様に鳴いた、——そしてマンドリンは心臓の鼓動する如くに、笛の流るゝ音の中で震るへて居た。奏樂者は見えぬ、彼等は熱帶の月が街路に投げた重い影のうちに立つて居た、——それはブランティン樹とタマリンド樹の影。

すべて莖色のほの暗さの中に動いて居たのはその音樂と螢ばかり、——螢は橙黄と鮮緑の大きな輝いた遅い火花であつた。暖かな空氣が呼吸を止めて居た、椰子の葉は靜かであ

つた、そして海のいつも目につく輪は、月下に於てすら青く、音も無く煙霧の輪の如く横たはつて居た。

笛とマンドリン——— 西班牙のメロディ——— 外に何も無い。それでも夜自らが語つて居るかと思はれた、または、久しき以前に自然の神祕のうちに溶け去つたが、猶ほも日の照るうちは眠り、星にのみ目を覺ます、その不思議な世界の生温い、芳しい、燦めく暗を徨ひ續けて居る或る感情的な生命が、その夜のうちから語つて居るかと思はれた。そしてその言は、嘗て有りて今は再び有り得ぬ歡喜を、精靈の如く反覆して居るのであつた、——— それは無限のやさしさと不測の悔恨を語るのであつた。

いとも單純な音樂が他の藝術のとても暗示し得ぬものを表現し得ることは私はいまだ嘗て感じなかつた、——— 飾も無く、技巧も無いが、それで希臘人の最上の優美の認識の様に、それほど盡惑的で不可解な感興を有つて居るメロディの驚く可き可能性を嘗て知らなかつた。

さて完全な藝術に於ては何物もただ逸樂的ではあり得ぬ、そしてこの音樂はその愛撫的なるに關らず、測られぬ程に、拭ひ難い程に悲しかつた。そしてそれ程單純な動機に於て

幽鬱と感動との精妙な混合、——鳩の叫ぶ如くククと鳴く一の低い長い音の再三の反覆、——それが消滅した時間の音楽的なる思の如き美の不思議を有つて居た、——我々自らの時代よりも、もつと温かい人間的な時代からの生存、——或る失はれたるメロディの術からの一の稀有なる生存を有つて居た。

二

音楽が静まつた、そして私は夢みながら残された、そしてその樂が起こした情緒を説明せんと試みても効がなかつた。ただ一の事は慥であると思つた、——即ちその神祕は自分の存在以外の諸々の存在のものであるといふこと。

私は反省した、生きて居る現在の爲めに死せる過去の全體があることを。我々の快樂と我々の苦痛と共にただ進化の所産である、——巨萬の海の砂よりももつと數へ難い失せたる存在者の經驗によつて創造された感性の巨大な複雑である、凡ての人格は結合を重ねたものである、そして凡ての情緒は死者のものである。それでも或る者は他の者よりもつと精靈らしく我々に見ゆる、——それは一つには、それ等の一層大なる關係的神祕の爲めて、

一つにはそれ等を組成する幻の波の無限の力の爲めである。快い形のうちに、最も精靈らしいのは初戀の情緒、自然に於ける壯美——恐ろしい美の知覺に續いて起こる情緒、——そして音樂の情緒である。それ等は何故に然るか。思ふにそれ等を起こす勢力は我々の忘れられた過去に最も遠く振動を及ぼす爲めである。一の思考する生命の深さは空間の深淵の深さの如く恐ろしく、——何百萬の時代を以てしても測り難い、——そして或る人格に於ては如何に深くその神祕が動かされ得るかを誰れか明らかめ得よう。我々は唯だ振動が深い程、反應する波は重く、そして結果はいよいよ怪異で、——遂には單一の波動が即死を來たし、または思想の纖弱な構成を永久に零落させる様な、それ等の深遠なるところに達するに到ることを知るのみである。

さて如何なる音樂にても、我々のうちなる過去の隠れたる感情を醒まして、愛の情緒に強く訴ふるものは、是非とも死せる快樂と等しく死せる苦痛を呼び起こさざるを得ぬ。抵抗し難いそして無慈悲な神祕によつて意志を征服された苦痛、疑惑の苦悶、競争の苦艱、非永久性の恐怖、——此等及び多くの他の悲哀の影は、同時に愛の喜びと愛の苦を生じ、永久に誕生より誕生に成長する、その心理的遺傳の調べを作るに參與したのである。

かくして小兒が情熱や眞の苦痛を知らざるに、なほよくその何れかを談る音樂によつて

涙を催すまでに感動させらるゝことが起こり得る。知らずして彼はその音楽が無数の消えたる生命の悲哀の影を談ることを感ずる。

三

然しあの熱帯地のメロディによつて醒まされた非常な情緒は以上試みた説明よりも一層性質的の説明を要する様に私は思つた。儘に音楽が訴へた死せる過去は或る特別の過去であつたに相違ないと私は感じた、——或る情緒的記憶の特別の階級または集團に觸れたのだと感じた。然し何の階級か、何の集團か。暫くの間は私は想像を試みることも出来なかつた。

然るに久しき後、或る偶然の事が驚くべく明らかに晩歌の記憶を復活した、——そして同時に、默示の如く、そのメロディの全魅力——その一切の悲しさとその一切の快さとは——最上にまた獨得に女性的のものであつたことが確實であるとの思が現はれた。

新しい悟りが私に現はれると共に私は反省した、「儘に一切の人間のやさしさの原始的根元は永遠の女性であつた……然し如何にして唯だ女性の魂を談るメロディが男性に作曲

され、そして男性のうちに此の名狀し難い情緒的記憶の生命を起すのであらうか」

その答は直に形を成した、

『あらゆる男は幾百萬度も女であつたのだ』

疑もなく兩性の何れにも、兩性の感情と記憶の全量が存して居る。然し或る稀なる経験は時には人格の女性的要素、——即ち自我の幻の世界の一半にのみ訴へて、他の半分を眠りて光無さに任ずことがある。そしてかかる経験は、私が聞いた晩歌の驚くべきメロディのうちに具體的に存したのであつた。

あの打震ふ快さは決して男性的で無かつた、あの感情的悲哀は決して男のもので無かつた、——何れも單性的で調べの美の單一の奇蹟のうちに混和して離れぬものであつた。自ら過去の神祕のうちに遠く反響しつつ、その調の魅力は幾代の眠から無數の埋れた愛を呼び出して、纖弱な群を残らず或る薄膜の様な復活の苦痛のうちに羽搏きさせ、——時、夜を通じて流動させ、——ダンテの見た幻の薄明りの中を永久に渦巻きゆく巨萬のもの、の如くにしたのであつた。

彼等は音楽と月と共に消えた、——然し全くさうでは無い。何時でも夢にあのメロディの記憶が還るとき、私は再度死者の長い柔らかない振動を感じる、——再度私はあの幽霊の様な笛のククと鳴る音に答へ、あの影の様なマンドリンの振動に答へつつ、微かな翼が張られて震るふのを感じる。そして彼等の群居の魔の様な歡喜が私を目覺ます、然し、何時も私の目覺めると共に快樂は去つて、暗の中に悲哀のみが彷徨する、——名狀し難い——無限なる……！

赤い夕日

一

いままで私が見たうち最も驚倒的な赤色の出現は、或る熱帯地の雲無き空の夕照であつた。それは空氣の異例の状態に於てのみ見ゆる夕照。それが地平線から頂天まで先づ橙黄色の焰と燃え、忽ちそれが熱烈な朱染めの色濃くなり、其中に眞紅の圓盤が燃え切つた星の餘燼の様に閃いた。海や峯や椰子樹が冥界の輝きに染まり、私は我がうちに漠然たる不思議の恐怖を覺ゆる様になつた、——それは夢魔に魘はれる前の銷魂の感じてあつた。其時私は其感じを説明し得なかつた、——私はただ色が其感じを起こしたことを知つて居た。

然し如何してそれを起こしたのか、——その後私は自らに尋ねた。輝く赤は不快な感じを起こすといふ一般説では、その經驗の怪異を私の爲めに説明するに足らなかつた。其色と血との聯想は殆ど私のこの場合の説明にならぬ、何故ならばこれまで血を見ても私の神

經は毫も影響を感じなかつた。心理的遺傳の説は或る説明を與へるかと思つた。——
が、大人が耐へられぬと思ふ色が、小兒にはいつも娛く思はれる事實を如何にその説で解
き得ようか。

然し凡ての赤い色調が精練された感性に不快であるのでは無い、或るものは全く反對で
ある、例へば石竹色、または薔薇色などいふ種々のやさしい色がそれである。それ等は頗
る快い感覺經驗に訴へ、優雅と柔らかさを暗示し、朱や緋に刺激されたとは全く異つた性
質の感覺を生ずる。石竹色は咲ける花、若さの咲き出た色、——菓物の成熟と、肉の成
熟の色で、芳香と甘美との印象及び美しい唇と頬との記憶といつても聯想される。

いな、氣味惡るい感じを起こすのは、唯だ純粹に輝いた赤、熱烈な赤色である。此色の
經驗は我々西洋の歴史の條件と全く異なる條件の下に發展した社會にても同様であつたらし
く見ゆる、——日本はその顯著な一例である。文明が益々精練され、人間らしくなるに連
れ、赤色を見ることは修養ある社會に容さるゝことが愈々少くなる。然るにその色を嫌ふ
人民の小兒が、尙ほその輝く赤色を好む理由は如何に説明さるべきであるか。

小兒の時に我々を樂ませた多くの感覺が成人になると無味になり又は厭はしくなる、それは何故か。その理由は、我々が生長すると共に、今はそれに關係を有つて居るが、小兒の時は眠つて居た感じ、今はそれ等と聯想されるが小兒の時は發達しなかつた觀念、それ等と連結して居るが、小兒の時は想像されなかつた經驗が成長した爲めである。

我々の生れた時は、心は體よりも更に發育が足らず、その十分な成熟は身體が完全に成長するに要するよりは餘程多くの時間を要す。小兒はその過失に於ても蠻人に似て居る、それは原始人の本能と情緒とが先づ小兒のうちに熟しはじめる爲めである、——然してそれ等の本能と情緒は自己保存に最も必要なので、種族の歴史に於て先づ發展する故に、個人に於ても先づそれ等が成熟する。後に成人となれば此等の本能や情緒は頗る劣等の地位に下る、それはもつと尊い心理的及び道德的の性質——それは比較的に近時に社會上の規律と文明の習慣から生じたのである——が漸く重みがついて正規の状態にあつては本能や情緒を壓倒する、——それが有力な新たな感覺の様になつて、原始的情緒的性質はその指

導を仰がねばならなくなつた爲めである。

凡て情緒は遺傳である、然し高等の情緒は進化の順序に於て最後のものであるので、頭腦が完全に發展してはじめて成長する。倫理的に考へて甚だ崇高な情緒は老年に於てのみ發達すると云はる、それで老年は特に魅力を賦與される。高等なる外の能力、主として美的能力は、平均を取ると中年に熟すと見られやう。然して個人發達の中年頃に色彩美の第一層立派な感覺は屬して居る、——それはよく知られぬ方法でそれに關係しては居るらしい。倫理的感覺よりは餘程單純な能力である。

生き活きた色は蠻人の美感に訴ふるごとく、我々の小兒の根本的美感に訴へる、然し文明の成人は生き活きた色は大概好まぬ、それ等の色は廉價な管絃樂演奏の金鼓の過度の響の如く彼の神經を苛立たせる。修養ある視覺は強く燃ゆる赤色には特に畏縮する。小兒のみが朱や緋を喜ぶ。成長すれば漸次に我々が所謂「高音の赤」と呼ぶ色を俗惡と思ひ、それほど優雅でなかつた前世紀先人達が好まなかつた以上にそれを好まなくなる。教育は何故に彼がそれを俗惡と思ふかの説明を助けるが、それが彼の眼を疲らすや否やの問題から離れて——何故に彼がそれを不快に感ずるかの説明は助けない。

それで今私はあの熱帯地の夕日の問題に歸る。

何れかの美はしい夕日の光景に刺激された通常の美的情緒に於てすら、人類とひとしく昔なる感情の要素がある、——即ち日没がいつも悲哀と豫覺を以て見守らるゝ時、幾代をかけて遺傳した暗い幽鬱、暗い恐怖がそれである。あの偉大な光明の後に、原始的恐怖の幾時間、——暗黒の恐れ、夜の敵の恐れ、幽霊の恐れ。此等及び其他の氣味惡い感情は、日光が退去した後に續く身體の銷沈から離れて、——遺傳によつて情緒的に日没の光景に關係する様になつたのであらう、而して原始的恐怖は遂に近代の壯美の一の元素的調子に進化的に變質するのであらう。而し巨大な緋の色の日没の光景は壯美の感よりも、もつと漠然と無い感情、——即ち明白に凶兆の感情の一種を目覺ますであらう。その色自らが、單にそれと恐ろしい光景との關係の爲めに遺傳せる感情の特殊の種類に訴へるであらう、——即ち、噴火山の頂の輝き、熔岩の激しい朱の色、森の火の暴び、戰亂の途に當たりて燒くる都市を掩ふ照明、壞敗の燼り、葬送の薪の燃ゆるなど。そして北人の想像せる『掠

奪の精靈^{ワンクゴスト}の如き破壊者としての火に關する物凄き種族の記憶に、そこ、苦痛との關係に於ける緋色の熱についての祖先以來の經驗を通じて發展した漠然たる悲痛、即ち有機的な恐怖が混ざるであらう。然して天の現象に於ける、それに似たる洪大な色は、古來凶兆と神怒の觀念に關係ある遺傳的恐怖をまた復活させるのであらう。

蓋しこの憤怒の色が人間に起こさせる不快感の最大元素は火に對する種族の經驗から成つたのである。然し最も生き活きた赤に於てすら、いつも情熱の暗示、血の色の或る暗示がある。死の光景に關係ある遺傳的情緒は色によつて刺激さるゝ氣味惡い感情の要素のうち、數へられねばならぬ。疑もなく人に取りても、牛に於ける如く激しい赤色の現はれによつて喚起さるゝ情緒の波は、主として種族の莫大な全生命を通じて集められた諸の印象と傾向の創造である、そして歌人トマスの昔話の如く、我々は我々の唯一眞實の仙境、即ち精靈的の過去に就いて、

、、大地の上に流れた血汐

それなる國の泉を洗ふ

と云ひ得よう。

譯者註　歌人トマス・Tanner は第十三世紀のスコットランドの歌人、また廣衛者にて今尙ほ死せず、或る仙境に住むと思はれて居る。

然し燃ゆる赤色を近代人の神經に耐へられぬものとす、それ等の聯想そのものは、それがはじめて華奢の色となつた時に既に非常に古いものであつたに相違ない。さらば如何にしてかかる聯想が今我々に不快な影響を及ぼすのであらうか。

私はこの色の情緒的暗示が、それが現今よりも、もつと漠然と且つ容積がずつと少かつた時に於てのみ、今尙ほ小兒に取りて然る如く、成人に取りて快感たるを失はなかつたと答へ様と思ふ。近代人の頭腦の中で、それが強くなると次第に快感たるを失つたので、――それは暖かさが熱の度に昂まつて快感を失ふと略ぼ同じであらう。更に後になると、それが苦痛になり、そしてその實際の苦痛は、その色が嘗て起こさせた光景と力の感覺の本來野蠻なる性質を暴露する。そして赤色によつて起こされた感情の強くなるのは遺傳的印象の其後の集積に因るのみならず、本質的に強暴と苦痛の觀念と反對で、しかもそれと離

れられぬ情緒の成長發達にも因るのである。我々の祖先の幾多の娛樂を、昔の野蠻の影の世界へ追放した時代の道德的感性、——文字通りの火の地獄を信じなくなり、一切の殘酷な競技を禁じ、動物の愛護を強ゆる時代の人道、それが赤色の殘酷な暗示を嫌ふのである。然し成長徐々たる小兒の頭腦にあつては、この近代的感性はまだ發展しきらず、——それが經驗と教育の助によつて發展するまでは、生き活きた緋色によつて起こさるゝ感情は自然に苦痛よりは快感として繼續するであらう。

四

かくの如く他の世紀に於ては帝王らしき威嚴のあつた色が、現世紀に於ては厭はしくなつた理由を説明せんと試みるうちに、私は我々の今の品位あるものの多くも、將來の時代に同じ様に俗化しはせぬかと思ふ様になつた。我々の趣味の標準、我々の美の理想は恆に變化しつゝある條件に關係してのみ價值を有ち得る。現實と理想とは共に變遷する、——それ等は永遠の轉生、の波動に於ける表面上の動搖に過ぎぬ。蓋し今日の最も倫理的または美的なる感情は他の時代には或る例外なる心理的隔世遺傳、——野蠻の過去の狀態への或

る個人的復歸に過ぎぬと見らるゝてあらう。

其間に今、現に耐へられなくなりつつある感覺の運命は、何となるのであらうか。如何なる精神上または身體上の能力でも、それが以前に進化的必要によつて發達したとしても、それが有用でも快樂でもなくなつた瞬間から、縮少し消滅する傾向を有つのであらう。赤を認める力の繼續はその力が種族にとりて、將來有用であり得るや否やによつて定まるであらう。なほそれが色を生ずるエーテルの振動の最低程度を代表する事實も、これに聯關して暗示することが無いことはなからう。蓋し我々が益々それを好まなくなれば、その色を辨別する力が結局は消滅し——色の階段の低い端に於てのダルトニズムの一種になつて消滅するのであらう。蓋しかかる視覺的消滅は網膜の感性がそれと共に優等なる分化を行ふによりて償つて餘りあるのであらう。更に高等に組織せられた時世の人々は、今日想像されぬ色彩の驚異を樂むことが出來て、しかも決して赤色を認め得られぬかも知れぬ、——少くとも我々の進化上の過去の苦悶と激怒との幽靈のやうな餘燼の感覺を生ずる赤色、——名づく可からず、測る可からざる畏怖の執着的出現、——死滅せる人間苦の巨大なる幻の威嚇たる赤色は認められぬかも知れぬ。

身震ひ

人間に觸れられていまだ嘗て身震ひを感じたことの無い人々もあるかもしれぬが、たしかに少數である。我々の多くはずつと幼い頃に身體の接觸に不思議な差別のあることを覚えて居る、——或る人が撫てさするのは柔らかで、他の人のは苛立たせる、その結果として我々は種々の不道理な好き嫌ひを定める。青年の成熟と共に我々はこれ等の區別を層一層と鋭く感ずると思はれる、——つひに運命の日が來て、そのとき我々は或る女性の接觸は悦びのいふにふはれぬ身震ひを通はせ、——それを我々は玄妙や超自然の理論で説明せんと試みる程の魔術をかけることを覺るのである。老年はこれ等の青年の魔法的空想を笑ふこともあらう、然し多くの科學あるに係らず、戀人の想像は幻滅を見た人の智慧よりも、恐らく眞理に近からう。

我々は成人の生活に於てかかる經驗に就いて頗る眞面目に考へることは稀である。我々はそれ等の經驗を否定はせぬ、然し我々は神經の特異質と、それ等を認めることに傾く。我々は男子または女子と、日常握手する行爲に於てすら、心理學が説明の出來ぬ感覺を受

けることのあることを殆ど注意せぬ。

私は多くの手の接觸、——それぞれの握手の質、起こされた身體的同感又は反感の感覺を覺えて居る。いかにも私は幾千の握手を忘れて居る、——それは多分、それ等の接觸が特に何物をも私に語らなかつた爲めであらう、然し強い經驗は十分に思ひ出せる。それ等の快いまたは不快な性質は全く道德的關係から離れて居たことは度々であることを私は知つた、然し私の思ひ出し得る最も法外的の場合——（詩人、軍人、避難民の如き最も不思議の經歷を有つた不思議に魅惑的な人格）——に道德的及び身體的の魅力は等しく有力で且つ等しく稀有である。或る人の力に魅せられた多くの人々の一人が私に云うた、『何時でも私が彼の人と握手する時に、夏の光の様に、暖かい衝動が私の全身に傳はるを覺える』と。現在の瞬間に於てすら、私は彼の死せる手を思へば、その手が二十年の間と數千里の距たりを越えて私に差し出される様に感ずる。それでそれは、を殺した手であつた。

これ等は、外の記憶と反省と共に私に來た、それはベイン氏が嘗て人間の皮膚の接觸によつて與へられた快樂の身震ひを進化的に説明したものの批評を私が讀んだ後であつた。この批評家は何故に約九十八度の溫度にせられた繻子のクッションは同じ身震ひを與へぬ

かと問うた、そして此質問は穩當で無いと私は思つた、何故なれば批評されたその文句のうち、ペイン氏は十分に理由を暗示したからである。彼はその身震ひは暖かさと柔らかさの何れの種類に因つても與へらるゝのではなく、唯だ特、の暖かさと柔らかさによつてのみ與へらると云ふつもりであつたと思へば、——彼はそのつもりであつたに相違ない様に、——彼の解釋は嘲笑を以て争はるべきものでは無い。約九十八度の温度にされた襦子のクッションはペイン氏が意味したより餘程單純な理由で人間の皮膚の接觸によつて與へらるゝと同様の感覺を與ふる事は出來ぬ、——それは實質に於て、組織に於て、またそれが生きて居らず、死して居るといふ全く重要な事實に於て、人間の皮膚と全然異つて居る爲めである。勿論暖かさや柔らかさだけでは、ペイン氏が考へた快樂の身震ひを起こすに足らぬ、容易に想像し得る狀況に於て、此二つが反對の或るものを生ずる事もある。滑らかさは柔らかさ又は暖かさが有つと殆ど同じ程に接觸の快感との關係を有つ、然し濕つたり又は餘り乾いて居る滑らかさは不快であり得る。また人間の皮膚でも冷たい滑らかさは暖かい滑らかさより一層快いものであらう。然しもつと劣等の生命の形に共通な冷たい滑らかさで戰慄を起こさせるものもある。例として手の接觸を快くするそれ等の性質は何であらうとも、それ等は恐らく多くのものの結合から成り、それ等はたしかに生きて居る

接觸に特有のものである。暖かさと滑らかさと柔らかさを如何に人工的に結合しても、人間の接觸が與へる様な快樂と同じ性質のものを起こすことは出來まい、——たとへ、ペイン氏以外の心理學者が云へる如く、快感のもつと微かな一種を起こす事ありとしても。

譯者註　ペイン氏はスコットランドの心理學者 Alexander Bain (1818—1903)

特別の感覺は特別の條件によりてのみ説明される。或る哲學者はこの快い身震ひを生ずる條件を主として主觀的と説明せんとし、他の哲學者は主として客觀的と見る。何れの説も眞理を有つことは眞實でありさうでは無いか、——身體的原因は特別の接觸に附隨する、定義し得る又は定義し得ぬ、或る性質に求めねばならぬこと、及びそれと同時に起る情的現象の原因は、個人にて無くて、種族の經驗に求めらるべきこともまたさうではあるまいか。

二つの觸れ得べきもの、——草の葉二枚、水二滴、砂二粒、——にして全く同じもの無きを思へば、一人の接觸が或る他の人の接觸によりて生ずる何れの感覺とも異なる感覺を與ふる力を有つことは信じ難いとは思はれぬ筈である。かかる差別が測定し難く、また性

質を明らかにし難いといふ理由で、それを不必要また薄弱なものとすら必らずしも考へ難い。此世界に於ける人類の幾億人の聲のうちに全然同じ二つの聲は無い、——然し妻または母、子または戀人たるものの耳と心にとりて、億萬の聲の間に存する、云ふに云はれぬ精妙な差別が如何に多く意義あることぞ。思想に於てかかる差別は特徴を示しがたく、況んや言語に於ては尙ほ現はし難い、然しこの事實と、その莫大な關係的重要性とをよく知らぬものが何處にあらう。

何れか二人の皮膚が全然同じことは可能で無い。肉眼にすら知覺し得る個々の差異がある、——ゴールトン氏は何れの二人の指紋も、同じに見えぬことを我々に教へたてはないか。然し肉眼なり、また顯微鏡下に於てのみなり、それに見ゆる差別に加ふるに、身體の強さ、神經及び腺の活動、生體組織の化學的成分に因る他の性質上の差別があるに相違無い。觸覺が果たしてかかる差別を識別するに足るほど精妙な感覺であるや否やは、精神物理學が決定すべき問題、——單に感覺の量のみならず質の問題である。我々が耳によりて百萬の聲の質的差別を區別し得る如く、觸覺によりても殆ど同じく、精妙な表面の質的差別を區別し得ると想像することは、未だ恐らくは正當ではあるまい。然し聲の或る質によりて我に起こさるゝ快感の刺激は、時には手の接觸によりて與へらるゝ身震ひとよく似たるこ

とはここに注意するの價がある。生きた皮膚の特性に我々が人を魅する聲と呼ぶところのもの名狀し難き魅力と殆ど同じく、獨得的に人を惹きつける或る者が認めらるゝことは可能ではあるまいか。

譯者註　ゴールトンは英國の人類學者 Sir Francis Galton (1822—1911) にて遺傳研究の名著あり、優生學の創始者となる。

恐らくそれは不可能であるまい。然し身震ひそのものの性質に於てそれを起こす接觸の魅力は、滑らかさ、暖かさ、柔らかさの如き身體的結合よりもつと深く生命的な或る物、——ベイン氏が示した如く、電氣的又は磁氣的の或る物に基づくならんとの暗示がある。

人間電氣といふものは空想では無い、すべて生ける體は——、植物でも、——或る度まで電氣的である、そしていかなる二つの有機體の電氣的條件も全然同一ではあるまい。身震ひは一面にそれ等の條件の或る個々の特性によりて説明されやうか。精妙な神經系統によつて認めらるべき接觸の電氣的差別、——百萬の聲の各々が凡ての他の聲と區別さるゝ音色の無限小の差異と同じ程に精妙なる差別、があるのではあるまいか。

例へば或る特別の婦人が極めて少しく觸れても、それが他のもつと美しい婦人の愛撫に

毫しも動かされぬ男に、快感の衝動を起す事實の説明の爲めにかかる理論が呈出され得る。然しそれは何故に同一の接觸が或る人には歡喜を生じ、他の人には何の影響も無いかの理由を説明し得ぬ。いかなる純然身體的の理論も身震ひの神祕の全體を説明し得ぬ。もつと深い説明の要がある、——そして私は『初見の戀』の現象で、その一の説明が暗示されると思像する。

初見の戀を起こさせる女の力は、通常の目に見ゆる或る牽引力に因らぬ。それは一部は唯だ或る目のみが見得る客觀的の或る物に因る、そしてまた一部は何れの間人も見得ぬもの、——情熱の主格の心理的組織に因る。何人も初戀の謎の全體を細かく説明すると稱し難い。然し一般的説明は進化論哲學によつて暗示さるゝ、——即ち、牽引力は女の力の特別の性質に對する遺傳せられたる個人の感受性に基因し、そしてそれは主觀的には超個人的なる認識の一種を表示する、——通例に『感情的類同』といはるゝ遺傳せられたる複合記憶が急に目覺めるのである。たしかに初戀は進化的に説明し得べしとすれば、それは愛する人は凡ての外の女と異なる或る物を愛せらるる人に認めることの意である、——即ち彼のうちにある遺傳的理想に應ずる或る物が、以前には潜在したるが、急にその視覚印象の結果によつて照らされて明らかになつたのを認めたのである。

我々の外の感覺も、それほど深くはあるまいが、視覺と同じ様に埋もれた過去に達するメロデーの單調子、一の聲の快さ……その何れもが祖先以來の記憶の測り知られぬ眠のうちに何といふ測り知られぬ身震ひを起こすのであらう。また、魅力ある、然し定義しがた——空氣中の或る香が、或る稀な輝きの目に我々にあの云ふにはれぬ樂みを起こすのを誰れが知らぬものがあらう。春のはじめの息、吹き渡る山風、海からくる南風がこの情緒を來たらし得る、——それは壓倒的な、然しその原因としての名の無い情緒、——空氣の様に形無く且つ透明の歡喜。精靈となるまでに稀薄にされて、この樂みを起こす、その香は何であるとしても、樂みそのものは奇怪に容積があつて唯だ一個人の經驗の何等かの記憶復活を以て説明しきれぬ。恐らくそれは人間の生命よりも古くて、——死せる快苦の無限盲目の底に深く達するであらう。

我々のうちにあつて生きた接觸に答ふる身震ひは、それも精靈の深淵から來るに相違ない、——それは心に尋ぬる、男の電氣的接觸、——久しき前に塵に朽ちた無數の纖弱な愛の手で與へられた愛撫の記憶を喚び返す、女の魔術的接觸。それを疑ふな。——我々のうちに身震ひを起こす接觸は我々が以前に感じた接觸である、——多くの覺えられぬ生命に於ける忘れられたる親密の感覺の反響である。

夕暗の認識

一

超自然の恐怖、——尙ほさら特に夢に見る超自然の恐怖、——これに近いとさへ思はれる程の他の恐怖の形式が世にあるかを私は疑ふ。小兒は夜にても晝にても共に此恐怖を知る、然し成人は眠の中または病が生じた最も常ならぬ心の状態に於ての外、これに憚まされる様に見えぬ。健康で覺醒して居る時間には、理性が、恐怖の原始的の形が棲んで居る遺傳された情緒のそれ等の深みにある境域よりもずつと上の方に、觀念の働きを保持する。然し成人には夢に於てのみ知らるゝとはいへ、この恐怖に比すべき覺醒時の恐れはない、——これ程深く、これ程漠然として、これ程いふに云はれぬ恐れは無い。この恐怖の不明確なことがそれを言語に現はし難くする、然し苦惱は頗る強烈で、若し數秒時以上に引き延べられると死に至る程である。そしてその理由はかかる恐怖は個人の生命のものでは無

いといふことに存す、それは如何なる個人の經驗が説明し得るよりも無限に巨大である、——それは出生前の祖先以來の恐怖である。當然それは漠然として居る、何故なればそれは遺傳された恐怖の無慮幾百萬の臚げなものから成る爲めである。然し同上の理由でその深さは底知れぬ淵の如くである。

文明の下に人心の訓練は一般に恐怖の征服の方に向けられ、そして——宗教に屬する感情の倫理的性質を除いては——特に超自然の恐怖を除くこととなつた。この恐怖は我々の多くに潛勢的に存在して居るが、然しその根源はよく護られて居て、眠の時の外はそれは何れの強固な心の人をも亂すことは殆ど出來ぬ、但し理性が驚異に抵抗することの出來る前に想像力が捉へられてしまふ程に、それ位凡ての關係的經驗に緣故の無い事實が現存するときは別である。

小兒の時期以後、唯だ一度、私は強い形式をとつた此情緒を知つた。それは夢の恐れを覺醒中の意識に生き活きと投げ出したことを示すものとして顯著なものであつた、そしてその經驗は特に熱帶的であつた。熱帶の國では、空氣の狀況に基づいて、夢の壓迫が我々の國に於てよりはもつと重大な苦惱である、そして恐らく晝寢シエスタの時に最も通常である。凡て爲し得る人は夜を田舎で過ごす、植民の多くは、明白な理由で、都市で晝寢をしてそ

の結果に甘んぜねばならぬ。

西印度の晝寢は、我々が北の國の夏にする夢の無い日中の眠の様に心を爽快にしない。それは眠よりは寧ろ感覺の麻痺である、——それは腦の基脚に重量をおかれた様な憐れな感情からはじまる、そして精神と身體の全存在が光と熱との壓迫に力なく屈伏するのである。それが屢々醜い幻に取り憑かれる、そして激烈な心臓の鼓動で覺まされる。折々は他の時には毫も氣が附かぬ響で擾される。都市が全く太陽に曝されて横たはる時、眞晝中の一の影だに無く、道行く人も絶えて、沈黙は驚くばかりになる。その沈黙の中に椰子の葉が紙の様に擦れ、または海岸に氣が抜けた様な小波の音が突然に響く、——渴いた舌の音する如く——、それが非常に大きくなつて耳に來る。そしてこの奇怪にも沈靜した眞晝は黑人にとりては幽靈の時である。生きて居る物は何れも光に酔うて無感覺である。——森さへも攀援莖の植物に纏はれて、日に酔うて、居眠りして下に垂れる……

私は幾度も晝寢から、音では無く、或る思ひの突然の衝突としか云はれぬ或るものに驚き起こされるのをとした。これは肺に及ぼす熱の或る不制規な影響で起こされた一の特別の内部の擾亂から起こるのであると私は思つた。除々として遅い噎せ返る様な感覺が半意識と實眠との間のほの暗い域に割り込んで、そして其處で奇怪極まる想像を煽る、——

それは生き埋めにされる空想と恐怖である。これに伴なつて嘲弄したり叱責したりする聲、または寧ろ聲の觀念がある、——『眞に光は快い、日を見るは目に楽しい』……外面は晝、——熱帯の晝、——原始の晝。それで人は眠る。「人は多くの年生きて、その年々を樂めど、されど——」……眠りつづけよ——凡てこの光榮は、人の目が塵になる時も同じであらう……「されど彼に暗の目を覺えさせよ——その日は多くあるべければ」

譯者註

ここに圈點を附したところは『舊約聖書傳道の書』第十一章七八節、「夫れ光明は快き者なり、

日に日を見るは樂し、人多くの年生ながらへてその内凡て幸福なるもなほ幽暗の目を憶ふべきなり。其はその數も多かるべければなり」〔邦譯〕を引いたのである。

私の耳にその幻の末高クレセントの音を聞いて、幾度か私は恐れて暑い床から飛び下りて割り板の鐵戸を通して、沈黙させ催眠させる様な外面の恐ろしい光を覗いて見た、——それから頭に冷水を注ぎかけて、焼ける様な褥に戻つてまたうつらうつらとすると、またも同じ聲で、或は自分の汗の滴り下るので——百足ひつてに這はれるのと區別のつかぬ様な感じて醒まされる。そして如何に私は南天の十字星の出づる夜を冀ひしことぞ。それは夜はいつも町が涼しくなる爲めではなくて、夜はあの無慈悲な日光の重さかさからの救をもち來る爲めであつた、何

故ならばかかる光の感じは何か重量のある物の洪水の様な感じてあつた、——それは同時に凡てのものを溺らせ、眩惑し、焼き、麻痺する物、そして液體化した電氣の觀念を暗示する或るものの感じてあつた。

然し熱帶の暑さが日没の後、重苦しくなるばかりだと思はるゝ時もある。山の上では年中概ね夜は愉快である。貿易風に面する海岸では夜が一層楽しい、そしてそこでは我々は暖かい強い風、——それは疾風とか突風とかいふものでなくて、絶え間なく續けて吹く風、——世界回轉の大きな煽る風の流れ、——に撫でられて、海に面した室で眠れる。然し反對側の町は——殆ど凡てが貿易風を遮斷する森で掩はれた山脈の麓にあるので——濕つた空氣が夜は折々名狀しがたきものとなる、——それは暖め過ぎた温室の空氣よりも惡い。かかる仲介物の中で眠る時は最も猛烈な夢魔に壓はれ勝ちである。

私の個人の經驗としては次の如くであつた、——

私は一人の混血兒の案内で島廻りをして居た、そして我々は風下の海岸の一の小さな植民地で一夜を過ごさねばならなかつた、其處に我々は一人の老寡婦が所有する宿屋に類する設備を見出した。其家には人は七人のみであつた、——即ち老婦とその二人の娘、二人の有色の婢、私と私の案内者であつた。我々は窓一つある室を與へられた、それは稍々小さいが——其他の點では模範的のクリーオール族の寢室で、敷物なき清い床があり、古風の重い或る家具、それに二三の搖椅子があつた。一方の隅には家内の祠の様なもの——即ちクリーオールが *Chappelle* といふて居るもの——を支へる棚承けがあつた。祠にはマリアの白い像があつて、その前には小さな燈火が油の杯の中に浮いて居た。植民地の習慣で僕は我々と共に旅する時は、同室か、又は闕の前に寝る。そして私の男は私に與へられた巨きな四本柱のある床の傍の筵の上に横になつて、直に駢しはじめた。私は床に就く前に戸が確に締めてあるのを見定めて寝た。

その夜は蒸し暑かつた、——空氣が凝結してゐるかと思はれた。庭を見下す唯一の大窓は明け放してあつた、——然しその空氣に微動だも無い。蝙蝠——隨分大きな蝙蝠——が音無く飛び入りまた飛び出して居た、——一匹は床の上を旋回しながら、實にその翼で私の顔を煽いだ。熟果の重い香——胸惡るくなる程甘さうな——が庭から上つて來た、其處には椰子とブランテイン樹が金屬製であるかの如く靜かに立つて居た。町の上の方の森から雨蛙、蟲、夜の鳥の例の夜の合唱がわめいて、——それは何の譬を以てしても精細に記述し難い擾ざであるが、然し無數の鋭い鈴の様な音で、碎けた玻璃が廣い遅い瀧にてもなつて居るかとの想像を暗示する。私は暑い堅い床で幾度か寢返りした、どこかにいくらか冷たい一箇所でもあるかと空しく求めながら。それから私は起きて搖椅子を窓のところへ引きずつて行き、葉巻を燻らした。煙は動かずに居据わるので、一吸ひ毎に吹き拂はねばならなかつた。私の男は軀を止めた。彼の裸の胸の銅色——祠のラムプの微かな光の下に混じつて輝く——が呼吸の運動を示して居らぬ。彼は屍であつたかも知れぬ。重苦しい暑さが益々暑くなる様に思はれた。終に、全く疲れて、私は床の上に戻つて、眠つた。

眞夜中もずつと過ぎた頃と思ふ、私は初の漠とした不安、——疑念——夢魔に先だち來

るそれを感じた。私は半意識、現實の夢の意識、——その室に居ることを知つて居る、——
——で起き上がりたいたいと思つた。直に不安は恐怖になつた、それは自分は動かうとしても動
かれぬことを知つたから。空氣中の名狀し難い或る物が意志を抑へ附けて居た。私は叫ば
うと試みた、そして私の最上の努力も誰れにも聞こえぬ様な囁きになつたばかり、同時に
階を上り來る登音がわかつた、——包んだ様な重さ、そしてまぎれもない夢魔がはじまつ
た、——聲も手足も抑へ附ける奇怪な磁氣の恐怖、——啞と無力に逆らふ無望の意志の苦
闘。忍びの登音は近づいた、——然し惡意ありげに、測られた遲さて、——遅く、遅く階
は一哩も深さがあると思ふばかり。遂に闕に到る、——待つ。それから除々と、しかも音
無く、錠を卸した戸が開いた、そして物が入つて來た、身を屈めながら來る、——衣を纏
うた物、——女性、——屋根に届くばかり、——面を向けられぬ。それが床に近寄ると床
板はキイキイ音がする、——そしてそれから——狂氣の様な努力で——私は覺めた、全身
の汗、私の心臓は破裂しさうに鼓動して居る。祠の燈は消えて居た、暗中何も見えぬ、然
し物が退いて行くのが聞こえると私は思つた。たしかに床板がまた鳴るのを聞いた。まだ
恐慌に捉はれて居て、私は實に身動きが出来なかつた。マッチを擦つて見る智慧もついた
が、まだ起きようとは思へぬ。直ぐに、私が聽かうとして息を凝らすと、黒い恐怖の新た

な波が私の身に滲みた、それは呻く聲を聞いたから、——夢魔の長い呻き、——下の二の別室で互に相答ふるかと思はるゝ呻き。それから、私の近くで、私の案内者が呻きはじめた——嗚れ聲で、嫌はしい。私は彼を呼んだ、——

『ルイス、ルイス』

我々二人は直ぐに起きて坐つた。私は彼が喘いで居るのを聞いた、そして彼が暗中で彼の曲り刀を探つて居るのがわかつた。それから恐怖で嗚れた聲で彼は尋ねた、——

『旦那、聞きなすつたか』

下では呻く者共は呻きつづけて居た、——聲はいつも末高クレセントになる、『マダム』、『嬢や』

——それから裸足で走る、ラムブの灯さるゝ音、そして、終に、脅嚇された聲の一般の叫び。私は起きてマツチを探つた。呻きと叫びは息んだ。

私の男がまた尋ねた、『旦那、御覽だつたか』

私は惑ひながら、指にマツチ箱を掴んで答へた、『御前何を云ふのかえ』

彼は答へた、『あの女のことですか』

この間は私を驚かして全く動けなくした。それから私は自分は了解したのかどうかと思ひ惑うた。然し彼は彼の土言で獨り語りする様に云ひ續けた、——

『脊の高い、高い、此部屋位高い、あのゾムビ。あの女が来たとき、床がキイキイいつた。わしは聞いた——わしは見た』

譯者註　ゾムビは全集第一卷五〇三頁に出づ。

暫くして、私はやつと蠟燭を灯した、そして戸のところに行つた。戸は依然締つて居る、二重に錠が下りて居る。高窓からは人が入れる筈は無い。

自ら云ふことを信ぜずに、私はいうた、

『ルイス、御前は夢を見て居たんだらう』

彼は答へた、『旦那、夢じやないんでさ、あの女はどの部屋へも入つて来て、皆に觸はつたのでよ』

私は云うた、『そりや馬鹿らしい、御覽、——戸は二重に錠が下りてるから』

ルイスは戸の方へ見向きもしなかつた、然し答へた、『戸が締つてたつて開いてたつて、ゾムビは出入りしまさ……わしは此家は嫌ひだ……旦那……その蠟燭つけておきなさい』

彼は終の句を命令的に云つて、『どうぞ』といふ敬語を加へなかつた、——殆ど案内者が共通の危険の場合に語るが如くに、そして彼の調子は彼の恐怖を私にも傳染させた。蠟

燭はついて居ても、私は一時は眠らずに居て夢魔の感覺を知つた。暗合が理性を壓伏した、そして厭はしい原始的の空想が、確實なるものの如く、因果の説明に當て缺つた。私の幻覺とルイスの幻覺の同じきこと、二人共聞いた床の鳴り音、夢魔が室から室へと巡回したこと、——此等は證據の不快な連合以上のものを形成した。私は或る姿を見たと思つた邊りて、私の足で床の板張を履んで見た、それが私が前に聞いたと同じキイキイといふ高い音を出した。ルイスは『夢じや無い』と云つた。ほんとにそれは夢でないらしい。私は蠟燭をつけておいた、そして床に戻つた——眠る爲めてはない、考へる爲めに。ルイスもまた横になつた、彼の手を曲り刀の柄にかけて。

私は長い時考へた。下の方も今は全く静かである。暑さもつひに薄らいで、庭から吹き入る冷かな空氣の折々の息は、陸風が目覺めたことを知らせた。ルイスはたつた今の恐怖に關らず間もなくまた軒しはじめた。すると私は板張が——随分音高く——鳴るのを聞いて驚かされた、——それは私が足で履んで試みた同じ板張であつた。今度はルイスはそれを聞いたらしくない。そこに何も無かつた。音がもう二度鳴つた、——それで私はわかつた。はじめにきびしい暑さ、後に溫度の變化が木材を連續して、歪めたり戻したりして、

その音を出したのであつた。眠の不完全な、夢の中にそれを聞くと、音は想像に強く影響する程に聞こえて、——歪んだ空想の長い行列を動かして來ることがある。同時に別々の室に於ける夢魔の殆ど同時に來る經驗は、その時刻の病を催す様な空氣の壓迫で十分に説明が出來ると私は思つた。

まだ二の夢のいやな類似が説明をまつて殘つて居た、そしてまた此謎の自然の解釋を私は少し反省した後に見出し得た。暗合はたしかに驚くべきものであつた、然し同じ點は部分的のみであつた。私の案内者がその夢魔に見たものは、西印度人の迷信の創造であつた——恐らくアフリカの起原であらう。然るに私が夢に見た形は、小兒の時に、私の眠を惱ましたもので、——或る恐ろしいケルト族の談の印象で、私に造られたものである、かかる談は想像を以て惠まれて居る、或は誑はれて居る、何れの小兒にも語られてはならぬものであつた。

三

此經驗を思ひめぐらして其後私は、我々が『暗の恐れ』と呼んで居るが、實は暗の恐れ

ては無い其の恐れの意味を考へることになつた。單なる條件としての暗はこの感情、——幽靈の何等かの定まれる觀念より幾千代も先きにあつた感情——を起こし得なかつた。小兒が示す如き遺傳せる、本能的の恐怖は暗そのものの恐れてなくて、暗と聯想される定義し難い危険の恐れである。進化論的に説明すれば、この漠然たる、然し容量のある恐怖は、その原始的要素として實際的經驗——暗に働く或る者の經驗——によつて造られた印象を有つのであらう、そして超自然の恐れはそれよりずつと後の情緒的發達としてのみ、其うちに加はるのであらう。夜に光る目に照らされた洞窟の原始的暗、——川邊の森の切れ目の黒さ、其處には渴いて水を求めにくるものを捉へんとして破滅の待てる、——畏怖を隠す錯綜した岸の陰影——蟒蛇の巢穴の暗——餓ゑたる野獸と絶望の人間の激情を反響する急場の隠れ所、——埋葬の場、及び洞窟に出入するものと埋められたものとの恐ろしい同類感の想像、——凡て此等、及び暗と死との關係の無數の外の印象は、小兒の想像を累はし、今尙ほ文明の保障の下に眠る成人をも捉へる祖先以來の暗の恐怖を造つたに相違ない。夢の凡ての恐怖が記憶されぬものの恐れてはあり得ぬ。然し遠距離からかけた見えぬ力に捉へらるゝその不思議の夢魔の感覺は——睡眠間に單に意志が停止することのみで十分に説明されやうか。またはそれは捉へられたことの無數の記憶の複成的遺傳であり得よう

か。恐らく眞の説明は奇怪な催眠術やまたは奇怪な網の生前の經驗を暗示するのではあるまい、——人間は彼の發達の進路に於て、彼の背後に現に存在する何れのものより比較にならぬ程に悪しき恐怖の條件を残したといふ進化的確實よりもつと驚くべき何物も暗示はしない。然し夢魔の心理的謎の多くが、人間の有機的記憶は苦痛——かつて或る忌まはしき消滅した生命によつて行はれた不思議な力に關係ある苦痛——の消滅したる形の何かの記録を保つや否やの問題を誘ふに足るだけ残つて居る。

永遠の執着者

今年の東京の彩色版畫——錦繪——は異常の興味あるものと私に思はれる。それ等の畫は初期の大版刷の色彩の魅力を再現する、または殆ど再現する、そして線描に於ては著しい進歩を示す。たしかに今の季節の最も良い版畫より綺麗な何物も望み難い。

最近に私が買ひ求めたのは怪異の研究の一組であつて、——極東で知られた各種の怪を含む、南洋にまだ知られぬ變種もあつた。或るものは極度に不快であるが、少數のものは眞に人を魅する。例へばここに、いま出たばかりで僅か三錢といふ特價で賣られる『ちかのぶ』作のうまいのが一つある。

編者註 『ちかのぶ』は明治時代の浮世繪師揚州周延ならむ。

諸君はそれは何を描いて居るのか推察されるか……左様、一人の娘、——然し何等の娘。少しそれを研究せられよ……下を向いた眼元に内氣の愛嬌がこぼれ、——羽をやすめて居る蝶の様な、あの輕さうなそして好ましい優美を具へた彼女はほんとに愛らしいではな

いか。……否、彼女は、諸君がいふ様な意味での、最も東のはてのサイケの様なものでは無くて——彼女は一の魂である。上の枝から落ち散る櫻花は、彼女の姿の中を通り過ぎて居るのを見よ。又下の方の彼女の衣裳の襞は、青い微かな霞に消えて居るのを見よ。全體が如何に微妙で煙霧の様である事ぞ。それが人に春の感じを起こさせる、そして凡てそれ等の仙境の様な色は日本の春の曙の色である……否、彼女は何れの季節の人格化でも無い。寧ろ彼女は夢である——極東の若人の眠につき纏ふ様な夢である、然し畫家は彼女に夢を現はさせ様としたのではない……諸君は推察されぬか。さあ、彼女は樹の精である、——櫻木の精。曙または、夕暮の薄光のうちのみ、彼女は木を脱け出でて現はれる、——そして彼女を見た人は誰れても彼女を愛せずには居られぬ。然し近く寄ると、彼女は吸はれた霧の様に幹のうちに消ゆる。樹の精が或る男を慕つて、彼の爲めに一人の男の子を生んだ談があるが、かかる行ひは彼女の種族の内氣な習ひに頗る外づれたものであつた……

諸君は不可能を描く要は何處にあると問はるか。さる問を發するのは諸君が若さのこの幻、——春のこの夢の魅力を感じぬことを證する。私は不可能は我々が現實及び平凡と呼ぶものの多數よりも、もつと事實に密接な關係を有つと主張する。不可能は赤裸の眞理で無いかも知れぬ、然し私はそれは通常、假面や面被を冠つて居るとしても、永遠の眞理

であると思ふ。さて私にはこの日本の夢は眞である、——少くとも人間愛が眞である如く眞である。精靈として考へてすらそれは眞である。何等の精靈を信ぜぬと稱する人は己が心に偽をいうて居る。誰れても精靈に憑かれる。そしてこの彩色版畫は、我々が皆知つて居る精靈を我々に思はせる、——たとひ我々の多數（詩人を除く）はその知己を告白することを欲せぬけれども。

恐らくは——それが我々の多數にさうなるのであるから——諸君はこの執着者を、小兒の時なりと、夜の夢に見たかも知れぬ。勿論、その時、諸君の息んで居る上に、身を屈める美しい姿を諸君は知り得なかつた、恐らく諸君は彼女を天使であるか、または死せる姉妹の魂であると思つたであらう。然し生の目覺めの時に、我々は初めて彼女の存在を注意する様になる。それは小兒が青年に成熟し始める頃である。

この初めての彼女の出現は歡喜の衝動、息もとまる悦樂である、然し驚異と快樂との後には直に名狀し難い悲哀、——以前に感じた何れの悲哀とも全く異なる——が迫り来る、たとひ彼女の目にはただ愛撫があり、彼女の唇には最も微妙の笑があるけれども。そして諸君は彼女の誰れなるかを知るまでは、——それを知るは容易では無いが——その感情の理

由を想像し得ぬ。

彼女は唯だ一瞬時止まる、然しその光彩の瞬時の間に、我々の存在の一切の潮が立つて、何の言にも云はれぬ憧憬を以て彼女の方に流れかかる。そしてその時——突如——彼女は居なくなる、そして我々は日が影になり、世界の色は灰色になつたのを知る。

それから後、魅力は我々と我々が以前に愛したものの、——人間又は物又は場所、——との間に残る。それ等の何物もまたそのかみの如くさう近くさう親しくは見えぬであらう。

度々彼女は還つて來よう。我々が一度彼女を見た上は、彼女は決して尋ねて來る事を止めぬであらう。そして此執着、——言にいひ難い程甘美で、現はされぬ程悲哀なる——が我々に彼女に似たる誰れかを求めて世界を遍歴したいといふ輕忽な願を抱かすかも知れぬ。然し如何に長く如何に遠く我々は徨うても、その誰れかを決して見出さぬであらう。

後には彼女の訪ひ來るのが恐ろしくなるかもしれない、それは苦痛、——了解の出來ぬ不思議な苦痛、——を伴ふからである。然し地帯を距て、海を越えても我々は彼女から離れ得ぬ、鐵壁も彼女を阻まぬ。彼女の動作はエーテルの振動の如く音無く且つ微妙である。

彼女の美は人の心の如く昔のもの、——されどいつも美しく成り勝さり、永遠に若さを保つ。人間は秋の霜に草の枯るゝ如く時のうちに凋む、然し時のみが彼女の無終の若さを

輝きと花とを照らす。

凡ての男は彼女を愛した、——凡てが彼女を愛し續けねばならぬ。然し何人もその唇を彼女の衣の裾にだに觸れぬであらう。

凡ての男が彼女を崇む、然し凡てを彼女は欺き、そして彼女の誑かし方は多端である。最も屢々彼女は己を慕ふものを或る地上の少女の前に誘ひ、そして判からぬ様に彼女自らをその少女の體に混じ、そして全然人間の目視が神聖になり、——人の四肢がその衣を徹つて輝く様な光彩を生ぜしめる。然し直ぐとまた光輝ある執着者は人間から彼女自らを離し、彼女に瞞された男をして感覺の嘲笑に驚かしむる。

殆ど凡ての男が試みたけれども、何人も彼女を描き得ぬ。彼女は繪にならぬ、——彼女の美その物は不斷の變移、無限の多種で、光の流に押さるゝ如く、永久の生氣で振動して居る爲めに。

實は、數千年前に或る驚くべき彫刻家があつて、彼女の單一の似姿を石に刻み得たといふ談がある。然しこの業は多くの人の爲めに至上の悲哀の因となつた、そして神は、慈悲心から、他の如何なる人にも同じ驚異を成就する力を決して與へぬと宣告せられた。近頃は我々は唯だ崇拜し得る、——我々は描くことは出来ぬ。

然し彼女は誰れ、彼女は何。……あゝ、私はそれを諸君に尋ねようと思つた。彼女は名を有たなかつた、然し私は彼女を樹の精と呼ぼう。

日本人は我々が彼女を攘ひ除け得るといふ、——若し我々が殘酷なれば——唯だ彼女の樹を切り倒しさへすれば。

然し私が云ふ靈は攘ひ除けられぬ、——また彼女の樹を切り倒すことも出来ぬ。

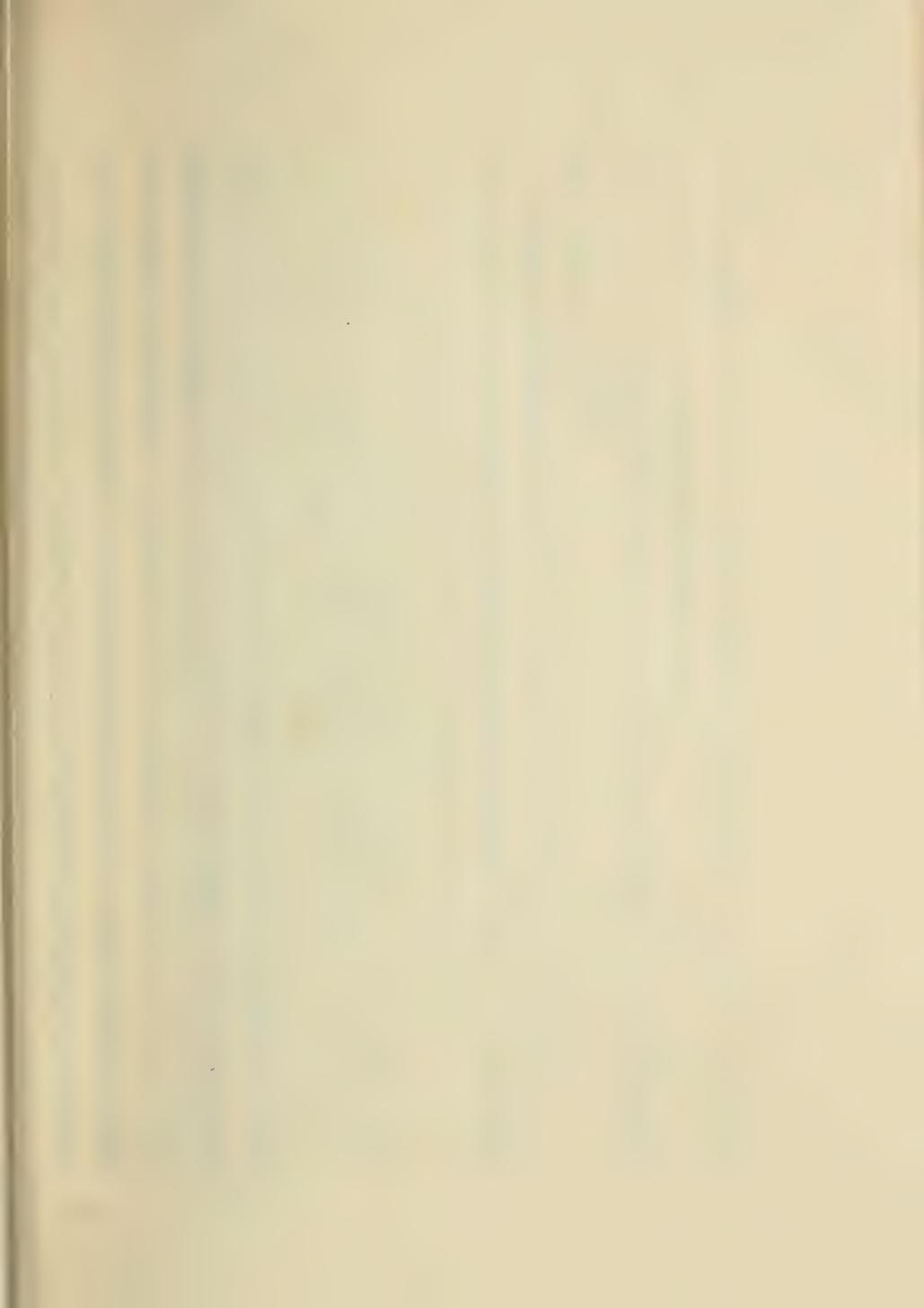
何故なれば彼女の樹は量も無く、時も無く、億萬の枝ある生命の樹、——正に世界の樹、イグドラシル、その根は夜と死のうちにあり、その頭は神々の上にある。

譯者註　イグドラシル (Yggdrasil) は北歐神話にある大木、その根は地獄にあり、梢は天に達し、枝は全地を掩ふ、ノルナと名附くる運命の三神その下に坐し人世の事件を編むといふ。

彼女を慕はんとすれば——彼女は反響。彼女を抱かんとすれば——彼女は影。されど彼女の笑は我々が分散して彼の世に行く時まで、——來るべき無數の生命を通じて執着するであらう。

そして我々は決して彼女の笑に笑み交はすことはあるまい、——決してあるまい。何故ならば、その笑は我々のうちに、我々が了解し得ぬ苦痛を覺まし來る故に。

そして決して、決して我々は彼女に克ち得まい、——何となれば、彼女は久しき以前に消えた太陽の幻の光である故に、——何となれば彼女は塵に還れる無慮幾百萬の心の鼓動によりて作られたるが故に、——何となれば、彼女の魔術は、我等自らの數へ切れぬ過去の無数の忘れし循環を通じて、若きものの幻と望との無終の満干によりて、作られたるが故に。



日本
お伽噺

化け蜘蛛

舊い舊い本に書いてありますが日本には澤山化け蜘蛛がゐたものだといふ事です。

人によつては化け蜘蛛が今でもいくらか居ると言ひきる者もあります。晝間は見たところ普通の蜘蛛そつくりですが、然し夜も大分更けて、人々は寢靜まり、何の音もしなくなると、それはそれは随分大きくなり、色々恐ろしい事を爲てかすのです。化け蜘蛛は又、人間の姿になるといふ——人を魅^ます爲めにですが——不思議な力を具へてゐるとも考へられてゐます。さてかういふ蜘蛛に就いて一つ名高い日本の話があるのです。

昔、或る田舎の淋しい所に一軒の化物寺がありました。其處を巢にしてゐる化物の爲めに誰一人として其の家に住む事は出来ませんでした。氣の強い侍達が大量化物を退治するつもりで何遍も何遍も其處へ出かけました。けれども寺に足を踏み入れたら最後二度と音沙汰はなかつたのです。

たうとう一人、度胸があつて抜目がないといふので人に知られてゐた侍が、寺に出かけて夜の問窺つて見ようといふ事になりました。侍は其處へ自分を連れて來た人達に向つて言ひました。『萬一拙者が明朝に至るも猶ほ生存致すに於ては、寺の太鼓を打鳴らして告げ參らすで御座らう』それから侍は一人後に残つて、手燭の光をたよりに見張りをしてゐました。

夜が更けて來ると侍は、埃だらけの佛像の置いてある須彌壇の下にぢつと蹲りました。何も變つたものも見えず何の物音も聞えぬままやがて眞夜中は過ぎたのです。すると其處へ化物がやつて來ました、身體は半分て眼は一つしかありません、それが『人臭い』と言ふのです。けれども侍は身動きさせませんでした。化物は行つて仕舞ひました。

すると今度は一人の坊主がやつて來て三味線を弾きましたが其の手際は全く驚くばかりなのでこれは人間の業ではないと侍は確かに見て取つたのです。そこで侍は刀を抜いて飛び起きました。坊主は、侍を見ながら、カラカラと笑つて、かう言ひました。『さては愚僧を妖怪と思召されたか。いやいや。愚僧は此の寺の和尚に過ぎんのぢや。妖怪共を近づぬ爲め彈かねばならぬが喃。どうぢやな此の三味線は美事な音が致すであらうが。どれ所望ぢやほんの一曲弾いて御覽ぢやれ』

さう言つて坊主は其の鳴物を差し出しましたが、侍は極く用心深く左の手でそれを掴んだのです。所が忽ち三味線は恐ろしく大きな蜘蛛網くものすに變り、坊主は化け蜘蛛に變りました。そして侍は自分の左の手が緊く蜘蛛網に絡まれたのに氣が付きました。彼は雄々しく立ち向つて、蜘蛛を刀で切り付け、手傷を負はしたのです、けれども直きに網の中に後から後からと巻き付けられて仕舞つて、身動きも出来なくなりました。

然し、手傷を負つた蜘蛛は這ひ去りました、そして日は昇つたのです。間もなく人々がやつて來て恐ろしい網に卷かれてゐる侍を見つげ、無事に助け出しました。皆は床の上に幾つも落ちてゐる血の滴りが眼に付いたので、其の跡を隨まけて寺から出て行き荒れ果てた庭に在る穴の所まで來ました。其の穴からは身の毛のよだつやうな呻き聲が聞えて來るのです。皆は穴の中に手傷を負つた蜘蛛を見付けて、それを退治しました。

猫を畫いた子供

昔々、日本の小さい田舎村に、一人の貧乏な百姓と其の女房が住んでゐました、夫婦共極く良い人達でした。二人の間には子供が大勢あつて、それを皆育てて行くのは随分骨の折れる事でした。年上の息子は中々丈夫な子で僅か十四の時立派にお父さんの手助けが出来ました、それから小さい女の子達はやつと歩けるやうになるが早いかもうお母さんに手傳する事を覺えたのです。

所が一番の年下の子供は、小さい男の子でしたが、どうも力仕事が適ひさうには思はれませんでした。大層賢い子で——兄さん達や姉さん達誰よりも賢かつたのですが、至つて身體が弱くて小さかつたので、大して大きな男には通もなれまいと言ふ評判でした。そこで両親は、百姓になるより坊主になつた方があの子の爲めに良いだらうと考へたのです。或る日両親は其の子を村の寺に連れて行つて、其處に住んでゐる親切な年取つた和尚に、もしお願ひが出来たら此の小僧をお弟子として置いて下さるやうに、そして坊さんの心得

をすつかり教へてやつて下さるやうに、と頼みました。

年寄は此の小童にやさしく言葉を掛けて、それから二つ三つむづかしい事を訊き質しました。其の答へが中々巧者だつたものですから和尙は小さい小僧を弟子として寺に引取り、坊さんになるやうに教へ込んでやるといふ事を承知したのです。

子供は老和尙の言ふ事は直ぐに覚えましたが、大概の事はよく言付を守りました。けれども一つ悪い事がありました。勉強の時間中に好んで猫の畫を畫くのです、それに猫なぞ決して畫いてはならない所にまで好んで猫を畫くのです。

どんな時であらうと自分獨りぎりになつたが最後、猫を畫きます。お經の本の縁にも畫くし、寺の屏風衝立残らずに畫く、さては壁といはず柱といはず幾つも幾つも猫を畫くのです。和尙は何遍となく良くない事だと言ひ聞かせましたが、どうしても畫くのを止めません。彼が猫を畫くのは本當のところ畫かすにはゐられないからでした。彼は「畫工みづかの天才」と言はれるものを持つてゐたので、全く其の爲めに寺の小坊主にはあまり向かなかつたのです。——良い小坊主といふものはお經本を習はなければならぬものですから。

或る日彼が唐紙の上にまことに上手な畫を畫いて仕舞つた後で、老和尙は嚴しく言ひ渡ししました。一小僧よ、お前は直ぐに此の寺を出て行かねばならぬぞ。お前は決して良い和

尙になるまいが、大方立派な畫工にはなる事ぢやらう。さて俺は最後に一言忠告をして進
ぜる、堅く心に留めて忘るまいぞ。「夜は廣き所を避けよ、——狭きに留まれ」」

其の子供は和尚が「廣き所を避けよ、——狭きに留まれ」と言つたのはどういふ意味だ
か解りませんでした。彼は自分の着物を入れた小さい包を、出て行く爲めに括りながら、
考へて考へ抜いたのですが、さう言つた言葉に合點が行きませんでした、けれども和尚に
もうかれこれ口を利くのは恐いので、只左様ならとだけ言つたのです。

子供はしみじみ悲しく思ひながら寺を後にしましたが、さて自分はどうしたらいいのか
と迷ひ始めました。もし其の儘家に歸れば察する所お父さんは和尚さんの言ふ事を聞か
なかつたからと言つて自分を叱るにきまつてゐる、だから家に行くのは恐いと思つたので
其の時不圖思ひ出したのは、十二哩離れた隣村に、大層大きな寺があるといふ事でした。
其の寺には大勢坊さんがゐると前から聞いてゐたのです、そこで其の坊さん達の所へ行つ
てお弟子入りを頼まうと彼は心を決めたのでした。

さて其の大きな寺はもう閉め切つてあつたのですが、子供は其の事を知らなかつたので
す。寺が閉された譯は、化物が坊さん達をおどかして追ひ出して仕舞ひ、自分が其處に住
み込んで仕舞つたからです。幾人か氣の強い侍達が其後化物を退治に夜其の寺に出かけた

事もありました、けれども其の人達の生きた姿は二度と見られませんでした。さういふ事を誰も其の子供に話した者は無かつたのです。——そこで彼は村を指して遠い路を歩いて行きました、坊さん達にやさしく扱はれればいいがと思ひながら。

村に着いた頃はもう暗くなつて、人は皆寝てゐましたが、目貫の通りを外れた場末の丘にある大きな寺が彼の眼に止りました、それに寺の中に一つ明りが點いてゐるのも見たのです。かういふ話をする人達の言ふ事ですが、化物はよく明りをとぼして、頼り少い旅人共が泊りに來るやうに誘き寄せるのださうです。子供は直ぐに寺に行つて、戸を叩きました。中には何の音もしません。それから何遍もトントン叩きましたが、矢張り誰も出て來ないのです。しまひにそつと戸を押して見ました、すると其處は締まつてはゐない事が解つたので彼は大喜びしました。そこで中に入つて行きました、身ると明りがとぼつてゐるのです、——でも坊さんは居りません。

彼は坊さんが直ぐ今にもやつて來るだらうと思つて、坐つて待つてゐました。其の時氣を付けて見るとどこもかしこも寺の中は埃で薄黒くなつてゐて、而も蜘蛛網が一杯懸つてゐました。そこで彼はかう考へました、坊さん達は部屋を綺麗にして置かうと思つて、さつと喜んで小坊主の一人は置くに違ひないと。何故坊さん達が何でも埃だらけの儘

にして置くのか彼には不思議に思へました。けれども、何より氣に入つたのは、猫を畫くに手頃の白い大屏風が幾つかあつた事です。疲れてはゐたのですが、彼は早速硯箱を探して、一つ見つけ出し、墨を磨つて、猫を畫き始めました。

彼は屏風の上にそれはそれは随分澤山の猫を畫きました、畫いて仕舞ふと眠くて眠くてたまらなくなつて來ました。眠らうと思つて屏風の傍に横になりかけた丁度其時です、不圖彼は『廣き所を避けよ、——狭きに留まれ』といふあの言葉を思ひ出しました。

寺は大變廣かつたのです、彼は全く獨りぼつちです、それで今此の言葉を思ひ出した時——言葉の意味はよく解らなかつたけれど——始めて少し恐くなつて來たのです。そこで『狭い所』を探して眠らうといふ事に決めました。彼は滑戸の附いてゐる小さい部屋を見つ、其處へ行つて、自分を閉め込んで仕舞つたのです。それから横になつてグッスリ寢込みました。

夜も大分更けた頃大變な凄じい音——鬨つたり叫んだりする音——がして彼の眼を覺ました。其の音は随分激しかつたので彼は小部屋の隙間から覗く事さへ恐がつたのです。恐ろしさに息を殺したまま、ぢーつと寢てゐました。

寺に點いてゐた明りは消えました、けれども物凄しい音は續いて、而も段々物凄くなつて、

寺中が揺れたのです。長い事經つてからひつそりしました、けれども子供は未だ動くのが恐かつたのです。彼は朝日の光が小さい戸の隙間から射し込んで来るまで身動きしませんでした。

それから彼は隠れてゐた所からそつと抜け出して、あたりを見廻しました。眞先に眼に付いたのは寺の床がどこもかしこも血で一杯になつてゐる事でした。次に彼の見たのは、其の真中に死んで横たはつてゐる、途方もなく大きな、恐ろしい鼠——牛よりも大きな、化け鼠だつたのです。

然し何人が、それとも何物がそれを退治する事が出来たのでせう。其處には人も居らねば他の動物もゐませんでした。不圖子供は眼を留めました、自分が前の晩に畫いた猫といふ猫は皆其の口が血で赤く濡れてゐるのです。さては自分の畫いた猫共が此の化物を殺したのだなと彼は其の時悟りました。又、あの智惠のある老和尚が何故自分に、『夜は廣き所を避けよ、——狭さに留まれ』と言つて聞かせたかといふ事も、其の時始めて解つたのです。

其の後其の子供は大層名高い畫工みゑかきになりました。日本に来る旅人達は今でも彼の畫いた猫がいくつも見られます。

團子を失くしたお婆さん

昔々或る所に一人の面白いお婆さんがありました、笑ふのと米の粉團子を拵へるのが好きだったのです。

或る日、お婆さんはお晝ごはんにしようとお團子を拵へに掛つてゐましたが、一つ取り落して仕舞ひました、其の團子は小さい臺所の土間にあつた穴の中に轉がり込んで見えなくなつたのです。お婆さんは穴に手を突つ込んで拾はうとしました、すると忽ち土が崩れて、お婆さんは落ち込んで仕舞ひました。

随分深い所まで落ちたのですが、ちつとも怪我はしませんでした。再び起き上つた時、お婆さんは自分が道路みちに立つてゐるのに氣が付きました、自分の家の前と同じやうな路なのです。其處は大層明るくて、お婆さんの眼には稲田が一面に見えました、でも何なにの田にも人つ子一人居ないのです。こんな事になつたのは全體どうした譯か、私には解りませ

ん。然しどうもお婆さんは他所の園に落ち込んで仕舞つたらしいのです。

お婆さんの落ちた路は大分急な坂でした。それで、團子を探しても見付からなかつたものですから、お婆さんはきつと團子が坂の下の方へ轉がつて行つたに違ひないと思ひました。

お婆さんは、

——「團子や團子。私の團子は何處行つた」

と言ひながら、路を駈け下りて探しに行きました。

間もなくお婆さんは石地藏が一つ路端に立つてゐるのを見て、聲を掛けました——

——「これはこれはお地藏様、私の團子をお見掛けになりましたか」

地藏は答へました——

——「うむ、團子が私の側そばを通つて下の方へ轉がつて行くのを見たよ。だがお前はもう

先へ行かない方がいゝ、其處を下りた所には、人を食べる悪い鬼が住んでゐるのだから」

然しお婆さんは唯笑つたばかり、——「團子や團子。私の團子は何處行つた」と言ひな

がら先へ馳け下りて行きました。やがてお婆さんは別の地藏が立つてゐる所にやつて來て、尋ねました——

——『これはこれはお優しいお地藏様。私の團子をお見掛けになりましたか』
すると地藏さんは言ひました——

——『うむ、團子がほんの今さつき轉がつて行くのを見たよ。だがお前はもう先へ行つてはいけない、其處を下りた所には、人を食べる悪い鬼が住んでゐるのだから』

然しお婆さんは唯笑つたばかり、相變らず——『團子や團子。私の團子は何處行つた』
と言ひながら駈け下りて行きました。やがてお婆さんは三つ日の地藏の所に來て尋ねました——

——『これはこれはおなつかしいお地藏様。私の團子をお見掛けになりましたか』
所が地藏は言ひました——

——『團子の事など言つてゐる場合ではない。今鬼が来る所だ。さあ此處へ來て私の袖の蔭に蹲しゃがんでおいて、少しも音を立ててはいけないよ』

間もなく鬼が直ぐ近く迄やつて來ましたが、立ち止つて地藏にお辭儀をして、かう言ひました——

——『今日は、地藏さん』

地藏も『今日は』を大層丁寧に言ひました。

さうすると鬼は俄に空気を二三遍不思議さうな様子をして嗅ぎましたが、大きな聲で言ひました――

――『地藏さん、地藏さん。何處かに人間の臭ひがしますね』

――『いや』と地藏は言ひました――『それは多分お前の思ひ違ひだよ』

――『いえ、いえ』と鬼は又も空気を嗅いてから言ひました、『人間の臭ひがしますよ』
其の時お婆さんはもう堪へ切れなくなつて――

『テ、へ、へ』と笑ひました――さうすると鬼は直ぐに大きな毛むくじやらの手を地藏の袖の後ろに伸ばして、尙も『テ、へ、へ』と笑ひ續けてゐるお婆さんを、引つ張り出しました。

――『あり、はー』と鬼は大聲を出しました。

其の時地藏はかう言ひました――

――『お前は其のよいお婆さんをどうしようとするのだ。いちめてはならんぞ』

――『いちめやしません』と鬼は言ひました。『唯家へ連れて行つて私等のおさんどんをして貰はうと思ふのです』

――『テ、へ、へ』とお婆さんは笑ひました。

——『それならよろしい』と地蔵は言ひました——『だが本當にお婆さんに優しくしないでならんぞ。もししなかつたら、私はひどく腹を立てるよ』

——『決していぢめは致しません』と鬼は約束しました、『お婆さんは毎日ちよつと許り私等の爲めに働いてくれさへすればよいのです。さよなら、地蔵さん』

それから鬼はお婆さんを連れてはるばる路を下つて行きましたが、やがて二人は廣い深い川の所まで來ました、其處には一艘の小舟があつたのです。鬼はお婆さんを其の小舟に乘せて、川を漕ぎ渡つて自分の家に連れて行きました。大層大きな家でした。鬼は直ぐお婆さんを臺所に案内して、自分や自分と一緒に住んでゐる他の鬼共に食べさせる御飯の拵へ方を教へたのです。それから小さな木で出來た杓しよ文字もじを渡してかう言ひました——

——『お前はいつでもお米を一粒だけ鍋に入れるんだよ、其の一粒の米を水に浸ひけて此の杓文字で掻き廻せば、粒はどんどん殖えて終ひには鍋一杯になるからぬ』

そこでお婆さんは鬼の言つた通りに、たつた一つの米粒を鍋に入れて、其の杓文字で掻き廻し始めましたが、掻き廻すにつれて、一粒は二つになり——それから四つ——それから八つ——それから十六、三十二、六十四といつた調子でどんどん出來上つて行きました。いつてもお婆さんが杓文字を動かす度毎に米の分量は殖えるのです、それで僅かの間に大

きな鍋は一杯になりました。

それからといふもの、其の面白いお婆さんは長い間鬼の家に留つて、毎日鬼や其の仲間達みんなに御飯拵へをしてやりました。鬼は決してお婆さんをひどい目に會はしたりおどかしたりしませんでしたし、お婆さんの仕事は例の魔訶不思議な杓文子のお蔭で大層樂に捗取りました——尤もお婆さんはそれはそれは随分澤山のお米を炊かなければなりませんして、何しろ鬼の食べる事といつたらどんな人間の食べるのよりずっと澤山なのですから。

けれどもお婆さんは淋しかつたのです、そしていつも自分の小さい家に歸りたくて、團子が拵へたくてたまりませんでした。それで或る日、鬼共が残らず何處かへ出掛けた時、お婆さんは逃げて見ようと考へました。

お婆さんは先づあの魔法の杓文子を取つて、それを帶の下に挟みました、それから川を下りて行きました。誰も見てゐません、小舟も其處にありました。お婆さんはそれに乗つてせつせと漕ぎ出しましたが、漕ぐのは中々上手でしたから、直きに岸から遠く離れて行つたのです。

けれども川は大變廣くて、未だ四分の一も漕ぎ渡らない頃、鬼は、みんな揃つて、家に歸つて來ました。さあおさんどんがゐなくなつた、魔法の杓文子も無くなつたといふ始末

です。みんなは直ぐ川まで駆け下りました、見るとお婆さんが大急ぎで向うへ漕いで行くところですよ。

多分鬼共は泳げなかつたのでせう。何しろ舟はありません。だからあの面白いお婆さんが向う岸に着かない内に捕まへるには川の水をすつかり呑み乾すより外に方法はないだらうと考へたのです。そこで鬼共は膝を突いて、大急ぎで呑み始めたのでお婆さんが未だ半分も渡り越さない内に、水嵩はずつと減つて仕舞ひました。

然しお婆さんはどンドン漕ぎ續けてゐたのです、其の内水が大變に淺くなつたので鬼は呑むのをやめて、踏込んで渡り始めました。するとお婆さんは櫂を下ろし、帯から魔法の杓文字を取つて、鬼共に向つて打ち振りながら、それはそれはをかしな顔付をしたので鬼共はみんな吹き出しました。

所が鬼共は、笑つた拍子に、こちらへ切れなくて呑み込んだ水をすつかり吐き出して仕舞つたのです、そこで川はもとの通り充満いっぱいになりました。鬼共はもう渡れません、それでお婆さんは無事に向う岸に着き、それから出来るだけ路を急いで逃げて行きました。お婆さんは息もつかずに走り續けてたうとう又自分の家に戻つて來ました。

それから後、お婆さんは大層仕合せになりました、自分の思ふまゝにいつでも、團子が

拵へられたからです。おまけに、お米の出来る魔法の杓文字を持つてゐたのです。お婆さんは近所の人達や通り掛りの人達にも團子を賣つて、ぼんの僅かの間にも金持になりました。

ちん・ちん・こばかま

日本の部屋の床には藁を織り疊んだ美しくて厚くて柔かい筵が幾枚も敷き詰めてあります。疊と疊とは非常にキチンと合はしてあるので、其の間にはやつと小刀の刃が挿し込める位の事です。疊は毎年一度取り替へられ、いつも随分綺麗にしてあります。日本人は家の中で決して靴を穿きませんし、英國人のやうに椅子や家具を使つたりしません。彼等は坐るのも、眠るのも、食事するのも、時としては書き物まで床の上でするのです。それですから成程疊は随分綺麗にして置かなくてはならない譯で、日本の子供達はやつと口が利けるやうになるが早いか、疊を傷めたり汚したりしないやうにと教へ込まれるのです。

さて日本の子供はといふと本當のところ極めて善良です。旅に來た人で、日本に關する面白い本を著した人は誰でも皆かう述べてゐます、日本の子供は英國の子供よりはるかに素直で悪戯氣ははるかに尠いと。彼等は物を傷めたり汚したりしません、自分の玩具でさへ毀さないのです。小さい日本の女の子も自分の人形を毀しはしません。いいえそれどころか、大層大切に、自分か一人前の女になりお嫁入りした後までそれを持つてゐるのです。お母さんになつて、出來た

のが女の子の時は、其の人形を其の小さい娘にやるのです。すると其の子はお母さんがした通りに其の人形を大切に、自分が大きくなるまで保存ほつて置いて、やがては自分の子供達にやりま
す、子供達は丁度自分のお祖母さんがしたやうに行儀よく其の人形を相手に遊ぶのです。さうい
ふ譯ですから私は——此の短いお話を皆さんの爲めに書いてゐる者ですが——日本で羨つても人形
を見ましたが、百年以上も経つてゐるのに見た所はまるで新らしかつた時のやうに綺麗なのです。
日本の子供達がどんなに善良であるかといふ事はこれで説明がつくでせう。又日本の部屋むまの床が
どうしていつも大方綺麗になつてゐるか——悪戯わるまの爲めに裂けたり汚れたりしないかといふ事も
お解りになるでせう。

みんなさうなのか、日本の子供はみんながみんな、そんなに善良なのかとあなた方はお尋ねにな
るかも知れませんか。いいえ——みんながみんなといふ譯ではありません、少しばかり、ほんの
少しばかり碌ろくで無しがゐるのです。それではかういふ碌ろくで無しの子供のゐる家の疊たたみはどんな事にな
るのか。別に大してひどい事にはなりません——何故かといふと疊たたみを大切にする小さい妖精おとぎが
ゐるからです。かういふ妖精共は疊たたみを汚したり傷めたりする子供達をからかつたりおどかしたり
するのです。少くとも——こんな悪戯わるま兒ごをからかつたりおどかしたりする事に大體きめてゐるの
です。私はかうした小さい妖精共が今でもまだ日本に住んでゐるかどうか確かな事は解りません
——新らしい鐵道や電信柱が非常に澤山の妖精共をおどかして追ひ拂つて仕舞つたのですから、

それは兎も角として茲に一つ彼等に就いての短いお話を致しませう――

※

※

※

昔或る所に一人の小さい女の子がありました。随分綺麗でしたが、無精な事も随分無精がして。両親は金持で大層多勢の召使を雇つてゐましたが、其の召使達が、大變小娘を可愛がつて、其の子が自分でしなければならぬ事を何でもかてもしてやつたのです。多分かういふ事が娘をそんな無精者にしたのでせう。やがて娘は成長して一人前の美しい女になりましたが、相變らず無精でした。けれども召使達がいつも着物を着せたり脱がせたり、髪を結つてやつたりするので、人目には全く惚れぼれするやうに見え、誰一人として娘に缺點があらうなどとは考へなかつたのです。

たうとう其の女は或る立派な武士さむらいと結婚しました、そして彼に連れられてよその家に行き其處で暮す事になりましたが其の家にはほんの僅かしか召使がゐませんでした。嫁さんは自分の家で使つてゐた程多勢の召使がゐないのを心許なく思ひました。お里の人達がいつもしてくれた事を、一切自分でしなければならなくなつたからです。自分で着付けをし

たり、自分の着物に氣を配つたりして、旦那さんの氣に入るやうに小綺麗に美しく見えるやうにするのは、嫁さんに取つて中々むづかしい事でした。然し旦那さんは武士の事ですし度々家を後にして遠く軍いくさに出かけなければならなかつたものですから、嫁さんもたまには思ふ存分懶ける事が出来たのです。旦那さんの両親は大分年も取つてゐるしそれにお人好して、ちつとも嫁を叱る事はありませんでした。

所が、或る晩の事旦那さんは軍に出かけて留守の時、部屋の中で怪しげな小さな物音がしたので嫁さんは眼を覺ました。大きな行燈の明りて嫁さんははつきり見る事が出来ました、不思議なものを見たのです。何てせう。

日本の武士まじらひそつくりの身なりをした、其のくせ脊の高さは僅かに一寸そこそこの小男共が何百も、嫁さんの枕をすつかり取り圍んで踊つてゐるのです。彼等は嫁さんの旦那さんが祭日に着るのと同じやうな着物を着て、——かみしも袴と言つて、肩先の四角になつてゐる長い上着です、——髪は束ねて結び上げ、銘々二本づつちつぽけな刀を差してゐました。彼等は踊りながらみんなして嫁さんを見て笑ふのです、そしてみんなて同じ歌を何遍も何遍も繰り返して歌ひました——

『ちん・ちん　こばかま、

よも　ふけ　さふらふ、

おしづまれ、ひめ・ざみ、

や　とん　とん

それはかういふ意味です——

『私等はちん・ちん　こばかまです——時も晩^かう御座います——お眠^かみなさい、御立派

な氣高いお嬢様』

其の言葉は大層丁寧なものに思はれましたが、嫁さんは小男共が自分をいぢめるつもりでいたづらしてゐるのだといふ事をぢきに悟りました。彼等は嫁さんに向つて意地の悪い顔付もしたのです。

嫁さんは幾つか捕まへようと思いました、けれども彼等は随分すばしく其處^{そこ}らを飛び廻るので捉まへる事は出来ませんでした。そこで今度は追ひ拂はうとしました、けれども彼等は逃げようとしません、そして『ちん・ちん　こばかま……』を歌つたり、あざ笑つたりするのをどうしてもやめませんでした。そこで嫁さんは彼等が小さい妖精^{おはけ}だといふ事が

解りました。さあ恐くなつたのならないのつてもう聲を立てる事も出来ない程でした。彼等は朝まで嫁さんの周りを踊りました——朝になると不意にみんな消えて失くなりました。嫁さんは恥かしくてどんな出来事があつたかを誰にも話しませんでした——何故かといふと、自分は武士の妻ですから、恐い目に會つた事など誰にも知らせたくなかつたのです。翌晩、再び小男共はやつて来て踊りました、其の次の晩にも又來ました、それから毎晩です。來るのはいつも同じ時刻でした、それは日本の年寄がよくいふ「丑の時」、つまり吾々の時間ていふと朝の二時頃なのです。たうとう嫁さんは重い病氣に罹りました、碌に眠らないからでもあり恐いからでもあります。けれども小男共は嫁さんを獨りだけにしてしまはずに置かうとはしませんでした。

旦那さんが家に歸つて來て見ると、妻が病氣で床に就いて居るので大層心配しました。始めの内嫁さんは病氣になつた始末を旦那さんに話すのを恐がりました、彼が自分をあざ笑ふだらうと思つたからです。けれども旦那さんは随分親切でしたし、随分優しくいたはつてくれたので、やがて嫁さんは毎晩の出来事を彼に話したのです。

旦那さんはちつともあざ笑つたりなどしませんでした、それどころか暫くの間極くまじめな顔付をしました。それから尋ねました——

『何時頃其奴共はやつて參るのぢや』

嫁さんは答へました——『いつも同じ刻限——「丑の時」で御座います』

『左様か』と旦那さんは言ひました——『今宵拙者は身を潜めて其奴共を見届けると致さう。恐るゝ事無用ぢや』

そこで其の晩武士は寢間の押入に隠れて、襖の隙間からちつと窺つてゐました。

彼が待ち構へて見張つてゐる内たうとう『丑の時』になりました。すると、忽ち、小男共が壘の中から飛び上つて、例の踊りを始め例の歌を始めたのです、

「ちん・ちん　こばかま

よも　ふけ　さふらふ……』

其の様子といつたら奇妙奇的烈で、踊るのが又随分とをかきな恰好だつたものですから、武士は危なく笑ふところでした。けれども彼は自分の若い妻の脅えた顔を見ました、そして其の時、日本の幽霊や化物は殆どみんな刀を恐がるものだといふ事を思ひ出したので、彼は刀の身を引き抜き、バツと押入から飛び出して、小さな踊子共に斬り付けたのです。

忽ち彼等は——に成つて仕舞ひました。何だと皆さんは思ひますか

爪楊枝!

もう其處には小さい武士共はゐませんでした——只一掴みの古い爪楊枝が疊の上に散らばつてゐたばかりです。

若い妻は大變に無精だつたので自分の爪楊枝を當り前には捨てなかつたのです。毎日、新らしい爪楊枝を使ひ果たすと、それを片付けて仕舞ふ爲めに、いつも疊と疊の間に突つ込んで置くのでした。それだものだから疊を大切にする小さい妖精共が腹を立てて、嫁さんを苦しめたのです。

旦那さんは嫁さんを叱りました、嫁さんは大層恥ぢ入つてどうしたらいいのか解らない程でした。一人の召使が呼ばれました、そして爪楊枝は向うへ持つて行つて焼かれたのです。それから後といふもの例の小男共は決して二度と戻つて來ませんでした。

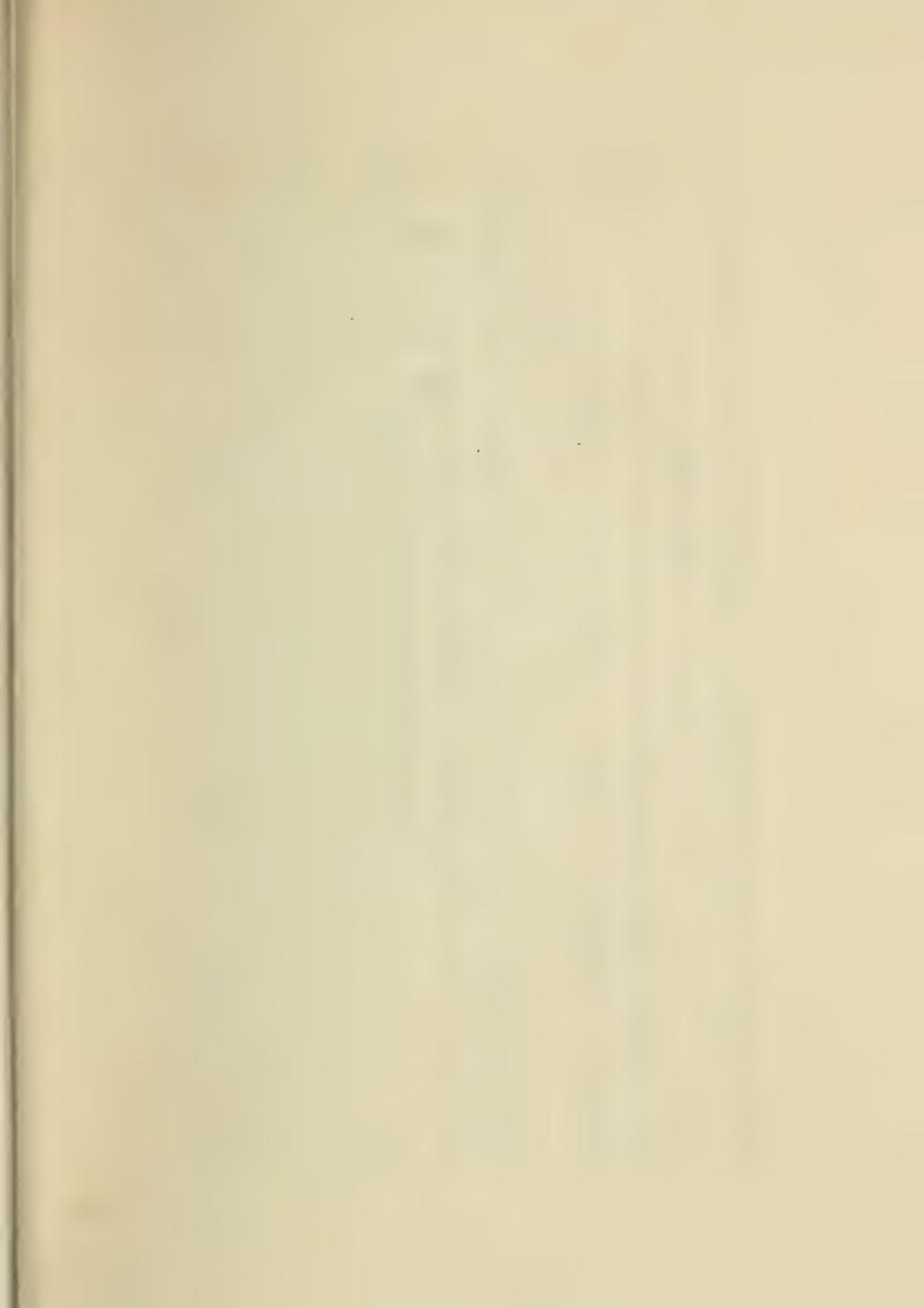
無精な小娘の事を述べた話がもう一つあります、其の娘はいつも梅干を食べては、後で

種子を疊の間に隠してゐたのです。長い間こんな眞似をして人に見つけられずにすんでゐました。けれどもたうとう妖精共が腹を立て、娘を懲らしました。

毎晩のやうに、ちつぽけな、ちつぽけな女が——みんな大層長い振袖の附いた眞赤な着物を着て——同じ時刻に疊から出て来て、踊つたり、娘をヂロヂロ見詰めたりして娘を眠らせませんでした。

或る晩娘のお母さんが寢ず番をしました、そして彼等を見て、叩きました、——するとみんなすつかり梅の種子になつて仕舞つたのです。そこで其の小娘の不しだらが解つて仕舞ひました。それから其の子は本當に大層善い娘になりました。

あとがき



『蟲の樂師』は譯者が明治三十年十月に提供した材料に據つて物されたのである。原著者が三に於て述べて居る事は、社會事彙にも依つたのであるが、上野廣小路の松坂屋の向側に居た文中の所謂『蟲源』といふ蟲屋に就いて譯者が聞いたものにも依つて居る。引用の歌は、他の文で原著者が爲して居るやうに、羅馬字で原歌を示すことはしないで、ただその自由譯だけ掲げてあるのであるが、譯者はその原歌を知つて居るから、その自由譯の逐字譯はしないで、原歌を掲げることにした。そして譯文には、序に、憶ひ出せる限りその作者又は出處を添へて記すことにした。

『死者の文學』は譯者が明治三十年七八兩月に亘つて蒐集した材料を使用して物されたのである。當時その材料を書留めるのに使用した雜記帳が不思議にも残つてゐたので、文中引用の經語及び戒名は、それに參照して、多くは苦も無く復譯が出来たが、中に原著者が餘りに自由譯にした爲め、これがそれと突とめかねるのが一二あるのは遺憾である。

序に原著者の戒名は正覺院淨華八雲居士であることを附記してよからう。

『蛙』は譯者が明治三十年十二月に提供した材料に主として依つて物されたものである。引用の俳句で、今その原句の憶ひ出せぬのがあるのは遺憾である。原英文にはその作者の名は掲げて無いが、判知し得たものだけ、添へてしるして置いた。

大正十五年十月

大谷正信

『佛の島の落穂』は一八九七年ボストンのハウトン・ミフリン會社とロンドンのコンスタブル會社とから出版された。初めの五篇は『大西洋評論』で發表された物である。『佛土』と云ふ成語はあるが、多數の意見によつてこの譯語『佛の島』を用ふる事にした。

「生神」のうち濱口に關する記事は、大坂朝日の記事によつた物、勿論精神は傳へてあるが、事實に違つたところがある。濱口五兵衛は紀州廣村濱口梧陵（七代目濱口儀兵衛）の事、津浪は安政元年十一月五日の夕方の出來事、被害者千四百餘人、行方不明者なほ三十餘人あつた。當時濱口は老翁ではなく、三十五歳の壯齡であつた。明治維新の際開國論を唱へて國事に奔走し、維新後紀州藩の權大參事となり、後中央政府に入つて驛遞頭（後の逓信大臣）となつた。再び郷里に歸つて和歌山縣大參事となつた。縣會開設と共に最初の議長にもなつた。明治十七年米國に行き、翌年ニューヨークで胃癌で歿した。六十六歳であつた。津浪後窮民に職を與へ、大堤防を築き、學校を建て（後の耐久中學もその一つ）、廣村のためにつくす事一方ならなかつたので、村民感激の餘り、濱口大明神と云ふ神社を

建てようとしたが、梧陵翁は許さなかつた。翁の歿後勝海舟の筆になつた石碑が建てられた。今和歌山縣會議事堂構内に銅像がある。令息濱口擔氏が英國留學當時、（ヘルン在世の頃）ロンドンの亞細亞協會で講演をした時、この文章を読んですでに濱口の名を知つた多數の紳士淑女が、この講演者が濱口の令息である事を發見して、驚喜の餘り、湧くやうな拍手と歡呼を贈つたので、濱口擔氏も意外の面目を施したと云ふ禮狀をヘルン家に送つて居る。梧陵翁のあとは令孫濱口儀兵衛氏（山サ醬油醸造元）である。杉村廣太郎氏著

『濱口梧陵傳』ラッド博士著 'Rare Days in Japan' 參照。

「涅槃」——

「人形の墓」は熊本で雇入れた「梅」と云ふ子守の身の上話であつた。その後八年間小泉家に仕へて後郷里で嫁して幸福に暮らして居ると聞いて居る。「人形の墓」は熊本の習慣、最後に人の坐つたあとの疊をたたいて坐ると云ふのは出雲の俗説である。

『異國情趣と回顧』は一八九八年ボストンのリッツル・ブラウン會社とロンドンのサムスン・ロウ會社から出版された。ヘルンがリッツル・ブラウン會社から引續いて四冊出版した物の第一冊である。その初版は日本風のへちまの圖案のある装釘の綺麗な書物である。

横濱の醫師ハウル氏に捧呈してある。ただ一篇『帝國文學』に出た「青色の心理」を除いて全部新しい物である。

「禪の一間」——

「月の願」は長男一雄君との問答から始まつて居る、勿論屋根へ上つて竿で月を落す事は日本の昔ばなしから思ひついたのであらう。

『日本お伽噺』一九〇二年東京、長谷川の出版にかかる繪入りの日本お伽噺叢書の第二十二冊から第二十五冊までになつて居る物である。

大正十五年十月

田部隆次

第六卷要目索引

Gleaning in Buddha-Fields, studies of Hand and Soul in the Far East.	佛の畠の落穂 極東に於ける手と魂の研究
--	------------------------

Contents

本文

- | | |
|---|--------------------|
| 1. A Living God. | 生神 |
| 2. Out of the Street. | 街頭より |
| 3. Notes of a Trip to Kyoto. | 京都紀行 |
| 4. Dust. | 塵 |
| 5. About Faces in Japanese Art. | 日本美術に於ける顔について |
| 6. Ningyō-no-Haka. | 人形の墓 |
| 7. In Osaka. | 大阪にて |
| 8. Buddhist Allusions in Japanese
Folk-Song. | 日本の民謡に現はれた
佛教引喩 |
| 9. Nirvāna. | 涅槃 |

10. The Rebirth of Katsugorō.
 11. With in the Circle.

勝五郎の轉生
 環中流轉相

Exotics and Retrospectives

1) Dedication

To Dr. C. H. H. Hall
 of Yokohama (late U. S. Navy)
In Constant Friendship

獻詞

横濱の(前米國海軍)
 ドクトル・シー・エッチ・エッチ
 ハウルへ かはらざる友情の記
 念として

2) Contents

本文

Exotics

1. Fuji-no-Yama.
2. Insect-Musicians.
3. A Question in the Zen Text.
4. The Literature of the Dead.
5. Frogs.
6. Of Moon-Desire.

異國情趣

富士山
 蟲の樂師
 禪の一間
 死者の文學
 蛙
 月の願

Retrospectives

1. First Impression.
2. Beauty in Memory.
3. Sadness in Beauty.
4. Parfum de Jeunesse.
5. Azure Psychology.
6. A Serenade.
7. A Red Sunset.
8. Frisson.
9. Vespertina Cognito.
10. The Eternal Haunter.

Japanese Fairy Tales

- The Goblin Spider.
The Boy who drew cats.
The Old Woman who lost her
Dumpling
Chin Chin Kobakama

回顧

- 初の印象
美は記憶
美のうちの悲哀
若さの香
蒼の心理
晩歌
赤い夕日
身震ひ
夕暗の認識
永遠の執着者

日本お伽噺

- 化け蜘蛛
猫を描いた子供
團子を失くしてお婆さん
ちん、ちん、こばかま

佛の島の落穂

田部隆次

生神。人形の墓。涅槃。

落合貞三郎

街頭より。京都紀行。塵。日本美術に於ける顔について。大阪にて。

金子健二

日本の民謡に現れた佛敎引喻。勝五郎の轉生。環中流轉相。

異國情趣と回顧

落合貞三郎

富士山。

大谷正信

蟲の樂師。死者の文學。蛙。

田部隆次

禪の二問。月の願。

岡田哲藏

初の諸印象。美は記憶。美のうちの悲哀。若さの香。蒼の心理。晚歌。赤い夕日。身震ひ。夕暗の認識。永遠の執着者。

日本お伽噺

稻垣巖

化け蜘蛛。猫を畫いた子供。團子を失くしたお婆さん。ちん・ちん・こばかま。

本配回四第

卷六第集全雲八泉小

第一回豫約菊判背革装

大正十五年八月配本開始
昭和三年一月配本完了

第二回豫約菊判總布装

昭和四年六月配本開始
昭和五年十一月配本完了

第三回豫約學生版

昭和五年十月配本開始
昭和七年三月配本完了



最初申込金五十錢（これは最後の
會費に充當）

豫約者に限り毎月一圓五十錢

家庭版 【第四回豫約】

昭和十二年三月十一日印刷
昭和十二年三月十五日發行

著者 田部 隆 次
小泉八雲全集刊行會代表

刊行者 長谷川巳之吉
東京市麹町區三番町一

刊行所 第一書房
東京市麹町區三番町一

振替東京六四二二三
電話九段三三四四

牛込區山吹町一九八
印刷者 萩原芳雄

(家庭版) 小泉八雲全集 全十二卷 内容

第一卷

異文學遺聞。
支那怪談。
チタ。ユーマ。

第二卷

佛領西印度の二年間

第三卷 [上]

知られぬ日本の面影

第四卷 [下]

知られぬ日本の面影

第五卷

東の國から。
心。

第六卷

佛の畠の落穂。
異國情趣と回顧。
日本お伽噺。

第七卷

靈の日本。
影。
日本雜錄。

第八卷

骨董。
怪談。
天の河縁起。

第九卷

神國日本。

第十卷

文學論。

第十一卷

きまぐれ。
クリーオール小品。
神戸クロニクル社説
隨筆八種。

別冊

小泉八雲。

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03043 0243

